……うたたねのことで、十分落ちついて寝られざる程に多忙を極むること。○記之文義……所詮の義理、或は口傳口決等を聞き傳へて記せしことで恐らく『秘藏記』を暗示せしものかと思はる。○並七幅等……並七幅等の六字は大師の自ら記し給へる注である。幅とは絹の「ハバ」のことで絹を七幅繼ぎ合せること。七幅一丈五尺。○二百卷……一本には二百餘卷とありて、餘の字を加ふ。○繕裝……繕修し表裝すること。

拳意 上に甘露の法門を仰ぐと云つたその甘露の法門の内容を具体的に示すと同時に求法等正に畢へることを示さる。

講義 かくて惠果阿闍梨の門に入り遂に乃ち一切の法門の根本たる大悲胎藏、金剛界の大曼荼羅の灌頂道場に入つて、金胎兩部の秘密灌頂の法門を授かり得たのである。それより更に或るときは食事を忘れて專心に讀書に耽り、或るときは寸蔭を惜んで落ちついて寢る暇とてなく、假寐し乍ら大悲胎藏金剛頂等の兩部の大經等の書寫に努力精進したのである。また他面に於て難解なる文義や口傳口決は已に敎示を蒙つて記し得、また彖ては胎藏大曼荼羅一鋪金剛界九會大曼荼羅一鋪を圖し、(兩界とも巾七幅一丈五尺)并に新に翻譯せられたる經典二百卷を寫し得、今正にそれらのもの悉く或は繕修し、或は表裝せられ畢らうとしてゐるのである。

此法也則佛之心國之鎭也攘氛招祉之摩尼脫凡入聖之嶠徑也

講方 此の法は則ち佛の心、國の鎭なり。氛を攘ひ、祉ひを招くの摩尼、凡を脫れ聖に入るの嶠徑なり。

字釈 ○佛之心……この密法は佛法の中で心髓に當ること。○國之鎭……この密法は鎭護國家の要尊の法なること。○攘氛……攘ははらひ除くこと。氛は妖氣、凶事、わざはひのこと。○祉……福のこと。○摩尼……摩尼は離垢と譯せられ垢穢の爲めに染せられずとか、又此の玉より一切の所求のものを出ずとかと稱せらる。如意寶珠のこと。○嶠徑……捷徑のことで、近路、はやみちのこと。

拳意 密敎の勝れたる特質を讃へ給ふ。

講義 かく今私が傳へた處の密法は佛敎の中でも特に勝れた敎法であつてそれは佛敎の心髓であり、而も鎭護國家を本旨とする所の要尊の敎法である。これを一個人に就ていふならば災難惡鬼をはらひ除いて、福祉を招かしむることと恰も如意寶珠がすべてのものゝ垢を離れしめ、所求を滿足せしむるに等しきもので、それは凡を脫離して聖に入る近路即ち速疾頓成の法門なのである

是故十年之功兼之四運三密之印貫之一志兼此明珠答之天命

講方 是の故に十年の功之を四運に兼ね、三密の印之を一志に貫く。此の明珠を兼ねて之を天命に答せん。

字釈 ○十年……十の字恐らく廿の寫誤ならんと『開書』に云へり。即ち玄肪以來入唐留學は二十年なるが故に、また尾州萬德寺の經藏の本には「廿年之功」とある故にと、二理由を擧げて十年は二十年の寫誤なりといへり。○四運……春・夏・秋・冬の四時の運行することで一年のこと。○三密之印……身・口・意の三祕密の印契のこと。○一志……一心のこと。○明珠……摩尼珠で密法に喩ふ○天命……桓武帝の綸命を指し奉る。

拳意 密法を完全に受傳し以て天命に奉答せんとする意中を明し給ふ。

講義 密敎の敎法は凡より聖に入る所の速疾頓成の妙法なるが故に、入唐の最初私は二十年を期してゐたのであつたけれども、その妙法の利益により、二十年の功を僅か一年にして兼ね具へることが出來得たのである。ともあれその密法の根本たる三密の印契を我が一心によく貫徹し体得して居るのである。そして國にとりては鎭國の祕法であり、個人にとりては脫凡入聖の肝心の密法にして恰も摩尼珠にも等しき此の法を全く具備し、之を聖天子の勅命に酬答し奉らんとするのである。

嚮使久客他鄉引領皇華

講方 嚮使、久しく他鄉に客たりとも、領を皇華に引かん。

字釈 嚮使……もしも、よしやの義。○他鄉……大唐を指す。○領……ウナジのこと。○皇華……『文選』に「皇華を歌つて使を遣る」と。されば使をいふ。

今は本朝の使臣をいふ。

拳意 鴛國致し度き旨を明さる。

講義 もしやたとひ、久しく此の大唐の國に留つて居るとしても既に自分の望みを果たせし今日何の益もなく、たゞ徒らに本朝の使臣の來れるを、東の方に望んで頸を長くして待つだけのことであらう。

白駒易過黃髮何爲今不任陋願奉啓不宣謹啓

講方 白駒過ぎ易く、黃髮何かんが爲ん。今陋願に任へず奉啓不宣。謹んで啓す。

字釈 ○白駒……『莊子』に「人尺地の間に生れて白駒の隙を過ぐるが如し」と、されば光陰のこと。○黃髮……老人の髮の黃色なること、轉じて七八十才の稱。○陋願……いやしき願望。

拳意 敢て歸朝を願ひ出でし所以を明す。

講義 願望を果せしにも拘らず、徒らに大唐に留つてゐても無益のことであり殊に光陰といふものは隙行く白駒のそれの如くに忽ちに過ぎ去るものであり愚圖〳〵してゐる間に私も黃髮の老人となつてしまふであらう。人間黃髮の老人となれば果して何がなし得ようや、なす能力はなくなつてしまふ。それを思へば一日も早く朝歸して國家社會の爲めに貢献せんの念に驅られて居たまらず、敢へて陋願をも顧ず御願ひ致す次第である。奉啓不宣、謹んで啓す。

四二　青龍和尙獻衲袈裟狀

青龍和尙獻衲袈裟狀一首

講方 青龍の和尙に衲の袈裟を獻ずる狀一首。

字釈 ○青龍和尙……大唐長安に於ける青龍寺惠果和尙を指す。○衲袈裟……佛制に基き、弊衣、故衣等種々の色體の衣布を雜糅裁縫して作れる袈裟の一種。

拳意 初に題名を擧ぐ。

講義 大唐青龍寺の惠果和尙に衲袈裟を獻じ奉る狀一首。

弟子空海稽首和南

講方 弟子空海稽首和南す。

字釈 ○稽首……最も重き禮で、首、地に至るまで屈して拜すること。○和南……梵語の南無(namas)の訛略で、南無は歸依信順の意を表して敬禮し救濟を願ふ意をいふ。上の稽首と同意で、梵漢交へ擧げたるなり。

拳意 歸依信順を記す。

講義 弟子空海、敬しく稽首し、禮拜し奉る。

空海生緣海外時是佛後常歎迷霧氛氳惠日難見

講方 空海、生緣は海外、時は是れ佛後なり。常に歎くらくは迷霧氛氳として惠日見難きことを。

字釈 ○生緣……生れ故鄉、即ち生國のこと。○迷霧……愚痴の煩惱に喩ふ。○氛氳……霧の盛んなるさま。

拳意 大師御自身の身上を明す中、生國と生時に就て示す。

講義 弟子空海はその生國は大唐を遙か隔てし大海の東であり、また自分が出世せし此の時代は已に佛の滅後の無佛の世であり、誰れに頼り、誰れに敎へを乞はんすべもなく、常に氛氳たる迷霧にも等しき盛なる愚痴煩惱に迷はされ、惠日たる大聖世尊を證見し能はずして歎てゐる者である。

遂乃遁影蒼嶺落飾緇林鼓篋問津躡屨尋筏

講方 遂に乃ち影を蒼嶺に遁れて、飾を緇林に落す。篋に鼓ちて津を問ひ、屨を躡んで筏を尋ぬ。

字釈 ○影……大師御自身を指す。○蒼嶺……泉州槇尾山を指す。○落飾……飾好を捨て髮を剃ることで出家すること。○緇林……佛道の世界をいふ。○鼓篋……『禮記』に「學に入りて篋を鼓つ」と。されば學に就くをいふ。○問津……渡し場の所在を問ふ義で、問ひ正し研極すること。○泳筏……筏

は法門を指す。法門を尋ね求めしこと。

【筆意】大師御自身の身上を明す中、出家と求法に就て示す。

【講義】そこで私は遂に蒼嶺たる横尾山に赴き、勤操大德に從つて出家し、それより益々佛學を砥鑽し、或は扈をはいて諸所に法門を尋ね求めしものであつた。

頗有舉旗鼓而諍是非惜浮囊以護持犯往往而在也

【講方】頗る旗鼓を擧げて是非を諍ひ、浮囊を惜んで以て持犯を護ることは往往に在ること有り。

【字釋】○擧旗鼓……戰をいふのであるが、今は論難論戰で議論を戰はすこと。○惜浮囊……浮囊を分ち與へざることで、戒を護るに喩ふ。○持犯……戒法を護持すること。

【筆意】佛教界の有り樣を記す。

【講義】か樣に法門を尋求して諸所を廻りしに、大いに諸大乘の碩學學匠法鼓を鳴して論戰を張り、是非得失を諍ふものは頗る多く、また浮囊を堅持して戒を護り、持戒堅固の高僧も往々に見受けられるのであるが、併しそれらは皆顯教であつて三大無數劫成佛を基調とする教理ばかりである。

至若朗三密於一法究十地於一生空聞英響未觀其人也

【講方】三密を一法に朗かんじ、十地を一生に究むるが若きに至つては空しく英響を聞ひて未だ其の人を觀ず。

【字釋】○三密……如來の三祕密莊嚴。○一法……法とは衆生の一心を指す。○十地……顯教の修行者が佛果圓滿に至る迄に經過する階位に五十二位ある中で、第四十一位から第五十位までの十地をいひ、此の五十位を經過する爲めには三大無數劫の長年月を要すといふ。○一生……此の現在の一生を指す。○英響……勝れたる名聲のこと。

【筆意】速疾頓成の勝れたる三密の法門の存してゐるといふことは豫て傳へ聞き憧れてゐたことを明す。

【講義】か樣に長劫成佛を基調とする顯教は盛んであつたけれども、三祕密莊嚴を我れ等の一心に朗かにし、明らかに證知し、かの十地の階位を此の一生涯中に究め盡して佛果を體得するといふ速疾頓悟の眞言教法のごときに至つては、今まではただ空しくその麗はしき評判を聞くのみであつて、未だその法を傳ふる明師に逢はざる次第であつた。

伏惟和尚三明圓兮萬行足法船牢兮人具瞻懷秋月而懸巨夜孕旭日而臨迷衢

【講方】伏して惟れば和尚、三明圓かんじて萬行足れり。法船牢して人具に瞻る。秋月を懷いて巨夜に懸け、旭日を孕んで迷衢に臨めり。

【字釋】○三明……三明とは宿住智證明、死生智證明、漏盡智證明の三で、これは六神通を約めしものである。この三を明と名くることは能く三際の愚を對治するが故である。○萬行……六度萬行のこと。○法船牢……法船とは祕密の法門をいふ。即ち此の祕密の法門はよく三界生死の大海を渡し、涅槃の岸に到らしむるが故に船に喩へてかくいふ。牢とはその法門を自分の身に牢固として堅く體得護持してゐること。○人具瞻……人々は和尚を依止師として瞻仰すること。○懷秋月……秋月とは本覺の智體に喩ふ。即ち秋の月の如くなる本覺の體性を懷き持てること。○懸巨夜……巨夜とは生死の長夜をいふ。懸とは上に月といへるが故にかく云ひしのみ。即ち月が高き所にかゝりて夜を照らす如く、一切衆生の暗鈍の心を照破すること。○孕旭日……旭日とは朝日のことで、これ始覺の智慧に喩ふ。孕とは體得し含藏してゐること。○臨迷衢　煩惱の諸道に惑はされ、一心の本源に歸宅することに迷つてゐる者の爲めに此の三界に現はれ給ふの意。

【筆意】惠果和尚の德を自證化他に約して讃嘆し給ふ。

【講義】伏して惟るに惠果和尚は三明六通の佛智を圓滿具足して居られ、また六度萬行を悉く具足し、以てこの祕密の法門を御自分の身にしつかりと體得し給ふた御方である。かるが故に人々は和尚を依止師として瞻仰し、尊崇してゐる有り樣である。そして更に和尚の化他の方面からいふならば、和尚はかの秋月の如き本覺の智體を體得し給ふて、無明の長夜に迷へる人々を照し導き、またかの旭日の如き始覺の智慧を體得し給ふて煩惱の諸道に惑はされ、一心の本源に歸宅するに迷つてゐる人々の爲めに世に現はれ給ふた救世の菩薩であらせるる。

可謂三身之一身千佛之一佛也

【講方】謂つ可し。三身の一身、千佛の一佛なり。

【字釋】○三身……法、報、應の三身を指す。○千佛……賢劫の佛を指す。即ち三世に三千佛出現して一切衆生を化益するのであり、過去世に千佛、現在世に千佛、未來世に千佛出現して度すといふによる。

【筆意】惠果和尚の德を佛として讃嘆す。

【講義】か樣なわけであるから惠果和尚は、法報應の三身の中の一佛身であらせられ、また現劫の千佛の中の一佛であらせられると云ふべきであらう。

空海幸廁洒掃得沐甘露悲喜非分粉身何答

【講方】空海幸ひに洒掃に廁つて甘露に沐することを得たり。悲喜分に非ず、身を粉にしても何んぞ答へん。

【字釋】○廁洒掃……廁はマジルこと。洒掃はふき掃除のことで、これ弟子たる者の職分、よりて今は單に弟子をいふ。○甘露……三密の法門に喩ふ。○悲喜……我れこれ迄に顯教を學びて密法を學ばざりしを悲しみ、又今爰に其深微妙の密法を授けられたるは喜悅に堪えざるをいふ。○非分……密法を受くるに堪ふる程の立派な器でないと謙遜して云ひし語。○粉骨……粉骨摧身全力を盡して恩に酬ふること。

【筆意】受法に對して感謝してゐる窣中を明す。

【講義】空海幸ひにして此の法佛にも比すべき惠果大和尚の門下に入り、その弟子に交はることを得、而も和尚より甘露の密法をそゝぎ灌ることを得たことは感謝感激に堪えざる處である。顧るにかゝる尊き密法のありしことを今まで知らざりしことを思へば悲しき極みであり、また今爰にその密法を授り得たことを思へば喜悅至極に存ずる次第である。併し自分はかゝる尊き密法を授け得る程の頓機に非ざるに、而も授り得たことを思へばその御恩德に對しては粉骨摧身渥身の努力を盡してもまだ酬ひ足らざる程である。

欲報鴻澤無一珍奇唯有麤衲袈裟雜寶手鑪以表丹誠伏願慈悲垂領日本國學法弟子苾芻空海稽首和南

【講方】鴻澤に報ぜんと欲するに一の珍奇無し。唯麤衲の袈裟雜寶の手鑪のみ有り。以て丹誠を表す。伏して願くは領を垂れたまへ。日本國學法の弟子、苾芻空海稽首和南。

【字釋】○鴻澤……鴻は洪で大、大恩澤のこと。○珍奇……めづらしきもの。○麤……つまらぬもの。○雜寶手鑪……雜寶は金銀等の七寶を指す。手鑪は香爐のこと。即ち金銀等の七寶をちりばめたる香爐のこと。○苾芻……比丘に同じ、沙門のこと。

【筆意】大師が惠果和尚に對して報恩の誠を披瀝し奉れるもの。

【講義】かくの如き大恩澤に對して報謝し奉らんと欲するのであるけれども珍奇なものとては何一つないのであるがたゞつまらぬ衲袈裟と雜寶の香爐とがある。よりて今それを呈上し、以ていさゝか乍ら我が丹誠を表せんとする次第である。伏して願ふらくは我が心中を洞察し、微意を汲み取つて領納あらせ給へ。日本國學法の弟子沙門空海稽首和南し奉る。

四三　爲橘學生與本國使啓

爲橘學生與本國使啓一首

【講方】橘學生本國の使に與るが爲の啓一首。

【字釋】○橘學生……橘は姓で橘逸勢を指す。逸勢は右中辨從四位下入居の子、

性放誕にして細節に拘らず。隸書をよくす。延曆の末に聘唐使に隨つて入唐す。留學の期二十年を約すと雖も久く他鄕にありて衣糧乏しきが故に大使高階の眞人と共に歸朝せんと欲し、大師に草案を請ふ。學生は留學生のこと。

參考 初に題名を掲ぐ。

講義 入唐留學生橘逸勢歸朝せんと欲してその許を得んが爲めに書を本國大使に呈するの啓文一首。

留住學生逸勢啓。逸勢無驥子之名。預青衿之後

訓方 留住の學生逸勢啓す。逸勢驥子の名無うして青衿の後に預れり。

字訓 ○驥子之名……一日に千里を走る駿馬の譬れで、俊才の譬れ高きこと。○青衿……學生のこと、今は入唐留學生を指す。

參考 逸勢が留學生になりたる所以を明す。

講義 入唐留學生橘逸勢申し上ぐ。逸勢幸ひにも御恩德を蒙りて何の俊才勝智も無うして入唐留學生の末席に列り得たことは無上の感激に堪えざる所である。

理須。天文地理諳。於雪光。金聲玉振縟。於鉛素

訓方 理須く天文地理雪の光に諳んじ、金聲玉振鉛素に縟んず。

字訓 ○天文地理……天に日月星辰あるを天の文となし、地に山川陵谷あるを地の理となすと『論衡』第二命義篇に云へり。○雪光……孫康が雪の光で勉學せし如く、全力を注いで勉學するに喩ふ。○金聲玉振……文章の麗しく立派なるに譬ふ。○縟……繁く多きことで、文章を譯出書くこと。○鉛素……鉛は粉筆、素は油素で絹のこと。

參考 留學生としての本分を記す。

講義 かく入唐留學生となりたる上からいふならば、儒老の經書はいふに及ばず天文地理の書物に至るまで、かの孫康が雪光を賴に專心研學せし程に奮鬪努力以て諳記してしまふべきであり、そして金聲玉振の如き麗はしく立派な文章を粉筆を以て素絹の上に、次から次へと書き著はすべき筈のものである。

然今山川隔。兩鄕之舌。未。遑。遊。槐林。且溫。所。習。兼。學。琴書。日月荏苒資生都盡

訓方 然れども今山川兩鄕の舌を隔てゝ、未だ槐林に遊ぶに遑あらず。且らく習ふ所を溫ね、兼て琴書を學ぶ。日月荏苒として資生都て盡きぬ。

字訓 ○隔兩鄕之舌……大唐と日本とは遠く隔つてゐるが故に語が相ひ通ぜざるをいふ。○槐林……學校をいふ。○溫……もと學びし所を疎ねる義。○琴書……『便蒙』によれば琴の曲譜の書なりと。○荏苒……日月が漸々に過ぎながびくこと。○資生……生活を資け養育する處の費用のこと。

參考 續つて逸勢の大唐に於ける研學情況を記す。

講義 か樣な理想を以て入唐留學したのであつたけれども然れども、今來唐して見れば大唐と日本との間には大海あり、大山あり、川野ありて遠く數千里を隔てゝゐるが爲めに兩國の語は相ひ通ぜず、從つて語を習ふために相當の年月を要し、ために學校に直ちに入學することも出來ざる有り樣であつた。故にしばらく今まで自分が習つてゐた所のものを更に溫ね研究して居り、また徒ねては琴書をも學んでゐたのであつたが、そうかうしてゐる內に段々と歲月も流れ過ぎ、滯在して研學すべき費用も都べて費ひ果してしまつたのである。

此國所。給衣糧僅以續。命。不。足。東脩讀書之用

訓方 此の國の給ふ所の衣糧僅かに以て命を續ぐ。東脩讀書の用に足らず。

字訓 ○衣糧……衣服と食物とで生活費のこと。○東脩……始めて師に見る時の贈物。

參考 唐國政府よりの給費僅少なるを記す。

講義 唐の國の政府より學費を給與して呉れてゐるのであるけれども、その給費は極く僅少にしてやつと命を續ぐ程度の生活費に過ぎない。從つて師に對する謝禮、或は書物を求むる等の費用は足らざる有り樣である。

若使專守。微生之信。豈待。廿年之期

訓方 若使、專ら微生が信を守るとも豈に廿年の期を待たんや。

字訓 ○微生之信……微生は微生高で、これにつき『四書人物考』第五に曰く「微生高は魯の人。高昔て女子と梁下に期す。女子來らず、水暴かに至る。去らずして梁柱を抱いて死す」と。即ち微生高が一婦人との約束を守つて反つてその爲めに溺れ死せしが如きは信ありと雖も信なきに如かざるが如しの意。

參考 留學期限たる二十年を待ち得ざる所以を明す。

講義 たとひ專らかの微生高が婦人と約束し、その約束を履行せんとし、反つてその爲めに溺れ死せしといふが、我れも今その如くに約束の留學期間たる二十年を守り、在唐致ずとしてもそれは費生續かざるが爲めに二十年を待たずして飢ゑ死にすることであらう。

非。只轉。螻命於壑。誠則國家之一瑕也

訓方 只だ螻命を壑に轉ずるのみに非ず、誠に即ち國家の一の瑕なり。

字訓 ○螻命……螻はケラ虫のこと、さればケラ虫の如くつまらぬ一小虫の命のこと。これにつき故事あり、即ち『文選』第四十一報任少卿書に「假令ひ僕法に伏し、誅を受くとも九牛の一毛を亡ふがごとし。螻蟻と何を以てか異ならん」と。

參考 若し唐國に於て死せば國家の恥になることを明す。

講義 若し自分が生活費もなくして在唐し、飢ゑ死にせんか、自分の如く知識も才能もなく恰も螻の如き者が死せばたゞ深谷に轉入して捨て去られるのみであるが、併し他面からいふならばたゞそれだけではすまない。他國に於て變死し、死体を天下に曝すことは誠にこれ國家の一恥辱なりと言はねばならぬ。

今見。所學之者。雖。不。大道。頗有。動。天感。神之能。矣

訓方 今所學の者を見るに大道にあらずと雖も頗る天を動し、神を感ずる能有り。

字訓 ○大道……儒教に云ふ所の大道、即ち至極の道。○動天感神……『風俗通』第六に曰く「夫れ樂は聖人天地を動し、鬼神を感ぜしめ、萬民を按じ、性類を成す所以のものなり」と。○能……ハタラキのこと。

參考 逸勢所學の琴書の功能を明す。

講義 さて續つて今日自分が唐に於て學び得た所の琴書に就て考へて見るのに、それはかの儒教の大道に契當するものではないけれども併し乍ら、音樂といふものもその堂奧に達すれば音樂によりて天地を震動せしめ、鬼神を感動せしむる程の大きなはたらきがあるのである。

舜帝撫。以安。四海。言假拍。而治。一國。尙。彼遺風。耽研功畢

訓方 舜帝撫して以て四海を安んじ、言假拍て一國を治む。彼の遺風を尙つて耽研功畢んぬ。

字訓 ○舜帝等……舜帝が五絃の琴を彈じて南風の薰を歌ふ。以て吾が民の慍を解くといひし故事による。○撫……撫は彈ずること。○言假等……言假は孔子の弟子の子游の名。依て今此處では子游に關する故事を指す。即ち子游が武城の宰となり、民を化導するに大道を用ひずして禮樂を以てせしこと。その理由は小人に在ては禮樂を學ばしむれば人和して使ひ易きが故に。○一國……武城の邑を指す。○耽研……專心耽りて研學すること。

參考 琴書に志せし所以と、其の奧技を極め盡せしことを記す。

講義 かの舜帝が五絃の琴を彈じて南風の薰の詩を歌つて以てよく民の慍を解き、天下を安泰にならしめたといふこと、またかの孔子の弟子の子游が武城

邑の宰となり、禮樂を以て民を化導しよく一國を治め得たといふことを聞きて、今自分もそれらの麗しき遺風を慕つて專心琴書に耽り、研究し以てその功を成就することが出來たのである。

一藝是立五車難通。思欲抱此焦尾奏之于天

讀方 一藝是れ立つ、五車通し難し。此の焦尾を抱いて之を天に奏せんと思欲ふ。

字訓 ○一藝等……『韓文』第十二進學解に曰く「一藝に名ある者もちひられずといふことなし」と。即ち一藝に秀でたる者は必ず登用せられて身を立つることが出來るの意。○五車等……『莊子』第十天下篇に曰く「惠子多方にして其の書五車」と。これを希邁注して曰く、其の著す所の書、五車を以て之を載すに足らざるなり。其の書多しと雖も、其の學ぶ所未だ正ならずと。○焦尾……『後漢書列傳』五十下蔡邕傳に曰く「吳に在りしとき吳人、桐を燒いて以てかしぐものあり、邕、火烈の聲を聞いて其の良材なることを知んぬ。因て請ふて裁して琴となす。果して美音あり。其の尾猶焦れたり。故に時の人名づけて焦尾琴といふ」と。されば焦尾琴は名琴のこと。

參考 逸勢が琴書に對する自信を披攝す。

講義 古の諺に一藝に秀でしものは必ず登用せられて身を立つることが出來るが、たとへ學問し、五車に載せ切れぬ程澤山に書を著はして見てもその奧義に通曉してゐなかつたならば何の益にも立たぬものであるといふことを聞き及んでゐるが全く其の通りである。ともあれ自分は今琴の奧義を極めたるを以て琴を學びしことを聖天子に奏上し奉り、また實際に琴を聖天子の御前に於て彈ぜんと思ふのである。

今不任小願奉啓陳情不宣謹啓

讀方 今小願に任へず。奉啓陳情す。不宣謹んで啓す。

參考 結言を記す。

講義 今我れ、我が小さき願望に任へずして奉啓陳情し奉る。不宣謹んで啓す。

四四 爲藤大使與渤海王子書一首

爲藤大使與渤海王子書一首

讀方 藤大使渤海の王子に與ふるが爲の書一首。

字訓 ○藤大使……遣唐大使藤原賀能を指す。○渤海王子……渤海は『舊唐書北狄列傳』第百四十四に曰く「渤海はもと粟末靺鞨高麗に附くものなり」と。されば高麗を指す。高麗の太子と藤太子の會見については『遊方記』第一に曰く「永貞元年二月十一日大使賀能朝を辭して國に歸る。爰に頃日渤海國の王子來朝して京に在り。今日本の大使來在すと聞いて王子來て大使を問ふ。是れ昔日渤海國の舡、風の爲に放り來る。然るを厚く幸して返へす。爾して之より善隣の義を爲して厚く聘して來り禮す。彼此の好を以ての故に來て大使に謝す」と。

參考 藤大使が入唐せしとき高麗の太子の訪問を受け、其の後重ねて面會せんと期せしも、面會するを得ず。よりて書面を以て思を表せんとし、その草稿を大師に依頼せらる。その一文が此れである。

講義 遣唐大使藤原の賀能、高麗國の太子に與へんが爲めに依頼されし書面一首。

渤海日本地分南北人阻天池

讀方 渤海と日本と地南北に分れ、人天池を阻てたり。

字訓 ○天池……大海のこと。

參考 高麗國と日本國とは遠く隔てゝゐること明す。

講義 高麗國と日本國とはその土地は南と北とに分かれ、またその間に大海が横りて兩國の人々を遠く隔てしめてゐるのである。

然而善隣結義相貴通聘往古今來斯道豈息

讀方 然れども隣を善みし、義を結び、相ひ貴んで通聘す。往古今來斯の道豈に息まんや。

字訓 ○通聘……通は通信、聘は聘物で人に贈與すること。即ち通物などを贈ること。

參考 昔より今に至るまで隣國の好みを以て交際せしことを明す。

講義 さ樣に遠く隔つてゐるとは云へ、互に隣國の好みを以て義を結んで固く守り、互に貴び合つて或は書を送り、或は通物を贈り合ひ、情誼を疏して交際してゐるのである。このことは往古より今日に至るまで一貫した親善の道である。從つてどうしてや息めることが出來ようか出來やしない。

賀能忝就朝貢偶然奉謁。不期而會非常喜悅。仲春漸暄。伏惟動止萬福。即此賀能推既被監使留礙不得再展。惆悵周旋誰堪斷腸

讀方 賀能忝く朝貢に就て偶然として奉謁す。期せずして會す。常の喜悅に非ず。仲春漸く暄かなり。伏して惟れば動止萬福ならん。即ち此に賀能推して既に監使を被つて留礙、再び展ぶることを得ず。惆悵周旋して誰か腸を斷つに堪へんや。

字訓 ○仲春……陰曆の二月をいふ。○漸暄……漸は次第に、暄は暖きこと。○動止萬福……書簡に用ふる常式の語である。動止はタチキフルマヒ、萬福は幸ひの多きこと。即ち御尊体御安体に幸ひ多きこと。○監使……監視する役人。○瑠礙……引き留められ邪魔せらるゝこと。○惆悵……イタミイタムことで失意のさま。○周旋……進み難きさま。

參考 謁見の喜びと、再會出來ざる悲しみとを記す。

講義 賀能忝なくも我が日本の遣唐大使を拜命して貴を以て長安の都に來りたるに偶然にも貴太子に奉謁することを得、全く豫期せずして突然に會見し得たことは通常の喜びではない全く無上の感激である。陳者時下仲春の候次第〳〵に暖かとなりつゝある。此の時に當り伏して惟れば貴太子に於かせられては益々御安體に萬福に亘らせ給ふことと拜察し奉り芽出度き極みである。さてこゝに賀能に護衛の役人を唐の朝廷より送らる。自分はそれを辭退し卻けんと欲したのであつたけれども强いて此の護衛を繁り、その護衛の役人が自分が貴太子に再び拜謁せんと企てしを引き留め礙げしたために、再會して我が意思を展べることも出來なくなつてしまつた。再び逢ふことが出來ずと思へば心中は實に惆悵として悲哀に滿ち、周旋として腸を千切られる思ひで離れでもかゝる場面に逢遇したならば斷腸の思ひをせぬものはないであらう誠に悲しき極みである。

今日取別後會難期。今不任顧戀之情。謹奉狀不宣謹狀

讀方 今日別を取る、後會期し難し。今顧戀の情に任へず。謹んで狀を奉る。不宣謹んで狀す。

字訓 ○顧戀三情……こひしく思ふ心。

參考 此の手紙を差し上げるに至つた所以を明し以て結語とす。

講義 今日貴太子と御別れ致したならば、今生に於て再び會ふことはもう絶對に期し難い。これが永遠の御別れかと思へば貴太子がしたはしく思はれ、その思ふ心に堪えずして謹んで狀を奉りたる次第である。不宣謹んで申し奉る。

遍照發揮性靈集卷第六

四五　奉爲桓武皇帝講太上御書金字法華達嚫

奉爲桓武皇帝講太上御書金字法華達嚫一首

【訓】桓武皇帝の奉爲に太上御書の金字の法華を講ずる達嚫一首。

【字】○太上……『便蒙』によれば此の講筵は淳和帝天長三年三月施行し給ふ所なり。故に太上は弘仁帝なりと。○御書……御眞筆の御こと。○達嚫……達嚫（dakṣina）は梵語で譯して財施又は施物の義とす。僧徒施物を受くるとき必ず施主に法を說きて報謝し、施頌を唱ふ。從つて財施の義より轉じて法施をも達嚫といひ法事の時唱ふる願文を達嚫文と稱することあり。今はその願文に當る。

【學】此の達嚫の文は淳和帝が桓武帝の奉爲に太上嵯峨帝の御眞筆の法華經を以て西寺に於て八講を行じ給ふ。其の時の願文である。今はその題名を示す。

【講】桓武皇帝の奉爲に太上嵯峨帝御眞筆の金字法華經を以て講じ奉る願文一首。

沙門空海聞。栗馱蓮理貸。濕凝乎筌魚。大我廣神假。虛金乎指兎。

【訓】沙門空海聞く。栗馱の蓮理は濕凝を筌魚に貸り、大我の廣神は虛金を指兎に假る。

【字】○栗馱蓮理……栗馱とは汗栗馱心のことで、汗栗馱心は形蓮花の合して未だ開かざるに似たるを以て未敷蓮に喩へて蓮理といひ、蓮理とは心蓮を理、即ち眞如に喩ふるが故にかくいふ。要するに今法華經の開講なるが故に止觀に約して法花の妙理を明さんとするもので、その止觀の中、止に約して栗馱の蓮理、即ち我々自心に藏する所の眞如の理を法譬並べ擧げてかく云ひしのみ。○濕凝……濕は因のこと、即ち『法華經』第四法師品に曰く「是の法花經を聞き已つて信解し、受持する者は當に知るべし。是の人は阿耨多羅三藐三菩提に近くことを得たりと。藥王譬へば人有つて渴乏して水を須めんに彼の高原に於て穿鑿して之を求むるに猶乾土を見て水尙遠しと知り、功を施すこと已まざれば轉た濕土を見る。遂に漸く泥に至つて其の心決定して水の必ず近きことを知るが如し」と。凝とは果のこと。即ち『心地觀經』第一序品に曰く「因圓に果滿じて正覺を成ず。住嶷凝然として去來無し」と。○筌魚……筌は魚を捕る道具で轉じて目的を達する方便のこと、今は能詮の文をいふ。魚は筌に對する所詮の魚で即ち所詮の理をいふ。○大我廣神……以下は人に約して觀について云ふ。大我とは佛を指す。即ち『大疏』第一に「此の宗の辯ずる義は即ち心を以て如來應正等覺とす。所謂內心の大我なり」と。廣神とは廣は佛の觀心は遍く十方を照燭し給ふ故に廣といひ、神は神識にして能觀の智に約す。○虛金……虛は止に當り、無相の菩提、一道無爲の眞理をいひ、金は金鏡で能照の用あり、即ち觀についていふ。○指兎……指は能詮の文についていひ、兎（月をいふ）は所詮の理についていふ。即ち『觀覺經』碧疏第三に曰く「修多羅の敎は月を標す指の如し。若し復月を見れば所標は畢竟月に非ることを了知す。一切如來種々の言說を以て菩提を開示することも亦復是の如し」と。

【學】佛が經典を著はさるゝに至りたる所以を示さる。

【講】沙門空海次の如くに聞き來る。心蓮の妙理たる所觀の眞如の妙理はその妙理を證得すべき自證の因、またその妙理を他をして證解せしむべき化他の果、それらを敎示せんが爲めに佛は恰も筌魚にも譬ふべき能詮の文、即ち經典を貸りて說き示されてゐるものであり、また大我たる佛の廣大なる働きを有する能觀の智、その能觀の佛智即ち眞如菩提を体得すべき自證の智、また恰も金鏡の如き能照の用ある處のその化他の智、それらを敎示し、證解せしめんが爲めに、佛は恰も指兎にも譬ふべき修多羅を假りて解き示されてゐるものであるといふことを。

於焉爪章髮論冥絕有涯

【訓】於焉爪章髮論は冥かに絕えて涯り有り。

【字】○爪章……印度に於ける外道の中、長爪梵志の論章を指す。○髮論……印度に於ける外道の中、黃髮外道の論をいふ。○冥絕……幽遠にしてはるかに勝れてゐること。○有涯……涯は淺狹のこと。劣つてゐること。

【學】一乘妙理が外道の敎理より遙かに勝れてゐることはかの長爪梵志や黃髮外道の敎理の遙かに及ばざる處で、それら外道の敎は淺狹にして遙かに劣つてゐるのである。

【講】一乘の妙理が幽遠にして勝れてゐることはかの長爪梵志や黃髮外道の敎理の遙かに及ばざる處で、それら外道の敎は淺狹にして遙かに劣つてゐるのである。

鳳斗龍言糟迹無逮

【訓】鳳斗龍言は糟迹逮ぶことなし。

【字】○鳳斗……孔子の書をいふ。これに故事あり、即ち『論語』の註に孔安國が曰く、「孔子を鳳鳥に比す」と。また『古文孝經』の序に曰く「魯の哀王人をして夫子の講堂を壞たしむ。壁の中に於て石函に古文孝經二十二章を得たり。字科斗の形なり」と。即ち古文孝經の文字の形が科斗（オタマジャクシのこと）に似たるが故に。○龍言……老子の書をいふ。これに故事あり即ち『史記』老子列傳第二に曰く「孔子去つて弟子に謂つて曰く、鳥をば吾れ其の能く飛ぶことを知れり。魚をば吾其の能く游ぐことを知れり。（中略）龍に至つて吾れ知ること能はず。其れ風雲に乘じて天に上る。吾れ今日老子を見るに其れ猶ほ龍のごときか」と。○糟迹……古人の糟魄といふことで、これは『莊子』第五天道篇に於て、桓公が書を讀んで居りしに對して、輪扁なる桶屋が、君の讀む所のものは古人の糟魄のみと言ひし故事に基く。

【學】一乘妙理が儒老の二敎よりも遙かに勝れてゐることを示す。

【講】更にまた一乘の妙理は、かの古人の糟魄にも等しき儒敎の書や老莊の書に比して遙かに勝れて居り、それら儒老の敎の到底及ばざる所である。

豐若乘蓮珍長撥去三椎孕日輪王寥示一路

【訓】豐に若かんや、乘蓮の珍長三椎を撥ひ去け、孕日の輪王一路を寥げ示めすは。

【字】○乘蓮……蓮花の上に坐せることで佛を寓味す。○珍長……瓔珞珍御の長者のことで、佛を寓味す。○撥去……はらひのくること。○三椎……椎は古の椎車のこと、されば三車をいふ。即ち羊・鹿・牛の三車のことで佛敎を指す。○孕日輪王……孕日とは惠日を懷けるもので佛をいふ。輪王は如來の世を化益するに譬へしもので佛を指す。○一路……一路は一道で、一道淸淨の敎、即ち一切無碍の人この一道を以て生死を出離し、佛果を体得するに至る。

【學】上來を總括して外道老儒の敎が遠く一乘の妙理に及ばざることを示す。

【講】さ樣なわけであるから愚にどうしてや、外道老儒の敎は、乘蓮珍長の佛が羊鹿牛の三車を適宜に與へ乍ら敎化敎導し、また孕日輪王の佛が一道淸淨の妙理をかゝげ示して人々を敎化敎導して生死をよく離脫せしむるが如き大我の自我完成といふ幽高なる敎には到底及ばざる所である。

雲雨覆澍而解煩草木滋茂師結果

【訓】雲雨覆ひ澍いで煩を解き、草木滋く茂して果を結ぶ。

【字】○雲雨覆澍……法雨を降らして一切衆生を濟度するに譬ふ。これにつき故事あり、即ち『法花經』第三藥草喩品に曰く「迦葉當に知るべし。譬へば大雲世間に起つて、徧く一切を覆ひ、其の雨普く等しく四方俱に下つて流澍無量にして率土充合す。草木叢林分に隨つて潤を受く、一切諸樹上中下等、根莖枝葉雜菓光色所潤是れ一にして各滋く茂するが如し」と。

【學】一乘妙理の廣大なる功德を慈雨に譬へて明す。

【講】更に一乘妙理の功德の廣大なることは譬へばかの雨雲が大雨を樹木に降り澍いで干魃等の災厄から救ひ、以て草木をして繁茂せしめてよく稔らすが如く、一乘妙理も亦またその如くに、よくこの法雨を降らせて一切衆生の苦難煩惱より救ひ、以て一切衆生をして佛果を体得せしむるものである。

契實之妙高矣無頂應物之權廣也巨際

【訓】契實の妙高うして頂き無く、應物の權廣うして際め巨

し。

【字訓】○契實之妙……一乘實相の妙理に契達せし正體智の用きのことで自證に約す。○應物之權……化他の後得大悲の權智の用きのことで化他に約す。

【要意】一乘妙理の自證、化他の妙用を明す。

【講義】一乘實相の妙理に契達せし自證の境地はその頂きなき程に高うして我々の窺知を許さず、またその化他の權智の妙用といふものも究め難き程に廣大無邊にして列底凡人の計り知る能はざる所である。

四量四攝巍焉蕩焉

【譯方】四量四攝巍焉蕩焉たり。

【字訓】○四量……慈、悲、喜、捨の四無量心をいふ。○四攝……布施、愛語、利行、同事の四攝法のこと。○巍焉……高大なるさまで竪に約す。○蕩焉……廣大なるさまで横に約す。

【要意】一乘妙理の妙用の廣大なるさまを竪横より明す。

【講義】その化他の妙用は四無量心を以て無量の衆生を緣じ、無量の衆生を利しまた四攝法を無量の衆生に與へて、無量の衆生をして道を受けしむるのであつて、それらの働きは竪に遍じ、横に遍じて全く巍々蕩々として廣高無際の絕大の妙用である。

伏惟我太上今上先後兩聖稽古欽明拭唐虞以大孝得一文思弘道凌殷周而大義貫三

【譯方】伏して惟れば我が太上今上先後の兩聖は稽古欽明にして唐虞を拭つて以て大孝一を得たり。文思弘道殷周を凌いで大義三を貫く。

【字訓】○太上……嵯峨太上皇を指し奉る。○今上……淳和帝を指し奉る。○稽古……稽は考ふること、古の道を考ふること。○欽明……欽はつゝしむ義、明はあきらかにすることであるが今は智あつて民を撫すること。○拭唐虞……拭は凌駕すること、唐虞は唐堯と虞舜のこと。○得一……一は道をいひ、天下を安ずる道であるが要するに帝位を得るをいふ。即ち『老子』不得一章に曰く、「天は一を得て以て清く、地は一を得て以て寧く、神は一を得て以て靈なり。谷は一を得て以て盈てり、萬物は一を得て以て生ず、王侯は一を得て以て天下の貞たり」と。○文思弘道……文思は德を以て身を殿るを文といひ、思惟して物を施すを思といふと『聞書』に註せり。要するに下の殷周の德政にかゝる。○弘道……『論語』に曰く「人能く道を弘む。道人を弘むるに非ず」と。○殷周……殷の湯王、周の文王で共に德治善政を以て聞ゆ。○大義……道のこと。○貫三……王の義。王の字天、地、人の三才を貫く故にかくいふ。

【要意】嵯峨、淳和の兩帝の御高德を讃嘆し奉る。

【講義】伏して惟るに嵯峨、淳和の御兩帝は相先後して帝位に即かせ給ひ、その御高德の程は云ふも長れ多いこと乍ら、よく古の道を考へさせ給ひ、且つ明智を以てつゝしみ行ひ給ふこと遙かにかの堯・舜の聖帝を凌駕し給ふ程であらせられ以て大孝の道を得させ給ふて帝位に即かせ給ひ、またその文思弘道たることはかの殷の湯王、周の文王を凌駕する程の聖帝にましまし、かくて大道を得させ給ふて帝位に即かせ給ふた聖天子にましまされるのである。

其明也者日月耻。其德也者乾巛合

【譯方】其の明は日月も耻ぢ、其の德は乾巛に合へり。

【字訓】○明……英明にましますこと。○乾巛……巛は坤の古文。されば乾坤で天地をいふ。

【要意】御兩帝の御高德を日月天地の大に比して讃嘆し奉る。

【講義】更に御兩帝の英明にして御高德にましますことは日月も及ばざる程であらせ給ひ、またその御仁德の廣大にましまし勝れさせ給ふことは天地に契はせ給ふ程であらせられる。

神則鬼不神。智則聖不智。千年雙聖一天兩日。于今見矣

【譯方】神は則ち鬼も神ならず。智は則ち聖も智ならず。千年の雙聖一天の兩日今に見つ。

【字訓】○神則鬼……神は神變神通の義、鬼は神鬼、『老子』下卷治大國章に「道を以て天下に莅めば其の鬼神ならず」と。即ち天子が道德を以て天下に臨莅せば神鬼其の精神をあへてせざるの意。○智則聖尊……聖智も及ばざるの義。○千年雙聖……聖人は千年に一度出世するといふ故事に從つて、嵯峨、淳和の御兩帝を千年の聖人に比し奉る。○一天兩日……御兩帝を日に譬へ奉り、今此の御兩帝は一天に兩日あるが如しと嘆じ奉る。

【要意】更に御兩帝の德を讃嘆し奉る。

【講義】更に御兩帝の德智に勝れさせ給へることは、その神變神通の神業は神鬼すらも遠く及ばざる處であらせられ、またその智の勝れさせ給ふことは聖智も及ばざる處であらせられる。全く御兩帝は千年の聖人にましまされ、而もその千年の聖帝が一時に御二方までも在せられ、それは恰も一天に兩日輪が輝けるが如き盛儀であり、その盛儀を今現在我々が仰ぎ奉ることの出來ることは誠に慶賀至極である。

去延曆之末桓武皇帝駕龍入天

【譯方】去し延曆の末に桓武皇帝龍に駕して天に入りたまふ。

【字訓】○延曆之末……延曆は第二十五年に改元す。此の年三月十七日桓武帝崩御し給ふ。○駕龍入天……陛下の崩御し給ふこと。即ち『史記』封禪書第六に曰く「黃帝首山の銅を采て鼎を荆山の下に鑄る。既に成て龍あり、胡髯を垂れて黃帝を迎ふ。黃帝上て騎す。群臣後宮從て上る者七十餘人、龍乃ち上り去る」と。

【要意】桓武帝の崩御のことを記し奉る。

【講義】去る延曆の末、即ち延曆二十五年三月十七日に桓武皇帝におかせられては悲しくも崩御遊ばされたのである。

太上親握龍管奉爲大行皇帝奉寫金字法華經一部七卷奉答海岳

【譯方】太上親ら龍管を握つて大行皇帝の奉爲に金字の法華經一部七卷を奉寫して海岳に答し奉りたまふ。

【字訓】○太上……『便象』の義によれば嵯峨上皇を指し奉る。即ち嵯峨帝の未だ潛龍たりし時代のこと。○龍管……筆のこと。○大行皇帝……桓武皇帝の御こと。大行皇帝とは天子の崩御後未だ諡を奉らざる間の稱。○七卷……法華經には調卷の不同ありて十卷本、八卷本、七卷本、六卷本、等あり、今は七卷本により給ひし故に一部七卷と記し給ふ。○海岳……御恩德の深高なるに比し奉る。

【要意】法華經を寫し奉るに至つた所以を明し給ふ。

【講義】此處に於て嵯峨太上に於かせられては桓武皇帝の奉爲に親ら金泥を以て法華經一部七卷を奉寫し、深高なる御恩德に酬ひ奉られたのである。

天下寶藏之西寺前年冬月與天火滅。紙燼字存。兩聖痛之人亦感惜

【譯方】天下寶藏として之を西寺に藏む。前の年の冬の月、天火の興に滅びたり。紙は燼えて字は存せり。兩聖之を痛み、人も亦感み惜む。

【字訓】○西寺……京都市下京區九條の西、東寺の西八町に在り。少僧都慶俊の開基。○天火……雷火のこと。○兩聖……嵯峨・淳和の御兩聖帝を指し奉る。○感……惻むこと。

【要意】御筆の法華經が雷火の爲めに燒失せしことを記し給ふ。

【講義】金泥御筆の法華經は天下の寶として之を西寺に收藏せしめ給はれたのであつたが、不幸にして前年の冬、雷火のために燒失しぬ。併し燒失といつても紙は燒け乍らも金泥の文字は殘存したのである。ともあれこの燒失を嵯峨淳和の御兩帝に於かせられては非常に痛み給はれ、また人々も之れを誠に遺憾なことと惻み惜しまれたのであつた。

去年春季上皇舉宮潔齋一月之間於冷然菴室更揮玉管重寫金字鸞風翔碧落而含象龍蜩遊蒼海以孕

義

【訓方】去し年の春の季に、上皇宮擧つて潔齋して一月の間に冷然の菴室に於て更に玉管を揮つて重ねて金字を寫したまふ。鸞風碧落に翔つて象を含み、龍螭蒼海に遊んで以て義を孕めり。

【字訓】○冷然……弘仁十四年四月天皇寶位を太子に讓られ給ひ、冷然院に遷り給ふ。冷然院は大炊の御門の南堀川の西にあり。嵯峨天皇の御宇に造らる。本名は冷然院、後に火災に依て然の字を改め泉となす。○鸞風・龍螭……共に字勢の麗はしく勝れたるを賞讃せし語。○碧落……あをぞら、天のこと。○螭……龍の雌、角なき龍をいふ。○孕義……萬象を含むこと。

【拿意】法華經を重ねて書寫し給ひし有り樣を記し給ふ。

【講義】去年の春、嵯峨上皇を始め奉り、宮樣方こぞつて一月の間精進潔齋し給ひ、冷然院の菴室に於かせられて重ねて更らに玉管を揮はせ給ふて金泥の法華經を書寫し給ふたのである。その書寫し給はれた文字の麗はしく勝れさせ給ふことは恰も、碧空を翔る鸞風の如くであり、また蒼海に遊べる龍螭の如くであらせられ、一點一畫に萬象を含藏せるが如き勢を示し、全く古今無比の文字であらせられる。

張王擲筆鐘蔡懷耻

【訓方】張王も筆を擲げ、鐘蔡も耻を懷かん。

【字訓】○張王……張は後漢の張芝、王は晉の王羲之、共に能筆を以て著る。○鐘蔡……鐘は魏の鍾繇、蔡は後漢の蔡邕、共に書道の名人。

【拿意】書寫の文字の麗はしく、古今無比なることを嘆賞し給ふ。

【講義】この書寫の文字の巧みなことは、かの後漢の張芝も晉の王羲之も共に遠く及ばずとて筆を投げ捨てゝ慨歎する程であり、またかの魏の鍾繇も後漢の蔡邕の如きも此の御筆に比すれば恥を抱く程に立派な出來榮へであらせられる

今上追遠感懷。欲報罔極。謹託西仁祠遇仰金仙靈。嚴

飾精舍延崛名僧。八箇日間講演太上御札金字法華

【訓方】今上遠きを追つて感懷し、罔極を報せんと欲す。謹んで西の仁祠に託いて金仙の靈を憑み仰ぐ。精舍を嚴飾して名僧を延崛し、八箇日の間太上御札の金字の法華を講演したまふ。

【字訓】○追遠……祖先の德を追ひ思ふこと。今は桓武帝の德を偲び奉ること。○感懷……心に感じ思ふこと。○罔極……きはまりなきこと。即ち極りなき父母の恩をいふ。淳和帝は桓武帝の第三皇子にまします。○西仁祠……仁祠は寺のこと、されば西寺を指す。○金仙……佛をいふ。○延崛……招くこと。○御札……『開書』によれば御札は表制集七には「御札神綬」と。文選には「短札を具す。注に向が曰く、札は筆なり」と。されば御札は御筆のこと。

【拿意】御筆の法華經を講演し奉るに至れる所以を明し給ふ。

【講義】淳和帝に於かせられては御父君桓武帝の御高德を深く感じ偲び奉り給ふて、その極りなき御恩德に報ひ奉らんと思し召されて、謹んで西寺に於て佛陀の靈を仰信し給ひ、且つ精舍を莊嚴し、名僧を招請し給ふて八日間、嵯峨太上御筆の金字の法華を以て講演を催し給ふに至つたのである。

釋迦再生鷲嶺之會輻湊。四衆重集涌出之瑞森羅。鍾磬一響讚唄斷續。老幼三禮香華飄隕

【訓方】釋迦再び生れて鷲嶺の會輻湊し、四衆重ねて集つて涌出の瑞森羅たり。鍾磬一び響いて讚唄斷續し、老幼三び禮して香華飄隕す。

【字訓】○釋迦再生等……諸の大德が法華を講說するさまは恰も釋尊が再び出世し給ふて說法するに似たりの意。○鷲嶺之會……靈鷲山に於て釋尊が法華經を說き給へる會座をいふ。○輻湊……あつまること。○四衆……比丘・比丘尼、優婆塞、優婆夷等の聽衆の義。○森羅……森然として羅列することで、多くならぶこと。○鍾磬……鍾はつりがね。磬は本來は玉又は石を材として作れるヘ字形の樂器。○讚唄斷續……講演の間、讚と唄交々唱ふる故に斷續といふ。○香華飄隕……香煙たゞよひ、散華の花葉舞ひ落つること。

【拿意】法華經講演の盛儀を明し給ふ。

【講義】さて續つて講莚の盛儀を申すならば、諸の大德が巧みに法華經を講說する有り樣は釋尊が再び出世してかの靈鷲山の會場に於て說法し給へるが如くであり、またその聽衆のつどひ集まれることは恰も釋尊の靈鷲山の會場に多くの者が集れるその如くに四衆等の諸の人々が、恰も地より涌き出でし菩薩の如くに森羅としてならび集り、それらの聽衆は皆、講演に心眼を疊して法悅の涙に咽び、また講演の間に鍾磬の音一たび傳るや讚唄の聲交々に斷續して傳はり、その有り難さに老ひも若きも皆三禮して伏し拜み、香煙たゞよひ散華の華ひら〳〵と舞ひ落つる等全く密嚴曼荼の世界の現出せし盛儀である。

伏願沃此法水奉浴先皇。五雲蕩一諷之口。兩曜揭一念之心。優遊覺月之殿。放曠惠日之觀。

【訓方】伏して願くは此の法水を沃いで先皇を浴し奉る。五雲は一諷の口に蕩け、兩曜は一念の心に揭げん。覺月の殿に優遊し、慧日の觀に放曠せん。

【字訓】○法水……法の功德のこと。『無量義經』說法品第二に曰く「法は譬へば水の如し。能く垢穢を洗ふ」と。○五雲……五蓋障のこと。五蓋障とは煩惱障、業障、生障、法障、所知障の五障で、此れを淨除すれば初地を證得するに至る。○兩曜……日、月のこと。覺月、慧日で、月は覺を、日は慧を表す。佛果を證し、佛智を体得せしこと。○優遊……休息することで涅槃の意。○放曠……ホイマヽになる義で、菩提智にかゝる。

【拿意】正しく願文の意を明し給ふ。

【講義】伏して願くは此の法華八講の修會の功德を先皇桓武帝に廻らし奉り、以て五蓋障を此の講演の法力によりて淨除し奉り、覺月慧日を一心に證得し給はれて、正しく覺月の殿に涅槃し給ひ、慧日の菩提智をほしいまゝに照し給はんことを。

太上天皇超然守一。姑射忘歸。脫躍谷神汾河般樂。

【訓方】太上天皇超然として一を守つて姑射に歸らんことを忘れ、脫躍して神を谷つて汾河に般樂したまふ。

【字訓】○超然……世塵に超越し給ふこと。○守一……一は道を指す、されば道に則り守ること。○姑射……內裏のこと。○脫躍……王位を去り給ふをいふ。○谷神……谷は養ふこと。『老子經』に「神を谷ふものは死せず」と。○汾河……仙洞御所を指し奉る。○般樂……般も樂も共にタノシムこと。

【拿意】嵯峨上皇を嘆じ奉る。

【講義】嵯峨上皇に於かせられては世塵を超越遊ばされ、道を守り、宮中に御歸還遊ばされることを忘れさせ給ふて遂に位を讓り給ひ、專心神魂を養はれ、以て仙洞御所に御留住遊ばされて大道の世界に般樂し給はれてゐらせられる。

今上陛下體練金剛。壽堅石劫。

【訓方】今上陛下、體は金剛を練し、壽は石劫よりも堅からん

【字訓】○今上陛下……淳和天皇を指し奉る。○體練金剛……金剛の如くに堅固な玉體であらせ給ふこと。○壽……御寶算のこと。○石劫……四十里四方の石山を長壽の人が百年毎に細氣の衣を以て拂拭して遂に磨滅せしむれど、まだ劫は盡きずと。

【拿意】淳和天皇を嘆じ奉る。

【講義】淳和天皇に於かせられては云ふも長れ多いことながらその玉體は金剛の如くに堅固に保ち給はれ、またその御寶算は石劫よりも長く御長命であらせられることであらう。

無爲垂拱爭北辰之天長。無事明哉將南嶽之地久。

【訓方】無爲垂拱にして北辰の天長に爭ひ、無事明哉にして南

獄の地久に將はん。

字訓 ○無爲垂拱……無爲は何事も爲さずして自然に治ること。垂拱は衣を垂れ手を拱き何事をもなさずして天下よく治ること。○北辰之天長……『論語』に曰く「政をするに德を以てす。譬へば北辰の其の所に居て衆星の之に拱するが如し」と。○明哉……明朗たること。○南嶽之地久……南嶽のことは『毛詩』に曰く、「南山の壽の如し。騫げず、崩れず」と。地久のことは『老子』上卷天長地久章に曰く「天長く地久し」と。要するに天地長生久壽なることを云ふ。

意義 陛下の德化を蒙りて天下泰平を壽ぎ奉る。

講義 聖天子の御高德を蒙りたるを以て天下は無爲垂拱にしてよく治り、聖天子の德を慕ひ奉ること恰も北辰に衆星が向ふその如くに爭つて慕ひ集る有り樣であり、全く天下は無事安穩にして明朗として平和に輝き、天地長生久壽なることであらう。

世子盤石股肱良哉

講方 世子盤石にして股肱良哉ならん。

字訓 ○世子……太子を指し奉る。○盤石……聖躬堅固にして盤石の如くに不動であらせ給ふこと。○股肱良哉……よき輔佐であらせられること。

意義 太子を嘆じ奉る。

講義 また太子に於かせられては聖躬萬歳にして堅固不動なること恰も盤石の如くであらせられ、然もよき輔佐であらせられ給ふ。

四門穆穆多士濟濟

講方 四門穆穆として多士濟濟たらん。

字訓 ○四門……禁中の四方の門で、宮中以外を指す。○穆穆……つゝしみてうやゝしきさま、また和ぐ貌。○多士濟濟……勝れたる人の多きを云ふ。

意義 賢良の臣の多きを嘆ず。

講義 また禁裏の外に於ては良臣賢臣穆穆として仕へ、然もその良臣賢臣の多きさまは全く多士濟濟たりと申すべきであらう。

國風澹朴時雨平施

講方 國風澹朴にして時雨平く施さん。

字訓 ○國風……國の風俗。○澹朴……澹靜にして朴直なること。○時雨平施……時雨とは五風十雨時に從ひ、氣候順調に、五穀豐饒にして人民豐かなるをいふ。平施は平等に時雨の恩惠を蒙ること。

意義 萬民の靜謐なる善風を嘆ず。

講義 かく上には聖天子在せられるが故に下人民その德化を蒙りて萬民の間には澹靜にして朴直たる善風行はれ、加ふるに五風十雨時に從ひ、氣候順調であるが故に等しく時雨の恩惠を蒙るであらう。

人親其親家子其子百穀盈畝萬民滿街

講方 人は其の親を親とし、家は其の子を子とせん。百穀畝に盈ち、萬民街に滿たん。

字訓 ○人……子をいふ。○家……親をいふ。○百穀……いろ〳〵の穀物のこと。○畝……田や畠のウネのこと。今は單に田や畠を指す。

意義 道德よく行はれ五穀豐饒にして天下泰平を嘆ず。

講義 かくて三綱五常等の道德よく行はれ、子はその親を親として敬ひ奉り、親はその子を子としてよく敎誘する等、社會の美風よく行はれ、加ふるにすべての穀物よく田畠に稔り、萬民富み榮えて街に天下泰平を歌歡する聲が滿ち〳〵ることであらう。

牢籠三界綿絡四生同脫愛獄齊遊覺道

講方 三界を牢籠し、四生を綿絡して同じく愛獄を脫し、齊しく覺道に遊ばん。

字訓 ○牢籠……引き入れて丸めこむこと。即ち攝取不捨をいふ。○綿絡……つらなりまとふことで、攝取不捨をいふ。○四生……胎・卵・濕・化で一切有情をいふ。○愛獄……三界をいふ。

意義 一文の結言を述ぶ。

講義 更にこの功德によりて三界に於ける一切の衆生をよく攝取引導して、等同に三界の貪愛の獄より逸脫せしめ、本覺眞如の里に遊樂せしめんことを。

四六　天長皇帝爲故中務卿親王捨田及道場支具入橘寺願文

天長皇帝爲故中務卿親王捨田及道場支具入橘寺願文

講方 天長皇帝故の中務卿親王の爲に田及び道場の支具を捨てゝ橘寺に入るゝ願文。

字訓 ○天長皇帝……天長は淳和天皇の曆號、よりて淳和天皇を指し奉る。○故中務卿親王……伊豫親王の御ことなり。○橘寺……大和國高市郡高市村大字橘にあり。現在は天台宗に屬す。

意義 初に題名を掲ぐ。

講義 淳和天皇、伊豫親王の爲に田地及び道場の支具等の種々のものを橘寺に寄捨し給ふに就ての願文。

雙圓大我起如如於一居五部曼荼羅智智乎諸識

講方 雙圓の大我は如如を一居に起し、五部の曼荼は智智を諸識に韞めり。

字訓 ○雙圓……圓圓海會の諸佛、即ち自性法身をいふ。○大我……佛の別名で、今は大日法身をいふ。○如如……如如の理をいふ。○一居……一言で、五種の言說の中の第五の如義言說をいひ、如義言說を以てすれば眞理を談ずることが可能なりとす。○起……說き顯はすこと。○五部……佛部・蓮華部・金剛部・羯磨部・寶部。○智智乎諸識……『秘藏記』に曰く「中臺心王の尊を以て一切の心主を攝す。是を一識といふ。八葉の尊を以て一切の心主を攝す。是を八識と謂ふ。八葉及び中臺の尊を以て一切の心主を攝す。是を九識と謂ふ。其の餘の十佛剎微塵數の一切の心主を一識に攝す。是を十識と謂ふ。是を一切一心識と名く」と。されば無量の心識に悉く智を含む故に智智諸識につゝむと云ひしなり。

意義 法身大日如來即ち金胎・理智・因圓果滿の境界を明し給ふ。

講義 自性法身大日如來はその內證の法門たる如々の理を如義語を以て說き示し給ひ、また五部の曼荼羅諸尊は大日法身の差別智身たる一切の智智を一識に攝し給へる尊である。

秣大羅而牛羊嬾脂化城而烏兎喘

講方 大羅に秣うて牛羊嬾れ、化城に脂して烏兎喘ぐ。

字訓 ○大羅……『甄正論』上に曰く「大羅の天玄都の境は玉淸天尊大淸大道君上淸老子所居の天三淸大羅是れ三十二天の內天なり」と。されば大羅は天のことであるが今は恐らく天乘を指すならん。天乘を擧げて人乘を擧す。○牛羊……牛は菩薩乘、羊は聲聞乘にそれ〴〵譬ふ。菩薩と聲聞を擧げて緣覺を擧す。○脂化城……車が遠くへ行くときには脂を注ぐ如く、今沈空の化城を脂塗して更に二百由旬を進む故に脂すといひ、即ちこれ廻心向大を指す。化城とは三百由旬の行程に於ける化城で三乘の涅槃の處。○烏兎喘……烏兎は日月であるが、今は時日を指し、三生六十劫、四生百劫、三阿僧祇劫等の顯敎の修行者の發心して佛果体得に至る所經の時間を指す。喘とは神通乘敎を知らざる故に長劫の間勞苦するをいふ。

意義 神通乘敎たる眞言の敎に五乘三乘の及ばざる義を明す。

講義 人天乘の敎によりて修行する者も、また顯敎の敎を奉じて菩薩乘・緣覺乘・聲聞乘等の三乘敎の修行者も供に成佛に至る迄には三大無數劫等の長劫の修行を必要とするが故に 愈れ果てゝ仲々佛果に到達することは難事であり、また三乘の修行者が三百由旬の化城に於て 暫 覺を蒙り廻心向大して大乘の妙極に赴くとしても神通乘を知らざるが故に三大阿僧祇劫の間修行し勞苦を積まねばならぬ。

遠而不遠卽我心。絕之不絕是吾性

【讀方】遠して遠からざるは卽ち我が心なり。絕えて絕えざるは是れ我が性なり。

【字釋】○心……智に約す。○性……理に約す。

【聲意】萬法唯一心なる故に法は尤も近き自心にあることを示す。

【講義】萬法は一心の所現にして、而もその一心は自己自身に具有してゐるものである。されば眞如は如何にも遠くにある樣に思つてゐるけれども本當は尤も近き自心そのものにあるのである。して見れば佛性は我が心性と絕離してゐる樣に思つてゐるけれどもそうではなく、我が心性こそ佛性そのものであつて決して我が心性と佛性とは絕離してゐるものではないことを知るべきである。

水清則不到而到。鏡瑩則不得而得。鍾谷之應奚其遲矣

【讀方】水清むときは則ち到らずして到り、鏡瑩くときは則ち得ずして得、鐘谷の應奚んぞ其れ遲きや。

【字釋】○水……心水で理に譬ふ。○鏡……智鏡で智に譬ふ。○鐘谷之應……打鐘の響き、及び鄔谷に於ける山彦で反應をいふ。○奚其遲……鐘谷の響きよりも速かなること。

【聲意】前章の遠而不遠等の譬說で、速疾頓證の義を明す。

【講義】かくの如く佛法は己心中に存してゐるものなるが故に行者の心水を淸ましむればそれで直ちに法佛の境地に到達せし筈のもので、換言すればそれは不到の到とでも云ふべきものであり、また法は自己の一心そのものに存してゐるのであるが故に自己の鏡智を瑩けばそれで佛智を体得せし筈のものであつて、換言すればそれは不得の得といふべきであり、その体得の經過はかの●顯教の如く三大阿僧祇劫といふ長時を要する必要なく、その速やかさは鐘谷の反應さへも遲しとする程に一瞬に成就し得るものである。

伏惟故中務卿親王。爀曦之玉葉圓舒之金柯。純粹稟天乃智人傑

【讀方】伏して惟れば故の中務卿親王は爀曦の玉葉圓舒の金柯なり。純粹天に稟けて乃智人傑なり。

【字釋】○爀曦……爀は赫に同じ。赫曦はかゞやける日光のこと。○玉葉……天子の御一門を指し奉る。○圓舒……月のこと。○金柯……金枝に同じく、皇族を稱し奉る。○乃智人傑……乃智の乃は付字、人傑は勝れたる人のこと。

【聲意】伊豫親王の德を嘆じ給ふ。

【講義】伏して惟るに故の中務卿親王、即ち伊豫親王に於かせられては金枝玉葉の御身であらせられ給ひ、その天性は純粹にして、且つ智に勝れさせ給へる人傑であらせらる。

所冀爭壽椿桃。竭忠松竹

【讀方】冀ふ所は壽を椿桃に爭ひ、忠を松竹に竭さんことを。

【字釋】○椿桃……共に長壽をいふ。椿につき『莊子』第一逍遙篇に曰く「古に大椿といふ者あり。八千歲を以て春とし、八千歲を以て秋とす」と。桃につきては『拾遺記』第三に曰く「磅礴山扶桑を去ること五萬里、日の及ばざる所地寒し。則ち桃樹千圍其の華青黑色、萬歲に一び實る」と。○松竹……節操の正しきに譬ふ。

【聲意】親王に對し奉りて萬民の願ひを明し給ふ。

【講義】國民の等しく冀ふ所は椿桃のそれよりも御長壽であらせられ給ふて、陛下に忠節を盡し給はれんことをといふことであつた。

寧圖控鶴早飛忠孝忽違

【讀方】寧ろ圖りきや。控鶴早く飛んで忠孝忽ちに違はんとは。

【字釋】◉控鶴……王子喬が白鶴に乘じて天に昇りし故事を指し、今は親王の薨じ給ひしに譬へ奉る。○忽違……萬民は等しく長壽を保たれ、忠義をいつまでも盡され度しと願ひ祈つてゐたのに早や薨じ給ふとは、その祈願に違ひ給ふをいふ。

【聲意】親王の薨じ給ふを記さる。

【講義】萬民は斯樣に心から祈り奉つてゐたのであるが故にいづくんぞ夾の樣なことを思ひもうけよや決して思ひもうけざりしことであつた。即ち親王がかくも早く控鶴して天に昇り給ひしことを。また永へに忠孝を盡し給へと祈りし萬民の期待に違ひ給ひしことを。

哀哉悲哉。雨絕雲端。一鳧蜿轉。露消葉上。數稚哽咽

【讀方】哀れなるかな、悲しいかな。雨雲端に絕えて一鳧蜿轉し、露葉上に消えて數稚哽咽す。

【字釋】○雨絕雲端……雨が雲の端より降りて再び雲に歸へることなきをいふ。雨は親王に譬へ奉り、絕は薨去を示し、雲は大裏に譬へ奉る。然も此の句は前章の譜を受けし譬說なり。○一鳧……御夫人に譬へ奉る。○蜿轉……輾轉反側して悲しみ給ふこと。○露消葉上……『蘇子』に曰く「夫れ人生一代朝露の桐葉に託するがごとし」と。されば人生のはかなきをいふ。○數稚……二三の稚子をいふ。○哽咽……すゝりなくこと。

【聲意】哀悼のさまを記し給ふ。

【講義】哀れなるかな悲しいかな。雨、雲の端より降りて再び雲に歸へることなきその如くに親王薨じ給ふて早や再び歸へり給ふことなし。御一門の御悲嘆喩へ樣もなく御夫人に於かせられても輾轉反側して悲しみ給ふ。げに人生は朝露の葉上に於けるが如くにはかなく消え去るとは、されど後に殘り給ひし御子供方は悲しき胸につかへてたゞすゝり泣き給ふばかりである。

不分不分。何蒼蒼忍剩無情。何奪我鐘愛

【讀方】不分、不分。何ぞ蒼蒼忍んで剩さへ情無き何ぞ我が鐘愛を奪へる。

【字釋】○不分……ねたましきこと。○蒼蒼……天のこと。○鐘愛……鐘は楽でアツム義、即ち情あつまつて愛する所。

【聲意】薨御を悲しみ給ふ。

【講義】ねたましいかな、ねたましいかな。何うしてや天は密かにしのびに來りて、あまつさへその上に、なさけなくもどうしてや我が最も愛歡し給ふ所の親王を奪ひ給ふや。

聖襟慟兮忘味。凡庶慘兮不相

【讀方】聖襟慟んで味を忘れ、凡庶慘んで相せず。

【字釋】○聖襟……天子の御胸襟をいふ。○慟……哀しみなげき給ふこと。○凡庶……萬民のこと。○慘……憂ひいたむこと。○相……キネウタのことで、中昇してキウタといふ。『史記』列傳第八に曰く「五覇大夫死す。秦國男女涕を流す。童子歌謠せず。春する老相杵せず」と。

【聲意】國を擧げて哀悼し奉るさまを記さる。

【講義】長くも天子に於かせられても深く慟み奉られ食物の味を忘れさせ給ふ程であらせられ、下萬民も等しく哀悼し、きねうたなども謹しみ御遠慮し、深く哀悼の意を表し奉つてゐる程である。

性愛恩深思崇福祐

【讀方】性愛恩深うして福祐を崇めんことを思ふ。

【字釋】○性愛恩深……天性としていつくしみめぐみ給ふ心深きこと。○福祐……さひはひのこと。今は冥福のこと。○崇……追崇すること。

【聲意】天長皇帝が親王の追福を祈り給ふに至りし所以を明し給ふ。

【講義】天長皇帝に於かせられてはその天性としていつくしみめぐみ給ふ御心深くあらせられるが故に、冥福を追崇せんと欲し給はれたのである。

謹以天長四年九月日。敬造藥師如來羯磨身。日月遍照兩大士羯磨身。寫金文蓮華法曼荼羅

【讀方】謹んで天長四年九月の日を以て敬つて藥師如來の羯磨身と日月遍照兩大士の羯磨身とを造り、金文の蓮華法曼荼

羅を寫す。

字訓 ○羯磨身……威儀具足の尊像のこと。○日月遍照兩大士……藥師如來の兩夾侍で、日光、月光の兩菩薩のこと。○蓮華法曼荼羅……法華經をいふ。

音意 迫福の爲めに造像と寫經との善業を記す。

講義 伊豫親王の御迫福の奉爲に、謹んで天長四年九月の日に、藥師如來の尊像と、その兩夾侍たる日光菩薩と月光菩薩との兩尊像とを刻造し、また金泥を以て法華經を寫し奉る。

兼延嵒致仕僧都空海・小僧都豊安・致仕律師施平・律師戴榮・泰演・玄叡・明福等・以爲講匠・泰命都講・慈朝・達嚫・法相中繼・隆長等・三論壽遠・實敏等・眞言眞圓・道雄等二十智象・聽法上首・四箇日間開レ卷盡レ文旗鼓談義

訓方 兼て致仕の僧都空海、少僧御豊安、致仕の律師施平、律師戴榮、泰演、玄叡、明福等を延嵒して以て講匠と爲し泰命を都講とし、慈朝を達嚫とす。法相には中繼、隆長等三論には壽遠、實敏等、眞言には眞圓、道雄等二十の智象を聽法の上首として四箇日の間卷を開き、文を盡し、旗鼓して談義す。

字訓 ○延嵒……延請で招き請ずること。○致仕……官を辭して退くこと。故に致仕の僧都は前の僧都の意味。○講匠……講師のこと。○都講……『便蒙』に『僧史略』上卷を引きて曰く「敷宣の士擊鼓の由、旁人をして端を啓くに非れば座に在て孤り起し難し、故に梁武、經を講ずるには祇園寺の法彪を以て都講となす。彪公先づ一問すれば梁帝方さに舌端を鼓して戴索して戴徵す。隨問隨答す。此れ都講の大體なり」と。要するに都講の役は、經を講ずる傍にありて問難を擧ぐるを能く答するのである。此れ都講の本義である。○嚫……諷師交を讀む役。○四箇日……四日八講で、四日間に毎日朝夕二座を勤めて法華經八卷を講ずること。○旗鼓……論戰の盛なるをいふ。

音意 冥福の爲めに法華八講を勤修せし有り樣を記す。

講義 兼ては法華八講を勤修せんが爲めに前の僧都空海、少僧都豊安、前の律師施平、律師戴榮、泰演、玄叡、明福等を招請して以て講師となし、また泰命を都講とし、慈朝を達嚫となし、其の他に、法相宗からは中繼、隆長等、三論宗からは壽遠、實敏等、眞言宗からは眞圓、道雄等凡そ二十の智學勝れたる高僧達を聽法の上首となして、四箇日の間、經卷を開き各その文言を盡して盛んに論難問答し、論議を戰はしたのである。

并永捨入若干色物。其水田十餘町者毎年春秋兩節云云

訓方 并に永く若干の色の物を捨入す。其の水田十餘町は毎年春秋兩節にす。

字訓 ○毎年春秋兩節……毎年春秋の兩節に迫福の講會を設くる費用に充當するの意。○云云……此の中間に作法等あるを畧する故に。

音意 施入とその用途を示さる。

講義 以上迫福の爲めに刻像、寫經、講會等の善業と并に更に若干の種々のものを捨入し給ふ。その捨入の中で水田十餘町はこれから毎年春秋二回に講會を催すための諸費用に充てんとするものである。中畧。

爾乃乘蓮金體流累日之光彩。潤草玉文致梵釋之誠請

訓方 爾れば乃ち乘蓮の金體は累日の光彩を流し、潤草の玉文は梵釋の誠請を致す。

字訓 ○乘蓮金體……新しく彫刻せる藥師等の尊像を指す。○累日之光彩……その光彩を放てること恰も日輪を重ねたるが如しの意。○潤草玉文……書寫せし處の金字の法華經を指す。○梵釋誠請……今日寫す所の法華經は恰も昔

梵天帝釋の誠請に依りて金口親り說きたまふが如しの意。

音意 所造と尊像の所寫の經典を嘆ず。

講義 さてかくて所造の藥師佛等の尊像は一入その光彩を放ちつゝあることは恰も日輪が重り合つて盛んに輝けるが如くであり、また書寫し給ふ所の法華經を拜讀すれば恰も昔梵天帝釋の誠請に依りて金口親り說き給へるが如き感銘を覺ゆるのである。

三妄蕩。一禮之題。五智集。一誦之吻

訓方 三妄は一禮の題に蕩け、五智は一誦の吻に集る。

字訓 ○三妄……三劫所度の妄執。○題……額のこと。○五智……大圓・平等・妙觀・成所・法界體性の五智。○吻……口邊のこと。

音意 禮佛・誦經（即ち造像と寫經）の功德を嘆ず。

講義 本當に信心の一念を以て佛を禮拜するとせば額地の一禮に於てすらも三妄執を脫脚して佛果を体得することが出來、また本當の信心を以て誦經するとせば一返の誦經に於てすらも五智を体得し得る筈のものである。

幡蓋颺搖輪座幾千。香華飛零相好無數

訓方 幡蓋颺搖し、輪座幾く千ぞ。香華飛零して相好無數なり。

字訓 ○颺搖……ひるがへり動くこと。○輪座幾千……『大灌頂神咒經』第十一普賢所問品に曰く「若し四輩の男女黃幡を作つて刹上に著れば八苦を離る。幡風に隨つて破碎して塵に盡きて微塵と成るに至る。風の幡塵を吹く、其の福無量なり。一轉する時轉輪王の位を得、乃至塵を吹く小王の位なり」と。要するに輪座は輪王位のことで、千轉すれば千の輪王位を得るが故に幾千と云ふ。○香華零……『華嚴經』第十七回向品に曰く、「衆華を布施する時是の如く廻向すれば此の善根を以て一切衆生をして常に妙色身を見、相好端嚴にして見る者厭ふことなからしむ」と。○飛零……とびちること。上の颺搖に對する語で意味なし。

音意 幡蓋と香華（即ち道場莊嚴具）の功德を嘆ず。

講義 幡蓋の功德たるや廣大にして、若し幡蓋が風に吹かれて颺搖として千轉するならば千轉輪王の位を得と稱せられ、また香華の功德も威大にして衆華を供養するならばその善根によりて一切の衆生をして妙色身を見、相好端嚴ならしむと稱せられてゐる程に廣大な功德があるのである。

伏願沃。此法水洗彼煩惱。性蓮乍發顯微塵之心佛。心法忽開證恒沙之遍智

訓方 伏して願くは此の法水を沃いで彼の煩惱を洗はん。性蓮乍ちに發けて微塵の心佛を顯し、心法忽ちに開けて恒沙の遍智を證せん。

字訓 ○煩惱……梵は獨で、ひとりあるたましいのこと。○性蓮……本性の心蓮のこと。○微塵之心佛……『便蒙』に『大日經疏』第一を引きて曰く「心王所住の處には必ず塵沙の心數有つて以て眷屬たり。今は心王の毘盧遮那自然覺を成ず。爾の時に一切の心數即ち金剛界の中に入て如來內證の功德差別智印と成らざるはなし」と。○恒沙之遍智……遍智は佛性のこと。即ち恒河沙の如き佛性をいふ。

音意 願意を明し給ふ。

講義 伏して願くは此の法の功德を廻向して伊豫親王の煩惱を清淨になし奉らんことを。然らば親王の本性の心蓮乍ちに啓發せられて如來內證の功德差別智印たる心佛を顯現し、心法たちまちに開けて恒沙の佛性を證悟し給ふであらう。

福廻聖躬。現當有餘。衆與生所遍之刹。情與非所在聚。豁大肚而懷含。開鴻藏以亭毒。同他饅乳之味。齊遊阿字之閣

訓方 福聖躬に廻して現當に餘り有らん。衆と生との所遍の

刹、情と非との所在の聚、大肚を豁かんじて懐含し、鴻藏を開いて以て亭毒せん。同じく鏝乳の味に飽いて齊しく阿字の閣に遊ばん。

字釈 ○聖躬……天長皇帝を指し奉る。○衆……四聖のこと。○生……六凡のこと。○刹……國土のこと。○情……有情のこと。○非……非情のこと。○聚……聚落のこと。○大肚……佛の意。○鴻藏……鴻は大、藏は無盡莊嚴藏、法に約す。○亭毒……化育の義。○鏝乳之味……眞言の法味で、金剛界に約す。○阿字之閣……法界宮殿で、胎藏に約す。

拳意 總じて一切の善根を三方面に分つて廻向せしことを明す。

講義 更に善根を聖躬に廻らし奉り、以て現當に於て益々榮えあらんことを。また更に四聖と六凡の所遍の世界、或はまた有情と非情の棲る世界に廻らして、一切のものをして、佛果をあきらかにして之を體驗せしめ、大無盡莊嚴藏の法門を開陳して以て化育せしめんことを。そして皆等しく眞言の法味を證驗して法界宮殿に遊樂し給はんことを。

四七　天長皇帝於大極殿嘘百僧雩願文

天長皇帝於大極殿嘘百僧雩願文

講方 天長皇帝大極殿に於て百僧を嘘して雩する願文。

字釈 ○大極殿……昔、天子の朝政を聽かれ給ひし正殿。一本に大極の下に清涼兩の三字あり。○雩……夏の雨請の祭をいふ。

拳意 初に題名を擧ぐ。

講義 淳和天皇、大極殿に於かせられて百僧を請じ、雨請の法要を勤めさせ給へる御時の願文。

維天長四年中夏之月朔乙酉。皇天所兒蒼生所父。陽谷之帝祖州之林

講方 維天長四年中夏の月朔乙酉、皇天の兒とする所、蒼生の父とする所、陽谷の帝、祖州の林。

字釈 ○維……發語の辭。○中夏……五月。○月朔……朔日、ついたちのこと。○皇天所兒……皇天は天津神の稱、即ち天津神の御子孫であらせられる天子を稱し奉る。○蒼生所父……蒼生は百姓のこと、即ち國民の齊しく父と仰ぎ奉ることで天子を稱し奉る。○陽谷之帝……陽谷は東方の日の出づる處で日本をいふ。日本國の帝王の御こと。○祖州之林……林は君に同じ。祖洲は日本を指す。これにつき故事あり。即ち『十洲記』に曰く「祖洲近く東海の中に在り。地方五百里、西岸を去ること七萬里、上に不死の草あり。昔、秦の始皇大苑の中に狂死の者多しして道に横ふ。鳥あり、烏の如し。此の草を銜で死人の面に覆ふ。當時起坐して自活す。始皇以て北郭の鬼谷先生に問ふ。云く、此の草は是れ東海祖洲の上に不死の草あり、瓊田の中に生ずるなり。始皇是に於て使者徐福を使して童男童女五百人を發して等しく海に入りて祖洲を尋ね。遂に返へらず」と。されば祖洲は日本に當る。州は洲に同じ。

拳意 雩の年時と會主とを記し給ふ。

講義 これ天長四年中夏朔日乙酉に當り、天津神の御子孫であらせ給ひ、また國民の御父として齊しく仰ぎ奉る處の大日本帝國の君にましまされる處の淳和帝。

侵割甲膚潔淨身心尅己爲人民罪推予。曲躬合掌燒香散華。於大極清涼兩殿雩乎三尊之靈

講方 甲膚を侵割し、身心を潔淨して己を尅て人の爲めにし民の罪を予れに推る。曲躬合掌して香を燒き、華を散じて大極清涼の兩殿に於て三尊の靈に雩す。

字釈 ○侵割甲膚……爪を剪り、膚を侵し給ふことにて心を用ふることの苦切を表し給ふ。○尅己……『論語』に「己に克つて禮に復るを仁となす」と。即ち身をつゞまやかにすること。○民罪推予……若し民に罪ありとせば己が政の惡しきによるのであるとて却つて自らを責め給ふこと。『商書』に「王の曰く其の爾の萬方罪ありとも予れ一人に在らん。予れ一人罪あるとも爾の萬方を以てすること無けん」と。○曲躬……身をかゞめて禮拜すること。○三尊……三寶のこと。

拳意 淳和帝が身心潔淨して雩し給ふに至りたる有り樣を記し給ふ。

講義 長くも淳和帝に於かせられては、甲膚を侵割し給ふ程に細心に心を用ひさせ給ふて身を潔め、心を淨めさせ給ひ、且つ己が身を約やかになし給ふて下人民の福祉を計り給ひ、民の罪を己が身に歸し給ふ等深く仁政に御心を用ひさせ給ふ聖帝にましますが故に、今天下の千魃に際して民を救はせ給はんがために畏いこと乍ら身を曲め、合掌して佛に向はせ給ひ、香を燒き花を獻じ、以て大極清涼の兩殿に於て三寶の靈に雩を祈らせ給ふに至らせ給ふたのである。

聞道佛心者慈與悲。大慈則與樂大悲則拔苦拔苦無問輕重。與樂不論親疎

講方 聞道、佛心は慈と悲となり。大慈は則ち樂を與へ、大悲は則ち苦を拔く、拔苦は輕重を問ふこと無く、與樂は親疎を論せず。

字釈 ○聞道……本來は聞道なり、聞雩は俗說なり。聞くにはの意。○佛心……『無量壽觀經』に「佛心とは大慈悲是なり」とあり。○大慈、大悲……『大論』第二十七に曰く「大慈は一切衆生に樂を與へ、大悲は一切衆生の苦を拔く」と。

拳意 佛德を嘆ず。

講義 次の如く聞き及んでゐる。即ち佛心とは大慈大悲の心であり、大慈はよく一切衆生に樂を與へ給ひ、大悲は一切衆生の苦を拔除し給ひ、然も大悲の拔苦に際しては苦の輕重を問ふことなく、いかなる苦をも除き給ひ、また大慈の與樂に際しては身の親疎といふことを論ぜず一切衆生平等に與樂し給ふものである。

比鐘谷而唱和。超摩尼而感應

講方 鐘谷に比して唱和し、摩尼に越えて感應す。

字釈 鐘谷……鐘を打てば響きあり、幽谷に叫べば山彦あるその如くに佛陀の感應空しからざるに譬ふ。○唱和……『文選』五十三、李康の「運命論」に曰く、「之を唱（イザナ）へば必ず和す」と。即ち相ひ從ふことで感應をいふ。○超摩尼……摩尼寶珠が世間の願をよく成ずといふが、それ以上によく意願を成就せしむの意。

拳意 佛の感應の空しからざるを明す。

講義 佛の感應の空しからざることは譬へば鐘を打てば必ず響きあり、幽谷に叫べば必ず山彦あるその如くに信心に從つて感應の妙利を蒙るものであり、それは摩尼寶珠が人の願を必ず滿足させて與れるといふが其れ以上によく人の意願に從つて感應の妙を垂れ給ふものである。

三界所以仰之。十方所以憑之。無歸之大歸唯在覺中之大覺

講方 三界所以に之を仰ぎ、十方所以に之を憑む。無歸の大歸、唯覺中の大覺に在り。

字釈 ○無歸之大歸……無歸はおもむきたよる所なき義、大歸は大歸依處で、佛陀を指し、本當におもむきたよるべきものの義。○覺中之大覺……佛陀の覺をいふ。即ち聲聞や菩薩の悟りは分覺であるが、佛世尊の覺りは覺中の大覺なりといはる。

拳意 佛を仰信する所以を明す。

講義 かゝるなわけであるが故に三界の一切の有情のよく憑信する所である。全く覺中の大覺者であらせらる佛陀こそ我々一切衆生がおもむきたるべきものがないその者にとりて最後の大依憑者であらせらる。

又夫國以民爲基。人以食爲命。人命所繫惟食惟衣。衣食所在允農允桑。農桑何以得。唯憑平施

訓方　又夫れ國は民を以て基と爲し、人は食を以て命と爲。人の命の繫る所は惟れ食、惟れ衣なり。衣食の在る所は允に農、允に桑なり。農桑何を以てか得る。唯、平施を遇む。

字訓　○國以民等……『淮南子』に「食は民の本なり。民は國の本なり」と。○平施……雨の異名なり。

摯意　農業は雨水を基となす旨を明す。

講義　また夫れ國は民を以て基本となし、民は食物を以て命を繫いでゐるのである。されば人が生活して行く上に最も根本的なものはとりも直さずこれ食これ衣なりといふべきである。然もその衣食のよつてもつて生産される所以は實に農業であり、養蠶である。更にその農業、養蠶は何を以て基となしてゐるかといへばそれは雨水である。雨水なくして農桑は絶對に不可能なことである。

然今霖節不レ霖雨際不レ雨

訓方　然るに今霖節に霖せず、雨際に雨らず。

字訓　○霖節……梅雨の時節をいふ。○霖……ながあめのこと。三日以上降り續く雨を霖雨といふ。○雨際……印度に於ける雨季のことで、今は我が國の梅雨を指す。

摯意　雨時に雨なきを明す。

講義　か樣に雨は農桑の基であるにも拘らず、今年は霖節たる梅雨季にながあめなく、降らねばならぬ時季に一向に雨がないのである。

其雨其雨杲杲霧卷。欲レ霽欲レ霽朦朦雲舒。密雲不レ零。經レ旬涉レ日

訓方　其れ雨りなんとし、其れ雨りなんとして杲杲として霧卷き、霽なんと欲し、霽なんと欲して朦朦として雲舒ぶ。

密雲あつて零らず。旬を經、日を涉る。

字訓　○杲杲……明らかなる貌。○霽……はれわたること。○朦朦……おぼろなる貌で、雨の降らんとする形容。○零……雨おつること。○旬……十日。

摯意　雨降らんとして降らざる空模樣を記す。

講義　雨季なるが故に雨なしとはいへその空模樣は正に雨降ら降らうとして而も杲杲として明るくなり、明るくなつたかと思へばはや霧卷き起つたから雨になるかと思へばまた正に晴れ上らうとし、晴れ晴るかと思へば朦朦として雲立ち込むる有り樣である。か樣にして密雲立ち込むれども雨は一向に降らず。かくして段々と日時は經過すれども雨は降らざる有り樣である。

祈レ之河伯レ河伯國竭。禱レ之山魅レ山魅髮焦

訓方　之を河伯に祈らんとすれば河伯國竭き、之を山魅に禱らんとすれば山魅髮焦れたり。

字訓　○河伯……河の神。○山魅……山靈で山の神。○河伯國竭、山魅髮焦……『晏子春秋』第一に曰く「齊大に旱して時を逾ふ。景公群臣を召して問て曰く、寡人賦斂を少くして以て靈山を祠らんと欲す。可ならんや晏子進んで曰く、祠るべからず。夫れ靈山は固に石を以て身を爲し、草木を以て髮となす。天久しく雨らず。髮まさに焦れなんとす。身まさに熱んとす。彼れ獨り雨を欲せざらんや。之を祠るとも益なし。公の曰く、河伯を祠んと欲す。可ならんや。晏子が曰く、不可なり。河伯は水を以て國をなし、魚鼈を以て民とす。天久しく雨らず。國まさに亡びなんとす。民まさに滅なんとす。彼れ獨り雨を欲せざらんや。之を祠とも何ぞ益あらん。景公の曰く、今之をいかんせん。晏子が曰く、君誠に宮殿を避けて暴露して靈山河伯と憂を共にせば其れ幸ひにして雨りなんか。是に於て景公野に出でゝ居り、暴露すること三日、天果して大に雨る。民盡く種ることを得たり」と。

摯意　河神、山神に祈るとも益なきことを明す。

講義　そこでこの干魃を河伯たる河の神に祈つて雨を求めんと欲すれども河伯そのものが既に干魃のために雨水つきはてゝ亡びんとしてゐる有り樣なるが故に祈るとしても一向に効驗なきことであり、また山魅たる山神に禱つて雨を求めんと欲すれども山神そのものも既に干魃のために身熱し髮焦れんとする程に雨水に困つてゐる有り樣であるが故に祈るとも何の効驗もなきことである。

顧レ殷湯レ以罪レ己。想レ夏禹レ而泣レ人

訓方　殷湯を顧みて以て己を罪し、夏の禹を想ふて人に泣く

字訓　○殷湯等……殷の湯王の祈雨の故事を指す。即ち『呂氏春秋』第九季秋紀に曰く「昔は湯、夏に克つて天下を正す。天大に旱すること五年、收らず。乃ち身を以て桑林に禱つて曰く、余れ一人罪あらば萬夫に及ぼすことなけん。萬夫罪あらば余れ一人に在らん。一人の不敏を以て上帝鬼神をして、民の命を傷なはしむることなけん。是に於て其の髮を剪り、其の手をつめきりて身を以て犧牲とし、用て禱を上帝に祈る。民乃ち甚だ說び、雨乃ち大に至る」と。○夏禹等……夏の禹王が罪人を見て自分が不德なる故に罪人出でたりとて泣きし故事を指す。即ち『說苑』に曰く「禹出でゝ罪人を見て車より下て問て泣く。左右の曰く、罪人道に順ぜず、君王何んすれぞ之を痛むや禹の曰く、堯舜の人（タミ）は皆堯舜の心を以て心とす。寡人が君たる百姓各自ら其の心を以て心とす。以て之を痛む」と。

摯意　干魃の續くのは何か己に原因ありやと御反省遊ばさるゝ苦衷を譬を以て明し給ふ。

講義　か樣に干魃の續くことは一體どうしたことであらうか、かの殷の湯王が萬夫の罪を一身に引き受けて以て誠意をこめ一心に祈雨せしといふが、今この干魃も己の不德の至す所ではなからうかと己が罪に歸し給ひ、またかの夏の禹王が罪人を見ては己が不德の至す所なりしと痛み泣き給ひしといふが、それを想ひ、これを顧れば己が不德の至す所ならんと層一層悲しくなる次第であられる。

蓋苞苴行歟。女謁進歟。黃沙抂寃耶。汗出復入耶

訓方　蓋し苞苴行はるゝか、女謁進めるか、黃沙抂寃せるか汗出でて復入るか。

字訓　○苞苴……贈りもの、轉じて賄賂の義。○女謁……婦女を近づくること。○黃沙……獄處、監獄のこと。○抂寃……無理にまげて罪すること、即ち寃罪のこと。○汗出復入……汗とは號令、即ち善令のこと。善令を出したのにも拘らず、それが行はれざることは、恰も汗が出れば再び身中に還らざるにそれが還り入るに似て道理にそむくが如くである。

摯意　此の章も己を尅め給へる苦衷を明し給ふ。

講義　蓋しまた善政行はれずして、賄賂の惡習が行はれてゐるがためであらうか、或はまた女謁政策が行はれてゐるがためであらうか、或はまた監獄に於て賄賂などのために法を抂げた、所謂寃罪などが行はれてゐるがためであらうか、或はまた善令を出したのにも拘はらず、それが行はれてゐないがためであらうか。

萬民有レ罪唯在レ一人。一人之仁盡レ被レ萬姓

訓方　萬民罪有れば唯一人に在り、一人の仁盡ぞ萬姓に被らしめざらん。

字訓　○萬民等……上の殷の湯王が干魃に際して自らを尅めし意に同じ。

摯意　此の章も尅己の苦衷を明し給ふ。

講義　若し萬民に何か罪ありとしても、それはたゞ自分の不德の致す所であり自分に責任がある。自分が仁政を行ひ、その仁德が萬民に感化を及ぼすならば、どうしてや萬民は罪を犯そうや決して犯さない筈のものであらうから。

故經云。羅惹不レ知名人民多貪殺。三綱弛紊五常廢絕。則旱澇飢饉邦國荒凉。國行十善人修五戒。則五穀豊登萬民安樂。敢取斯義正躬率物

訓方　故に經に云く。羅惹、名を知らざれば人民多く貪殺す。三綱弛び紊れて五常廢絕するときは則ち旱澇飢饉して

邦國荒涼す。國十善を行ひ、人五戒を修するときは則ち五穀豊登して萬民安樂なりと。敢て斯の義を取て躬を正しくして物を率ふ。

字訓　○經云羅惹等……此れは『便蒙』に云へる如く『守護國界主陀羅尼經』第十阿闍世王受記品（大正藏經第十九卷五七一頁）に於ける阿闍世王の故事を指すならん。即ち『守護經』に曰く「阿闍世王佛に白して言く、何を以てか摩伽陀國風雨節あらず、旱澇調らがず、饑饉相仍りに、怨敵侵擾し、疾疫災難無量百千なるぞ。唯願くは世尊我が疑網を斷じ給へ。爾時世尊の言く（中略）汝は王の名字尚ほ自閑せず、況んや餘聲に於ておや。夫れ王とは即ち癡若の義なり。癡字の聲とは所謂苦惱の聲、啼哭愁歎、無主無歸、無救護の聲なり。王は當に慰喩して言ふべし。汝苦しみ惱むことなかれ。我れ汝が主たり。當に汝を救護すべし。淚を拭て慈愍して之を撫育すべし。惹字の聲とは是れ最勝の義、是れ富貴の義、是れ自在の義、是れ殊勝の義、是れ勇猛の義、是れ端正の義、是れ智慧の義なり。是れ能く一切衆生憍慢自高にして他を凌蔑するを摧滅する義なり。大王汝今に於て因果を信ぜず、所生の父を殺し（中略）後調達をして佛身の血を出し、和合の僧を破せしむ。（中略）百姓を徴科すること油麻を壓するが如し。貧貧困苦にして千戸の資材も一象の費へに充つること能はず（中略）故に言ふ、自己の名字を聞かずと、何ぞ更に此の陀羅尼神力加護を得ん」と此の經文の取意によるならん。○三綱……君は臣の綱、父は子の綱　夫は妻の綱。○五常……仁・義・禮・智・信。○旱澇……身三口四意三の十善戒のこと。○五戒……不殺生、不偷盗、不邪婬、不妄語、不飲酒の五戒。○五穀……米・麥・粟・黍・豆。○豊登……ゆたかにみのること。

講義　射を正しくせられ給ふについての所以を譬を引きて明し給ふ。

講義　この故に經に次の如き教訓を垂示せられてゐる。即ちかの阿闍世王の如く、若し仁政を行はずして人民を苦しめるが如きことありとせば、それは王といふ文字の字義すらも知らざる者である。從つて王の字義をも辨へずして道理にそむきたる政をなすならば、國の三綱の大道はゆるびみだれ、五常の大義はすたれてしまひ、國は亂れ、干澇や洪水相つぎて起り、國中は荒涼として荒れすさびであらう。然るに此れに反して王仁政を施されるならば國民それに感化されて、國中に十善よく行はれ、五戒よく保たれ、國家よく治り然も五風十雨時に從つて五穀よくゆたかにみのり、萬民は禍祉安樂なることを得るものであると。この教訓に從つて身の正しき上にも尚敢て躬を正しうし、以て一切の物の先立となり率んとす。

仰攘災於釋桓取脱難乎普明

講方　攘災を釋桓に仰ぎ、脱難を普明に取る。

字訓　○釋桓……釋提桓因のこと。釋提桓因が佛法を信修して難を逃れし故事を指す。即ち『仁王經』卷下護國品に曰く「往昔過去に釋提桓因、頂生王四軍衆を領して帝釋を滅さんと欲が爲めに、即ち過去の諸佛の經法に依つて百の高座を敷き、百の法師を請じて般若波羅蜜多經を講讃せしむ。頂生退き、天衆安樂なり」と。○普明……普明王のこと。即ち普明王が正に殺されんとせしとき、佛法を信修してその難を逃れし故事を指す。即ち同經に又曰く、「昔、天羅國王一りの太子あり、名けて班足といふ。外道の師あり、名けて善施といふ。王に灌頂を與ふ。乃て班足をして千王の頭を取つて以て冢間の摩訶伽羅大黑天神を祀らしむ。已に九百九十九王を得たり。唯一りの王をかぐ、北のかた萬里を行て乃ち一りの王を得たり。名けて善名と曰ふ。班足に白して言く、願は一日三實を禮拜し、沙門に飯食することを聽したまへ。班足すなはちこを許す。乃て過去の諸佛の所說の教法に依て百の高座を敷き、百の法師を請じて一日二時般若波羅蜜多を講說せしむ。時に彼の衆中の第一の法師、普明王のために偈を說いて言く、劫火洞然大千俱に壞す。須彌巨海磨滅して餘りなし。班足王是の法を聞て空足を證す。歡喜踊躍して諸の王に告げて言く。我れ外道邪師のために誤らる。汝各國に還つて當に法師を請じて般若波羅蜜多を解說せしむべし。時に班足王、國を以て弟に付して出家して道をおこなひ、無生法忍を得たり」と。

講義　佛法によりて干魃の難より救はんとする所以を故事を引きて明し給ふ。

講義　また他面に於ては、かの釋提桓因が佛法を信じ、僧を請じ、經を講說せしめて危難をはらひのぞきしこと、またかの普明王が正に殺されんとせしに際して僧を請じ、經を講說してその難を免れしこと、それらの故事に倣つて今干魃の難を佛法によりてはらひのぞかんと欲するものである。

奉仰三尊延唱百僧轉讀太般若經供奠天中之天

講方　三尊を仰ぎ奉り、百僧を延唱して大般若經を轉讀して天中の天に供奠す。

字訓　○轉讀……次第に讀誦すること。○供奠……供養し祭ること。○天中之天……佛をいふ。即ち『本行經』第八還城品に曰く「淨飯王一日太子を抱て釋迦增長大天神に謁す。廟神石を以て像をつくる。即ち起つて太子の足を禮す。王の曰く、我が子は天神の中に於ても更に尊勝たり。宜く天中の天と名くべし」と。

講義　正しく供養の有り樣を記し給ふ。

講義　三寶を仰ぎ奉り、百僧を招請し、大般若經を讀誦して佛陀に供奠し奉る。

仰願四智法帝五大忿王十護諸天八部靈神

講方　仰ぎ願くは四智の法帝、五大忿王、十護の諸天八部の靈神。

字訓　○四智法帝……大圓鏡智の阿閦佛、平等性智の寶生佛、妙觀察智の阿彌陀佛、成所作智の不空成就佛を指す。○五大忿王……五大力菩薩のことで、五大力菩薩は皆忿怒形なる故に忿王といふ。○十護諸天……『摧魔怨敵法』によれば、毘首羯磨、劫毘羅、法護、眉目、廣目、護軍、珠賢、滿珠、持明、阿吒縛なりと。○八部……天龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽なり。

講義　新願を捧ぐる所の諸佛諸天善神等の尊名を明し給ふ。

講義　仰ぎ願はくは四智を德としたまふ所の四佛を始めとし、五大力菩薩、十護の諸天、八部衆等の靈神、次の願望を成就し給はんことを。

揮智劍以斷黔黎之業馳通輪以摧蒼生之障

講方　智劍を揮つて以て黔黎の業を斷ち、通輪を馳せて以て蒼生の障を摧きたまへ。

字訓　黔黎……人民のこと。○通輪……神通力のこと。輪は輪王の輪寶でよく摧滅する義、故に神通力の力用をそれに譬ふ。○蒼生……人民のこと。

講義　願望の意志を表示せらる。

講義　如何なるものをもよく摧破する所の利劍の如き鋭き智慧を揮つて以て人民の惡業を斷ち、輪王の輪寶の如く如何なるものをもよく摧滅せしむるが如き神通力を以て人民の障りを摧滅し、除去したまはらんことを。

不勞燕舞畎澮滂沱不因鶴唳川溪汎溢

講方　燕舞を勞せずして畎澮滂沱し、鶴唳に因らずして川溪汎溢せん。

字訓　○不勞、不因……今は法力に依るが故に、燕鶴の舞鳴に頼ることなきをいふ。○燕舞……雷風雨に際して石燕が似燕となりて飛舞すること。これにつき故事あり、即ち『湘南記』白孔六帖第五石部に曰く「零陵山に石燕あり形燕に似たり。雷風を得るときは飛んで頡頏すること眞の燕の如く、風雨止むときは還つて石と成る」と。○畎澮……溝のこと。○滂沱……盛んに流るゝさま。○鶴唳……鶴はコウノトリで鶴に似たれども頭に丹なく、唳かずして喙を磨して聲をなす。『毛詩』に曰く、「零雨其れ濛たり、鶴垤に鳴く」と。雨ふらんとする時に鳴くと稱せらる。唳を特にレイと發音するときは鶴の鳴聲にいふ。○汎溢……水のみなぎりあふるゝこと。

講義　祈雨の法成就せしものと假定して雨水汎溢のさまを記し給ふ。

講義　若し願望に對して法力あらはれるゝと致しなば、恐らくかの石燕の飛舞を煩はさずとも法力に依つてたちまちに雨降り、畎澮には滂沱として盛んに雨水流れるであらうし、またかの鶴唳を待たずして直ちに川や溪には雨水みなぎりあふるゝことであらう。

畝有餘糧路不拾遺

【講方】畝に餘粮有つて路に遺ちたるを拾はず。

【字訓】○畝有餘粮……『淮南子』第八本經訓に曰く「昔、容成（黄帝の時代の人）の時、餘糧を畝首に置く」と。粮の餘れること。○路不拾遺……『孔子世家』卷四十七に曰く「國政を與り聞くこと三月、塗（ミチ）に遺ちたるを拾はず」と。天下泰平をいふ。

【會意】五穀豐登にして天下泰平のさまを明し給ふ。

【講義】雨水適度に流れ、五穀天下に稔るとせば、百姓達は途に餘粮を貯ふるに至り、たとへ道に遺物ありと雖も敢へて拾はざる程に富裕となり、天下泰平に治るに至ることであらう。

野老不知帝力。家嬰悉飽王乳

【講方】野老は帝の力めを知らず、家嬰は悉く王乳に飽かん

【字訓】○野老……田舍のとしより。○帝力……零によりて大雨を降らすに至つた皇帝の御苦心といふものは廣大にして野老にはかり知ること能はざる所であるの意。○家嬰……庶民をいふ。○王乳……王の御恩を乳に譬ふ。嬰と云ひし故に乳をかけしなり。

【會意】皇帝の御苦心御努力の絶大なることを嘆じ奉る。

【講義】旱天に慈雨を雨らすことが出來たとすれば、その慈雨を雨らすに至るまでにはかくの如く御苦心御努力を遊ばされたのであつたけれども、その御苦心御努力ははかり知る能はざる程に絶大のものであるが故に野老の如きものには氣附かざる所であり、かくその御恩を知らずと雖も庶民は齊しく皆御恩を蒙つて福祉を得ることであらう。

首股明良豈只曩辰。庶事康哉當見今日

【講方】首股明良なること豈に只曩の辰のみならんや。庶事康哉なること當に今日に見つべし。

【字訓】○首股明良……首明股良で、元首明かなれば股肱良しといふ『尚書』の文による。○庶事……すべてのこと。○康哉……やすらかなること。

【會意】天下泰平の現出を嘆じ奉る。

【講義】元首明らかに、股肱賢良にして庶事康哉なりと云つて稱贊したのはあにただ往昔の時代のみであらうか、決してそうではない。上聖天子ゐまして庶事康哉、天下泰平の御世を現在今日に於て間もなく見ることが出來るであらう。

然後三界沐法水。六趣飽甘露。同出愛纒共成覺道

【講方】然して後に三界法水に沐し、六趣甘露に飽き、同じく愛纒を出でて、共に覺道を成せん。

【字訓】○出愛纒……愛縛の煩惱を離れて三界を出づること。

【會意】結言として總廻向を明し給ふ。

【講義】か樣に天下泰平になりて後に、三界六道の一切の有情甘露の法水を味得して、愛縛の煩惱を離れて三界の苦域を出離し、皆共に佛地の覺道に至らんことを。

四八　右將軍良納言爲開府儀同三司左僕射設大祥齋願文

右將軍良納言爲開府儀同三司左僕射設大祥齋願文

【講方】右將軍良納言開府儀同三司左僕射の爲に大祥の齋を設くる願文。

【字訓】○良納言……良峯の朝臣安世のこと。安世は桓武帝の御子、冬嗣の同母の弟。弘仁七年參議に任ぜられ、同十二年に中納言となる。十四年に右大將を兼ね、天長五年に大納言に任ぜらる。同七年七月六日に薨ず。年四十六。○開府儀同三司左僕射……閣院の左大臣冬嗣のこと。冬嗣は右大臣內麻呂の二男なり。天長二年左大臣に任ぜらる。元は右大臣左大將正三位なり。三年正二位に轉ず。二月大將を辭す。七月二十四日に薨ず。行年五十二。○大祥……三回忌をいふ。然るに冬嗣は天長三年に薨じ、今此の催しは天長四年なり。然れば小祥に當る。されば大祥は小祥の寫誤ならんと『便蒙』に註せり。

【會意】初に題名を掲ぐ。

【講義】右將軍良峯の朝臣安世、開府儀同三司右僕射閣院の冬嗣のために大祥忌をいとなむについての願文。

奇哉逸嗣之德。皇矣五轉鑾

【講方】奇いかな逸嗣の德、皇なるかな五轉の鑾

【字訓】○奇哉……奇特　即ちめづらしくすぐれたること。○逸嗣……一阿のこと。嗣と阿と音同じきが故に。阿字は法身の體、萬法の能生、諸法の道首、諸聲の甫めなる故に、その德を嘆ぜしなり。而も阿字は理法身の種子であり胎藏を表す。○皇……大で、廣大無上をいふ。○五轉之鑾……鑾字は智法身の種子であり、金剛界を表す。鑾字の五轉とは、『大疏』によれば、バは是れ菩提心、バーは是れ行、バンは是れ三菩提、バヘは是れ涅槃、バーウヘは是れ方便なり」と。

【會意】金胎兩部の德を讃嘆し奉る。

【講義】幽妙に勝れた德を有せられるものは、法身の體、萬法の能生、諸法の道首たる理法身の種子阿字であり、また廣大無上の德を有せられるものは菩提心、行、三菩提　涅槃、方便の五轉の德を具有せる智法身の種子鑾字である

闢千門乎津梁。廓萬戶乎拔濟

【講方】千門を津梁に闢き、萬戶を拔濟に廓にす。

【字訓】○闢……利他の德用をいふ。○千門、萬戶……所說の敎法の無量衆なるをいふ。即ち『大疏』第四に曰く、「學者隨て一法明道に於て悟入を悟るときは即ち是れ普く一切の諸總持門に入る。一門より王を見るときは即ち是れ千門萬戶に遍入するが如し」と。○津梁……濟度の義。○拔濟……濟度の義。

【會意】金胎兩部の法門を利他門に望めて開きしことを明す。

【講義】金胎兩部の法門これを利他門に望めて開說するならば千門萬戶乃至無量衆の法門となりて、無量無數の衆生を濟度するに至るのである。

挹其派者各奢得源。攀其枝者悉驕極柢

【講方】其の派を挹む者は各々源を得るに奢り、其の枝を攀づる者は悉く柢を極むるに驕る。

【字訓】○挹……酌むこと。○派、枝……本源より分れたる支派枝末の權方便の敎法に譬ふ。○奢、驕……支派枝末の權方便の敎法を至極なりと思ひ、法身の本源を知らざるをいふ。○柢……根で、本源をいふ。

【會意】法身の根源を究めずして妄りに枝流を習つて本源なりと執するを遮ぶ。

【講義】眞言密敎の精神からいふならば如何なるものも皆成佛への機緣となるものにして、かの內外の典墳、半滿の敎文等といへども皆これ毘盧遮那莊嚴藏の枝派である。併しそれはどこまでも枝派であつて、本源に達すべき權方便である。然るにその枝派たる權方便を究めて以て本源を得たりとしてゐるものありとせば、それは未だ本源を究め知らざる未熟のものである。

逮于赫曦頓照。白瞿風疾。八遮蕩穢。一眞簡淨。防非莫作唯蘊湛然。聲非聲建不建二邊名雙存玄

【講方】赫曦頓ちに照し、白瞿風のごとくに疾く、八遮穢を蕩かし、一眞淨を簡ぶ。非を防いで作すこと莫く、唯蘊湛然たり。聲と非聲と、建と不建と、二邊の名雙べて玄を存するに逮んでは。

【字訓】○赫曦頓照……第九住心華嚴を明す。赫曦は日光、『華嚴經』に日初めて出でゝ高山を照すが故にとの意による。○白瞿風疾……第八住心を指す。白瞿は白牛のこと。『法華經』譬喩品に白牛（中略）行步平正にして其の疾きこと風の如しといへるによる。○八遮蕩穢……第七住心を指す。八遮は八不中觀のこと。蕩はそゝぎ除くこと。穢は八迷の戲論のこと。○一眞簡淨……第六住心を指す。一眞は一眞法界のこと。淨は依他の淨分。○防非莫……第四

住心を指す。その中淵然の言は兼ねて第五住心を顯す。防非莫作は道宜の『戒疏』一の上に「古所傳の如は防非禁惡を以て戒を解す」と。また『七佛通戒』の偈に曰ぐ「諸惡莫作諸善奉行」と。唯蘊は法を存するが故に唯蘊といふと『祕藏記』に云へり。堪然とは堪然常寂のこと。○麤非麤等……世間三筒の住心を指す。麤は麤論外道で麤常住論を主張するもの、非麤はそれと反對に麤を撥無して無善惡の法に墮在するもの。建は一切の法を建立して淨とする建立淨のもの。不建は不建立無淨で、建立は究竟の法に非ずとするもの。二邊名とは二邊即ち對立的名を立てゝ未だ對立各執を離すこと。玄とはその對立的な玄理を最極幽玄なりと執着してゐること。名は各ならんと『便蒙』に注せり。

【章意】 枝派の分齊たる九種の住心を擧ぐ。

【講義】 太陽初めて出でゝ高山を照らすが如く、一番初めに說かれたる法即ち華嚴に最も勝れてゐるとする華嚴宗、また大白牛車に乘ずれば平正にして疾風の如くに成佛すと說ける法華、また八不中觀によりて八迷の戲論を蕩除して佛果を體得し得と說く三論宗、また一眞法界は諸法の勝義にしてこれ眞如なりとする法相宗、また諸惡莫作諸善奉行や唯蘊無我澹然常寂を主張する處の麤開緣覺、乃至はまた麤常住に對して麤無常、建立淨に對して不建立無淨等それらは何れも皆二邊に墮した相對的對立的名を雙べ立て、各々の對立的敎條を以て至極の玄理と執着してゐるものである。

其祖唯一子孫百計

【訓方】 其の祖は唯一にして子孫百計なり。

【字訓】 ○祖……元祖。○百計……大數に約していふ。實には無量である。

【章意】 一と多との關係を明す。

【講義】 上述の如くその枝派多岐多端であるけれどもその元祖はたゞ一つであつた筈である。それが種々の趣、種々の性欲に隨つて、即ち應病與藥的に法門を說かれしが故に無量無數の子孫、即ち末派を生ずるに至つたのである。

譬如一天衆星隻龍雨滴色味雖異終歸一途一途之詣極其唯在金剛金剛之普門人法俱妙矣哉

【訓方】 譬へば一天の衆星、隻龍の雨滴、色味異なりと雖ども終に一途に歸するが如し。一途の詣極其れ唯金剛に在り。金剛の普門は人法俱に妙なるかな。

【字訓】 ○一天衆星……衆星は無數なりと雖も俱に一天を出でずの意。○隻龍雨滴……隻龍は一龍で、一龍がふらす處の雨は無量なれども皆一水を出でずの意。○色味……衆星の光色、水滴の味。○金剛……如來實相の智に譬ふ。實相の智とは即ち秘密乘敎をいふ。今金剛般若を誇ず、故に此れにちなんで特に金剛といふ。○金剛普門……曼荼羅海會の一切の聖衆をいふ。

【章意】 歸一の至極は秘密乘敎たることを示す。

【講義】 これを譬へて云ふならば、かの衆星は無量無數天に於て輝いてゐるけれどもそれらは皆俱に一天を出づるものではなく、またかの一龍が降らす處の雨足無量無數なりと雖も皆一水に歸するもので、要するにその衆星の色、雨滴の味は異らうけれどもその歸する處は一天一水なる如く、敎法に於てもその枝派無量無數なりと雖もその歸する處は一の本源にあるのであつて、その一途に歸一すべき至極の處はそれはたゞ如來實相智たる秘密乘敎であつて、その秘密乘敎に於ける曼荼羅會の一切の聖衆、一切の法俱に皆至妙至極のものである。

伏惟故左僕射贈開府儀同三司藤原朝臣累代台鼎文武佐時

【訓方】 伏して惟れば、故の左撲射贈開府儀同三司藤原の朝臣は累代の台鼎、文武時を佐く。

【字訓】 ○累代……代々。○台鼎……三公をいふ。○文武……文官武官。○佐時……天下の民を佐け濟ふこと。

【章意】 藤原朝臣冬嗣の家柄を讃ふ。

【講義】 伏して惟るに故の左僕射贈開府儀同三司藤原朝臣冬嗣の家柄は祖先代々

より三公の重臣に列り、或は文官に、或は武官に任ぜられて天下の民を佐け濟ふて來た名門家である。

謙恭守雌晏平何侈溫良生徒肩隨天子一心授命兩帝簡其撲射

【訓方】 謙恭雌を守る、晏平何ぞ侈れる。生徒に溫良にして肩天子に隨ふ。一心命を授けて兩帝其の僕射に簡ぶ。

【字訓】 ○謙恭……つゝしみへりくだること。○守雌……雌は卑に喩ふ。即ち尊ぶべきを知つて自らは卑しきにへりくだり居る義。『老子』上知其雄章に曰く「其の雄を知て其の雌を守るときは天下の谿たり」と。○晏平……晏平仲嬰は萊の夷維の人なり。齊の靈公、莊公、景公に事ふ。既に齊に相として食、肉を重ねず。妾帛を衣ず」と。要するに儉約にして質朴なりし人なり。○肩隨天子……「聞書」によれば冬嗣の年も天子の御年と大方遙はずの意なりと。○一心授命……一心を以て天子に仕へ奉ること。○兩帝……嵯峨上皇、淳和天皇を指し奉る。

【章意】 冬嗣の人となりを賛へ、以て左僕射に任ぜられる至りし所以を明す。

【講義】 冬嗣卿の人となりは、その謙恭にして尊べきを知つて自ら卑しきにへりくだり居り、儉約にして質朴なることはかの晏平仲嬰といへども未だ及ばざる程であり、また生徒に對して溫良にしてよく導き敎へ、また他面一心を以てよく天子に仕へ奉れる賢臣であつた。從つて御兩帝に於かせられてもそれを認めさせ給ひ、左僕射の重職に任ぜ給ふに至つたのである。

柔和接物緇素每慕其風位極君眄寵結王恩可謂有虞益稷姬年奭望

【訓方】 桑和物に接して緇素每に其の風を慕ふ。位君眄を極め寵王恩を結べり。謂つ可し、有虞の益稷姬年の奭望なりと

【字訓】 ○接物……物に接するに順ありのことで、人物をとり、賢才を適用する義。○君眄……眄は顧眄で、顧眄はふりかへりみることで、恩寵に浴する高位高官の意。官に約す。○寵……榮名の意。祿に約す。○有虞益稷……有虞は舜帝、益稷は伯益 后稷で舜帝の御代の賢臣。○姬年奭望……姬は周の姓であり、年は時代。奭望は太公望のこと。

【章意】 冬嗣卿の德を嘆ず。

【講義】 人に接するに柔和にして然も人物をよく見拔き賢才を適用せし賢臣なりしが故に僧俗各方面の人々からその德風をしたはれ、また他面君の恩寵を蒙つて高位高官にあり、皇情を忝うして榮名をほしいまゝにしてゐたのである。その有り樣は謂はゞ恰も舜帝に於ける伯益、后稷の如き、また周の御代に於ける太公望の如き位置にあたるといふことが出來るであらう。

豈謂星精返知命白城喪鄭產

【訓方】 豈謂ひきや、星精知命に返つて白城に鄭產を喪はんとは。

【字訓】 ○星精、鄭產……共に冬嗣に比す。○知命……五十才の稱。○白城……古本には日城に作る。日城の方が正しいといへり。白城ならば『鈔』には冬嗣卿の舍宅のことか、または都城のことかと注せり。

【章意】 冬嗣卿の薨去を記す。

【講義】 どうしてや次の如きことを思ふや決して思ひ設けぬことであつた。即ち冬嗣卿が知命の年にやつとなれるばかりにして白城に於て薨ぜられるとは。

嗚呼嗚呼哀哉哀哉春者不相耕人輟耒一人廢朝萬民訴慕蒼蒼何忍奪我阿衡

【訓方】 嗚呼嗚呼哀れなる哉、哀れなる哉。春者相せず、耕人耒を輟む。一人廢朝し、萬民訴へ慕ふ。蒼蒼何ぞ忍んで我が阿衡を奪へる。

【字訓】 ○不相……キネウタを歌はざること。○輟耒……輟はやめること。耒はすき、即ち耕作をやめること。○廢朝……君主の朝政を見給はざること。○訴慕……訴は何忍を受け、慕は奪我阿衡を受く。○蒼蒼……天のこと。○阿

衙……宰相をいふのであるが今は左僕射冬嗣をいふ。

【參考】冬嗣卿の薨去を悲しむ。

【講義】嗚呼嗚呼悲しいかな悲しいかな。春音は歌を歌はず、耕す者は耕作をやめて哀悼し奉る。上御一人に於かせられては一日朝政を見給はらずして弔意を示し給ふ。萬民等しく天に訴へて何んぞひそかに我が大臣を奪ひ給ふやと言つて大臣を慕ふ有り樣である。

哀哉苦哉弟子同衾易感在原難抑

【講方】哀れなる哉、苦しい哉。弟子同衾感じ易く、在原抑へ難し。

【字釈】○弟子……『便家』には良納言の自稱と注し、『開書』には弟の如く子の如しの意と注せり。○同衾……兄弟の友愛の深きをいふ。○在原……鶺鴒鳥が原にあること。即ち鶺鴒は原にありては常處を失ひ、飛び鳴いて其の類を求む天性を有す。これ恰も兄弟が急難に於けるが如し。故に兄弟の急難を相救ふに譬ふ。今はたゞ常處を失ふ難をいふ。○難抑……忍び難きこと。

【參考】良納言の悲しみを明す。

【講義】悲しいかな苦しいかな、安世と卿とは兄弟の如く友愛殊に深きを以て他界の悲しみ一入感じ易く、常處を失へる苦難誠に忍び難し。

携提我之比天。割亭我之同地。言思其德答以歸佛

【講方】我を携提すること天に比し、我を割亭すること地に同じ。言其の德を思ふて答ふるに歸佛を以てす。

【字釈】○携提……懇切に教へ示すこと。即ち『毛詩』に曰く「あゝ小子未だ臧（臧とは善のこと）否を知らず。手これを携ぐのみにあらず、言（ワレ）之に事を示す。面たり之を命ずるのみにあらず、其の耳を提む」と。○天……父をいふ。○割亭……割は宰割で肉を切り割くこと。亭は養ふこと。即ち能く養育し教へ導くこと。○地……母をいふ。○言……我の義。

【參考】良峯朝臣安世の報恩の所以を明す。

【講義】我に懇切に教示を賜ふこと恰も父の如くであり、また我を養育し教へ導き給ふこと恰も母の如くであつた。故にその恩を思ひ偲んで、報ずるに歸佛を以てせんとする次第である。

謹以天長四年孟秋季旬。奉爲先左僕射大祥。奉寫金字金剛般若經一十二紙。延之龍象衍之涌泉

【講方】謹んで天長四年孟秋の季旬を以て先の左僕射の大祥の奉爲に金字の金剛般若經一十二紙を寫し奉る。之を延くに龍象をもつてし、之を衍ぶるに涌泉をもつてす。

【字釈】○孟秋……陰曆七月。○季旬……下旬のこと。○龍象……僧の德に比していふ。○衍……演に同じ。○涌泉……經のこと、即ち經に五義ある中の一名なり。五義とは涌泉・繩墨・結鬘・線・井索である。今は金剛般若經を指す。

【參考】正しく供養講演を明す。

【講義】謹んで天長四年七月旬、先の左僕射の三回忌の奉爲に、金泥を以て金剛般若經十二紙を寫し奉る。更に智德勝れたる僧を招請し、以て金剛般若經を講演す。

方丈草堂呑法界而蠹芥。華山松林變寶樹而刹說

【講方】方丈の草堂は法界を呑んで蠹芥なり。華山の松林は寶樹に變じて刹說なり。

【字釈】○方丈草堂……維摩居士の宅室の故事を指す。即ち方丈とは維摩居士の宅室の遺趾を測量せしに縱横十笏あり、故に方丈といふと。草堂とは昔時の堂は草を以て屋根を葺きし故に草堂といふと。○呑法界……『維摩經』に曰く、「東方に世界あり、須彌相と名く、其の佛を須彌燈王と號す。佛身の長八萬四千由旬なり。維摩詰の神通力を以て彼の佛に三萬二千の師子座を遣はして維摩詰の室に來入せしむ。其の室廣博にして皆悉く包容す。坊閭する所なし」と。即ち僅か十笏四方の維摩詰の居室に八萬四千由旬の佛身を迎へ奉つたといふ故事。○蠹芥……小さきとげ。○華山……京都山科の郷に在り、良峯朝臣の別業なりといふ。○寶樹……『法華寶塔品』に曰く、「時に娑婆世界即ち變じて淸淨なり。瑠璃を地となし、寶樹莊嚴せり」と。即ち佛國の寶樹莊嚴と化せしをいふ。○刹說……說法のこと。

【參考】金剛般若經講讃の會場を稱嘆す。

【講義】かの維摩詰の方丈の草堂に長八萬四千の佛身を迎請して狹からずと稱せられてゐるが、今金剛般若講讃の道場たる良峯朝臣の華山の居宅に於ても、法界の眞理たる八萬四千の法門を說き並べたるに、それを皆居宅に並べ呑んで而も蠹芥の如く小さく感ずる程に廣博であり、かくてその華山の居宅にある松林は變じて寶樹となり、一切の莊嚴より妙音を出して說法し、恰も佛國そのものゝ現出となれるが如くである。

梵曲魚山錦華龍淵

【講方】梵曲は魚山のごとく、錦華は龍淵のごとし。

【字釈】○魚山……梵唄のこと。即ち魏の陳曇が魚山に於て風聲を聞きて梵唄を作りしといふ故事あり。即ち『法苑珠林』四十九に曰く、「昔魏の陳思王曹子建、魚山に遊んで忽ちに空中に梵天の音を聞く、淸響哀婉にして其の聲心を動す。獨り聽くこと良久しうして乃ち其の節を摸して梵唄とす。文を撰し、音を製して傳へて後式とす」と。○錦華……上の松林を受けて、松林が寶樹と化せし故にそれに因んで錦華といふ。○龍淵……『華嚴經』卷九に「世界あり、寶莊嚴師子座と名く。佛、大龍淵と號す」と。されば龍淵は莊嚴美を云ふ。

【參考】讃讃會場に於ける讀經の聲とその會場の美しさを讃ふ。

【講義】讀經する梵曲はかの陳曇が感得せし所の魚山の譜の如く神秘であり、また會場に於ける莊嚴の麗しさは佛の在す大龍淵の如くである。

金剛句句斷結證解。玉振字字除障得滅

【講方】金剛の句句に結を斷じ、解を證し、玉振の字字に障を除き、滅を得。

【字釈】○結……煩惱のこと。○解……解脫のこと。○玉振……玉の振るが如く雅趣と妙に富めること。○滅……涅槃のこと。

【參考】讃讃の功能を明し給ふ。

【講義】金剛般若經の一句一句を講演するごとに煩惱を斷じて解脫を證し、その一字一字を講演する聲恰も玉を振るが如き妙の聲きありて、それを聞くごとに煩惱障を除いて涅槃を得證するが如くである。

伏願揭斯惠日。頓朗昏夜。遊心飛閣。賞神翔樓。當有法界稱覺尊王

【講方】伏して願くは斯の慧日を揭げて頓に昏夜を朗んじ、心を飛閣に遊ばして神を翔樓に賞せん。當に法界を有て覺尊王と稱すべし。

【字釈】○慧日……般若の智慧。○昏夜……生死の迷衢のこと。○飛閣、翔樓……共に高閣のこと。並に法帝の樂都に喩ふ。

【參考】願文の本意を明し給ふ。

【講義】伏して願はくはこの功德によりて般若の智慧を顯かし、遠やかに生死の迷衢を明朗たらしめ、以て心を飛閣のごとく、翔樓のごとき高閣の法帝の樂都に優遊せしめ、まさに法界に於ける覺尊王となり給はんことを。

寰中一分必歸貫三。仰願皇帝陛下。金輪轉四天。智劍斫三障。魔軍面縛海內無波。人等知足壽同有頂

【講方】寰中の一分は必らず貫三に歸す。仰ぎ願くば、皇帝陛下、金輪四天に轉じ、智劍三障を斫かん。魔軍面縛して海內波無く、人は知足に等しく、壽は有頂に同じからん。

【字釈】○寰中……天子治下の土塊總體。○一分……『華嚴經』普賢行願品に曰く「國に君主有つて一切のもの安きを獲、是の故に人王は一切衆生安樂の本たり

是の故に所修の功德六分の一常に國王に屬す。○貫三……王のこと。○金輪……四天下に王たる金輪王のこと。○三障……煩惱障、業障、報障。○面縛……降伏のこと。○海內……國內。○無波……靜泰たること。○知足……都率天のことで、五欲の中で止足を知る故に知足天とも稱す。○有頂……有頂天即ち非非想處天で壽量八萬劫と稱せらる。

【參考】金剛般若經の餘力の功德を述べて、淳和天皇を祝ひ奉る。

【講義】國中に於ける所修の功德の六分の一は必ず天子に歸し奉る。仰ぎ願くは皇帝陛下威德金輪王の如くあらせ給ひ、智慧の利劍をもつて一切の煩惱を斫き給はんことを。さればたち所に一切の煩惱降伏し、國內靜謐安泰にして人々は知足天に於ける如くに知足安泰であり、その壽命は恰も有頂天に於ける如く長壽を保つに至るであらう。

太上天皇巍山逸樂契久桃椿汾河般興期永芥石

【訓方】太上天皇巍山の逸樂契桃椿よりも久しく、汾河の般興期芥石よりも永からん。

【字訓】○太上天皇……嵯峨上皇。○巍山……巍姑射山で仙洞御所の敬稱。○逸樂……樂しみ給ふこと。○桃椿……長壽を意味す。○汾河……仙洞御所を指し奉る。○般興……樂しみさせ給ふこと。○芥石……芥は芥子劫のことで百由旬四方の城に芥子を滿たし、長壽の人百年に一度來て一の芥子を持ち去らんに芥子盡くるとも劫はなほつきずといふ。石は石劫で、方百由旬の石あつて、長壽の人が百年に一度輕軟の衣を以て拂磨し、石盡くるとも劫はなほつきずといふ。共に長年月をいふ。

【參考】嵯峨上皇を祝し奉る。

【講義】嵯峨上皇に於かせられては仙洞御所に於て靜かに餘樂し給ひ、その聖壽は桃椿よりも久しく、また芥石よりも永く保たれることであつて誠に芽出度き極みである。

關鳩甡甡鳳閣秩秩

【訓方】關鳩甡甡として鳳閣秩秩たらん。

【字訓】○關鳩……「毛詩」の故事に從つて后妃を稱し奉る。○甡甡……衆多なるさま。○鳳閣……大裏を指し奉る。○秩秩……つゞけるさまで、皇子皇孫の繼ぎ紹ひで絕えざるさまを稱し奉る。

【參考】御繁榮を祝し奉る。

【講義】御貞潔にましまされる后妃嬪御多くましまし、皇統連綿として續かせ給ひ、大內山いや榮えに榮え奉ることであらう。

瓊柯玉葉武傑文雄。盡勞日月之明。流譽山河之盟

【訓方】瓊柯玉葉、武傑文雄、勞を日月の明に盡し、譽を山河の盟に流さん。

【字訓】○瓊柯玉葉……皇族を稱し奉る。○武傑文雄……文武の賢臣をいふ。○盡勞日月……勤勞を聖主に盡し奉るをいふ。○山河之盟……萬代不朽の義。

【參考】皆擧つて忠孝を盡し奉るに至ることを記す。

【講義】上は瓊柯玉葉の皇族方を始め奉り、武官も文官も皆共に勤勞を聖主に盡し奉り、以て譽れを萬代に傳ふることであらう。

十一生類入無餘而不度。九種譬劍破有爲而無住。忘愛溺於此涯。捨惠撥於彼岸

【訓方】十一の生類無餘に入れて度せず、九種の譬劍有爲を破して住すること無からん。愛溺を此の岸に忘れて惠撥を彼岸に捨てん。

【字訓】○十一生類……卵生、胎生、濕生、化生、有色、無色、有想、無想、非有想、非無想の十種に、その總を加へて十一とす。これ金剛般若經に說く。○入無餘……『金剛般若經』に曰く、「我れ今無餘涅槃に入らしめて之を滅度せん。是の如くの無量無數無邊の衆生を滅度して實には衆生の滅度を得る者なし」と。○九種譬劍……九種の譬を以て能斷の劍となす。その九種の譬とは『能斷金剛般若經』に曰く「一切有爲の法は星と翳と燈と幻と露と泡と夢と電と雲との如し。まさに是の如くの觀をなすべし」と。○惠撥……撥は筏に同じ、惠筏は法のこと。『金剛般若經』に曰く「我が說法は筏喩の如き者と知るべし。法尙捨つべし。何に況んや非法をや」と。

【參考】結句として一切平等利益の義趣を示し給ふ。

【講義】この金剛般若經の功德によりて十一の生類皆悉く無餘涅槃に入りて滅度を蒙ることを得、よりてその他に最早や滅度を蒙る者なし。九種の能斷の劍を以て一切有爲法を破斫して有爲法に住することなく、愛溺の煩惱を此の迷界に忘れ去つて彼岸に入りて正しく菩提を成ぜしめん。

四九　東太上爲故中務卿親王造刻檀像願文

東太上爲故中務卿親王造刻檀像願文

【訓方】東太上故の中務卿の親王の爲に刻檀の像を造る願文。

【字訓】○東太上……嵯峨上皇を指し奉る。このことにつき『便覽』によれば「此の齋筵を啓くこと弘仁中に在り、然るに斯の集編撰は是れ承和中なり、故に太上と稱す。承和の初め、弘仁、淳和の兩太上並び在ます。淳和上皇を西院の帝と號し奉る。西院は淳和院なり。弘仁の上皇は冷泉院に在ませらる」と。○中務卿……伊豫親王の御こと。○刻檀……白檀木を以て彫刻せる佛像。

【參考】初に題名を擧ぐ。

【講義】嵯峨天皇故の中務卿伊豫親王の爲めに白檀の佛像を彫刻して御菩提を弔ひさせ給ふ願文。

粤有大聖號薄伽梵

【訓方】粤に大聖有ます、薄伽梵と號す。

【字訓】○薄伽梵……薄伽梵（Bhagavan）は梵語の音譯字にして、意譯して世尊といふ。これ嘆德の總稱にして諸佛の通號なり。

【參考】佛の名を記す。

【講義】こゝに大聖人ゐませらる。その名を薄伽梵と申し奉る。

孕太虛而爲體。豁纖塵而建都

【訓方】太虛を孕んで體と爲、纖塵を豁んじて都を建つ。

【字訓】○孕太虛……其の德廣大にして十法界を孕める義、『心地觀經』第三報恩品に曰く、「自受用身諸の相好一々に十方刹に徧滿す。四智圓明にして法樂を受く、前佛後佛體皆同なり。法界に遍ずと雖も障碍なし」と。○纖塵……細かきちりのこと。『華嚴經』第七世界成就品に曰く「一塵の中に於て大小の刹あり、差別すること塵數の如し」と。

【參考】佛の德を體に約して嘆ず。

【講義】佛德の廣大無邊なることは譬へば佛は十方界を孕む程に廣大な佛體であらせられ、またその無邊なることは一塵を淨化し、その一塵の中に不可說の妙境を顯現せしめらるゝ程であらせらる。

其通也則汲冥海於毛端。其術也則入巨嶽於小芥

【訓方】其の通は則ち冥海を毛端に汲み、其の術は則ち巨嶽を小芥に入る。

【字訓】○通……神通力のこと。○冥海……大海。○術……神術。○冥海巨嶽……『維摩經』の故事を指す。即ち曰く「若し菩薩是の解脫に住する者は須彌の高廣を以て芥子の中に內る。增減する所なし。須彌山王の本相故の如くして四天王忉利の諸天己が入る所を覺らず知らず、たゞ應度の者のみ乃ち須彌の芥子の中に入るを見る。是を不可思議解脫法門と名く。又四大海の水を以て一毛孔に入る。魚鼈黿鼉水性の屬ひをなやまさずして彼の大海の本相もとの如し。諸龍鬼神阿修羅等も己が入る所を覺らず知らず、此衆生に於ても亦饒す所無し」と。

【參考】佛の德を用に約して嘆ず。

【講義】佛の神通力の廣大なることは恰も大海の水を毛端に汲みて然も龜魚をも損破せず、また大山を小芥の中に入れて人天をも損せざる程に神通自在の神術を體得せられ給ふてゐるのである。

四量用心六度爲行。無親無怨三界耶孃。不捨不倦四生則子。塵沙德海欲談舌卷之也

【訓方】四量に心を用ひ六度を行と爲。親も無く怨も無く三界の耶嬢たり。捨てず倦まず四生則ち子なり。塵沙の德海談せんと欲するに舌卷く。

【字訓】○四量……慈、悲、喜、捨の四無量心のこと。○六度……檀、戒、忍、進、禪、慧の六波羅蜜のこと。○耶嬢……父母のこと。○四生……胎、卵、濕、化の四生物のこと。○塵沙德海……微塵恒沙の功德のこと。○舌卷……言語道斷の義。

【拳意】佛の化度の妙用を嘆ず。

【講義】更に世尊は慈悲喜捨の四無量心に心を用ひ給ふて六波羅蜜を以てその行をなし給ふ。また世尊は無緣平等の公平無私たる態度を以て一切衆生に接し給ふが故に朔して親怨といふこともなく等しく一切衆生を憐み給ふこと父母のごとくであらせらる。かくして一切の衆生を見捨て給ふことなく倦まずに我が子の如くに救濟し給ふ。その功德の廣大なること恰も微塵恒河沙の如くであらせられ、それを讃嘆しようと思へども我々としてはそれを贊ふべき言葉なく、所謂言語道斷といつて良い程に廣大であらせらる。

伏惟皇帝陛下。允仁允慈含弘光大。且智且文道義是親

【講方】伏して惟れば皇帝陛下、允に仁、允に慈あつて含弘光大なり。且は智、且は文にして道義是れ親しむ。

【字訓】○皇帝陛下……嵯峨天皇を指し奉る。○含弘光大……含弘とは地の萬物含んで大なるをいひ、光大とは天の物を蓋ふて大なるが如きをいふ。○道義……先王の道、或は王道の義。

【拳意】嵯峨天皇の御高德を嘆じ以て造像の所以となし給ふ。

【講義】伏して惟れば嵯峨天皇に於かせられては允に仁、允に慈に富ませられ給ひ、その仁慈の德の御廣大に亘らせ給ふこと恰も天地の如くであらせられ、また他面智に勝れさせ給ひ、文に秀でさせられて、たゞ王道にのみ親しみ給ふ聖天子にましませる。

所以爲故中務卿親王及故夫人藤原氏。敬造刻檀釋迦牟尼佛像一軀。觀世音菩薩像一軀。虛空藏菩薩像一軀。並金銀泥畫。四大忿怒王像四軀。四攝八供養八大天王像等。各副法曼荼羅三昧耶曼荼羅。兼延法侶開肆齋筵

【訓方】所以に故の中務卿の親王、及び故の夫人藤原氏の爲に、敬んで刻檀の釋迦牟尼佛の像一軀、觀世音菩薩の像一軀、虛空藏菩薩の像一軀を造り、並に金銀の泥をもつて四大忿怒王の像四軀、四攝八供養八大天王の像等を畫き。各々法曼荼羅三昧耶曼荼羅を副へて、兼ねて法侶を延て齋筵を開き肆ぶ。

【字訓】○夫人……伊豫親王の御母、吉子夫人を指し奉ると。○檀……白檀、或は赤栴檀ともいふ。○。四大忿怒王……降三世、軍荼利、大威德、金剛夜叉の四大明王。○攝……鉤、索、鎖、鈴の四菩薩。○八供養……嬉、鬘、歌、舞、香、華、燈、塗の八供養菩薩。○八大天王……伊舍那、帝釋、火天、閻魔、羅刹、水天、風天、毘沙門天王の八方天。○法曼荼羅……種子曼荼羅、○三昧耶曼荼羅……所持の幟幟を圖示せる三形曼荼羅。

【拳意】供養齋筵の有り樣を記さる。

【講義】斯樣に仁慈にましまされるが故に、故の中務卿の親王及びその御母君藤原夫人の爲に、敬んで白檀木を以て、釋迦牟尼佛の像一軀、觀世音菩薩の像一軀、虛空藏菩薩の像一軀を造り、并に金泥銀泥を以て、四大忿怒明王の像四軀、四攝菩薩、八供養菩薩、八大天王等の像を圖畫し、各々種子曼荼羅、三昧耶曼荼羅を副へて、兼ねては僧侶を招請して供養の法筵を催し給ふ。

爾乃妙業揮刀眞容宛爾。尊尊玉質智智金山香饌斷結妙華含光

【講方】爾れば乃ち妙業刀を揮つて眞容宛爾たり。尊尊の玉質、智智の金山、香饌結を斷ち、妙華光を含めり。

【字訓】○妙業……非凡の工巧師。○揮刀……佛像を刻むこと。○眞容……眞實の佛容。○宛爾……さながらそのまゝの義。○尊尊玉質……各尊の麗しき相。○智智金山……金山は佛、各尊が差別智を體識して嚴然たるさま。○香饌……香華等を供養すること。饌はそなふること。○斷結……煩惱を斷除すること。○含光……萬物を包含して化して光あらしむる程の智慧を得ること。

【拳意】佛像の尊容と供養の德とを嘆ず。

【講義】さてそこで出來上り給へる佛像を拜し奉るに、それは非凡な出來榮えであつて恰も眞實の佛容さながらであらせられ、各尊尊の差別智身がそれ〴〵の特質を象徴して嚴然としてゐませらる。誠に莊嚴極りなき御尊容であらせらる。それらの尊々に香を焼いて至心に供養すれば、一切の煩惱直ちに斷除せしめ給ふことであり、また華を供養して至心に祈れば含光の智直ちに得せしめ給ふことであらう。

伏願藉此勝業拔翊兢魂。持金翅於空空。攀蓮步於如如

【講方】伏して願くは此の勝業に藉て兢魂を拔き翊けん。金翅を空空に持し、蓮步を如如に攀ぢん。

【字訓】○兢魂……獨りあるたましひ、即ち聖靈のこと。○拔翊……特に拔き出して菩提の爲めにたすけること。翊は輔なり。○金翅……金翅鳥で、此の鳥毒蛇を食ふによりて佛がよく煩惱諸惡の毒を斷除する所を以て此の佛に譬ふ。○空々……智に約す。○蓮步……釋尊が生れて初めて七步を步み、その步み跡に蓮華を生ずと。これも佛をいふ。○如如……理に約す。

【拳意】正しく願文の意を明し給ふ。

【講義】伏して願くは此の勝業の功德によりて、兢魂を拔濟し奉り、佛の空空の智德を體得し給ひ、佛の如々の理德を證驗し給はんことを。

珍寶日新山壽無窮。股肱良才元元康哉

【講方】珍寶日に新にして山壽窮り無く、股肱良才にして元元康哉ならん。

【字訓】○日新……日日に新なるを盛德といふ。○山壽……壽命長遠の喩。○股肱良才……良才一本には良哉とあり。賢臣良臣よき輔佐たること。○元元康哉……元々は臣民、哉康はやすらかなること。

【拳意】嵯峨天皇の御德を祈り奉る。

【講義】今上陛下の御德日日に益々御盛大にましまされ、聖壽萬歲にして大山の如くに搖ぎなく極りなく、また賢臣良臣よく輔佐し奉り、よく忠をはげみ、萬民擧つて益々康安とならんことを祈り奉る。

幽顯同福併鑒本有之五鏡。常沐佛護鎮遊法苑

【講方】幽顯福を同うして併に本有の五鏡を鑒み、常に佛護に沐して鎮へに法苑に遊ばん。

【字訓】○幽顯……幽明で靈界と現世。○五鏡……五智。

【拳意】結句として平等利益の旨趣を述ぶ。

【講義】幽明の一切の靈も人も共に平等利益を蒙つて本有の五智を體得し、常に佛の加護に浴して鎮へに佛國土に優遊し給はんことを祈り奉る。

五〇 藤大使中納言爲亡兒設齋願文

藤大使中納言爲亡兒設齋願文

【訓方】藤大使中納言亡兒の爲に齋を設くる願文。

【字訓】○藤大使中納言……藤原賀能のこと。

【拳意】初に題名を擧ぐ。此の一文は散逸して殘る處僅かに二十三字のみ。

【講義】藤原賀能亡兒の爲めに齋筵を設くるに際しての願文。

伽梵大師有悲智。達磨妙寶爲筏爲船。體則冥空而不二

【訓方】伽梵大師、悲有り、智有り、達磨の妙寶を筏と爲、船と爲。體は則ち空に冥つて不二なり。

【字訓】○伽梵……薄伽梵の畧で、譯して世尊といふ。○大師……佛を指す。○達磨……法のこと。○筏船……筏や船が此の岸から彼の岸へよく渡す如く、法も此の岸から彼の岸へ人を渡す。故に法を筏や船に喩ふ。○空……理。○不二……理智合する故に不二といふ。

【參考】佛の本體を明す。

【講義】大聖世尊は悲智の二德を具備し給ひ、且つ法の妙理を船筏となしてよく一切衆生を濟度し給ふものにして、その本體たる智體はよく空理に冥合して理智不二の妙體であらせらる。（以下の文章散逸して傳はらず）

五一　爲式部笠丞願文

式部笠の丞が爲の願文。

【訓方】式部笠の丞が爲の願文。

【字訓】○式部丞……唐名は吏部郎の史、大丞は相當正六位下、小丞は從六位上。○笠……笠は姓、名は仲守。『續日本後記』に曰く「承和二年十二月甲戌左中辨從四位下笠朝臣仲守卒す」と。

【參考】初に題名を擧ぐ。

【講義】式部丞笠の仲守が先考の爲め、追福に梨田を寄進するに際しての願文。

恭聞。我性自覺滿空。海滯化身救世

【訓方】恭んで聞く、我性の自覺は空に滿ち、海滯の化身は世を救ふ。

【字訓】○我性……自性理法身。○自覺……自受用智法身。○滿空……遍法界の體なる故に滿空といふ。○海滯化身……加持を以ての故に各法界の一門より現じて一りの善知識の身となることを得といふ者の其の數無量なるが故に海滯と言ふ。滯は滴なり。

【參考】自證化他の佛の境界を明し給ふ。

【講義】恭んで聞く、我性の自性理法身を證得せる自受用智法身は法界に遍じ滿ち、かく法界に遍じ滿てる自受用智法身は加持力を以て更に法界の一門より現じて一善知識身となり、その善知識身が無量無數に顯現されて一切衆生を濟度し給ふに至るといふことを。

遍界塵墨盲離瞻也。瞽隷記也

【訓方】遍界塵墨は離が瞻ることを盲しめ、隷が記すことを瞽しむ。

【字訓】○遍界塵墨……遍界は上の我性等の句を受け、法界に遍ずる佛身をいひ、塵墨は上の海滯等の句を受け、化身の無量無數なることを表す。塵墨は『法華經』第三化城喩品の故事で、恒沙無數をいふ。即ち曰く「譬へば三千大千世界の所有の地種をたとひ人有て磨して以て墨とせん。東方千國土を過ぎて乃し一點を下さん。大さ微塵の如し。又千國土を過ぎてまた一點を下さん。是の如く展轉して地種の墨を盡さん。乃至點と不點と盡抹して塵となして一劫とするが如し」と。○離……離朱のことで、離朱は非常によく目が見えしといふ人。即ち『淮南子』に曰く「離朱が明、筴（へ）の末を百歩の外に察れども淵中の魚を見ること能はず」と。○隷……隷首のことで、計算に巧みなりし人。即ち『西京賦』に曰く「伯益も名くること能はず、隷首も記すこと能はず」と。

【參考】法身の德を喩を以て嘆ず。

【講義】我性の佛は法界に遍滿すれどもかの離朱の如き眼明き者の目も還つて見ること能はず、また化身の佛身無量無數なること恰も塵墨の如くなれば隷首

が如き數理家も計へ記すこと能はざる程である。

狂乘牛名道。泣駕驎稱易

【訓方】乘牛に狂するを道と名け、駕驎に泣くを易と稱す。

【字訓】○乘牛……老子を云ふ。○狂……虚無に執して未だ眞道を知らざる故に狂といふ。○道……老子の云ふ大道のこと。○駕驎……『孔叢子』上記問篇に曰く「車子鉏商野に樵て麟を獲たり。之を五父の衢に棄つ。夫子往いて焉を觀て泣いて曰く、麟や麟出でゝ死す。吾が道窮んぬ」と。駕は上の乘に對する語で意味なし。要するに駕驎は孔子といはんが爲めに用ひしのみ。○易……易道のこと。

【參考】法身の境地は老儒の窺ひ知る能はざることを明す。

【講義】かくの如く離朱の明も自心の佛を見ること能はず、況んや青牛に乘じて虚無に執して眞道を知らざる老子の輩も、またかの孔子が易道を講明してこれを根本の道となせしが如き、何れも自心の佛を見ることは不可能のことである。

近而難觀高而易感。澄鏡則天祐響應。濁染則鬼殺雪消

【訓方】近うして觀難く、高うして感じ易し。澄鏡なるときは天祐響のごとくに應じ、濁染なるときは鬼殺雪のごとくに消す。

【字訓】○近、高……上の我性自覺に就いていふ。○澄鏡……『起信論』に曰く、「衆生の心は猶し鏡の如し。鏡若し垢あれば色像現ぜず。是の如く衆生の心も若し垢あれば法身現ぜず」と。○天祐……感應をいふ。○鬼殺……煩惱に譬ふ。○雪……如來の智に比す。

【參考】自心佛たる法身の隱顯の理を明し給ふ。

【講義】自心佛たる法身は我が心中に在ますのであるが故に誠に近きにあるのであるが、併し凡夫には率爾に得難きものである。然れども一心さへ寂靜なればこの高大なる法身も感見し易い筈である。從つて我が一心が澄める鏡の如くに清らかならば感應響の如くに應ずるものであり、また自心濁染にして惡業に耽つてゐるならば殺鬼來たつて法身の慧命を消除すること恰も雪に湯をかけるが如くである。

其源也則大日得名。大悲也則觀音立號。所謂阿哩野翳迦捺者目佉（翻云大聖十一面觀音也）則是蓮華部利他之一門也

【訓方】其の源は則ち大日に名を得たり。大悲は則ち觀音に號を立つ。所謂、阿哩野翳伽捺者目佉（翻じて大聖十一面觀音と云ふなり）則ち是れ蓮華部の利他の一門なり。

【字訓】○觀音立號……觀音とは一切衆生界を觀察して之を救ふこと自在なる義の故に大悲によつて名づけられしもの。『法華經』普門品に曰く「若し無量百千萬億衆生あつて諸の苦惱を受けんに、是の觀世音菩薩を聞きて一心に稱名すれば、觀世音菩薩即時に其の音聲を觀じて皆得解脫せしむ」と。○一門……普門總德の大日如來より流現せる一一別德の尊をいふ。

【參考】普門一門の尊を明かさる。

【講義】人法の源は大日如來であり、これ普門總德の法身如來であらせらる。その普門大日如來の一德たる大慈大悲の德を司る本源は觀音菩薩にあり、觀音といふ御名そのものが既に大慈大悲より名けられしものである。今こゝでいふ觀音とは阿哩野翳迦捺者目佉、即ち大聖十一面觀世音菩薩である。即ち是れ蓮華部に於ける利他の一門尊であらせらる。

擎寶瓶而施財寶之無盡。懷十利於稱名超萬劫於誦言。大士神力誰能名矣

【訓方】寶瓶を擎げて財寶を施すこと無盡なり。十利を稱名に懷き、萬劫を誦言に越ゆ。

字訓　○寶瓶……十一面觀音の三昧耶形なり。○十利……十種の利益をいふ。即ち『十一面神咒經』に曰く「爾時に觀自在菩薩、佛に白して言く。世尊我らに神咒あり、十一面と名く。大威力を具す。若し淨信の善男子善女人等あれば、まさに恭敬して至心に繫念し、晨朝の時ごとに此の咒一百八遍を念誦すべし。現身に十種の勝利を獲得す。一には身常に無病。二には恒に十方諸佛の爲めに攝受せらる。三には財寶衣食受用して無盡なり。四には能く怨敵を伏して畏るゝ所なし。五には諸の尊貴をして恭敬し先言せしむ。六には蠱毒鬼魅中傷すること能はず。七には一切の刀杖害すること能はず。八には溺すること能はず。九には火燒くこと能はず。十には終に横死せず」と。○萬劫等……又同經に曰く「十菀伽沙等の劫を過ぎて佛ありて出世す。美音香如來と名づく。爾の時に我身大居士と作つて彼の佛の所に於て此の咒を受け得たり。此の咒を得る時に便ち生死に於て四萬劫を超ゆ」と。

拳意　十一面觀音の功德を明す。

講義　此の章は三昧耶形たる寶瓶を擎げて以て無量の財寶を施與し給ふことを暗示し、また此の章の神咒を稱へ奉れば十種の利益を授け給ふこと、更にまた至心に稱咒する者は直ちに四萬劫に於ける罪障煩惱を滅し給ふことを誓はせ給ふ所の大慈大悲の章にまします。されば十一面觀音の神力といふものは廣大無邊蕩々乎として名け難し。

昔我先考失禾千里。褰帷一州。

訓方　昔我が先考、禾を千里に失ひ、帷を一州に褰ぐ。

字訓　○先考……亡父の稱。○失禾千里……失禾の二字合すれば秩になり、秩祿を意味す。禾は蔣茂子禮が三穗の禾の中穗を得てまた失ふと夢を見て、後に内大臣に任ぜられしといふ故事。これ人臣の上祿をいふ。千里とは諸侯の封地をいふ。要するに失禾千里は大祿を得てゐたことの意。○褰帷一州……太守となりて能く治むるの意。これにつき故事あり、即ち『後漢書』に曰く、「賈琮字は孟堅、乃ち琮を以て冀州の刺史となす。舊典に傳車驂駕赤帷裳を垂れて州界に迎ふ。琮が部に之て車を升るに及んで言て曰く、刺史まさに遠く視、廣く聽いて美惡を糾察す。何ぞ反て帷裳を垂れて以て自ら掩塞することの未成就にして他界せし人の志を愍んで、先考は此の觀音像を造り奉らんとするに至つたのである。問もなくその佛像は完成されたのであつた。弟子仲守、次いで先考の所領の境地を拜領して此の地に來り、先考の遺跡の觀音を見奉るに、此の觀音を通して種々の先考のことどもが思ひ出されて哽泣せざるを得ない有り樣である。

謹以弘仁六年十月十五日。墾田一町永奉燈分料。慧燈星懸癡暗雲卷。智光朗月覺威爀日

訓方　謹んで弘仁六年十月十五日を以て墾田一町永く燈分料に奉ず。慧燈星のごとくに懸て癡暗雲のごとくに卷き、智光月を朗んじて覺威日を爀かさん。

字訓　○墾田……耕やされたる田、良田のこと。

拳意　墾田の施入と願意とを記す。

講義　謹んで弘仁六年十月十五日を以て墾田一町歩を永く燈分料として奉獻す。願くは慧燈星の如く輝きて痴暗の雲を除き、智光月の如くに益々光明を放つて覺威日の如くに盛んに輝かさんことを。

伏乞藉此善業。奉翊四恩。優遊覺苑。放曠禪林。毛鱗角冠。蹄履尾裙。有情非情動物植物。同嚴平等之佛性。忽證不二之大衍

訓方　伏して乞ふ。此の善業に藉つて四恩を翊け奉り、覺苑に優遊して禪林に放曠せん。毛鱗角冠、蹄履尾裙、有情非情、動物植物、同じく平等の佛性を鑒みて忽に不二の大衍を證せん。

字訓　○四恩……國王の恩、父母の恩、衆生の恩、三寶の恩。○蹄履尾裙……蹄履は蹄をふむもの、尾裙は尾を引くもの。○不二之大衍……釋論にいふ處の不二摩訶衍の法。

拳意　結句として一切有情平等利益の旨趣を述ぶ。

講義　伏して乞ひ奉る。此の善業によつて四恩の德に報謝し奉り、覺の庭に優遊し、佛果を益々輝やかさんことを。更にまた獸類、魚類、蹄あるものも尾あるものも、存情も非情も、動物も植物も一切のもの悉く皆同じく平等の佛性を顯現して直ちに不二摩訶衍の法を證せんことを。

五二　爲藤中納言大使願文

爲藤中納言大使願文

訓方　藤中納言大使の爲の願文。

字訓　○藤中納言大使……藤原賀能のこと。賀能曾て遣唐大使たりしとき、洋中に於て暴風の難に遭ふ。その時に本朝の諸神に向つて立願して使節を遂ぐるを得たり。故に歸朝の後その立願を果すに當つての願文がこれであると。

拳意　初めに題名を揭ぐ。

講義　中納言大使藤原の賀能の爲めの願文。

某乙聞。智慧源極强名佛陀。軌持妙句假曰達磨。智能圓故無所不爲。法能明故自他兼濟

訓方　某乙聞く、智慧の源極を强て佛陀と名づけ、軌持の妙句を假りに達磨と曰ふ。智能く圓なるが故に爲さざる所無く、法能く明かなるが故に自他兼濟す。

字訓　○軌持……法のこと。『要覽』卷中に曰く、「梵音の達磨、華には法と言ふ。軌持を以て義とす。謂く物に軌として解を生ず。自性を任持するが故に」と。

拳意　法の德用を明す。

有らんや。乃ち御者に命じて之を褰げしむ。百城風を聞いて自然に竦震す」と。

拳意　先考の德を嘆ず。

講義　昔我が先考は秩祿千里に及びし程の大祿を頂き、太守となりてかの孟堅が車の帷帳を褰げてよく治めしといふが、我が先考も彼れに劣らずよく一州を治められた樣である。

遊覽之次忽觀。一塊桃材。問之土人。答曰。有人擬造十一面觀音像。伐採此木。未就功業。不幸而殞。先考愍彼逝者。奉造此像。不日而功畢。弟子仲守續拜此境。乍觀先人之遺跡。物能感人。誰耐哽泣

訓方　遊覽の次でに忽に一塊の桃材を觀る。之を土人に問ふに答へて曰く、人有つて十一面觀音の像を造らんと擬して此の木を伐り採つて、未だ功業を就さず。不幸にして殞すと。先考彼の逝者を愍んで此の像を造り奉る。不日にして功畢へぬ。弟子仲守續いで此の境を拜して乍ちに先人の遺跡を觀るに物能く人を感せしむ。誰れか哽泣に耐へん。

字訓　○一塊……一塊のこと。或は一本のこととも いふ。○巧畢……佛像成就せるを指す。○拜此境……先考の後を襲いで先考所領の境地を拜領すること。○物能感人……物は觀音を指す。先考の遺跡の觀音を見奉るに先考のりとどもを思ひ出して哽泣すること。

拳意　先考が觀音像を造り奉るに至りし因緣を記す。

講義　かつて先考が所領を遊覽せし折、ふと一塊の桃木が置かれてあるのを見、その土地の人にそのわけを尋ねしに、答へて曰く、人あつて十一面觀音の像を刻造せんと欲して此の木を伐り取られたのであつたが、その刻造の未だ成就せざる間に不幸にして他界せられたのであると。此の話を聞きて先考はそ

【講義】 某乙賀能聞く、智悲の源極は得て名くべからずも爾れども衆生の未覺に對して强て佛陀と名け、軌持の妙句を假りに達磨即ち法と言つてゐるのである。その智には如何なるものも圓備してゐるが故になし能はざるといふことなく、また法には明理をよく具有してゐるが故に自他俱に圓滿に濟度することが出來るのであると。

五眼常鑒津渉溺子。六通自由拔拯樊籠。

【標方】 五眼常に鑒みて溺子を津渉し、六通自由にして樊籠を拔拯す。

【字釈】 ○五眼……天眼、肉眼、慧眼、法眼、佛眼の五眼のこと。『智度論』第七に曰く「肉眼は所見不遍。天眼は國土及衆生を緣ずるに無障無碍なり。慧眼は諸法の實相を知る。法眼は是人は何の方便を以て何の法を行て得度せしめんと云ふを見る。佛眼は一切法眼前了々知と名く」と。○津渉……濟度のこと。○溺子……生死海の群生のこと。○六通……天眼通、天耳通、宿命通、他心通、神境通、漏盡通なり。○拔拯……濟度のこと。○樊籠……鳥籠のこと。轉じて身を束縛せらるゝこと。一切衆生の三界の火宅に籠居するをいふ。

【審意】 佛の化他の德用を嘆ふ。

【講義】 佛は五眼を以て常に生死海に溺れんとする一切の衆生を濟度し給はんと思し召し遊ばされて居り、また六通を自由自在に活用して一切衆生が三界の火宅に籠居してゐるのを救出し、濟度し給はんとしてゐられるのである。

桓因所以憑念。摩醯歸之接足不宰之功何敢比喩之矣。

【標方】 桓因所以に憑念し、摩醯之に歸して接足す。不宰の功何ぞ敢へて之に比喩せん。

【字釈】 ○桓因……釋提桓因のこと。釋提桓因が歸佛して長壽を得し故事による。即ち『悲華經』第十入定三昧品に曰く「帝釋命まさに終らんとす。定んで當に畜生道に墮すべし。此の事を以ての故に心に恐怖を生じ、八萬四千の諸天とともに因臺波羅窟に詣して佛の說法を聞いて恐怖即ち除き、壽千歲を增し須陀洹果を得たり」と。○摩醯……摩醯首羅天で、譯して大自在天といふ。大自在天が遂に歸佛して無上大菩提を成ずるに至れるを指す。○接足……頭面接足で歸依禮佛をいふ。○不宰之功……『老子經』上載營魄章に曰く「生而不レ有、爲而不レ恃、長而不レ宰、是謂二玄德一」と。此の句を解して『其注』に曰く「生而不有とは道萬物を生ず、取有する所なし。爲而不恃とは道施爲する所其の報を恃み望まず。長而不宰とは道萬物を長養して宰割して以て器用となさず。是謂玄德とは言ふこころは道、德を行ふ、玄冥にして見ることを得べからず、人をして道の如くならしめんと欲す」と。此の意味からすれば、佛は常に一切衆生を濟度せんとしてゐられる。その佛の不思議力は幽玄にして見えざれども今現に桓因、摩醯の歸依し、得度するに至つた事實を見れば、老子が單に言葉の上でのみ云つてゐる所の不宰玄德とは到底比較にならぬの意である。

【審意】 佛の化他の德用の廣大なるを故事を引きて明す。

【講義】 このゆゑにかの釋提桓因は佛に歸依して佛果を得、またかの摩醯首羅も佛に歸依して菩提を證するに至つたのである。この事實に徵して見ても佛の化他の力用が如何に不可思議廣大なるかゞ窺はれ、かの老子が單に言葉の上でのみ不宰の玄德といゞてゐるとは比較にならぬ。老子の不宰玄德などは敢へて比喩するにさへ足らぬものである。

弟子去延曆二十三年。銜天命於大唐遠渉鯨海。風波沃天人力何計。自思不因冥護寧得遂皇華之節乎。卽祈願奉爲一百八十七所之天神地祇等。奉寫金剛般若經每神一卷。鐘谷感應得果使乎之羨。

【標方】 弟子去し延曆二十三年、天命を大唐に銜んで遠く鯨海を渉る。風波天に沃いで人力何ぞ計らん。自ら思はく、冥護に因らずんば寧ろ皇華の節を遂ぐることを得んやと。卽ち祈願すらく、一百八十七所の天神地祇等の奉爲に金剛般若經、神每に一卷を寫し奉らんと。鐘谷感應して使乎の羨を果すことを得たり。

【講方】 ○鯨海……大海のこと。○風波沃天……暴風に遭つて海の大いに荒れること。○冥護……神助を指す。○皇華之節……皇華は帝より命ぜられ給ひし使をいふ。即ち忠臣使を奉じて君命を光かにす。遠しとなく、近しとなきこと華の高下を以て其の色を易へざるが如しといふによる。節は忠節のこと。○使乎之羨……使乎は遣唐大使のこと。羨は貪り欲すること。

【字釈】 賀能が此の法要を僅すに至りし所以を明す。

【審意】 弟子賀能、去る延曆二十三年天子の御命令を受け奉つて大唐に使す。遠く大海を航す。然る所大暴風に遭ひ、波濤天に沃ぐ程に荒れ、最早や人力を以てしては如何ともなし難き次第となる。そこで自ら思ふに、神助を蒙ることなくしてはどうしても此の遣唐使としての忠節を全うすることは能はじとよつて即ち左の如くに祈願し奉る。一百八十七所の天の神、地の神等の奉爲に金剛般若經を神每に一卷を寫し奉らんと。この自分の祈願神に通じさせ給ひ、鐘谷の如くにたちまちに感應ありて海靜り無事に航海することを得、遣唐使としての願望を遂行し得た次第であつた。

寨寨服思食不甘味。雖然公私擾擾遲延跼蹐。謹以弘仁四年十月二十五日奉寫供養。竝以轉諷每卷一遍

【標方】 寨寨に思を服けて食味を甘んせず。然りと雖も公私擾擾として遲延し、跼蹐す。謹んで弘仁四年十月二十五日を以て奉寫し、供養す。竝に以て轉諷すること卷每に一遍。

【字釈】 ○寨寨……れてもさめてもの意。○服……之を思ふこと。○擾擾……さわぎ亂るゝこと。○跼蹐……心に怖を抱きのび〳〵せざること。○每卷一遍……卷每に讀誦一遍して書寫すること。

【審意】 長年の懸案を果せしことを記す。

【講義】 ねてもさめてもこの祈願のことが思ひ思はれて食物も味なき程に氣にかゝつてゐたのであつたが、何分にも公私の多用忙殺に遲延に遲延して今日に及んでゐたのであつた。愈時機到來して弘仁四年十月二十五日を以て奉寫し供養し奉る。書寫に當つては一卷每に一遍讀誦してから書寫し奉つたのである。

伏願以此妙業崇彼神威。金剛慧日鎖竭愛河。實相智杵摧碎邪山。

【標方】 伏して願くは此の妙業を以て彼の神威を崇めん。金剛の慧日は愛河を鎖竭し、實相の智杵は邪山を摧碎せん。

【字釈】 ○金剛慧日……金剛は金剛般若、慧日は智慧を日に譬へて慧日といふ。○愛河……貪愛を河に譬ふ。○鎖竭……減除すること。○實相智杵……實相は實相般若、智杵は智慧を金剛杵に譬ふ。○邪山……貪慾を山に譬ふ。

【審意】 正しく願意を明す。

【講義】 伏して願くは此の妙業を以て神威を益倍增せんことを。また金剛般若の智慧を以て貪愛を減除し、更に實相般若の智慧を以て貪慾を摧滅せしめんことを祈り奉る。

自他平等斷割妄執。怨親齊沐轉禍爲福。三有六途皆悉四恩。蚊行蝡動何無佛性。遍灑平等之法雨。旱熟妙覺之根果。

【標方】 自他平等にして妄執を斷割し、怨親齊しく沐して轉禍爲福せん。三有六途は皆悉く四恩なり。蚊行蝡動何で佛

性無からん。平等の法雨を灑いで早く妙覺の根果を熟せしめん。

字訓 ○三有……三界のこと。○六途……六道のこと。○蚊行……足あるもの。○蜈動……虫のうごめくこと。

事意 結句として一切衆生平等利益の旨を明す。

講義 また願くは自他平等に煩惱を斷除し、怨も親も、敵となく味方となく共に皆齊しく法雨に浴して惡を轉じて福となし、以て無上菩提を成ぜんことを。また三界六道等の一切の有情はこれ四恩の何れかに屬するものにして且つ蚊行蜈動等に至るまで一切の有情は佛性を具するものなれば、遍く平等の法雨を灑ぎ灌らしめて、早くその佛性を顯現し、妙覺の佛果を成熟せしめ給はんことを。

五三　藤大使爲亡兒願文

藤大使爲亡兒願文

藤大使亡兒の爲の願文。

字訓 ○藤大使……藤原賀能のこと。

事意 初めに題名を掲ぐ。

講義 藤原賀能亡兒の周忌を催す爲めの願文。

竊聞三曳自性不因他造。一同本覺何待緣

基本 竊に聞く。三曳の自性は他に因て造らず、一同本覺は何ぞ緣を待て起らん。

字訓 ○三曳……三麽曳のことで三平等をいふ。三平等とは自心と佛と衆生との三法無差別平等、身語意三密平等、自他共三平等、理行果三法、三寶、三身等總て三法の平等なるをいふ。○不因他造……心自ら心を證し、心自ら心を覺つて自證の三菩提を得るものなるが故に他によつて造られるものではない故にかくいふ。○一同本覺……不二本覺をいふ。

事意 自證本覺の境界を明す。

講義 竊かに聞き及んでゐる。即ち三平等の自性を證悟するといふことは他に因つて造り出されるものではなく、それは心自ら心を證し、心自ら心を覺る體のものである。また不二本覺を顯得することも他よりの緣を待つてなされるものではない。自心自らなさなければならぬものであると。

雲敷四印雨足三密。水喻舌卷燈談手絕。三賢非分十地難窺

基本 雲敷の四印、雨足の三密は水喻も舌卷き、燈談も手絕えたり。三賢も分に非ず、十地も窺ひ難し。

字訓 ○雲敷……雲集で、雲の如くに澤山集れること。○四印……四智印のこと。即ち大智印、三昧耶智印、法智印、羯磨智印にして、これ四種曼荼羅をいふ。○雨足……雨足多しと雖も井にこれ一水なりの義で、多即一にして一味なるに喩ふ。○水喻……華嚴に說く處の水波の喩を指す。即ち『探玄記』第一に曰く「理事無碍門とは亦二義あり、一には謂く一切の諸法舉體眞如事相を碍へず、歷然として差別なり、二には眞如の舉體一切の法の爲に一味を碍へず、湛然として平等なり。前は即ち波水に即して動相を碍へざるが如く、後は即ち水、波に即して濕體を失はざるが如し」と。○燈談……『鈔』によれば天台に約すと。即ち天台の所談に「一室衆燈光相即無碍圓融」を明す故に。○手絕……手は心をいふ。絕心のこと。○三賢……十住、十行、十廻向をいふ。天台に約す。○十地難窺……『大日經疏』第一に曰く「此の自證の三菩提は一切の心地を出過して現に諸法の本初不生を覺る。即ち十地の菩薩なりと雖も、尙し其の境界に非ず、況や餘の生死の中の人をや」と。華嚴に約す。

事意 自證本覺の境界の功用を明す。

講義 一切の諸佛諸菩薩が雲集せる四種曼荼羅、その四種曼荼羅が各各四種曼荼羅を具して現出せる所の重々無盡の本覺の境界や、また雨足の如く無量無數にゐませられる處の諸佛諸菩薩の三密が各各三密を具して現出せる一味平等の自證の境界は、華嚴に說く處の水喻を以てしても到底說き得ざる處であり、天台に說く處の燈談の喩說も遠く及ばざる處であり、三賢十地も到底窺ひ知る能はざる所である。

是故凹頭引有讚歸藏。左腋推無談道經

基本 是の故に凹頭は有を引いて歸藏を讚し、左腋は無を推して道經を談ず。

字訓 ○凹頭……孔子のこと。孔子の首の上にくぼかなる所ありしよりかくいふ。○引有……根元一氣の有をいひ、有の一邊を引き陳ぶるをいふ。○歸藏……易をいふ。即ち『周禮』に曰く「大卜三易の法を掌る。一を連山と曰ひ二を歸藏といひ、三を周易と曰ふ」と。鄭氏が注して曰く「名て歸藏といふは萬物歸して其の中に藏まらずといふことなし」と。○左腋……老子のこと老子母の左腋を割つて生る。故にかくいふ。○推無……虛無の道を推し廣む故にいふ。○道經……『註老子經』第一に曰く、「老子上下二篇八十一章五千餘言を著はす。故に號して老子經と曰ふ」と。

事意 本覺自證の境界は儒老の遠く及ばざる義を明す。

講義 かくの如く三賢十地も及ばず、言語道斷心行亦寂なる故に、かの孔子が有の一邊をのみ引き陳べ以て易道を翼贊せし儒教の如き、また老子が虛無の一邊をのみ推し廣めて說き著はせし老子經即ち道教の如きはそれ未だ及ばざること甚だ遠しと言はねばならぬ。

東稚猶渴推功西聖難信能信

基本 東稚は猶渴して功を推り、西聖は信じ難きことを能く信せしむ。

字訓 ○東稚……孔子を指す。其の教の淺膚なるを以て其の人を東稚と稱す。東といふは西聖に對して言ふ。○推功……孔子が釋尊を大聖なりと云ひし故事による。即ち「列子に云く、昔吳の太宰嚭、孔丘に問て曰く、夫子は聖人か。孔子對へて曰く、惇識强記す、聖人には非ず。又問ふ、三王は聖人か。對へて曰く、三王は善く智勇を用ふ、聖は丘が知る所に非ず。又問ふ、五帝は聖人か。對へて曰く、五帝は善く仁信を用ふ、聖は丘が知る所に非ず。又問ふ、三皇は聖人か、對へて曰く、三皇は善く時を用ふ、聖は丘が知る所に非ず。太宰大に駭て曰く、然らば即ち孰をか聖人とせんや。夫子容を動じて問らくあつて曰く、丘聞く、西方の人に大聖人なるものあり、治めずして亂れず、言はずして自ら信あり、化せずして自ら行る。蕩々乎として人よく名づくること無し。若し三王五帝必しも是れ大聖ならば孔丘豈隱て說かざるべけんや」と。○西聖……釋尊を指す。○難信能信……『隋書』によれば此の一句は老子が如來に歸信せし故事を指すとて『後漢書』を引きて曰く「西の方散關に入つて浮圖となる」と。又『珠林』二十を引きて曰く「老子西升經に曰く吾師天竺に化遊して善く泥洹に入る」と。さればこれ老子歸佛せし證なりと。

事意 孔老も遂に佛陀に屈服せしことを明す。

講義 されば孔子も遂に聖は我が知る所にあらずと云つて、大聖人の名を釋尊に與ふるに至り、また大聖釋尊は難信の者をよく信ぜしめ給ふが故に遂に老子も印度に赴き歸佛するに至つたのである。

不嘗醍醐毒醉何解

基本 醍醐を嘗めずんば毒醉何ぞ解けん。

字訓 ○醍醐……今は祕密陀羅尼藏を指す。○毒醉……三毒の醉。

事意 祕密陀羅尼藏の法門を喩ず。

講義 かゝ樣に最上無比の勝れた法門が我が祕密陀羅尼藏なるが故に此の法門を味證しなかつたならば、どうしてや三毒の妄醉から解脫することが出來ようや。

願念亡子官位心淳負米業茂締構

基本 顧念へば、亡子心淳く米に負ひ、業締構に茂し。

字訓 ○負米……盡孝をいふ。即ち『孔子家語』第二に曰く「仲由字は子路、孔子に見えて曰く、重きを負ふて遠きを涉るには地を擇ばずして休ふ。家貧

して親老るときは祿を擇ばずして仕ふ。昔由二親に事へし時、常に藜藿の實を食ふて親の爲に米を百里の外に負ふ。親沒しての後南のかた楚に遊んで從車百乘積粟萬鍾茵を累ねて坐し、鼎を列ねて食ふ。願は藜藿を食て親の爲に米を負んことを欲すれども得べからず」と。○締構……締は結で、むすびかまふること。父の跡を繼ぐの意。

拳意 亡子の孝心を嘆ず。

講義 顧み思ふに、亡子はその心はよく親を思ひ、孝を盡さんの志あつく、またその業からいへばよく親の跡を繼ぎ得、而も盛ならしむる者であつた。

膈手之疾命也難愈。碎玉之哀幾損眼明。天公何忍奪我鍾愛。

講方 膈手の疾ひ命なり、愈え難し。玉を碎くの哀しみ、幾くか眼命を損する。天公何ぞ忍んで我が鍾愛を奪へる。

字訓 膈手之疾……膈はマドのこと。窓より手を取つて永く訣れんとすといふ。『論語』の故事より來る。今は單に病氣の意なり。○命……天命のこと。○碎玉……子を喪ふこと。『白氏六帖』第十六父子部に曰く「珠掌上に碎け、蘭庭中に敗る」と。○眼明……たましいをいふ。○鍾愛……めでいつくしむこと我が子をいふ。

拳意 子を喪へる悲しみを記す。

講義 病氣となりて全快致さざることも畢竟これ天命である。假し乍らさうはいへども親として子を喪ふの悲哀は到底堪え難き苦痛であるが故に幾度か茫然自失、己がたましいを失ふ程に悲歎に暮れしことか。天何ぞひそかに我が最愛の子を奪ひ給ふや。

空事傷悼無益存歿。所以敬爲亡息周忌。聊設法筵禮供三尊。諷音遠徹摧伏馬頭。香氣遙薰奉仰象王。妄雲寒性空覺月朗心秋。

講方 空しく傷悼を事とするは存歿に益無し。所以に敬んで亡息の周忌の爲に聊か法筵を設けて三尊を禮供す。諷音遠く徹して馬頭を摧伏し、香氣遙かに薰じて象王を仰ぎ奉らん。妄雲性空に寒げて覺月心秋に朗かならん。

字訓 ○傷悼……人の死をいたみをしむこと。○存歿……生けるものも、死せるものも。○三尊……三寶のこと。○馬頭……馬頭羅刹で獄卒のこと。○香氣遙薰……『僧史畧』中卷に曰く「經の中に長者佛を請じて宿夜に樓に登つて手に香爐を乘つて以て信心を達す。明日食時に佛即來至したまふ。故に知んぬ。香を信心の使となす。」と。○象王……佛を指す。○妄雲……煩惱の雲。

拳意 亡息の齋筵を設くるに至りし所以と、願意を明す。

講義 徒らに傷悼することは生ける者にも死せし者にも何の益もなきことである。そこで亡息の周忌に際して敬んで聊かの法筵を設け、三寶を恭敬供養し奉る。願くは誦經の聲遠く徹して獄卒を摧伏して極樂に往生せしめ、香煙遙かに佛處にまで薰じて佛を供養し奉り、佛の化導を蒙りて妄雲を拂拭して自性清淨たらしめ、以て覺智を益々輝やかしめ給はんことを。

執香自馥洗衣脚淨

講方 香を執れば自ら馥し、衣を洗へば脚淨し。

字訓 ○執香自馥……『佛本行經』五十七難陀因緣品に曰く「若し手に沈水香及び薰香麝香等を執ることあれば、須臾に執持すれども香自ら染む。善友に親附するも亦復然なり」と。即ち此れ善法を廻向せばその利益を受くるの意を含む。○洗衣脚淨……蜀江に錦を洗ふの足自ら淨しの意なりと。されば善法を施す者も自ら功德を蒙るの意も多分に含まるか。

拳意 下の福延現衆等の句を言はんが爲めに感じ易き義を述ぶ。

講義 香を執持せば自らその香氣に染み、また蜀江に衣を洗へば自ら足も淨くなる如く、すべてものは感じ易く、影響され易きものである。

福延現衆不怕鼠侵。無堪福履天長地久

講方 福現衆に延いて鼠の侵さんことを怕ぢざらん。堪り無き福履天長地久ならん。

字訓 ○鼠侵……『大集經』に說かれたる故事で、黑白の二鼠が命藤を嚙み切ること。即ち命を絕つこと。○不怕……長壽を保つをいふ。○福履……福祿のこと。

拳意 修福を更に現衆に廻向せんことを明す。

講義 さればこの修福を更に現衆にまで廻らし、以て長壽萬歲にして福祿限りなく、天長地久たらんことを。

鱗衫羽袍蹄舄角冠。誰無佛性早見實相。

講方 鱗衫羽袍、蹄舄角冠、誰か佛性無からん。早く實相を見せしめん。

字訓 ○鱗衫……衫はヒトヘ、要するに鱗衫は鱗を着けたるものゝ意。○羽袍……袍はウハギ、要するに羽袍は羽毛のあるもの即ち鳥類をいふ。○蹄舄……蹄はヒヅメ、舄はクツの義、要するに獸類をいふ。

拳意 結句として一切平等利益の旨趣を明す。

講義 更に此の功德を鱗衫羽袍蹄舄角冠等に至るまでの一切の有情に及ぼし、彼れらの有せる佛性を開顯し、早く菩提を證見せんことを祈る。

遍照發揮性靈集卷第七

五四　奉爲四恩造二部大曼荼羅願文

奉爲四恩造二部大曼荼羅願文

【訓】四恩の奉爲に二部の大曼荼羅を造する願文。

【字訓】○二部……金剛、胎藏の兩部のこと。○願文……此の願文は大師が長安の都に於て兩部曼荼羅を寫得してより年久し、爲めに零落せしを以て重ねて圖畫し給ふ時の願文である。

【事意】初に題名を揭ぐ。

【講義】四恩の奉爲に金胎兩部の大曼荼羅を謹製するに就ての願文。

弟子蕊芻空海歸命兩部曼荼羅也

【訓】弟子蕊芻空海兩部曼荼羅に歸命したてまつる。

【字訓】○蕊芻……比丘に同じく、僧の義。○歸命……歸は敬順の義、命は諸佛の教命の義。即ち如來の教命を奉けて傳法利生することを明す。

【事意】佛に歸命し奉る義を明す。

【講義】佛弟子沙門空海兩部曼荼羅に歸命したてまつる。

夫金剛四法身胎藏三秘印

【訓】夫れ金剛の四法身、胎藏の三秘印は。

【字訓】○金剛四法身……金剛界五智所成の四種法身のこと。四種法身とは自性身、受用身、變化身、等流身なり。○胎藏三秘印……胎藏部に屬する大日經に說かれたる三種の秘密身をいふ。即ち『大日經』第六本餘三昧品に曰く「一切如來に三種の秘密身あり、謂く、字印形像なり、字とは法曼荼羅、印は謂く種々の標幟、即ち三昧耶曼荼羅なり。形とは相好具足の身、即ち大曼荼羅なり。此の三種の身に各威儀事業を具する是を羯磨曼荼羅といふ。是れ四種曼荼羅なり」と。

【事意】所歸の原極たる兩部大日を明す。

【講義】夫れ所歸の原極たる大日如來これを兩部に約して云ふならば、自證化他の二德を圓備し給ふ處の金剛界の四種法身にましまし、大悲胎藏の萬德を含藏し具足し給ふ處の胎藏の三秘密身にましますのである。

憩空性而軟祖秣重如以脂轄

【訓】空性に憩つて軟祖し、重如に秣うて以て脂轄す。

【字訓】○憩空性……第八の住心の者が無相の空理に滯著して後位に秘密莊嚴心あるを知らざるをいふ。即ち『大疏』第二に曰く、「行者初めて空性を觀ずる時一切の法皆心の實際に入ると覺る。下衆生として度すべきを見ず、上諸佛として求むべきを見ず。爾時に萬行休息して究竟を爲すと謂へり」と。此れ第八の住心に當り、第八住心を擧げて第九住心を兼ね表す。○軟祖……門出せんとするに際して道祖神を祭ること。今は第八の住心の者が自の極果たる空性に安住すれども忽ち上の四法身の域に至らんと欲し、旅び立つ志を起せしをいふ。○秣重如……第七の住心の者が進趣し修行するをいふ。即ち『開書』に曰く、「住心論第七覺心不生心に曰く、二諦俱絕と言は二諦皆如なり。奈んぞ皆不絕なることを得ん。二諦俱不絕とは是の如の相を得るを名づけて如來とす。是二つの如の相を得、所以に皆不絕なり。又五教章下に云く、三身の外に於て別に自性身を立つ。楞伽經に云が如し。四には如々佛此れ終教に約して說く」と。重如は如如に同じ。終教は第七住心に當る。今は第七住心を擧げて第六住心を兼ぬ。○脂轄……轄は車の軸の端にあるクサビ・クサビに油を注ぐことで出發の用意を整ふる義。今は第七の住心の者が無爲平等の理に沈著せしが警覺開示を蒙つて大日の境界に進趣せんとするをいふ。

【事意】四家大乘の人が從顯入密する相を明す。

【講義】かくの如き所歸の原極たる大日如來の境界は、かの第八の住心の者が自の極果たる無相の空理に滯著し、それを至極なりと安住して居りしも秘密佛の警覺開示を蒙つて忽ち秘密莊嚴の境界に趣入せし、その境界であり、またかの第七の住心の者が無爲平等の理たる重如の理に沈著して居りしも、秘密佛の警覺開示を蒙つて修行し、趣入せし境界に當るのである。

一道無爲初入門三自本覺聲不及

【訓】一道無爲は初入の門、三自本覺は聲も及ばず。

【字訓】○一道無爲……天台には一實中道といふ故に一道無爲といひ、一道清淨といふ。『摩訶止觀』一之三に曰く「何をか一となす、一實不虛の故に、一道清淨の故に、一切無碍の人、一道を以て生死を出づるが故に」と。此れ第八住心を明す。『寶鑰』に第八の住心を名づけて一道無爲心となし、此を初法明道と名け、又入佛道の初門となす。○三自本覺……三自とは三は體相用の三大、自は依他の妄法煩惱に對して三大の自體をいふ。本覺は本來法爾として一切衆生各々所具の眞如の理體をいふ。此れ即ち三大を具足せし法爾の自覺ありと談ずる第九住心をいふ。

【事意】四家大乘の中、別して第八、第九の住心を擧げて第十に及ばざることを明す。

【講義】一實不虛、一道清淨の法華の教理を以て生死の出離を敎ふる第八の住心はこれ入佛道の初門であり、また三大を具足せし法爾の自覺ありと談ずるを以て至極究竟なりとする第九の住心の如き、何れも皆第十の密藏に望むれば遠く及ばざる所である。

衆寶心殿高廣無邊光明日宮無所不遍

【訓】衆寶の心殿は高廣にして無邊なり。光明の日宮は遍せずといふ所無し。

【字訓】○衆寶心殿……十方法界中の萬德を以て莊嚴したる胎藏理法身が所住とする心殿。○高廣無邊……『大日經』第一住心品に曰く、「如來の信解遊戲神變より生ぜる大樓閣寶王は高うして中邊なし。諸の大妙寶王を以て種々に間飾せり」と。○光明日宮……金剛界智法身が赫々たる光明を照らし乍ら住する心殿。即ち『瑜祇經』上序品に曰く「本有金剛界自在大三昧耶自覺本初大菩提心普賢滿月不壞金剛光明心殿」と。これ衆寶の日宮光明の心殿といふべし。○無所不遍……十方法界中に遍在せざる所なきをいふ。

【事意】別して兩部の海會を嘆ず。

【講義】十方法界中の萬德を以て莊嚴せし胎藏理法身の所住の心殿は高大無邊にして遍く行き渡り、橫竪無邊であらせらる。また金剛界智法身が赫々たる光明を照し乍ら住せらるゝ衆寶光明の心殿は十方法界に遍じ給ひ、遍じ給はざる所なき程に高大無邊であらせらる。

眞言大我本住心蓮塵沙心數自居覺月

【訓】眞言の大我は本より心蓮に住し、塵沙の心數は自ら覺月に居す。

【字訓】○眞言大我……理智の法身をいふ。即ち理智の二法身は十方法界中を以て我物とする故に凡夫の小我に對して大我といふ。○心蓮……心蓮は心蓮華臺のこと。○塵沙心數……十佛刹微塵恒河沙の如き無量數の諸眷屬をいふ。○居覺月……法爾本覺の月輪三昧中に安住し給ふこと。

【事意】能住の佛身たる心王心數に就いて明す。

【講義】眞言の大我たる理智の二法身は本より常に心蓮華臺に能住し給ひ、また十佛刹微塵恒河沙佛の無數の眷屬は本來、法爾本覺の月輪三昧中に安住し給ふてゐらせらる。

三等法門住佛日而常轉秘密加持應機水而不斷法性身塔奇哉大哉

【訓】三等の法門は佛日に住して常に轉じ、秘密の加持は機水に應じて斷えず。法性の身塔奇なる哉、大なる哉。

字訓 ○三等法門……三平等の法門のことで、即ち身口意平等、心佛衆生平等佛法僧平等等をいふ。○佛日……三時を越えたる如來の日、即ち三世常恒の義。『大疏』第一に曰く「三時を越ゆる如來の日、加持の故に身語意平等句の法門とは、爾の時に佛日住して而も法を演說す、淨眼を以て之を觀ずるに三際の相了に不可得なり。無終無始にして亦去來なし。此の如の中に佛何の法をか說きたまふ。即ち是れ身語意三平等句の法門なり」と。○祕密加持……如來は佛日に住して三密平等の法門を說くと雖も唯佛與佛自受法樂の境界で等覺十地と雖も因分の人は法益を蒙る能はず、よりて大悲の神通力を以て加持三昧を現ずるをいふ。即ち『大疏』第一に曰く「是の故に自在神力加持三昧に住して普く一切衆生の爲に種々の諸種所意見の身を示し、種々の性欲所宜開の法を說き、種々の心行に隨つて觀照の門を開く、然も此の應化は毘盧遮那の身、或は語、或は意より生ずるにあらず。一切時處に於て起滅邊際俱に不可得なり」と。○機水……機根のこと。○法性身塔……以下は上來の總結を明す。法性身塔とは諸法の體性たる法身大日如來をいふ。法性身即塔の義。

案意 所說の法門を明す。

講義 如來は佛日に住し給ふて三世常恒に三密平等の法門を說き給ふ。かく如來は常に三密平等の法門を說き給ふてゐるのであるけれどもその法門は唯佛與佛自受法樂の說法にして等覺十地等の因人には法益蒙り難きを以て加持三昧を示現して衆生の機根に應じ、千差萬別の性欲に隨つて種々の敎法を說かれてゐる。然れども其の說法も亦三世常恒に不斷になされ給ふてゐるのである。これを思へば法身大日如來は誠に不可思議であり、絕大であらせらる。

弟子空海。性薰勸。我還源爲。思。徑路未知。臨。岐幾泣

講方 弟子空海、性薰我を勸めて還源を思と爲。徑路未だ知らず。岐に臨んで幾たびか泣く。

字訓 ○性薰……眞如佛性の內薰、即ち眞如が心內に於て薰動して發心するをいふ。『起信論』に曰く、「眞如法あるを以ての故に能く無明を熏習す。即ち妄心をして生死の苦を厭ひ、涅槃を樂求せしむ」と。○還源……本覺の佛性を體得すること。『釋論』第三に曰く「自性淨心を曀覆して還源日無し」と。○徑路……還源すべき近路を指す。

案意 大師が發心して佛心の要を尋求せし有り樣を明す。

講義 弟子空海、自分は自分の心內の眞如の薰動によりて發心し、生死を厭つて涅槃を求むるの心、その心に動かされて本覺の佛性に立ち還へらんことを思ひ欲するに至つたのである。併し乍ら小乘大乘、一乘三乘等無數の敎法あり、その中何れが還源するの近路であるかといふことを未だ知る能はず、その多數の敎法の中の何れに從ふべきやその岐路に臨み、迷つて幾度か歎き泣いたことであらうか。

精誠有。感。得。此秘門。臨。文心昏願。尋。赤縣。

講方 精誠感有つて此の秘門を得たり。文に臨んで心昏うして赤縣を尋ねんことを願ふ。

字訓 ○秘門……久米寺の塔下に大日經を感得せしことを指す。○臨文心昏……大日經の文を讀むに意味の通ぜざる處ありし事實を指してかく仰せらる。○赤縣……中國を名づけて赤縣神州といふと。支那のこと。

案意 祕經を感得し、且つ入唐求法するに至りし所以を明す。

講義 此處に於て勇猛精進、眞心を以て不二無上の法門を授からんことを一心に祈り奉りしに、三世の諸佛その精誠に感應し給ふて、久米の塔下に求むる處の祕經を感得することが出來得たのである。然るにその祕經を拜讀するに自分の心に氤氳する能はざる所あり、名師に尋ねしも疑を解くことを得ず、遂に入唐求法せんことを願ふに至つたのである。

人願天順得。入。大唐。儻遇。導師。圖。得兩部大曼荼羅。兼學諸尊眞言印契等。

講方 人の願ひに、天順ひたまふて大唐に入ることを得たり儻導師に遇ひたてまつつて兩部の大曼荼羅を圖し得たり。

兼て諸尊眞言印契等を學す。

字訓 ○天……桓武天皇を指し奉る。○導師……青龍寺惠果和尙を指す。

案意 勅許を得て入唐し、惠果和尙に遇つて祕密の法門を授り得しことを明す

講義 入唐求法を願ふてゐたこの自分の願を、天子に於かせられては許され給ふて、大唐に渡ることが出來、大唐長安の都に於て遇然にも大導師青龍寺惠果和尙に遇ひ奉つて兩部大曼荼羅を圖し得、また諸尊の眞言印契その他の祕密の法門等を學修することが出來たのである。

從。爾已還年過。三六。絹破。彩落。尊容欲。化。願。後學而興。歎。悲。群生之無福。

講方 爾かりし從り已還、年三六を過ぎて絹破れ、彩落ちて尊容化しなんと欲す。後學を願て歎を興し、群生の無福を悲しむ。

字訓 ○三六……十八年、延曆二十三年より弘仁十二年に至るまでの十八年。これ大師の入唐せし年より數へてのことなり。○化……變化して諸尊の相が無くなること。

案意 曼荼羅の零落せしことを悲しみ歎き給ふ所以を明し、惹いては再寫せんとする志を述べ給ふ。

講義 願思するに入唐してよりこのかた早や十八年の歲月を經たり。爲めに圖寫せし所の曼荼羅の諸尊の彩色零落して諸尊の容相變化し、且つ無くなりさうである。もし無くなり、遷依する所を失ふとせば後學の者歎きを抱くであらうし、また群生も祕密法門の利益を蒙ることも出來なくなることで、悲しみの極みといふべきである。

於焉諸佛照膽。一天感。誠。后妃隨喜震卦亦應。三台竭。心衆人效。力

講方 於焉諸佛膽を照し、一天誠を感ず、后妃隨喜し、震卦亦應ず。三台心を竭し、衆人力を效す。

字訓 ○照膽……肝膽を照鑑し給ふこと。○震卦……東宮の御こと。○三台……三台星の異で、太政大臣、左大臣、右大臣をいふ。○効……致に同じ。

案意 諸佛の加被に依り、君臣の助成に依つて曼荼羅を再寫する義を述べ給ふ

講義 こゝに於て諸佛は我が眞心を照鑑し給ひ、また天子に於かせられても我が誠心に感應し給ひ、后妃に於かせられも隨喜し給はれ、東宮に於かせられても亦感應し給ひ、三台には心を盡して助力し給ひ、また衆人力を致して助力する等、遂に曼荼羅を再寫する機運に至つたのである。

謹從。弘仁十二年四月三日起首。至。八月盡。奉。圖。大悲胎藏大曼荼羅一鋪八幅。金剛界大曼荼羅一鋪九幅。五大虛空藏菩薩。五忿怒尊。金剛薩埵。佛母明王。各四幅一丈。十大護天王。蘗魯拏天像。龍猛菩薩龍智菩薩眞影等。都二十六鋪。取。九月七日。聊設。香華。供。養曼荼。

講方 謹しで弘仁十二年四月三日從り起首して、八月盡に至るまで、大悲胎藏大曼荼羅一鋪八幅、金剛界大曼荼羅一鋪九幅、五大虛空藏菩薩、五忿怒尊、金剛薩埵、佛母明王各四幅一丈、十大護の天王、蘗魯拏天の像、龍猛菩薩、龍智菩薩の眞影等都べて二十六鋪を圖し奉る。九月七日を取つて聊か香華を設けて曼荼を供養す。

字訓 ○盡……晦日のこと。○一鋪……一幅のこと。○八幅……絹八巾のこと ○五大虛空藏……大虛空藏菩薩所具の五智を開きて五尊とせる尊で、法界虛空

藏、金剛虛空藏、寶光虛空藏、蓮華虛空藏、業用虛空藏をいふ。○五忿怒……不動明王、降三世明王、軍荼利明王、大威德明王、金剛夜叉明王をいふ。○佛母明王……今は孔雀明王を指すと。○十大護……毘首羯磨、劫毘羅、法護、眉目、廣目、護軍、珠賢、滿賢、持明、阿吒縛俱をいふ。○薩魯拏天……迦樓羅天とも書し、妙翅鳥、又は金翅鳥ともいふ。八部衆の一。

參意 圖寫の年月日と、圖寫の諸幅と供養とを明す。

講義 此處に於て謹んで圖寫し奉る。それは弘仁十二年四月三日に起首して八月晦日に至る迄の約一百五十日間に於て、大悲胎藏大曼荼羅八幅のもの一鋪、金剛界大曼荼羅九幅のもの一鋪、五大虛空藏菩薩、五忿怒尊、金剛薩埵、佛母明王各四幅にして丈一丈、十大護天王、迦樓羅天の像、龍猛菩薩、龍智菩薩の眞影等總じて二十六鋪を圖寫し奉る。かくて九月七日の吉日を卜して香華を辦じ、曼荼羅及びその他の諸尊の像に供養し奉る。

九識心王凝乘蓮之相。五智法帝嚴坐月之貌。

讀方 九識の心王は乘蓮の相を凝らし、五智の法帝は坐月の貌を嚴しうす。

字訓 ○九識心王……中台八葉の九尊を擧げて胎藏界の曼荼羅を讃す。○乘蓮……胎藏界の諸尊の月輪は蓮華の上にあるが故にかくいふ。○五智法帝……金剛界の曼荼羅を指す。○坐月……金剛界の諸尊の蓮華は月輪中にあるが故にかくいふ。

講義 所造の兩界曼荼羅の相を明す中、心王に約す。

講義 胎藏曼荼羅の諸尊は蓮華三昧に安住して不動轉の相を示し給ひ、また金剛界曼荼羅の諸尊は月輪三昧に安住して威儀嚴然としてゐませらる。

點塵身雲執本標而輻側。恒沙心數擎供器而駢羅。一禮一瞻慧劍斷縛。若供若讃智寶與福

讀方 點塵の身雲は本標を執つて輻側し、恒沙の心數は供器を擎げて駢羅たり。一禮一瞻、慧劍縛を斷ち、若は供、若は讃、智寶福を與ふ。

字訓 ○點塵……塵數の義。○身雲……雲集せる佛身の義。○本標……本誓標幟のこと。○輻側……輻湊侷側、あつまりそばだつこと。○駢羅……ならびつらなること。○一禮一瞻……『法苑珠林』二十七に曰く「一瞻一禮萬累氷の如くに消ゆ」と。○慧劍、智寶……諸尊の三昧耶形を指す。

參意 恒河の眷屬と功能とを明す。

講義 點塵の如く無量無數に雲集せる諸眷屬の佛身はそれ〴〵本誓の標幟を持つて集りそばだたゝれ、また恒河沙の如き無量の諸眷屬は供器を擎げ持ちてならびつらなり給ふ。それらの諸佛諸尊に一禮し奉り、或は一見し奉るのみにても諸佛の本誓たる慧劍を以て煩惱を斷除し、若しくは一遍の供華、一誦の讃を唱ふるのみにても諸佛の本誓たる智寶を蒙りて福祉を授り得と稱せらる。

伏願廻斯功業奉報佛恩。擁護國家尅證悉地。剎均妙樂之剎。人同不變之人。

讀方 伏して願くは斯の功業を廻して佛恩を報じ奉り、國家を擁護し、悉地を尅證せん。剎は妙樂の剎に均しく、人は不變の人に同じからん。

字訓 ○尅證……尅は期で、必らずの意。必らず證すること。○悉地……今は眞言の妙果をいふ。○妙樂之剎……密嚴國土を指す。○不變之人……常住不變の如來を指す。

參意 新願の意を述べ給ふ。

講義 伏して願くはこの功業を廻して佛恩を報じ奉り、國家を擁護し、眞言の不二の妙果を必ず證せんことを。そして又國は密嚴佛土に等しからしめ、人は常住不變の如來と同じからんことを願ふ次第である。

若貴若卑或道或俗。捨財効力之績。揮筆投針之營。伐木汲水設饍調味。擧心隨喜合掌低頭。讃毀見聞親疎恩怨。五大所遍心識所在。

讀方 若は貴、若は卑、或は道、或は俗、財を捨て力を効すの績、筆を揮ひ、針を投ずるの營み、木を伐り、水を汲み饍を設け、味を調へ、心を擧げて隨喜し、掌を合せて低頭し、讃毀見聞、親疎恩怨、五大の遍ずる所、心識の在る所。

字訓 ○績……功業で善業のこと。○投針……縫ふこと。○擧心……全靈を捧げての意。○低頭……頭を地につけてぬかずき禮拜すること。『大疏』第四に曰く「若し結緣の弟子は擧手低頭の善も撰せざる所なし」と。○讃毀……讃嘆するものも、毀るものも共に緣となりて救はること。

參意 利益を有緣無緣一切に及ぼさんとするに際して有緣無緣の一切の人々を列ぬ。

講義 財物を施捨し、力を合せて功を助け給ひし所の貴賤道俗は云ふに及ばずまた直接に筆を揮つて尊像を畫きしもの、或は之を表裝せしもの、或はまた木を伐り水を汲み、饍を設け食事を調ふるもの、或はまた全心全靈を捧げて隨喜合掌低頭して至心に禮敬するもの、或はまた讃嘆するもの、毀るもの、見るもの、聞くもの、親しきもの、疎なるもの、恩あるもの、怨みあるもの、乃至は五大所成のもの、心識のあるもの等一切の有情非情に至るまで。

悟阿字於本初。覺三寶於三密。解鏤文乎無終。知五界於五智。法爾莊嚴豁然圓現。本有萬德森羅頓證

讀方 阿字を本初に悟つて三寶を三密に覺り、鏤文を無終に解して五界を五智に知らん。法爾の莊嚴豁然として圓に現じ、本有の萬德森羅として頓に證せん。

字訓 ○悟阿字於本初……阿字本初不生の理を證悟すること。即ち『大疏』第七に曰く、「梵文の阿字に本初の聲あり」と。又曰く、「若し本不生際を見る者は即ち是れ實の如く自心を知る。實の如く自心を知るは即ち是れ一切智智なり故に毘盧遮那は唯此の一字を以て眞言とす」と。○覺三寶於三密……三寶は佛、法、僧。三密は身、口、意。即ち佛法僧の三平等の法を身口意の上、即ち三三平等なる理を覺ること。○解鏤文乎無終……鏤文は實相智の種子。無終は無終無始の眞理のこと。即ち能詮の鏤字を以て無終無始なる眞理を會解すること。○知五界於五智……五界に眼等の五界とする義と、五大とする義とあり、今は五大の義にとる。即ち五大即五智と覺り知ること。○法爾莊嚴……新曼荼羅に約して法爾の體性なることを明す。即ち今掲げたるは新曼荼羅なれども明ず處は法爾法然の莊嚴にして今新に顯はれたるに非ずの意。○豁然……明瞭なる義。

參意 正しく祈願を明す。

講義 等しく皆能詮の阿字を以て本初不生の眞理を證悟して佛法僧の三平等の法を身口意の上に體驗すること、即ち三三平等なる理を覺り、能詮の鏤字を以て無始無終なる眞理を會解して五大即五智なる義を覺知せんことを。また今所造の新曼荼羅が法爾法然の莊嚴を豁然として圓現せしその如くに、衆生身内の所具の曼荼羅を各々に圓滿し、顯現せんことを。更にまた衆生が本有の曼荼羅を拜する功德によりて本有の萬德を森々と羅列して頓に佛果を證せんことを祈り奉る。

五五　爲故藤中納言奉造十七尊像願文

爲故藤中納言奉造十七尊像願文一首

讀方 故の藤中納言の爲に十七尊の像を造り奉る願文一首。

字訓 ○藤中納言……藤原賀能のこと。賀能は弘仁九年十一月十日薨ず。行年六十四。臨終に際して大師に紫綾の文服を贈れり。よりて大師は賀能の追福の爲に綾服を地となして理趣會の十七尊の曼荼羅を圖繪し、供養したまふ。これその時の願文なり。

聖意 初に題名を擧ぐ。

講義 故藤原賀能中納言の追福菩提の爲に理趣會十七尊曼荼羅の尊像を圖繪し供養するに際しての願文一首。

越有大樂不空十七尊曼荼羅。超兩絶而建都。過三諦以構殿

講方 越に大樂不空十七尊の曼荼羅有り、兩絶を超えて都を建て、三諦を過ぎて以て殿を構ふ。

字訓 ○越……發端の辭。○大樂不空……大樂とは金剛薩埵の自證に名く、即ち金剛薩埵は無我の大我にして恒に凡即是佛の三昧に住して自受法樂なる故に。不空とは化他に名く、即ち不空は無間の異名にして、金剛薩埵が化他の作用に於ては間斷なくなし給ふが故に。『理趣經開題』に曰く「大樂不空とは此れ金剛薩埵の異名なり。妙樂の中に此の尊三摩地特に殊勝となすが故に大樂と曰ふ。不空とは梵には阿目佉といふ。此には無間といふ。自證の大樂、化他の大喜間斷あることなし。故に無間といふ。無間と不空と其の義一なり」と。○十七尊……五尊、八供養菩薩、四攝菩薩をいふ。○兩絶……第八第九の住心とする義と、第六第七の住心とする義との二義ある中今は後者の義とす。即ち法相宗、三論宗共に佛果の境界は遮詮談旨と言ふ。依て此の二箇の住心を兩絶といふ。○三諦……第八第九の住心を指す。即ち天台宗は諦法を空假中の三を以て說き盡す。また華嚴宗は諸法を眞俗中の三を以て說き盡す故に此の二箇の住心を指す。

聖意 理趣會の極底を明し給ふ。

講義 こゝに金剛薩埵の自證化他の三昧たる大樂不空十七尊の曼荼羅がある。この曼荼羅の境界は、兩絶たる法相三論の敎理を遙かに超絶して建立せられたものであり、また三諦を說く天台華嚴の敎理を遠く超過して構設せられたる至極幽妙のものである。

無始無終坐其極。金幢金杵莊其臺

講方 無始無終にして其の極に坐し、金幢金杵其の臺を莊る

字訓 ○無始無終……本有の境界常恒の妙用をいふ。○其極……自證法爾の位に住し給ふこと。○金幢金杵……昇して二尊の三昧形を擧げて以て餘尊を影顯す。金幢は金剛の摩竭幢。金杵は金剛薩埵の金剛杵。

聖意 上に都とか殿とかと云ひし爲め、今はその莊嚴を昇進す。

講義 無始無終法爾常恒に自證法爾の御殿に住し給ひ、その御殿は摩竭幢幡や金剛杵を以て莊嚴せられ給ふてゐる。

塵體以爲身。沙心以爲用。常恒佛業何有何無

講方 塵體を以て身と爲、沙心を以て用と爲。常恒の佛業何づくんか有り、何づくんか無からん。

字訓 ○塵體……刹塵の體。○沙心……恒河沙の心。○常恒佛業……化他の作業常恒三世一切時に働けるをいふ。

聖意 金剛薩埵の化他の作用を明す。

講義 金剛薩埵の身は遍法界の體であり、その化他の心は恒河沙の如く無量無數であり、應用無窮の身心であらせらる。從つて無盡無餘の一切の衆生界に於て一切の願作業悉く圓滿せしめんが爲めに常恒三世一切時に於てなされてゐるのである故に、何れに於ても攝化の作用があり、何れに於ても無いといふことはないのである。

伏惟故入唐大使中納言正三位藤原氏。累代貂蟬兩國令聞。一心授四帝。閨孝移國忠

講方 伏して惟れば故の入唐大使中納言正三位藤原の氏は累代の貂蟬、兩國の令聞あり。一心四帝に授けて閨孝國忠に移す。

字訓 ○貂蟬……侍臣の冠の裝飾、轉じて高官の人を稱す。○兩國……日本と大唐となり。○令聞……よききこえ。ほまれ。○一心……忠義一心の眞心。○授……君に事へて身を致すこと。『論語』に曰く「危を見て命を授く」と。○四帝……光仁、桓武、平城、嵯峨の四天皇を指し奉る。○閨孝移國忠……閨孝とは閨房に於て親に孝道を盡すこと。かく閨房に於て親に孝道を盡してゐたその孝道を忠義の道に移して大いに忠義を盡すに至ること。即ち『孔子傳』に曰く「君子は孝を閨門に脩めて君に事り、長に事り以て官を治するの義備さに存す」と。

聖意 聖靈在世の德を嘆ず。

講義 伏して惟れば故の入唐大使中納言正三位藤原の氏は先祖代々より高位高官に任ぜられし家柄であり、殊に賀能卿は日本大唐兩國に於て譽高き賢臣であられ、忠義の一心を以て四帝に事へ奉り、よく親に孝にして而もその孝道を忠道に移してよく忠節に勵みし君子であられた。

延曆末年奉使入唐。貧道叨濫學道。同乘一船。暴風折桅之難。狂汰破船之危。三江泛鷁五嶺馳騏。東洛西秦關輔郵亭。契深存沒。約厚現當

講方 延曆の末の年使を奉はつて入唐す。貧道學道を叨りもみりがはしうして、同じく一船に乘る。暴風桅を折るの難、狂汰船を破るの危、三江に鷁を泛べ、五嶺に騏を馳す。東洛西秦、關輔郵亭、契存沒に深く、約現當に厚し。

字訓 ○叨濫……みだりがはしくむさぼること。大師謙遜の語。○狂汰……驚波であらなみのこと。○三江……吳江、松江、錢塘江。○鷁……鷁は一種の大なる水鳥、その像を畫いて船首に著けし船のこと。○五嶺……湖南、廣東兩省の界にある大嶺、始安、臨賀、桂陽、揭陽の五嶺。今は單に山に遊びしの意。○騏……くろみどり色をした馬のこと。○東洛……東都洛陽のこと。○西秦……西都長安のこと。○關輔……長安のこと。○郵亭……昔の旅宿をいふ。○存沒……生死のこと。○現當……現世と未來。

聖意 大師と賀能と入唐を共にし、苦樂を共にして友情の深かりしことを明す。

講義 卿は延曆の末年、即ち延曆二十三年に遣唐大使の命を拜受して入唐するに當り、貧道も入唐求法を願ひしに勅許を蒙りて、同じ船に乘ることが出來たのである。航海中には暴風に遭遇し、桅を折られ、荒波に船破損する等の危難に遇つて共に肝を潰し、また彼の地にありては共に三江に鷁舟を浮べて遊覽し、五嶺に馬を馳せて風景を賞で、或はまた洛陽に、長安にと異國の旅宿に艱難辛苦し、全く生死を共にして現當に此の友情を契りかはせし間柄であつた。

豈謂風撥朝露。雨絶夕雲。白楊悴秋霜。青栢吟冬吹。空餘墳墓。人去何處

講方 豈謂ひきや、風朝露を撥ひ、雨夕雲に絶えんとは。白楊秋の霜に悴け、青栢冬の吹に吟ず。空しく墳墓を餘して人何づれの處にか去れる。

字訓 ○雨……雨、天より落ちて再び天に歸へらず、即ち死をいふ。○白楊……楊柳のことで、墳墓に植ゑるもの。○青栢……栢でこれも墳墓に植ゑるもの。

聖意 賀能卿の死を悼む。

講義 かく樣に友情深かりし卿が、風が朝露を吹き拂ふごとく、また雨が夕雲と共に落ち去れるその如くに忽然と薨じ給ふとはかく樣なことがあらうとは豈ど

うして思ひ設けよや、思ひもうけぬことであつた。卿不歸の客となりて一入悲哀に閉ざされ、卿の死を悼んで白楊も秋の霜に枯れおとろへるが如くであり、また青柏も冬の風に悲哀を口ずさんでゐるが如くである。たゞ空しく墳墓を殘して卿は何れの處にか去り給ひしや。

臨終遺余一紫綾文服。覩衣珠落思人鯁生。今思廻作功德報彼逝者

【訓方】終に臨んで余に一の紫綾の文服を遺れり。衣を覩て珠落ち、人を思ふて鯁生す。今思はく廻して功德を作して彼の逝者に報ぜんことを。

【字訓】○珠落……落涙すること。○鯁生……鯁は哽に通ず。哽咽悲塞の義、むせびふさがること。

【拳意】遺物の紫綾を見て悲歎し給ふ貌を明す。

【講義】臨終に際して余に一枚の紫綾の文服を遺り來る。その紫綾の文服を見るにつけては卿の在世のことどもが追憶せられて涙落ち、また折にふれ時にふれて卿のことが思ひ出されてむせびふさがる思ひが生ずるのである。そこで今善業の功德を廻向して卿の菩提を弔ひ、以て生前の恩德に報ひんと思ふ次第である。

謹以弘仁十二年九月七日。綾服爲地金銀爲絲。奉圖十七尊曼荼羅一鋪三幅。幷書寫大樂金剛不空三昧耶理趣經一卷。兼設香華供佛演經。蘇羅多妙相澹然色悅。吉利羅尊容寛爾意示

【訓方】謹んで弘仁十二年九月七日を以て綾服を地と爲、金銀を絲と爲て、十七尊の曼荼羅一鋪三幅を圖し奉る。幷に大樂金剛不空三昧耶理趣經一卷を書寫して、兼ねて香華を設け、佛に供し、經を演ぶ。蘇羅多の妙相は澹然として色悅び、吉利羅の尊容は寛爾として意を示す。

【字訓】○蘇羅多……妙適菩薩のこと。即ち『理趣釋』に云く「妙適とは即ち梵音は蘇羅多なり。蘇羅多とは世間の那囉那哩の如し。那囉那哩は娯樂なり。金剛薩埵も亦是れ蘇羅多なり。無緣の大悲を以て遍く無盡の衆生界を緣じて安樂利益を得しめんと願ふ。心に曾て休息なし。自他平等無二なり。故に蘇羅多と名く」と。○澹然……安らかに。○色悅……熙怡、即ちやはらぎよろこぶさまをいふ。○吉利羅……觸金剛をいふ。『理趣釋』に曰く「金剛髻離吉羅菩薩の瑜伽三摩地を修するに由て、觸清淨句を得。是の故に金剛髻離吉羅菩薩の位を獲得す」と。○尊容寛爾……意の熙怡を示すこと。

【拳意】供養の有り樣を記し、所造の佛像を嘆ず。

【講義】謹んで弘仁十二年九月七日を以て紫綾の文服を地とし、金銀を以て絲色となして十七尊の曼荼羅三幅のもの一鋪を圖し奉る。幷に大樂金剛不空三昧耶理趣經一卷を書寫す。兼ねて香華を綺じて佛に供養し奉り、經を誦じ、以てねんごろに供養す。今所造の曼荼羅の諸尊澹然として住し給ひ、殊に妙適菩薩は殊勝微妙の相に安らかに住して熙怡し給ひ、また觸金剛は寛爾として意から熙怡の尊容を示し給ふてゐらせらる。

慾箭射厭離之意。悲幢吸愛縛之心

【訓方】慾箭は厭離の意を射、悲幢は愛縛の心を吸ふ。

【字訓】○慾箭……慾金剛をいふ。『理趣釋』に曰く「慾金剛の瑜伽三摩地を修するに由て慾箭清淨句を得、慾金剛菩薩の位を獲得す」と。○射厭離之意……生死即涅槃、煩惱即菩提、娑婆即寂光なるを以て、生死を厭離せんとする心を射て、煩惱即菩提の理を悟らしむること。此れ慾金剛が箭を持てる所以である。○悲幢……愛金剛をいふ。『五秘密軌』に曰く「愛金剛の摩竭幢を大悲

金剛鎖となす。一切衆生を度して以て其の道とす」と。摩竭幢は愛金剛の三昧を標す。○吸愛縛之心……摩竭幢の先にある摩竭魚が口を開いて凡夫の愛縛の煩惱を呑滅せんとしてゐるその如くに、愛金剛が大悲の心を以て凡夫の愛縛の煩惱を斷滅せんとするをいふ。

【拳意】三昧耶形より所造の佛像の德を嘆ず。

【講義】更に慾金剛は箭を三昧耶形として凡夫が生死を厭離せんとする心を射止めて以て生死即涅槃、煩惱即菩提の義を悟らしめんとし給ふて居り、また愛金剛は摩竭幢を持して、かの摩竭魚が凡夫の愛縛の煩惱を呑せんとしてゐるその如くに、此の尊は大悲の心品を以て凡夫の愛縛の煩惱を斷滅せんとし給ふてゐられる。

八供侍女滿法界而無盡。四攝使天遍四生以饒益

【訓方】八供の侍女は法界に滿みて盡くること無く、四攝の使天は四生に遍じて以て饒益す。

【字訓】○侍女……八供養菩薩は定門なるが故に女と稱す。○四攝使天……鉤、索、鎖、鈴の四攝の菩薩は常に金剛薩埵の命を受けて一切衆生を攝取して剩さず洩らさず悉く濟度する故にかくいふ。

【拳意】八供養菩薩と四攝の菩薩とを嘆ず。

【講義】金剛薩埵に隨順し給ふ處の八供養菩薩は法界に遍滿し、且つ法界に遍滿せる供物を捧ぐるが故に其の供養物に盡くることなく、また四攝の菩薩は金剛薩埵の命を受けて四生等の一切處に遍在し、一切處の一切の衆生を攝取して剩さず洩らさず悉く濟度し化益せんとしてゐられるのである。

伏願藉此良緣奉翊尊靈。朗覺月於心臺。曜慧日於蓮宮。廣羅無際普入不生

【訓方】伏して願くは此の良緣に藉て尊靈を翊け奉り、覺月を心臺に朗んじ、慧日を蓮宮に曜かさん。廣く無際を羅めて普く不生に入らしめん。

【字訓】○覺月……心內所具の理法身の體性をいふ。○心臺……智法身の臺といふ。○慧日……智法身をいふ。○蓮宮……理法身をいふ。○無際……際限のなき一切衆生をいふ。○不生……阿字本不生の眞理をいふ。

【拳意】正しく願意を述べ、更に一切衆生平等利益を明し給ふ。

【講義】伏して願くは此の供養の良緣によつて尊靈を翊け奉り、以て無上菩提を證し給はんことを、更に願ふ處は此の功德によりて覺月を心臺の上に朗かに卽ち心內所具の理法身を智法身の上に證顯し、慧日を蓮宮に曜かすその如くに智法身の上に理法身を照顯して光明赫々たらしめ以て廣く一切衆生を攝取濟度して阿字本不生の眞理に入證せしめ給はんことを祈り奉る。

五六　笠大夫奉爲先妣奉造大曼荼羅願文

笠大夫奉爲先妣奉造大曼荼羅願文一首

【訓方】笠の大夫先妣の奉爲に大曼荼羅を造り奉る願文一首

【字訓】○笠大夫……式部丞仲守をいふ。○先妣……亡母の稱。

【拳意】初に題名を掲ぐ。

【講義】笠の大夫仲守が亡母の爲に大曼荼羅を造り奉つて聖靈の得脫を祈るに際しての願文一首

伏願弟子從五位上行左衛門權佐笠朝臣仲守。歸命金剛蓮華部四種曼荼羅

【訓方】弟子從五位上行左衛門の權の佐笠の朝臣仲守、金剛蓮華部の四種曼荼羅に歸命したてまつる。

【字訓】○行……『職原』に位と官と相當の時に行といふと。また『便蒙』には『位

署の書式』を引きて位高く、官低きときに行の字を用ふとも云へり、○左衛門佐……相當從五位上、五位の殿上人の中より之を任ず。○金剛……金剛界○蓮華……胎藏界。○四種曼荼羅……四種智印。

傘蓋 仲守輔が歸依する所の依憑を明す。

講義 弟子從五位上行左衛門の權の佐笠の朝臣仲守金胎兩部の四種曼荼羅に歸命したてまつる。

李桑言籍猶滯二邊之泥

講方 李桑が言籍は猶二邊の泥に滯り。

字訓 ○李桑……李は老子の姓、故に老子を指す。桑は孔子を指す、孔子空桑の中に於て生る故にかくいふ。○二邊……老子は無の一邊を說き、孔子は有の一邊を說く。故に兩者を合せて二邊といふ。

傘蓋 次下に兩部曼荼羅を嘆ぜんが爲めに先づ儒老の二敎の劣なることを擧ぐ

講義 老子、孔子、即ち老儒の說く處のものはそれ〳〵無、有の二邊に墮せる一偏の義理に過ぎない。

勝數典文尙溺三有之水

講方 勝數が典文は尙ほ三有の水に溺る。

字訓 ○勝數……勝は勝論外道、數は數論外道を指す。○三有……三界の異名なり。

傘蓋 外道に就いて明す。

講義 勝論外道や數論外道はその說く所深細なりと雖も尙三界を出ずる道には非ず。たゞ三界に迷ひ溺るゝに過ぎない。

小家小感大演大時

講方 小家は小感し、大演は大時なり。

字訓 ○小家……小乘。○小感……小涅槃。○大演……大乘。○大時……三大阿僧祇劫成佛。

傘蓋 第四、第五、第六、第七の住心に就いて明す。

講義 小乘家の自調自度の人は、利他を知らずしてたゞ見修の惑を斷じて人空無漏の小涅槃を證するに過ぎず、また第六七の二位心の大乘の者と雖も、自利利他の大乘心を以て法執品の惑を斷じ菩提涅槃の二轉の妙果を期すとはいへ、三大阿僧祇劫の長時の修行を經なければ成佛する能はざる所である。

復或一濕俱時金華。雖美之美深之深。而涵泳風水之淵。優遊自他之窟

講方 復或は一濕俱時の金華、美が美、深が深なりと雖も、風水の淵に涵泳し、自他の窟に優遊す。

字訓 ○一濕……『便蒙』には香象の『起信疏』を引きて第九住心華嚴宗なりと解すれども、『抄』并に『私記』『聞書』等は一義を出してこれ第八の住心天臺を指すとす。即ち『法華經』藥草品に於ける「一雨所潤」、また大師が「一雨圓音を灑いで草木の芽葉を發す」と云へるは此の窟に當り、これ天臺の敎理に相當すといふ。○俱時……十法同時に緣起することで華嚴を指す。即ち『五敎章』中に曰く「一には同時具足相應門。地の上の十義同時に相應して一緣起を成す前後始終等の別あることなし。一切を具足して緣起の際を成ず。此の海印三昧に依て炳然として同時に顯現して成ず」と。○金華……上の一濕俱時を天臺華嚴の義とすれば金華も亦天臺華嚴の義を取る。即ち金は金師子の喩で華嚴に當り、華は法華の蓮花三昧で天臺に當る。○美之美……初の美は法相三論、後の美は天臺華嚴、○深之深……初の深は法相三論、後の深は天臺華嚴。○風水之淵……華嚴を指す『釋論』第二に曰く、「譬へば大海の中に大龍王あり、名づけて出生風水と曰ふ。其の頭頂よりは澄水を出生し、其の尾末よりは標嵐(風の名)を出生す。是の龍に由るが故に大海の風水常恒に相續して斷絕あることなきが如く、一心の龍王も亦復是の如し。能く一切善別平等種種の諸法を生じて常恒に相續して斷絕あることなきが故に」と。○涵泳……涵はしづむこと。しづみおよぐことで、滯著するをいふ。○優遊……休息『即ち滯著の義とす。○自他之窟……『聞書』によれば法花とす。自は本覺、他は無明、即ち此の宗は眞如緣起を立てゝ自他の隔歷の執見に留るをいふ。窟は境界をいふ。

傘蓋 第八住心天臺、第九住心華嚴に就て明す。

講義 更にまたかの法花には一雨所潤の義を談じ、また華嚴には十法同時緣起を談ずるが如き、それは恰も金師子の如く、蓮花の如く麗はしきものであり これを佛敎中に比較すれば、殊に美しく甚深である處の法相三論、その法相三論よりも美しく甚深のものである。左樣に佛敎中に於て美が中の美、深が中の深であるとしても之を密敎からいふならば、華嚴は十法俱時緣起を說き乍らも未だ風水、即ち無明本覺の和合たる有爲の境界に滯著してゐるものであり、また法華は眞如緣起を立て乍らも自他の隔歷の妄見の境界に留つてゐるに過ぎずといへるのである。

誰若弍阿本初吸性眞愛。無始。金蓮性我孕。本覺日。無終

講方 誰か若かん、弍阿の本初性眞の愛を吸うて始無く、金蓮の性我本覺の日を孕んで終無きには。

字訓 ○弍阿本初……弍阿は一阿で、阿字は諸法の本初、理智不二の體なり、○吸性眞愛……吸とは吸納すること。性は本性の大悲、眞は眞實、愛は三毒を指し、大愛の上の三毒なれば、大貪、大瞋、大痴をいふ。○金蓮性我……金蓮は金は紫摩黃金色身の御體を云ひ、蓮はその坐する處の臺をいふ。これ心內所證の眞理に安住するをいふ。性我はその佛の本性を指し、本性大我の法身なることを示す。○本覺日……本覺は大智に約す。智を日に喩ふ。即ち法爾法然の實相の大智を具足して無始無終なるをいふ。

傘蓋 密敎を嘆じて、遠く華天の及ばざる義を明す。

講義 云ふ處の眞言密敎の敎は諸法本初の阿字、即ち理智不二の體は大悲本性眞實の大愛を吸納して無始無終に理法身であらせられ、また蓮上の紫摩黃金の本性大我の智法身は本來法爾實相の大智を具足して無始無終に智法身であらせ給ふその境界を說くのであるが故に、上來の諸敎とどうして比較されよう。それらの到底遠く及ばざる處である。

機絕因緣言離筌蹄

講方 機因緣を絕ち、言筌蹄を離れたり。

字訓 ○機絕因緣……機は自證會場の機根。絕は絕離する義。因緣は、今は顯敎の因緣を指すが故に六因、四緣をいふ。○言離筌蹄……言は五種の言說の中の如義語。筌蹄は筌は魚を捕る具、蹄は獸を捕るもの。轉じて目的を達する方便の意。即ち言語文字は眞理を遙べ詔す筌蹄なりといふ。

傘蓋 自證の境界を明し給ふ。

講義 大日如來の自證會場の機根は大日如來の從身流出の佛身なるが故に本來佛身なれども假に未悟實行の相を現じ給ふ。これ自受法樂の故に主伴互位、唯佛與佛の境界なるが故に、この境界は衆生の信心を以て因とし、如來の大悲を以て緣とするが如き顯敎因人の機緣を絕離して居り、また大日如來の說法の言語は如義語を以て說法し給ふが故に聲字即實相にして能詮の言語文字そのまゝが所詮の理である。然るに顯敎では所詮の理を得れば、能詮の言語文字を捨離すること恰も魚獸を得て筌蹄を捨離するが如くであるが、それ等の顯敎とは大いに異り勝れてゐるのである。

自自爲自阿獨作阿

講方 自自ら自を爲し、阿獨り阿を作す。

字訓 ○自自爲自……自は本覺の體性を指す。『釋論』第五に曰く「本覺性智は無始よりこのかた功德を圓滿し、智慧を具足して自自ら自を作す、他力なきが故に」と。○阿獨作……阿は本初不生の理を持す。『釋論』第六に曰く、「法身の佛は心行處滅し、言語道斷せり。滅を滅し、斷を斷じて唯阿阿を作すが故に」と。

傘蓋 兩部理智互に萬德を具して各々守自性各々自建立なる旨を明す。

講義 兩部理智二法身は本覺の性智を今初めて煩惱を遠離することによりて證

得せしに非ず、即ち本來法爾として證得してゐられるのであり、また本初不生の理も今初めて煩惱を遠離することによりて證得せしにあらず、本來法爾として證得し給ふてゐられるのである。

乘烏五智騎兎四輪

讀方　烏に乘る五智、兎に騎る四輪

字釈　○乘烏……乘は智理に住するが故に。烏は日輪、即ち胎藏理界なり。○騎兎……烏は日輪に住するが故に騎といふ。兎は月輪、即ち金剛智界なり。○四輪……輪は輪圓具足で曼荼羅をいふ。されば四種曼荼羅。○五、四……五四といふは言を互にするのみ。

拿意　能證の人に就て明す。

讀義　胎界法身に乘住し給ふ處の五智即ち金剛界の智法身、また金界智法身に騎住し給ふ處の胎界の理法身。

證金體於曼荼海會得蓮躬于瑜祇心殿

讀方　金體を曼荼の海會に證し、蓮躬を瑜祇の心殿に得たり

字釈　○金體……金剛界智身。○蓮躬……胎藏界理身。○瑜祇心殿……『瑜祇經』に曰く「一時薄伽梵金剛界遍照如來、不壞金剛光明心殿の中に於て、自性所成の眷屬金剛手等と與にす」と。不壞金剛とは總じて諸尊の常住の身を嘆ず。光明心とは心の覺德を歎ず。殿とは身心互に能住所住となることを明すなり。

拿意　所證の法を明す。

讀義　かくの如きの理智二法身ば胎藏曼荼羅の境界に於て金剛界の金剛不壞の智體を證得し給ふ。

是故五居足疲秣。十慮心滅休遊

讀方　是の故に五居足疲れて秣ひ、十慮心滅して休遊す。

字釈　○五居……五種の言說をいふ。居とは所居、所依の義。言語は所詮の理の所依たるが故に。○十慮……『釋論』第二に曰く、「心量に十あり。云何が十とす。一には眼識心、二には耳識心、三には鼻識心、四には舌識心、五には身識心。六には意識心、七には末那識心、八には阿梨耶識心、九には多一識心、十には一一識心。是の如の十が中に初の九種の心は眞理を緣ぜず、後の一種の心は眞理を緣じて境界となすことを得」と。此の五居十慮の中、今は五種言說の中の前四種言說と、十慮の中前九慮に就いて云ふのである。

拿意　理智法身の境界は顯の四言九心の遠く及ばざる義を明す。

讀義　かくの如く理智二法身の境界は深秘の境界なるが故に。顯の四種言說を以てしては遠く及ばず、いくら說くとも說き能はず、たゞそれは疲れ果てゝ休息するのみであり、また顯の九種の心慮を以て緣じようと試みても、その九種の心慮にては到底理智不二の境界を緣ずること能はず、たゞ自の境界に休遊し、滯着すのみである。

允父允母牢籠三學。能攝能生出內五藏

讀方　允に父とし、允に母として三學を牢籠し、能く攝し、能く生じて五藏を出內す。

字釈　○父母……理智の二法身は四生の父母たりの意。○牢籠……閉ぢこめる義。また含納の義。○三學……戒、定、慧の三學のこと。○五藏……如來の一切の教法を攝して五分となす。即ち一には素呾纜藏、二には毘奈耶藏、三には阿毘達磨藏、四には般若藏、五には陀羅尼藏。

拿意　理智二法身の化他を明す。

讀義　理智二法身は大慈大悲にましまし恰も父母の如くに一切の衆生を教導し、その訓を垂れ給ふこと三學に非ざるはなく、よく教法を攝在して如何なる鈍根なりとも此れを濟度し、またよく機に隨ひ、人に應じて攝化の法を說き給ひ、自由自在に五藏の一切教法を或は廣く說き出し、或は一に攝して說き給ひ、以て一切衆生を常に攝化し給ふ。

弐聲之義歴劫難盡。四曼之德誰能稱謂之矣

讀方　弐聲の義劫を歴ても盡し難し。四曼の德誰か能く之を稱謂せん。

字釈　○弐聲之義……阿字等の一字に含まれたる義理。○四曼……四種曼荼羅。○稱謂……說き明すこと。

拿意　阿字并に四曼の不可得の義を讃ふ。

讀義　阿字、唵字等に含まれたる處の義理は一字含千理なれば、之を說き明さんとしても說き盡すことは能はず、また四曼所具の德は十方法界中の萬德を具するものなるが故に之を說き明さんとしても說き明すことは不可能のことであつて、誰れ一人として之を說き明すものはない。

伏惟先妣從五位下王氏。柔範備婦儀圓

讀方　伏して惟れば先妣從五位下王氏は、柔範備はり、婦儀圓なり。

字釈　○柔範……婦女のをしへ。『晉書』に「柔範を體して六義を弘む」と。○婦儀……婦人の四德、即ち婦言、婦德、婦功、婦容をいふ。

拿意　聖靈の在世の德を讃ふ。

讀義　伏して惟れば先妣從五位下王氏は柔範よく備はり、婦人の四德悉く圓滿具足せられたる典型的婦人であらせられた。

荷露瑩心竹霜凝念

讀方　荷露心を瑩き、竹霜念ひを凝らす。

字釈　○荷露……心の廉潔なるに喩ふ。○竹霜……貞烈なるに喩ふ。

拿意　內心より先妣の德を嘆ず。

讀義　また先妣はかの蓮葉の上に於ける露の如くに常に廉潔にして汚さぬ樣に心を瑩かれ、またかの竹が霜に犯されず四季に亙つて色を失はざる如くに常に貞節に心掛けられし立派な婦人であられた。

每至夕月坐牕曉鐘徹聽慕金仙於香煙耽玉句之假寐

讀方　夕月牕に坐し、曉鐘聽を徹するに至る每に、金仙を香煙に慕ひ、玉句を假寐に耽る。

字釈　○金仙……佛陀のこと。○玉句……經典のこと。○假寐……うたゝね、或は旅先きの宿り。

拿意　先妣の信仰深かりしことを記す。

讀義　夕月照り輝く窓に向つて坐し乍ら、また或は曉の鐘の音を耳に聽くたびに香を薰じて佛を念じ奉り、またたとへ假寐に於てすらも讀經に耽り給ふ程に信心深き方であつた。

誓曰聞道曼荼諸佛佛中之尊眞言祕經經中之最願我粉身奉圖折骨書寫以益自他以酬恩海

讀方　誓つて曰く、聞道、曼荼の諸佛は佛の中の尊、眞言の祕經は經の中の最なりと。願くは我れ身を粉にして圖し奉り、骨を折つて書寫し、以て自他を益し、以て恩海を酬んと。

字釈　○誓……先妣の素願をいふ。○曼荼諸佛……四種法身をいふ。○粉身、折骨……その志の切なるを嘆ぜし語。○恩海……恩の深廣なるをいふ。

拿意　先妣生涯の問の志を述ぶ。

讀義　先妣在世の時誓つて曰く、私は次の如く聞き及んで居りました。「即ち曼荼羅中の四種法身は諸佛中に於ける最も尊き尊でゐらせられ、また眞言陀羅尼宗の秘密の經典は八萬四千の教法の中で最も勝れた經典である」と。そこで我が願ふ所は假令我が身を粉にするとも此の尊き曼荼羅を圖し奉り、また

假令自分の骨を折らうとも此の眞言陀羅尼宗の秘經を書寫し奉り、以て一は自利利他を願ひ、一は四恩の深廣なる恩德に報ひ奉らんとすることである。

豈圖事將乖願違慈水奄逝

【訓】豈圖りきや、事願ひ將違して、慈水奄に逝かんとは。

【字訓】○慈水……慈母の義。○奄……たちまちに。にはかに。○逝……逝去。

【會意】薨去を明し給ふ。

【講義】上來の如く、先妣の誓ひ給ふ所は粉身折骨してまでも曼荼羅や秘經を圖寫せんと期する所にあつたのであるのに、その誓の事と願ひを果す事とが相違して、慈母の如き先妣が忽然として逝去し給ふとは豈に思ひもうけよや、思ひ圖らざりしことなりき。

弟子等嘗藥無感毒蓼訴蒼

【訓】弟子等藥を嘗むるに感無し、毒蓼蒼に訴ふ。

【字訓】○弟子等……をさなきものたち、家族達をいふ。○嘗藥無感……藥を調へ看病せしにその効なきをいふ。『禮記』に曰く「親疾あつて藥を飲むときは子先づ之を嘗む」と。○毒蓼……毒や蓼を呑むことで哀苦をいふ。○訴蒼……天に訴へ悲しむこと。

【會意】悲哀の相を明す。

【講義】子や家族達は藥を調へすすめて專心看病し給へどもその感應効驗もなく逝去し給ふ。悲哀に滿つこと恰も毒蓼を飲むに等し。天何ぞひそかに我が慈母を奪ひ取るやと歎息せざるを得ぬ有り樣である。

日薄星廻期辰遄至

【訓】日薄り、星廻つて期辰遄かに至れり。

【字訓】○薄……せまる義、迫と同じ。逼迫でおひつむること。○期辰……周期のこと。○遄……速かなること。

【會意】一周忌に至れる義を明す。

【講義】日月速かに過ぎ去り、星移つて早くも一周忌となりぬ。

謹以天長元年孟冬二十二日爲遂先妣本願奉圖大日微細會漫捺羅一鋪九幅七十三尊幷奉寫大日經等若干部卷

【訓】謹んで天長元年孟冬二十二日を以て、先妣の本願を遂げんが爲に、大日の微細會の漫捺羅一鋪九幅七十三尊を圖し奉り、幷に大日經等の若干の部卷を寫し奉る。

【字訓】○孟冬……冬のはじめ陰曆十月のこと。○微細會……金剛界九會の中の一會なり。○七十三尊……五佛、四波羅蜜、十六大菩薩、八供養、四攝、賢劫十六尊、外金剛部二十天なり。

【會意】先妣の本願を果さんが爲めに曼荼羅と經典を圖寫し、供養し奉りしことを明す。

【講義】謹んで天長元年十月二十二日を以て先妣の本願を遂げんが爲めに、金剛界曼荼羅の中の微細會の曼荼羅を九巾一幅に七十三尊圖し奉り、幷に大日經等の若干の經卷をも寫し奉る。

兼延法侶講演大日法智印

【訓】兼て法侶を延いて大日の法智印を講演す。

【字訓】○法侶……僧侶。○法智印……法曼荼羅、今は大日經を指す。

【會意】秘經の講演を記す。

【講義】兼ねては僧侶を請じて大日經を講演し奉る。

四銖肝鹽五莖照灼。一鉢有餘三尊尙饗

【訓】四銖肝鹽し、五莖照灼す。一鉢餘り有り、三尊尙饗したまへ。

【字訓】○四銖……燈のこと。四銖は一錢程の金、即ち極く僅かの金にて求めし油燈にても精神をこめて供養すればいつまでも消えず盛んに輝くことの意。○肝鹽……盛んなるさま。○五莖……華のこと。『智度論』第三十に曰く「須摩提菩薩の如きは然燈佛を見たてまづるときに周旋求索して華を賣る女を見て五百の金錢を以て五莖の青蓮華を買ひ得て以て供養す」と。○照灼……供養の花麗しく奇麗なるをいふ。即ち『辨正論』第四に曰く、「照灼たる名華、三山を麗はしくして捧げ至る」と。○一鉢有餘……僅か一鉢の供養にても精神かも本當に供養するときは餘りある義。即ち『智度論』第三十二に曰く「供養の功德は心に存り、事にあらず。乃至菩薩一鉢の食を以て十方の諸佛に供養するに十方の佛の前に飲食の具具足して出づ」と。○尙……こひねがふこと。○三尊……法報應の三身とも、また三寶ともいふ。

【會意】供養の相を明す。

【講義】凡そ供養といふことは供養せんとする人の眞心如何にその價値があるのであるが故にたとへ四銖ほどの僅かの金を以て購ひ求めし燈油の燈火と雖も眞心を以て供養するときは永く滅することなく盛んに輝き。また僅か五本の蓮華を供養すれども、それが心をこめ、本當に眞心をこめ、精神からなされたならば照灼として麗しく、また僅か一鉢の食を十方の無量無數の佛に供養するとしてもそれが誠心をこめた心からの供養なるときは十方の諸佛に普くゆきわたりて餘りある程である。然るに今施主仲守卿は精神をこめ、心からの供養であり、且つ澤山の供養なれば三尊こひねがはくは受納したまへ。

法界發彩海會之影森羅丹青交暉塵刹之像駢塡

【訓】法界彩を發して海會の影森羅たり。丹青暉りを交へて塵刹の像駢塡たり。

【字訓】○法界發彩……新造の曼荼羅の圖繪彩色宛も法界法然の莊嚴の如しの意。○影森羅……影は影像、森羅は多くならぶこと。○塵刹……無數のこと。○駢塡……多くならぶこと。

【會意】新造の曼荼羅の相を嘆ず。

【講義】此の度新造の曼荼羅は圖繪彩色宛も法界法然の莊嚴の如くに麗はしく、諸佛諸尊の影像森羅としてゐませられ、また赤色青色等の色彩光り交へて誠に麗しく、その麗しき尊像が駢塡として集會し給ふてゐる。

金文玉字字字呑百千之契經空點有畫點點含萬億之義理

【訓】金文玉字字字に百千の契經を呑み、空點有畫點點に萬億の義理を含めり。

【字訓】○金文玉字……寫す所の經卷の文字の麗はしきをいふ。○契經……梵語の修多羅の譯で、經典のこと。緣に契ひ、事に契ひ、義に契ふ故に。○空點有畫……梵字にはすべての點或は三昧の畫あり、故に今は惣じて梵文をいふ。○含萬億等……一字含千理の意。

【會意】書寫の經文を嘆ず。

【講義】書寫する處の經卷の文字は恰も黃金の如く、玉の如くに麗しく、その字字に佛の一切の經法を含藏し、またその寫經の中の梵文は萬億の義理を含藏せし尊き文字である。

積劫障雲蕩一瞻之目累生業霧寮一諷之口

【訓】積劫の障雲は一瞻の目に蕩け、累生の業霧は一諷の口に寮げん。

【字訓】○蕩一瞻之目……曼荼羅を拜見することによりて無量の罪業を消滅する功德あること。即ち『大日經』第一具緣品に曰く「無量俱胝劫に作る所の衆の罪業此の曼荼羅を見れば消滅し盡して餘なし」と。○寮一諷之口……一遍の誦經に重罪を消滅する功德あるの意。即ち『陀羅尼集經』第四に曰く「もし人あつて四重罪及び五逆罪を犯せんに、能く此の法を持して一遍の陀羅尼

を讀誦すれば所有の一切の根本重罪悉く消滅することを得」と。

【拿意】禮拜讀誦の功德を明す。

【講義】人若し本當に心から曼荼羅を禮拜するならばたとへ一度見て禮拜するだけでも無量劫に依りし處の罪業を消滅し盡す功德があり、また本當に心から誦經致すならば一遍の誦經に於てすらも無量劫中に作りし重罪を消滅し盡す功德があるのである。

伏願藉此妙業奉翊先慈月鏡盈盈忽逍遙金剛之月殿日輪赫赫速放曠蓮臺之日宮

【讀方】伏して願くは此の妙業に藉て先慈を翊け奉らん月鏡盈盈として忽ちに金剛の月殿に逍遙し、日輪赫赫として速に蓮臺の日宮に放曠せん。

【字釋】○月鏡……心月を指す。能住を表す。○月殿……金剛界會で所住を現す。○日輪……慧日で能住を表す。○日宮……法界宮殿で所住を現す。

【拿意】先妣の得脫を祈る。

【講義】伏して願くは此の妙業の功德によりて先妣の聖靈の增進菩提をたすけ奉り、以て先妣の心月をして圓滿ならしめ、忽ちに金剛界會に證入せしめ、また先妣の靈日をして胎藏法界宮殿に趣入せしめて赫々と輝やかしめんことを。

鱗衣蹄履角矛牙劍排上潛下怨親疎昵同他鑊乳之珍味齊登阿字之寶閣

【讀方】鱗衣蹄履、角矛牙劍、排上潛下、怨親疎昵、同じく鑊乳の珍味に他いて、齊しく阿字の寶閣に登らん。

【字釋】○鱗衣蹄履……鳥類と獸類。○角矛牙劍……予の如き角あるに、劍の如き牙あるもの。獸類をいふ。○排上潛下……排上は空を飛ぶもの、鳥類。潛下は潛み下るもの潛魚類。○疎昵……疎遠なるもの、昵近なるもの。鑊乳鑊は金剛界の種子、乳はその悟境に喩ふ。○阿字……胎藏界の種子。

【拿意】結言として法界平等利益を述べ給ふ。

【講義】更に願はくは鱗衣蹄履、角矛牙劍、排上潛下等の一切有情に至るまで、怨みあるものも、親しきものも、緣故あるものも、緣故なきものも皆同じく金剛界の無上の法味を覺つて、齊しく胎藏界の阿字本初不生の寶閣に登入せんことを祈り奉る。

五七　僧壽勢爲先師入忌日料物願文

僧壽勢爲先師入忌日料物願文一首

【讀方】僧壽勢先師の爲に忌日の料物を入るゝ願文一首。

【拿意】初に題名を揭ぐ。

【講義】僧壽勢なるもの先師の爲めに忌日の料物を奉入するに際しての願文一首。

弟子苾芻壽勢歸命三寶覺之鉢曇名曰佛衆與達磨卽人心

【讀方】弟子苾芻壽勢、三寶に歸命したてまつる。覺の鉢曇を名づけて佛と曰ふ。衆と達磨と卽ち人の心なり。

【字釋】○三寶……佛、法、僧。○鉢曇……梵語にして譯して句、または足とす。足跡所止の處、卽ち至極の義とす。○衆……僧寶。○達磨……梵語にして譯して法といふ。法寶。○人心……人の心の一心眞如の上の三義が、佛、法、僧なることをいふ。

【拿意】先づ三寶に就いて明す。

【講義】弟子沙門壽勢三寶に歸依し、禮敬し奉る。覺の至極に到達せるものこれを佛と申し奉る。僧寶と法寶と佛寶との三は卽ちこれ一心の上の三義に外ならぬものである。

斯義難知斷臂接足此言幽閑非師何證

【讀方】斯の義知り難し。臂を斷ち、足を接す。此の言幽閑なり。師に非ずんば何かんが證せん。

【字釋】○斯義……上の三寶の義を指す。○斷臂接足……達摩の弟子の慧可禪師の故事を指す。卽ち慧可禪師達磨大師に遇つて法を求めしに許されず。雪中に立つて臂を斷ち以て師の前に至りて篤信を表す。達磨卽ちその機根なるを認めて法を許す。○幽閑……おくぶかきこと。

【拿意】一體三寶の甚深なる義を述ぶ。

【講義】かくの如き三寶の義理は伸々窺ひ知り難きものである。かの慧可が求法の爲めに臂を斷ち切つて以て師に接足禮敬して己が信心を表し、以て初めて師の印可を得て三寶を己が身の上に體驗せしといふが、この言は誠に幽深にして味ふべき言である。ともあれ三寶を證驗せんが爲めには師匠に依らずしては不可能のことであり、師なきときは何として證得することが出來ようや。

故能訪朋百城勇銳之心彌勵哭慧一市渴法之意常新開喩之功至矣哉入證之德何報之

【讀方】故に能く朋を百城に訪うて勇銳の心彌勵し、慧を一市に哭して渴法の意常に新なり。開喩の功至れるかな。入證の德何かんが報せん。

【字釋】○朋……師を意味す。○訪朋百城……『華嚴經』第八十入法界品に於ける、善財童子が善知識卽ち師を求めて一百一十餘城を歷訪せし故事を指す。○哭慧一市……常啼菩薩が般若波羅蜜多を求めんが爲めに身命を惜まず、珍財を顧ず、名譽をもとめず、ひたすら一城中に於て己が身を賣らんとし、然も賣ふ人なくして涕泣せしといふ故事を指す。○開喩……開示曉喩で、師が弟子を敎導すること。○入證……弟子が師の敎導によりて悟入證得せしこと。

【拿意】故事を引きて師の恩德を讃嘆し給ふ。

【講義】師あつて初めて證得するに至るものであるが故にかの善財童子は名師を求めて百十餘城を歷訪し、歷訪するに從つて益々その求法の志を勵まし振ひおこし、またかの常啼菩薩が般若波羅蜜多の法を求めんが爲めに身命を投げ捨て、己が身を賣り、身賣れざるを泣き悲しめりと稱せられる程に法を求め、慧を磨くに切實にして、恰も法に渴してゐるかの如くに切實に求むる心、その心日日益々新に起し、かくて初めて法を體得することが出來るのである。然もその證得に至るには自らが自らの菩提心を振起さすこともさり乍ら、何と云つても師の敎導の功がなければならぬ。師の開喩の功や誠に至大なりといふべし。また弟子が悟入證得するに至つたのはこれ偏へに師の恩德によるものである。その師の恩德に對して如何にして報ゆれば良いのであらう。

伏惟我先師大德几前惟珠分色霜鐘傳聲

【讀方】伏して惟れば我が先師大德几前、惟れ珠色を分ち、霜鐘聲を傳ふ。

【字釋】○珠分色……明珠が物に遇へば、物の色に從つてそれ〴〵異つた色を寫すが如く、今先師は機に從つて法を說き、物に應じて利益をなすに喩ふ。○霜鐘傳聲……『山海經』第五によれば、豐山に鐘の九耳なるものあり、霜降るときは自ら鳴ると稱せらる。その如く先師は問ひ尋ねなくとも相手を察して敎へ導き給ふの義。傳聲は敎へ導くこと。

【拿意】先師の化他の德を讃ふ。

【講義】伏して惟れば我が先師大德に於かせられては、恰も明珠が物に應じて色を寫し宿すが如くに機に應じ、物に應じて法を說き以て人々を利益し給ひ、またかの豐山の九耳の鐘が霜の降るに際して自然に鳴るといふが、先師もその如くに自ら進んで相手の機を察して種々懇切に敎へ導き給ふのが常であられたのである。

混物我之多譏證自他之不二

【讀方】物我の譏ひ多きを混じて自他の不二を證す。

字訓 ○物我……我他彼此の義。
拿意 先師の自證の境地を明す。
講義 先師は既に我他彼此の差別を離れて自他平等不二の道理を證得し給ふてゐられたのである。

衣愛百衲日貴一食

讀方 衣は百衲を愛し、日に一食を貴ぶ。

字訓 ○百衲……百には意味なく、單に衲衣の義、即ち衣を指す。○一食……『摩訶僧祇律』第十七に曰く「如來一食を以ての故に身體輕便なり、安樂住を得。汝等比丘も亦一食すべし」と。
拿意 先師の日常生活を記す。
講義 先師は常に衣を愛し經つて修行三昧に耽り。また一食主義を貴ばれてそれを實踐してゐられた。

中觀瑩心百非不住心虛外書閒閱八不常繫念劍

讀方 中觀心を瑩き、百非心虛に住らず、外書閒閱て八不常に念劍に繫けたり。

字訓 ○中觀……『中論』に說かれたる中道正觀を指す。○百非……百非洞徹で否定道の至極の妙理をいふ。○念劍……八迷の戲論を斷ずる劍、故に念劍といふ。
拿意 先師の觀相を明す。
講義 先師は常に中道正觀に耽つて以て心を瑩き、また百非洞徹の否定觀を以て凡ての差別的情執を打破し、以て虛空の如き一心の體性を體得し乍らも然もその境地に滿足せずして、更に餘暇を見ては佛書以外の書を閱讀して知識の深廣を求め、更に進んで常に八不正觀に心をかけ、八迷の戲論を斷除すべく念劍を研磨せしめ給ふてゐられた。

三空蕩三有之雲一實灑一心之雨

讀方 三空に三有の雲を蕩かし、一實に一心の雨を灑ぐ。

字訓 ○三空……空、空空、大空をいふ。○三有……三界のこと。○一實……一實中道實相の妙理をいふ。○灑一心之雨……一心に體得せし所の一實中道實相の妙理の功德を衆生に平等にそゝぎ蒙らすの意。
拿意 自證化他の德を嘆ず。
講義 三空の妙理に徹して三界の迷雲を蕩除して無上菩提を證し給ひ、一實中道實相の妙理を已が一心の上に體驗し、その體驗せし所の一實中道實相の妙理の功德を一切衆生に平等にそゝぎ蒙らしめ給ふてゐられた大德であつた。

所冀導我於芥石之劫喻我乎塵墨之年豈圖薪盡無緣燈滅有爲

讀方 冀ふ所は我を芥石の劫に導き、我を塵墨の年に喩さんことを。豈に圖りきや。薪無緣に盡き、燈有爲に滅えんとは。

字訓 ○我……壽勢自らを指す。○芥石之劫……芥子劫、磐石劫のことで共に長年月をいふ。○塵墨……三千世界の地を墨となし、微塵ほどの大さの點を畫き乍らその墨を盡すを一劫とすと。されば長年月をいふ。○無緣……無緣の衆生。○有爲……此の世界を云ふ。
拿意 先師の遷化を明し給ふ。
講義 壽勢先師に對して冀ひしことは、我れを敎へ諭したまはんこと芥石劫の如く長からんことを、また塵墨の如く長からんことをであつた。然るに豈はからんや、能化の薪を無緣の衆生濟度に盡し、能化の燈を此の有爲界に於て消滅し、入寂し給ふとは。

寒暑數變提撕在耳星霜已久慈顏目前

讀方 寒暑數變じて提撕耳に在り。星霜已に久しうして慈顏目の前なり。

字訓 ○寒暑等……寒さも暑さも年に一度なれば、數變とは數年經過するをいふ。○提撕……後進を指導すること。
拿意 大德の生前を偲ぶ。
講義 先師大德遷化し給ふて以來寒暑節を改め、數年を經過すれども生前我を敎へ導き給ひし敎訓今なほ我が耳に殘り、また星霜移り變つて年月を經ること久しけれども慈顏今なほ我が目の前に在せられる程に我が心底に殘つてゐるのである。

几杖塵兮暗色松栢吟兮悲聲

讀方 几杖塵れて暗色あり、松栢吟じて悲聲あり。

字訓 ○几杖……机と錫杖。○塵……塵埃にけがされてゐること。○松栢……墓地に植ゑられたる松や栢。
拿意 遺物に托して悲哀の義を述ぶ。
講義 大德在世の砌りは對面して敎訓を承りしに今はたゞ空しく机や杖などの遺品が塵にまみれて暗色を呈してゐるのを見受けるのもいと哀れであり、また墓所に植ゑし松栢も年ふりて大きくなり、風の吹く度に音を立てゐるが、その音も何んだか悲しみに滿ちた聲の樣に聞ゆ。

欲報德海未飽胸臆謹捧秔粒貳仟伍佰勝奉入先師忌日料

讀方 德海を報せんと欲するに未だ胸臆に飽かず。謹んで秔粒貳仟伍佰勝を捧げて先師の忌日料に奉入す。

字訓 ○秔粒……米のこと。○貳仟伍佰勝……勝は升。されば二十五斛のこと。
拿意 奉入の料物を明す。
講義 先師大德の廣大なる御恩德に報ひ奉らんと欲してゐたのであつたけれども、未だその機運に到らず心飽き足らざりし有り樣であつた。此處に於て謹んで米二十五石捧げ奉つて、先師の忌日の供養料として奉入する次第である。

伏願藉斯良緣奉答萬一

讀方 伏して願くは斯の良緣に藉つて萬が一を奉答せん。

字訓 ○萬一……師德の萬分の一をいふ。
拿意 報恩の意を明す。
講義 伏して願くはこの善業の良緣によりて尊靈を翊け奉り、以て恩德の萬分が一にても報答し奉らんことを。

百億能仁授手乘華之遊一大淨滿摩頂無生之樂

讀方 百億の能仁は手を乘華の遊に授け、一大の淨滿は頂を無生の樂みに摩でたまへ。

字訓 ○百億能仁……能仁は釋尊のこと、されば變化身の釋迦をいふ。『梵網經』に曰く、「我れ今盧舍那方に蓮華臺に坐す。周匝せる千華の上に復千の釋迦を現ず。一華は百億國、一國に一釋迦あり。各菩提樹に坐して一時に佛道を成ぜり」と。○授手乘蓮等……救濟の手を授けて蓮華臺上に引誘したまへの義。○一大淨滿……一大法身盧遮那佛をいふ。淨滿とは盧遮那佛のこと。○無生之樂……無生法忍で涅槃の不生不滅の樂果をいふ。
拿意 增進菩提を祈り奉ることを明す。
講義 一華百億國に出現し給ふ處の百億の應化身の釋迦如來よ。慈悲の心を以て先師大德に救濟の手を授けて蓮華臺上の佛果に引誘したまへ、また一大法身盧遮那佛よ、哀愍を垂れ給ふて我が先師の聖靈の頂を摩で以て無生法忍の不生不滅の涅槃寂靜の境界に引誘したまはらんことを。

滅戲論於空空證寂靜乎如如

讀方 戲論を空空に滅し、寂靜を如如に證せん。

字訓 ○戲論……惑業を指す。○寂靜……涅槃をいふ。
拿意 得證の相を明す。
講義 かく佛の加被を蒙つて更に空空の理によりて惑業を斷滅し、如々の妙理

によりて寂靜涅槃を證得し給はんことを祈り奉る。

北極垂拱南風解慍

【讀方】北極垂拱して南風慍を解かん。

【字訓】○北極……天子を指し奉る。○垂拱……無爲にして天下よく治まるをいふ。○南風解慍……南風吹き五風十雨時ありて五穀豊饒なれば民は不作の慍りを解いて喜び歌ふ義。

【拳意】天子の御德を嘆じ奉る。

【講義】更にまた天の萬星が北極星に向ひ集る如く、萬民天子の御高德に歸服し奉り、無爲垂拱にして天下泰平によく治り、五風十雨時に從ひ、氣候和順に、五穀豊饒にして無事太平にして安樂たらんことを祈り奉る。

關雎鵲鳩鳳樓虎爪。竭力蕩蕩之化。蒙潤巍巍之風

【讀方】關雎鵲鳩鳳樓虎爪、力を蕩蕩の化に竭し、潤ひを巍巍の風に蒙らん。

【字訓】○關雎……毛詩の篇の名。また后妃の德を稱し奉る。されば后妃を指し奉る。○鵲鳩……夫人の德をいふ。○鳳樓……太子の御殿を指し奉る。○虎爪……鋭猛なる虎の爪を具ふるもので武官をいふ。○蕩蕩……廣遠なること。○巍巍……大なること。

【拳意】天子の德化を譽ることを明し給ふ。

【講義】后妃、皇太子、重臣を始め奉り、益々皆等しく力を蕩蕩と遠く廣大なる陛下の御化育に竭し添へ奉り、巍々として高大なる御恩德を此の上とも益々皆等しく蒙らしむるに至らんことを祈り奉る。

上絡有頂。下籠無間。同斷三障。齊入一道

【讀方】上有頂を絡ひ、下無間を籠めて同じく三障を斷じて、齊しく一道に入らしめん。

【字訓】○有頂……有頂天。○無間……無間地獄。○三障……煩惱障・業障・報障。○一道……三論に說く處の無所得の空理を指す。

【拳意】結言として一切平等利益を明す。

【講義】更に此の功德を以て上は有頂天より下は地獄に至るまでの一切の有情に蒙らしめ、彼れ等をして三障を斷除し、速に齊しく無所得の空理を体解して、涅槃を得證せんことを祈り奉る。

五八　和氣夫人於法華寺奉入千燈料願文

和氣夫人於法華寺奉入千燈料願文一首

【讀方】和氣の夫人法華寺に於て千燈料を奉入する願文一首

【拳意】初に題名を揭ぐ。

【講義】和氣の夫人南都法華寺に於て千燈會の供養料を奉入するに際しての願文一首。

思惟寶珠在礫不瑩則無雨寶之功。智鏡處心無緣則闕利物之力

【讀方】思惟れば寶珠礫に在れども瑩かざれば則ち雨寶の功無し。智鏡心に處すれども緣無きときは則ち利物の力を闕く。

【字訓】○思惟……發端の語。發端の語に多數ある中、今思惟の語を用ひしは、如意寶珠を思惟珠とも稱するにより、それに因んで用ひしなり。○礫……ただアラガネ、卽ち銅鐵等の未だ石と混じたるもの。このことにつき『大疏』第二に曰く「猶し如意寶あつて石礫の中に在り、衢路之間に棄て瓦礫と異なること無し。然れども寶を別まふる者すなはち之を識つて先づ利鐵を用ひて鈍石を鐫り去け、また諸の藥を以て之を食ふに礦穢をして消化せしめ、洗ふに灰水を以てし、磨くに浮疊を以てす。既に光顯なることを得つれば之を高幢に置く、能く一切の所具に隨つて普く衆物を雨すが如し」と。○智鏡……心智の鏡のこと。○無緣……修行の緣なきときはの意。○利物之力……衆生を利益する力。

【拳意】修行の存する所以を嘆ず。

【講義】思ふに寶珠未だ礦石中にある間は寶珠としての價値を發揮することは出來ぬものである。それが寶珠としての價値を發揮する爲めには精錬し、磨琢しなければならぬ。かくて初めて寶珠としての價値力用を發揮して寶を雨らすことを得るに至るのである如く、人の心智の鏡も、それが心中に潛んでゐたのでは、即ち修行の敎緣なきときは一切衆生を救濟し、利益するだけの力を發揮することは出來ないのである。

故能磷石長時積六度之行。耗芥永歲蘊萬行之因

【讀方】故に能く石を長時に磷げて六度の行を積み、芥を永歲に耗いで萬行の因を蘊む。

【字訓】○磷石……磐石劫を指す。○六度……檀、戒、忍、進、禪、慧の六度。○耗芥……芥子劫を費す。○蘊……積むこと。

【拳意】修行の相を明す。

【講義】かゝる理由あるが故に磐石劫の長時日を費して六度の行を行じ、その功德を積み、また芥子劫といふ永遠的の年月を費して萬行を修し、以て萬行の功德を積んで菩提を得證せんとするのである。

覺山妙果不可不仰。德海善因誰能不修

【讀方】覺山の妙果は仰がずんばあるべからず。德海の善因誰れか能く修せざらん。

【字訓】○覺山……無量劫に萬行の功德を積み重ねたのが覺りである。故に覺山といふ。○德海……功德の海をいふ。

【拳意】正覺の妙果を嘆ず。

【講義】かく樣に無量劫の修行に於て萬德を積み重ねし覺山なれば誠にその德高大なるが故に人皆此の覺山を讃仰しなければならぬ。かく樣に海の如く廣大なる善因功德をば誰れが修し得よう。仲々修し難きものである。

故姉法諱昔遊法華寺。儻覩千燈會。感喜深心思。添涓滴。歸眞之暮追遂宿願。謹以私墾田奉添法華寺千燈會（田數幷國郡條里在別）

【讀方】故の姉、法の諱、昔法華寺に遊んで儻千燈會を覩る。感喜心に深うして涓滴を添へんことを思ふ。眞に歸せしの暮、追つて宿願を遂ぐ。謹んで私の墾田を以て法華寺の千燈會に添へ奉る。（田數幷に國郡條里別に在り）

【字訓】○涓滴……少しばかりの物。今は些少の燈明料を指す。○歸眞之暮……歸眞は眞如に歸すで死滅の義。即ち死後をいふ。○墾田……田地をひらくことであるが今は單に田地をいふ。○條里……區劃のこと。

【拳意】奉入の所以と正しく奉入とを明す。

【講義】故の姉、法の諱、昔法華寺に參詣せしときたまゝ千燈會の法要に遇ひ、それを見て心に深く感激し寡んで、涓滴の燈明料を寄附せんと思はれたのであつた。併し乍らそれが死後に至りてやつと宿願を果すに至つた。即ち謹んで私の墾田を以て法華寺の千燈會の燈明料として寄附し奉る。（田の數幷に所在の國郡の名及び區劃のことは別紙にあり）

伏願智燈代日融山之容圓現。長夜褰雲黑暗之心忽銷

【讀方】伏して願くは智燈日に代つて融山の容圓かに現じ、長夜に雲を褰げて黑暗の心忽ちに銷えん。

【字訓】○融山……佛のこと。○長夜……生死の迷の長夜。○黑暗……無明煩惱。

【拳意】願意を明す。

【講義】伏して願くは智の燈明、太陽の如くに赫々と輝いて融山たる佛の容を照し出し、以て其の佛身を圓滿に具現し、迷の長夜の雲を除き拂ひ、無明煩惱

の黑暗の心を消滅せしめて、速に菩提を證せんことを。

普照法界朗五眼於自他廣被幽明證六通乎物我

【訓方】普く法界を照して五眼を自他に朗にし、廣く幽明に被らしめて六通を物我に證せしめん。

【字訓】○五眼……肉眼、天眼、法眼、慧眼、佛眼。○幽明……冥土と現世。○六通……神境通、天眼通、天耳通、宿住通、他心通、漏盡通。○物我……他と自。

【章意】結言として一切平等利益の義を述ぶ。

【講義】千燈會の功德の光、普く一切の法界を照し、自他一切の有情をして五眼を顯證せしめ、更に廣く冥土及び現在の一切のものに及ぼし、自他一切のものをして六通を證得せしめて、速に涅槃に趣かしめんことを祈り奉る。

五九　爲前清丹州亡妻達嚫

爲前清丹州亡妻達嚫一首

【訓方】前の清丹州の亡妻の爲の達嚫一首。

【字訓】○清……清原氏。○丹州……丹波守。

【章意】初に題名を掲ぐ。

【講義】前の清原氏丹波の守の亡妻の菩提を弔はんが爲めの達嚫一首。

染淨狂風鼓識浪而洶湧。業力妄霧翳心月而朦朧

【訓方】染淨の狂風は識浪を鼓して洶湧し、業力の妄霧は心月を翳して以て朦朧たり。

【字訓】○染淨……染は無明、淨は本覺。『釋論』第三に曰く「云何んが名づけて染淨本覺とする。自性淨心無明の熏を受けて生死に流轉して斷絶なきが故に」と。○洶湧……水のわきおこるさま。○朦朧……おぼろなるさま。

【章意】生死流轉の始りを明す。

【講義】本覺が無明煩惱の狂風の爲めに熏習され、そこに六七二識の妄識が鼓動し來りて妄執差別の諸法が洶湧として盛にわき起り、かくて益々惡業力の迷霧が心月を覆ひ隱して朦朧たらしめ、本覺は分明を缺き黑暗に包まれてしまふに至る。

十二之緣輪轉不絶。三有之業鉤鎖無斷

【訓方】十二の緣輪轉じて絶えず。三有の業鉤鎖して斷ゆることなし。

【字訓】○十二因緣……無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死。○三有……三界。○鉤鎖……連續の義。

【章意】生死流轉の相を明す。

【講義】かくて十二の因緣は輪の如くめぐりめぐつて盡きることなく、また三界に於て作りし處の惡業互に因となり果となりて鉤鎖の如くに連續して斷ゆることなく、永遠に三界に流轉してゐるのである。

四生於是蕃滋。八苦因之鬱茂

【訓方】四生是に於て蕃滋し、八苦之に因て鬱茂せり。

【字訓】○四生……胎、卵、濕、化。○蕃滋……しげること。○八苦……生、老、病、死、愛別離、怨憎會、求不得、五陰盛。○鬱茂……あを〳〵としげること。

【章意】流轉の盛なる有り樣を記す。

【講義】か樣に惡業を作りて三界六道に輪廻して斷ゆることなきが故に、益々惡業を作るに至り、四生は愈々盛んに增殖し、その結果としてまた他面には四苦八苦等の苦惱が滿ち滿ちて鬱勃たる有り樣となる。

生死之海浩浩易沈。涅槃之岸巍巍難登

【訓方】生死の海浩浩として沈み易く、涅槃の岸巍巍として登り難し。

【字訓】○浩浩……水の盛大なるさま。○巍巍……高大なるさま。

【章意】惡業は作り易く、涅槃は證し難き義を明す。

【講義】生死の海は浩浩として廣大にして際涯なく、誠に沈み易きものであり、涅槃の岸は巍々として高大なるが故に仲々登り難きものである。

伏惟故王氏。柔氣陶身。巛爻冶性。德言不虧於內。容功圓備乎外。嫁人能禮。母人能訓

【訓方】伏して惟れば故の王氏、柔氣身を陶き、巛爻性を冶く。德言內に虧けず、容功圓かに外に備へたり。人に嫁して能く禮あり、人に母として能く訓ふ。

【字訓】○柔氣……柔和心。○巛爻……巛は坤の古文。坤は地、爻は卦、周易に坤爻は女の卦にあつ。地能く萬物を生ずるが故に女の德に准ず。今は柔順なる婦德をいふ。○德言……『周禮』に云ふ所の四德の中の婦德、婦言をいふ。○容功……『周禮』に云ふ所の四德の中の婦容、婦功をいふ。猶婦人の四德の中、婦德とは婦人の修むべき德、婦言は婦人の言葉づかひ、婦容は婦人の身づくろひ、婦功は婦人の仕事、女子のてわざをいふ。

【章意】夫人の在世の時の德を嘆ず。

【講義】伏して惟れば故の王氏は柔和の心を以て己が身を陶き給ひ、また婦德たる柔順の心を以て己が性を冶かれ、婦德婦言內に具はりて虧けず、婦容婦功よく洗練され、熟達し給ひ、嫁してよく禮節を盡し、また母となりてよく子供を訓育し給へる賢夫人であられたのである。

誰圖降年不遠片鳧忽飛。稟氣不長隻鰈乍沈

【訓方】誰か圖らん、降年遠からずして片鳧忽ちに飛び、稟氣長からずして隻鰈乍ちに沈まんとは。

【字訓】○降年……天から受けた命。○片鳧忽飛……二人あるものが一人になること。李陵が蘇武に送る詩に於ける故事を指す。彼の詩に曰く「双鳧俱に北に飛び、一鳧獨り南に翔る」と。○稟氣……天から受けし氣質。○隻鰈……鰈は二匹ならばざれば行かずとの故事を指す。卽ち二匹の中一匹缺げて一匹となりし意を表す。

【章意】逝去の義を明す。

【講義】斯の如き立派な夫人が、天命つたなくして夫婦の中の一人を殘して早く世を去り、また短命にしてたゞ一人早く逝去し給ふとは誰れか圖り知らうや。

甘井竭兮直木折。苦雲慘兮松風悲

【訓方】甘井竭きて直木折れ、苦雲慘んで松風悲しむ。

【字訓】○甘井……母の乳水に喩ふ。○直木……正直なる木、卽ち善人に比す。○苦雲等……悲哀の義を示す。

【章意】減後の悲哀を記す。

【講義】慈母に早逝せられし爲め、子にとりては恰も、甘味なる泉にも喩ふべき乳水の枯竭に逢ひ、また直木にも比すべき善良なる夫人に先き立たれて、家族一同は空の雲を見るも苦しき悲しさを覺え、松吹く風も何んだか悲哀に滿たされてゐる樣に感じ、何を見るにつけても悲しさが先き立つ有り樣である。

逝水不休尼父談。生者必滅我師說

【訓方】逝水休まざるは尼父の談、生者必滅は我が師の說なり。

【字訓】逝水……『論語』に曰く「子川の上りに在して曰く、逝く者は斯の如し。夫れ晝夜を捨まず。」と。○尼父……孔子を指す。○我師……釋迦牟尼佛を指す。

【會意】無常なる義を明す。

【語義】一 孔子は凡そ死滅するものは晝夜をわかたず、一舜も休むことなしに轉變すること恰も水の流れ去るが如くであると說き、また釋尊は生者必滅こそ宇宙の眞理なりと、世の無常、有爲轉變の道理を强調してゐられるのである。

故經云。諸行無常云云 若有男女一聞此偈。能滅罪業。早登善果。雪童投身月光燈體。良有以也

【法文】故に經に云く。諸行無常云云。若し男女有つて一びこの偈を聞けば能く罪業を滅して、早く善果に登る。雪童身を投げ、月光體を燈す。良に以有るかな。

【字訓】○經云等……經とは『涅槃經』を指し、『涅槃經』に說かれたる四句の偈の因緣とその功德とを明せしもの。即ち『涅槃經』北本第十四聖行品に曰く「過去の世に佛日未だ出でず。我れ爾の時に於て婆羅門と作つて菩薩の行を修す。周遍して大乘の經典を求索しき。我れ爾の時に於て雪山に住す。無量歲を經れども亦如來出世し、大乘の經の名あることを聞かず。爾の時に釋提桓因自ら其の身を變じて羅刹の像と作る。形甚だ怖畏すべし。遠からずして便ち過去の佛の所說の半偈を宣ぶ。諸行無常、是生滅法と。是の半偈を聞て心歡喜を生ず。卽ち坐より起つて手を以て髮を擧げて四向に顧視て是の言を說く、さきに聞く所の偈は誰れが說く所ぞ。すなはち前んで是の羅刹の所に至て是の如くの言を作さく、汝何れの處に於て過去の離怖畏者の所說の半偈を得るや。即ち我れに答へて言く、今問ふべからず。我れ食せざるよりこのかた已に多日を經。飢渴苦惱心亂顚語して我が本心の所知に非ず。我れ卽ち問て言く、汝食する所の者は是れ何物とか爲。羅刹答へて言く、我が食する所は唯人の噉肉のみ。自ら我れ薄福にして唯此の食を食す。人皆福德あり、兼ねて諸天の爲に守護せらる。而も我れ力なく殺すことを得る能はず。我れ復語て言く、汝たゞ具足して是の半偈を說くべし。當に此の身を以て奉施すべし。羅刹復言く、汝能く身を捨てば當に汝が爲に其の餘の半偈を說く、我が心中に歡喜して卽ち己身に著る所の鹿皮を解いて法座を敷置し、叉手長跪して是の言を作く。唯願くは和尙善く我が爲に其の餘の半偈を說きたまへと。羅刹卽ち生滅滅已、寂滅爲樂と說く、我れ此の義を思て然して後處々に此の偈を書寫して卽ち高樹に上つて尋ねて卽ち身を放つ、未だ地に至らざる時に羅刹還つて釋身に復す。卽ち空中に於て接取して平地に安置す。是の因緣を以て便ち超越して十二劫を足して彌勒の前に在つて阿耨多羅三藐三菩提を得たり」と。○月光燈體……『法苑珠林』卷第九十六によれば、月光菩薩の捨身と、喜見菩薩の燒身供養とを揭ぐ。されば月光は月光菩薩の捨身供養を指し、燈體は喜見菩薩その他多くの燒身供養を指す。

【會意】無常を說ける經文を明して其の理を述ぶ。

【語義】此の故にかの『涅槃經』には諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂の四句の偈を說いて無常の理りを明し、そして若し善男善女あつて此の四句の偈を聞き、その四句の偈の眞意義を体得したならば、旣に造りし所の惡業も直ちに斷滅し、直ちに無爲安樂なる佛果に登り至ることが出來るのである。そこで無常なる生身を捨てゝ安樂無爲の佛果を求めんが爲めに、雪童は身を樹上より投じ、月光菩薩は捨身供養し、喜見菩薩は燒身供養するに至つたのであるがそれらの捨身供養、燒身供養するに至りたることは良に深き理りのあることである。

伏願以此法力開悟先靈。妙偈加持早證知見之源。沒馱護念速遊本覺之殿

【法文】伏して願くは此の法力を以て先靈を開悟し、妙偈加持して早く知見の源を證し、沒馱護念して速かに本覺の殿に遊ばん。

【語義】○法力……修する所の法事の功德力のこと。○妙偈……所讚の涅槃經の四句の偈を指す。○加持……四句の偈の功德が聖靈に加被し護持すること。○知見……佛知見のこと。○沒馱……佛陀に同じ、覺者と譯す。佛のこと。

【會意】正しく聖靈の得脫を祈る。

【語義】伏して願くは此の修する所の法事の功德力を以て先靈を開悟せしめ給はんことを、また讚ずる所の四句の妙偈の神力よく先靈を加被し護持して早く佛知見の源底を證悟し、佛の護念によりて速かに本來圓滿せる阿字覺体の心殿に優遊し給はんことを。

有情業壽是日永斷。菩提智牙斯辰彌布

【法文】有情の業壽是の日永く斷ち、菩提の智牙斯の辰彌布せん。

【字訓】○業壽……前世の業因に依て受けし壽命で、三界六道に流轉する生命。○牙……牙は芽に同じ。

【會意】結言として總願を明す。

【語義】更に餘力を以て一切有情に廻らし、一切有情をして皆等しく宿世からの業壽を今日限り斷ち切り、菩提の智芽を發芽せしめ、以て菩提を證せしめんことを祈り奉る。

六〇 於平城東大寺供三寶願文

於平城東大寺供三寶願文一首

【法文】平城の東大寺に於て三寶を供する願文一首。

【字訓】○平城……南都、卽ち奈良をいふ。○三寶……佛、法、僧。

【會意】初に題名を揭ぐ。

【語義】高祖大師が南都東大寺に於て佛、法、僧の三寶に供養するに際しての願文一首。

弟子苾芻空海等歸命三寶。法身在何不遠。卽身。智體云何我心甚近

【法文】弟子苾芻空海等三寶に歸命したてまつる。法身何くにか在る、遠からずして卽ち身なり。智體云何ん、我が心にして甚だ近し。

【字訓】○空海等……高祖大師が主となり、その他多くの僧が集りて此の供養會を催す、よりて空海等といふ。○法身……佛寶に當る。○智體……法寶に當る。○身・心……共に僧寶に當る。

【會意】凡聖不二、凡身卽佛の旨を明す。

【語義】佛弟子沙門空海等三寶に歸命したてまつる。思ふに胎藏理法身たるものは何れにおはしますや、これ遠く隔てゝ他にあるものではない。卽ちそれは我々の一身を離れて存するものではなく、我々の色身卽ち胎藏理法身そのものである。また金剛界智法身の法體たるものも亦これ他にあるものにあらずして卽ち我々の一心を離れず、我々の一心卽ち金剛界智法身の法體たるが故に尤も近き所におはしますのである。

本來無去鎭住滿月之宮。如今不生常恒赫日之臺

【法文】本より來た無去にして鎭へに滿月の宮に住し、如今不生にして赫日の臺に常恒なり。

【字訓】○滿月……心月に喩ふ。○赫日……慧日に喩ふ。

【會意】法身の智体と境界とを明す。

【語義】更にその法身の智体たるものは本來法爾としての存在なれば滅することなくして永遠に胎藏理法身の宮殿たる心月圓明の宮殿に住し給ひ、また理法身の法体たるものも法爾本來の存在なればいつ生じたといふこともなくして三世常恒に變りなく、金剛界智法身の高殿に住し乍ら赫々と輝いてゐるのである。

攝下之迹不息。自用之歡何窮矣

【法文】攝下の迹息まず、自用の歡び何んが窮まらん。

【字訓】○攝下之迹……理智二法身が自證の本源の位より迹を垂れ、下界に降りて一切衆生を濟度すること。○自用之歡……理智二法身が自證の位に於て唯佛與佛三三平等の法門を說きその法樂を得ること窮りなきをいふ。

【會意】自證化他の二德を明す。

【講義】兩部理智二法身が自證の本源の位より迷を垂れ、下界に降りて一切衆生を濟度し給ふに休息なく、常恒不斷になし給ふて居り、またその理智二法身が自證の位に於て唯佛與佛三三平等の法門を自由自在に說きてその法樂を得させ給ふこと窮りなく、際限なき有り樣であらせらる。

空海等念雲蔽兎業霧籠烏。久迷方於還源。長醉境乎歸舍。

【講方】空海等、念雲兎を蔽し、業霧烏を籠む。久しく方に還源に迷つて、長く境に歸舍に醉へり。

【字釋】○念雲……無明のこと。○兎……上の滿月を指す。○烏……上の赫日を指す。○迷方……向ふ所に惑ふこと。

【拳意】一心の本源に歸入するに迷ひしことを明し給ふ。

【講義】空海等無明妄執のために一心所具の胎藏理法身の法體を覆蔽され、また惡作業の霧、卽ち無明の妄三業のために本來法爾として所具せる金剛界智法身の法體を覆ひこまれしために向ふ所の一心本源の法身の道に迷つて本源の源に歸へることを忘れ、自身の本宅を忘れて長く三界の火宅に迷ひ醉へり。

幸因外警之緣內薰之力。覺狂想。尙聖智。

【講方】幸に外警の緣、內薰の力に因つて狂想を覺り、聖智を尙ふ。

【字釋】○外警……佛祖其の他の敎誘を指す。○內緣……心內所具の淨菩提心が薰發すること。○狂想……眞理を眞理とせず、非眞理を眞理と思ふことで妄分別のこと。

【拳意】敎緣によつて妄境を悟り給ひしことを明す。

【講義】幸にも佛祖其の他の善き敎誘を蒙り、また他面心內の淨菩提心薰發する等のことによりて無明妄想によれる妄分別の誤りなることを覺り、それより ひたすら正しき佛智をこひねがふ樣になつたのである。

謹設麤飯。供獻三寶。

【講方】謹んで麤飯を設け、三寶に供獻す。

【拳意】供養の相を明す。

【講義】謹んで麤末なる供物を辦備して三寶に供獻し奉る。

伏願大慈不捨納受惟馨。

【講方】伏して願くは大慈捨てずして惟れ馨しきことを納受したまへ。

【字釋】○惟馨……『尙書』に「黍稷馨しきにあらず、明德惟れ馨し」と。されば今は至心をいふ。

【拳意】正しく願意を述べ給ふ。

【講義】伏して願くは佛よく大慈大悲の心を垂れ給ふて此の供養物を捨て去ることなくして受け取り給へ、どうか我が至心に供養する心の香しさを納受したまはらんことを。

大小添功尊卑効力。同褰積霧。朗見曼荼。謹疏。天長元年三月二日空海疏

【講方】大小功を添へ、尊卑力を効すもの同じく積霧を褰げて朗らかに曼荼を見ん。謹んで疏す。天長元年三月二日空海疏す。

【字釋】○大小……多少のこと。○積霧……積重せし惡業のこと。○曼荼……兩部理智の曼荼羅境界を指す。○疏……陳述すること。

【拳意】結言として廻向の旨を述べ幷に年月日を記す。

【講義】多少に拘らず功を添へ供養し奉るもの、また供物を捧ぐる賤きものも卑しきものも皆同じく積重せる惡業の霧を拂ひ除いて、兩部理智の曼荼羅境界を見悟し、得證せんことを祈り奉る。謹んで申し奉る。天長元年三月二日空海陳述し奉る。

六一　荒城大夫奉造幡上佛像願文

荒城大夫奉造幡上佛像願文一首

【講方】荒城の大夫幡の上の佛像を造り奉る願文一首。

【字釋】○荒城……姓。

【拳意】初に題名を揭ぐ。

【講義】荒城の大夫が幡の上の佛像を造り奉るに際しての願文一首。

瓊粮吐故。城邈射而盤桓。馭鵠策風。都大羅而跋扈。

【講方】瓊粮故きを吐いて邈射に城いて盤桓し、鵠に馭し、風に策つて大羅に都して跋扈す。

【字釋】○瓊粮……瓊は玉のこと。粮は食料のこと。卽ち仙人は玉を屑にして食すと。されば仙人の食料をいふ。○吐故……古き空氣を吐いて新しき空氣を吸ふこと。○邈射……邈姑射之山で仙人の住む山といはる。○盤桓……進みがたきさま。めぐりめぐること。○馭鵠……仙人が大鵬に乘つて天に昇りしといふ故事を指す。○大羅……大羅宮で仙人の居住する所。

【拳意】世仙の道を擧げて佛敎と對比する中、世仙の境界を明す。

【講義】かの仙人は常に玉を食物とし、古き空氣を吐きて新鮮な空氣を吸ひ、以て不老長壽の養生法に心がけて邈姑射の山に居住し、そこに盤桓として樂しみ住り、また大鵬に乘り、風よりも早く飛び廻り、以て大羅宮に居を構へて勇壯に樂住することがその理想である。

雖云希夷玄妙。忽恍冥然。猶蜃樓構宮。夢幻築室。

【講方】希夷玄妙にして忽恍冥然たりと云ふと雖も、然も猶蜃樓宮を構へ、夢幻室を築く。

【字釋】○希夷……道の本體の見聞に超越せること。○玄妙……深遠なること。○忽恍……ぼつとしてとりとめなきこと。○冥然……くらき貌。○蜃樓……蜃氣樓。

【拳意】世仙の道理を佛敎に對明してその淺劣なる義を述ぶ。

【講義】世仙が說く所の道の本體は甚深微妙忽恍冥然なりと稱すべきではあるけれども、併しそれを佛敎の敎理より眺むるならば、未だ蜃氣樓の如き無實の宮殿に住むに等しく、また夢幻の如き假空の居室に居るに等しく、無常轉變の域を脫するものにあらずといふべきである。

豈若性蓮大我遍太虛而無終。覺樹法皇入微塵以無始

【講方】豈に若かんや、性蓮の大我太虛に遍じて終り無く、覺樹の法皇微塵に入て以て始め無きには。

【字釋】○性蓮大我……胎藏理法身を指す。○太虛……大虛空十方法界をいふ。○無終……無終を言て無始を畧す。○覺樹法皇……金剛界智法身を指す。○微塵……微塵の刹土。○無始……無始を揭げて無終を畧す。

【拳意】眞言密敎の敎理が世仙に勝れてゐることを明す。

【講義】かく未だ無常の域を脫せざるが世仙の道理なれば、眞言密敎に於て胎藏理法身たる者は大虛空十方法界に遍じ、三世に亘つて無始無終、生滅なしとする敎理、また金剛界智法身たる者は微塵の刹土に遍入して無始無終なりと說く甚深の敎理に豈にどうしてや比較出來ようや、出來やしない。

三點凝心四量滿懷。利物之力春雨不喻。拔濟之力船筏無比者也

【講方】三點心に凝らし、四量懷に滿つ。利物の力、春の雨も喩にあらず、拔濟の力、船筏も比すること無し。

字訓 ○三點……悉曇の伊字の三點は不縱不横にして三角形なるが故に三法の不一不異又は非前非後等密接なる關係を示すに譬喩として用ふ。『涅槃經』二には法身、般若、解脫の三德に喩ふ。自宗では佛、菩、金の三部、大定、大智、大悲の三德等の義に用ふ。○四量……慈、悲、喜、捨の四無量心。

拳意 化他の德を明す。

講義 かの法身は三點に心を凝らし、四無量心を以て一切衆生濟度の念に滿ち給ふ。その衆生濟度の功力は春の雨が萬物を潤すそれ以上のものであり、またその救濟の功力は船筏が人をよく濟渡するが、その船筏の濟渡の功力などは到底比較にすらならぬ程に絶大の救濟力であらせ給ふ。

弟子等撫躬非聖尅己庸調

講方 弟子等躬を撫するに聖に非ず、己を尅するに庸調なり。

字訓 ○撫……顧み按ずること。○庸調……庸は凡庸、調は才。

拳意 我が身の聖者に非る義を明す。

講義 飜つて弟子等の身を顧み察し考ふるに、我れ等は元より聖人にあらず、また自分を尅したゞして見るに元より凡庸にして才智あるものに非ることはよく承知してゐるのである。

毎至蜉影碎籠烏光射隙歎昊天爰罔極悲苦海越無邊

講方 蜉影籠に碎け、烏光隙を射るに至る毎に、昊天の爰に罔極なることを歎き、苦海の越に無邊なることを悲しむ。

字訓 ○蜉影……蜉は蜉蝣で月中に住むといふ蝦蟇、轉じて月をいふ。影は月光のこと。○碎籠、射隙……共に光陰の過ぎ易きことを云ふ。○烏光……日光のこと。○昊天罔極……天の際限なきが如く、父母の恩惠の大なるを云ふ。○苦海……生死の苦海を云ふ。

拳意 父母の恩の廣大にして極り無きを明す。

講義 月光遠かに籠を照らし去り、日光隙行く駒の如くに過ぎ去るごとくに、

即ち日々夜々に、昊天の際限なきが如くに廣大なる父母の恩を蒙りしに對して報ひんと欲し乍らもそれを果す能はざることを歎き、また他面生死の苦海無邊にして竭き難きことを悲しむものである。

況復春蘂風飄秋葉雨散對之三省宣爾亡我

講方 況んや復、春の蘂風に飄り、秋の葉雨に散んず。之に對つて三び省みて宣爾として我を亡す。

字訓 ○三省……一日に幾度も我が身を反省すること。○宣爾……茫然たること。

拳意 飛花落葉を見て身の無常なるを悟りしことを明す。

講義 更にまた春の花一陣の風に散り去り、秋の木の葉雨滴に落さるゝ有り樣を見て、我が身もかく無常にあらざるやと一日に幾度も反省し、やがては我が身も無常の風にいざなはれて忽ちに死ぬべきものなることを知りて茫然自失我れを喪ふ有り樣である。

思欲捨此五主圓彼二利

講方 此の五主を捨てゝ彼の二利を圓にせんと思欲ふ。

字訓 ○五主……財寶のこと。即ち『便蒙』に『雜譬喩經』を引きて曰く、「人の重んずる所のものは身なり、命なり、財なり。此の三事皆惜しむに足らず。輕んずべからず。財惜しむに足らずとは、是れ五家の分なるを以てなり。盜賊、水、火、縣官、惡子の五家忽ちに至るときは一且に便ち盡く。故に惜しむに足らずと曰ふ。輕んずべからずとは此の良福田に遇つて持用して布施すれば後に法財を得」と。

拳意 財施の供養をなさんとする意圖を明す。

講義 此處に於て財寶を施捨し供養して、現當二世に於ける自利利他二利圓滿せしめんと欲する次第である。

敬以年月日造道場幡二十旒兼寶幡上奉圖十方佛菩薩神王等像六十軀微風一扇輪寶幾千香雲數薰

法身開發

講方 敬つて年月日を以て道場の幡二十旒を造り、兼ねて寶幡の上に十方の佛菩薩神王等の像六十軀を圖し奉る。微風一扇、輪寶幾千、香雲數薰じて法身開發す。

字訓 ○年月日……何年何月何日と書くべきなるも、今は草案なる故に畧し給ふ。○佛菩薩神王……四佛四菩薩天龍八部等をいふ。○一扇、幾千……一扇と幾千とは對句なり。○輪寶……轉輪王の寶位をいふ。○香雲……單に香のこと。○法身……五分法身のこと。

拳意 供養の相と、供養の功德とを明す。

講義 謹んで年月日に於て道場の幡二十旒を造り、かねて寶幡の上に十方の佛、菩薩、神王等の像六十軀を圖し奉る。その圖造し奉りし幢幡を佛餐せし場所に微風吹き來りて幢幡を扇動してゐるが、その幢幡の一轉の功德によりて轉輪王の寶位を獲得するに至ると稱せられてゐる。されば今施主もその功德を蒙ることであらうし、また香を薰ずるその功德によりて五分法身を開發し、佛果を体得するに至ることであらう。

伏願廻此芥福報彼鴻恩

講方 伏して願くは此の芥福を廻らして彼の鴻恩を報せん。

字訓 ○芥福……芥子粒程の小さき善根のこと。小福。○鴻恩……廣大なる父母の恩。

拳意 以下廻向の意を明す。その中今は父母の恩に報ず。

講義 伏して願くは修する所は些小の善根なるも、その小善根を廻らして父母の頓證菩提を祈り奉り以て、我が蒙りし父母の廣大なる御恩德に報ひんことを。

聖天天長后地地久春儲山海百工松竹

講方 聖天天長后地地久ならん。春儲山海のごとく、百工松竹のごとくならん。

字訓 ○天長、地久……天地の如くに長生久壽ならせ給ふを稱す。○春儲……皇太子の御こと。○山海……山や海の如くに壽長ならせ給ふをいふ。○百工……百官のこと。○松竹……松竹の如くに節操正しくして忠に勵むをいふ。

拳意 聖壽無窮、國體安穩を祈り奉る。

講義 聖壽天の如くに長く、地の如くに久しからんことを、また皇太子の御壽山海の如くに長壽にましまさんことを祈り奉り、惹いては文武百官松竹の如くに節操正しくして忠を勵み、いつまでも國家安穩に亘らせ給はんことを祈り奉る。

九世恃怙四生耶嬢三力加持六通先導早脫有結頓入無漏

講方 九世の恃怙、四生の耶嬢、三力加持し、六通先導して早く有結を脫かれ、頓に無漏に入らん。

字訓 ○九世……三世に各々三世を具する故に九世となる。○恃怙……恃は母の稱、怙は父の稱。○四生……胎、卵、濕、化の四生物。○耶嬢……父母のこと。○三力加持……我が功德力と如來の加持力と法界力との三力が加持感應し涉入相應するを云ふ。○六通……天眼、天耳、宿命、他心、神境、漏盡の六神通力をいふ。○有結……有漏で煩惱のこと。

拳意 一切有情の得脫を祈る。

講義 更に此の功德を廻らして九世の父母、四生の父母、即ち無始以來の一切の有情を加被し任持し、また六神通力を以てそれら一切有情の先導者となりて早く三界の煩惱より脫れしめ、無漏涅槃の境界に入らしめんことを。

弟子等識海浪靜念室暗消五眼蓮開三點月圓傍羅動物廣覆含靈同出有有之區早入如如之境

講方 弟子等識海浪靜かにして念室暗に消え、五眼蓮のごと

くに開け、三點月のごとくに圓かならん。傍ら動物を羅め、廣く含靈を覆ふて同じく有有の區を出で、早く如如の境に入らん。

字釈 ○識海……第八識海に喩ふ。○浪……煩惱に喩ふ。即ち六七二識の妄法の浪の義。○念室……衆生凡夫の心室の義で煩惱多き心をいふ。○五眼……肉眼、天眼、慧眼、法眼、佛眼。○三點……法身、般若、解脫。○動物……合識で一切有情のこと。○有有之區……三界有漏の凡夫の境界。○如如之境……如如平等の佛果の境界。

章意 自他法界平等の廻向の義を明す。

講義 次に更に願ふらくは、我れ等弟子どもの第八識の大海をして、妄法の浪より靜まらしめて澹然寂靜ならしめ、また我れ等の一心上に於ける暗昧の煩惱を消失せしめ、五眼具はり、未蓮華が開敷するが如くに開けしめ、かくて煩惱より解脫し、佛智を得て自性法身の位を證得して法身、般若、解脫の三德を滿月の如くに圓滿せしめたまはんことを。更に他面に於ては普ねく一切有情をして等しく三界の有漏の境界を解脫して如々平等の佛果の境界に悟入せしめんことを祈り奉る。

六二　爲知識華嚴會願文

爲知識華嚴會願文一首

讀方 知識の華嚴會の爲の願文一首。

字釈 ○知識……人を化導利益する有德の善親友をいふ。『便蒙』には願主の僧を知識と稱すと註せり。

章意 初に題名を揭ぐ。

講義 或る知識が華嚴經八十卷を書寫して此れを供養し、講讃するに當りての願文一首。

越有奇仁號之沒度身遍於塵刹心等乎大虛談吐不失軌儀思心無越規矩無越之範其極誰矣所謂大方廣佛華嚴經是也

讀方 越に奇仁有す。之を沒度と號く。身は塵刹に遍く、心は大虛に等し。談吐軌儀を失せず、思心規矩を越ゆることなし。無越の範其れ極れるは誰れぞ。所謂大方廣佛華嚴經是れなり。

字釈 ○奇仁……仁は人に通ず。奇特の人をいふ。○沒度……佛陀に同じ。○談吐……說法のこと。○軌儀……軌範儀則のこと。○規矩……法則のこと。○大方廣佛華嚴經……人法一體の旨趣から、法を擧げて人を示す。されば之れ大覺世尊釋迦如來を指す。

章意 釋迦如來の德を讃嘆し給ふ。

講義 こゝに奇特な大人ゐます。それを佛陀と稱し奉る。その身は十方世界に遍じ、その心は十方大虛空界の如くに廣大無邊にあらせらる。その說法は一言一句皆軌儀に契ひ、またその能化の思ひ心をそのまゝ實踐するに法則に違越することなき高德無上の世尊であらせらる。か樣に欲する所に從つて行ひ然もそれが自然に法則に契はせ給ふ。即ち無越の範の至極を示し給ふは人それは一体誰れであらせられるか、それは謂ゆる大方廣佛華嚴經の敎主たる大覺世尊釋迦如來その人であらせらる。

事理無碍一多相融

讀方 事理無碍にして一多相融す。

字釈 ○事理無碍……事とは因緣生の有爲法をいひ、理とは不生不滅の無爲法をいふ。無碍とはこの理と事とが相融通して碍げぬこと。即ち眞如の理より現はれたるが事（有爲法）なるが故に、事はこれ理、理はこれ事で、例へば水は即ち波であり、波は即ち水である如く、事も理も相融通無碍なるをいふ。これは華嚴の四法界の中の一を擧げて他の三を擧せしもの。○一多相融……一は理、多は事を指す。即ち一は多を攝し、多は一を含み、一と多と相容れて少しも碍げざるをいふ。これ十玄門の中の第二を擧げて他の九を擧せしもの。

章意 華嚴宗所說の理を擧示す。

講義 さて華嚴宗の所說によれば一切の萬象（事）は眞如の理より現はれたるが故に事はこれ理、理はこれ事であつて相融通無碍し、また一（理）は多（事）を攝し、多は一を含み、一と多と相容れて少しも碍げず、互相に圓融無碍してゐるものであると說かれてゐるのである。

歸者忽飛青雲之上誦者乍入大日之輿奇哉覺帝之德巽乎經王之功

讀方 歸する者は忽に青雲の上に飛び、誦ずる者は乍に大日の輿に入る。奇なるかな覺帝の德、巽なるかな經王の功。

字釈 ○歸者……華嚴の敎主に歸依し信仰する者。○青雲之上……第一義天、即ち佛果の境界を指す。○誦者……華嚴經を讀誦する者。○大日之輿……大日は上の青雲に對す、即ち華嚴の敎主盧遮那佛たる釋迦如來を指す。輿はその境界を指す。

章意 華嚴の敎に歸仰する者の功德、換言すれば佛の化他の德を嘆じ給ふ。

講義 華嚴の敎主に歸依し、信仰する者はたゞちに佛の加被力を蒙つて佛果に導かれ、また華嚴經を信奉し讀誦する者はその讀誦の功德力によりて乍ちに盧遮那佛の佛果の境界に轉入するに至るのである。か樣に覺帝たる佛の功德は不可思議奇特のものであり、またその經典の功德は世間の文と異り、異常に高大無窮の利益があるのである。

所以乙等近憑消禍於眼前遙仰蘊福乎命後唱隣里勸道俗合絲成紬聚塵爲山

讀方 所以に乙等、近くは消禍を眼前に憑み、遙かに蘊福を命後に仰ぐ。隣里に唱へ、道俗を勸めて絲を合せて紬と成し、塵を聚めて山と爲。

字釈 ○近……現世の意。○消禍……減罪の義。○遙……未來の義。○蘊福……善福を積む義。○合絲等……合力助成の義。絲は紵で、大索のこと。八十卷の華嚴經を書寫するに當りてその助力を乞ふ旨を明す。

講義 か樣なわけで小禰等は佛と經の功德力を信んじて、先づ現世の此の生に於て減罪生善を計り、以て未來命終後に於て福報を希ひ奉らんが爲めに八十卷の華嚴經の大經を書寫し奉らんと欲す。併し何分にも八十卷の大經なれば衆力の助成なくては功なり難し、よりて恰も多絲を合せて大索となし、また塵積りて大山となるが如くに衆力を積聚せんものと、隣里に此の聖業を提唱し、道俗に勸誘する次第である。

謹以去弘仁十一年奉寫華嚴經一部八十卷聊設法筵供講事畢

讀方 謹んで去んし弘仁十一年を以て華嚴經一部八十卷を寫し奉り、聊か法筵を設けて供講事畢んぬ。

字釈 ○華嚴經……八十卷の華嚴經は唐の實叉難陀の譯、六十卷の華嚴經は東晉の佛馱跋陀羅譯、四十卷の華嚴經は唐の般若の譯なり。

章意 寫經とその供食會とを明す。

講義 謹んで去る弘仁十一年を以て華嚴經一部八十卷を寫し奉ることを得、聊か法筵を設けて供養し、講演し奉つたのであつた。

從爾已還星霜空往能事闕焉追願先契激揚緇素

讀方 爾し從り已還た、星霜空しく往いて能事闕けたり。追つて先契を願て緇素を激揚す。

字釈 ○能事……重ねて華嚴經を僃すといふこと。○激揚……はげましあぐること。○緇素……僧俗。

【意】弘仁十一年以來重ねて華嚴會を催すといふ發願を果し得ざりしことを明す。

【講義】かく樣に弘仁十一年に華嚴經を書寫し供養し奉りてよりこのかた、星霜空しく過ぎ去るのみにして、重ねて華嚴會を催すことも出來なかつたのであつた。そこで今重ねて華嚴會を催すと誓ひしことを追想してその誓ひを果さんが爲めに僧俗を激勵し發揚する次第である。

寶閣構信解之神變。幢幡表菩提之勇健

【字訓】○寶閣……七寶莊嚴の寶樓閣で華嚴の華藏世界を言ひ、佛果の境界を指すのであるが、今は華嚴會を催す所の道場をいふ。○信解之神變……『大日經』第一住心品に曰く「如來信解遊戲神變の生ぜる大樓閣寶王は高うして中邊無く、諸の大妙寶を以て種々に間飾せり」と。○幢幡……幢幡は大菩提心を建立して萬行を軌成することを標幟せるもの。

【意】道場の相を明す。

【講義】今華嚴會を修する所の道場は恰も如來信解遊戲神變より生ぜし所の大寶樓閣の如き觀を呈し、またその道場に間飾せられたる幢幡は勇健なる大菩提心を標幟し、道場につどへる人々の淨菩提心を搖動せんとしてゐる樣である。

六樂俱陳八音共奏。男女爲華人天獻香。珍饈滿堂虔供三尊

【講方】六樂俱に陳ね、八音共に奏す。男女華を爲り、人天香を獻ず。珍饈堂に滿ち、虔んで三尊に供す。

【字訓】○六樂……黃帝以下六代の樂、卽ち黃帝樂(雲門)・堯帝樂(咸池)・舜帝樂(大韶)・禹王樂(大夏)・湯王樂(大護)・武王樂(大武)。○八音……支那八種の樂器及び其の音のこと、卽ち金(鐘の類)・石(磬の類)・絲(琴瑟の類)・竹(笛の類)・匏(笙・竽の類)・土(缶の類)、革(鼓の類)・木(柷の類)。○爲華……爲は以ての義、されば華を以て供養する意。○人天獻香……『法華經』第一序品に曰く「諸天龍神人及び非人香華伎樂を以て常に以て供養す」と。○三尊……三寶のこと。

【意】供養の有り樣を明す。

【講義】供養會式の有り樣は六樂を俱に彈じ、八音を共に奏して誠に極樂世界の妙音を傳へ、善男善女は妙華を以て供養し、人天は香を獻じ奉り、珍饈の供獻堂に滿ち滿ち以て虔誠をこめて謹嚴に三寶に供養し奉つてゐる。

伏願以斯白業奉答四恩。逝者化爲金剛之躬。留人變作如意之身。共圓二利同證一道

【講方】伏して願くは斯の白業を以て四恩を答し奉らん。逝者は化して金剛の躬と爲り、留人は變じて如意の身と作らん。共に二利を圖んじ、同じく一道を證せん。

【字訓】○白業……淨業のこと。○逝者……死者。○金剛之躬……金剛不壞の身。○留人……存生の者。○如意之身……如意珠王の身。

【意】正しく願意を明す。

【講義】伏して願くはこの淨業を以て四恩に報答し奉らんことを。更にこの功德力によりて逝者は金剛不壞の身と化し、留人は如意珠王の身と變作せんことを、乃至はまた自利利他二利圓滿し共に佛果の一道に證入せんことを祈り奉る。

堅及五類。橫沾四生。早超愛河。速入智海

【講方】堅には五類に及し、橫には四生を沾して早く愛河を超えて速かに智海に入らしめん。

【字訓】○五類……五類の諸天のこと。卽ち『祕藏記』下に曰く「土界天・虛空天・地居天・遊虛空天・地下天」。○愛河……貪愛等の煩惱によりて三界に輪廻する生死の世界を河に喩ふ。○智海……佛智の世界を海に喩ふ。

【意】結句として法界廻向を記す。

【講義】更に餘の功德力を以て堅には五類の諸天に及ぼし、橫には四生等の一切の有情にまで蒙らしめて早く生死流轉の三界より超脫し、速かに佛智の世界に入證せんことを祈り奉る。

六三　葛木參軍設先考忌齋願文

葛木參軍設先考忌齋願文一首

【講方】葛木の參軍先考の忌齋を設くる願文一首。

【字訓】○葛木……姓。○參軍……官。○先考……亡父の稱。

【意】初に題名を揭ぐ。

【講義】葛木の參軍が亡父の爲めに忌齋を催ほすに當りての願文一首。

弟子葛木魚主等歸命三寶。始夾山甫拔海言

【講方】弟子葛木の魚主等三寶に歸命して始めて山を夾み、甫めて海を拔えて言す。

【字訓】○夾山、拔海……『便蒙』によれば拔の字は跋の寫誤ならんと云へり。夾山跋海は泰山を挾んで以て北海を越えることで、はたし難き義、今は父母の恩の報じ難きをいふ。

【意】父母の恩の報ひ難きを明す。

【講義】弟子葛木の魚主等三寶に歸命し奉り以てかく申さく。卽ち泰山を挾んで北海を越ゆること甚だ難し、その如くに今はじめて父母の恩の報じ難きことを覺り、かく覺りたるを以てその萬分の一たりとも報じ奉らんと思ふに至りしことを言し奉る。

抒金擔人也未報。而導十力也不酬。而耶提孃哺皇矣唐矣

【講方】金擔を抒きし人も也未だ報せず、導きし十力も也酬ひず。耶の提、孃の哺、皇ひなるかな、唐しひかな。

【字訓】○金擔……黃金で造りし荷物のことであるが、今は黃金で造りし棺を指し、釋尊の御父たる淨飯大王の棺を意味す。○人……釋尊を指す。○十力……十力を具足せる佛のことで釋尊を指す。十力とは一に是處非處力。二に業力。三に定力。四に根力。五に欲力。六に性力。七に至處道力。八に宿命力。九に天眼力。十に漏盡力なり。○提……提撕。○哺……哺育。○皇、唐……共に測るべからざる義。

【意】父母の育養の恩の報じ難き義を、釋尊に於てすら然る義を例示す。

【講義】更に父母の育養の恩の報じ難きことを云へば、かの黃金を以て棺とせし處の淨飯大王の棺を抒き荷ひ以て父恩を報ぜんとせし釋尊に於てすらも未だ報じ得ざりし處であり、また父淨飯大王を導きし釋尊、卽ち十力具足の佛なれども父恩を報じ得ざりし處である。されば如何に父の提撕の恩の廣大不可測なるか、また如何に母の哺育の恩の廣大不可測なるかといふことが察知せられるのである。

不憑線軌舟筏。誰借。不仰如知。如若之何

【講方】線軌を憑まずんば舟筏誰れにか借らん。如知を仰がずんば之の若くなるを如何せん。

【字訓】○線軌……線は貫線攜持で經をいひ、軌は法をいふ。されば經法のこと。卽ち佛敎をいふ。○舟筏……凡夫に喩ふ。○如知……如實知者で佛をいふ。

【意】經法の力に憑らずんば如何ともなし難き義を明す。

【講義】父母の恩はかく樣に廣大不可測にして報じ難きものなるが故に經法に依憑しなくては凡夫の我々は誰れの力をか借り得ぞうや、また如實知者たる佛を仰ぎ奉り、佛に縋らずしてはかゝる父母の廣大なる恩を報ぜんには如何ともなし能はざる所である。

彼已大我能覺。阿字。此是達摩能脫諸過

【訳方】彼は已に大我能く阿字を覺る。此は是れ達磨能く諸過を脱る。

【字訓】○彼……如實知者を指す。○大我……佛のこと。○阿字……阿字本不生の義。○此……線軌即ち經法を指す。○達磨……梵語で譯して法といふ。

【拳意】佛と經法の德を嘆ず。

【講義】云ふ處の如實知者とは已に大我を体得して阿字本不生の理を覺證し給ひしものであり、また線軌即ち經法とは宇宙の眞理にして一切の過を離脱せしものである。

自悟悟他身手餘力。權實智通大奇大奇也

【訳方】自ら悟り、他を悟らしめて身手餘力あり、權實の智通大いに奇しく、大いに奇し。

【字訓】○身手……身手を以て衆生を濟度する義。即ち『法華經』卷第二譬喩品に曰く「彼の長者の復身手力ありと雖も之を用ひずして但慇懃の方便を以て勉めて諸子火宅の難を濟ふが如し」とあり。○權實智通……權は後得智。實は正體智。智は後得、正體の二智。通は神通。

【拳意】佛の自利利他二利圓滿の德用を嘆ず。

【講義】佛は自ら能く諸法實相の理を證得し、又他の一切衆生をも能く實相の理に體達せしめ、而もかく自利利他の二利を圓滿し乍らも更に尙身手を以て何處までも衆生を濟度する處の餘力を有し給ふものである、か樣に佛は大悲化他の後得智、自證の正體智、正後の二智及び神通の妙智力を具足し給ふものでその功德力たるや誠に大、誠に不可思議のものであらせらる。

伏惟先考。允孝顯於懷橘。友于厚乎杖庭

【訳方】伏して惟れば先考、允孝懷橘に顯はれ、友于杖庭に厚し。

【字訓】○顯懷橘……陸績が母に食はさんが爲に橘を懷にして歸宅せし故事で、孝心厚き義。即ち『吳志』第十二に曰く「陸績字は公紀、年六歲にして九江に於て袁術に見え、術橘を出す。績三枚を懷にす。去て拜辭するときに地に墮す。術謂て曰く、陸即ち賓客と作つて橘を懷にするか。績跪て曰く、歸つて母に遺らんと欲す。術大に奇なりとす」と。○友于……『書經』に「惟孝友二于兄弟一」とあるに基きて友于の語出づ。よりて兄弟の仲よき義に用ふ。○厚乎杖庭……『禮記』に曰く「五十にして家に杖き、六十にして鄉に杖き、七十にして國に杖き、八十にして朝に杖く」と。要するに五十才頃にして始めて衰へかける故に杖く、從つて今は五六十歲の老年に至るまで即ち生涯亘りて兄弟に親しみ厚き義に用ふ。

【拳意】先考在世の德を嘆ずる中、親に孝、兄弟に友愛厚きを明す。

【講義】伏して惟れば先考、その親に事ふるに實に孝心深く、かの陸績が懷橘の至孝の譽れ高きにも劣らざる程に兩親に孝を盡し、また兄弟に親しみ厚く、その生涯を通じて實に兄弟と仲よく親和せられてゐたのであつた。

許身仕主櫛沐風雨。授命法帝。素飯嗜法

【訳方】身を許して主に仕へて風雨に櫛沐し、命を法帝に授けて素飯法を嗜む。

【字訓】○許身……身命を捧げること。○櫛沐風雨……疾風に櫛り、甚雨に沐することで、奉公に盡瘁して隙なき義を示す。○授命法帝……佛に歸依すること。○素飯……疏食のこと。○嗜法……佛法の眞理を味ひ樂しむこと。

【拳意】先考在世の德を嘆ずる中、忠義にして信仰心厚かりしことを明す。

【講義】また更に先考は身命を捧げ、全力を盡して君に仕へ奉り、恰も風雨に櫛沐する程に公務に盡瘁し、また佛に深く歸依して疏食に甘んじ、佛法の眞理を味ひ樂しまれてゐたのである。

豈謂油薪易盡月水難留

【訳方】豈に謂ひきや、油薪盡き易く、月水留り難からんとは。

【字訓】○油薪等……油竭きて燈滅え、薪盡きて火滅ゆ。月移つて留り難く、水逝いて止り難き意味で無常の義を示す。

【拳意】逝去の義を明す。

【講義】油竭きて燈滅え、薪盡きて火滅え、月移つて留り難く、水逝いて止り難きはこれ世の理りであるが、その如く我が父も世を去り給ふことは免れ難きことではあるが、かくも早く世を去り給ふとは豈にどうして思ひ設けよや、思ひ設けぬことであつた。

弟子等訴天不及。叩地幾殞。星霜廻薄祥禫忽戻

【訳方】弟子等天に訴ふれども及ばず、地を叩いて幾んど殞せんとす。星霜廻り薄つて祥禫忽ちに戻る。

【字訓】○幾殞……幾は殆、殞は歿。○祥禫……三回忌のこと。○戻……至るに同じ。

【拳意】悲歎のさまを明す。

【講義】よりて弟子等は天に訴へて泣き叫べども如何ともなす能はず、地を叩いて泣き悲しみ殆んど死せんとする程に悲歎にくれたのであつた。併しそれより星霜移り過ぎて既に三回忌を迎ふるに立ち至つたのである。

謹以弘仁十二年十月八日。奉爲先考妣。奉寫金光明經一部。法華經兩部。孔雀經一部。阿彌陀經一部。般若心經二卷。兼莊供具奉奠三尊

【訳方】謹んで弘仁十二年十月八日を以て先考妣の奉爲に金光明經一部、法華經兩部、孔雀經一部、阿彌陀經一卷、般若心經二卷を寫し奉り、兼ねて供具を莊つて三尊に奉奠す。

【字訓】○先考妣……今は先考の爲の忌齋の願文なれば、先考妣とあるは恐らく妣の字衍文ならん。○供具……供養の道具。○三尊……佛、法、僧の三寶。

【拳意】供養の有り樣を明す。

【講義】謹んで弘仁十二年十月八日を以て先考の奉爲に金光明經一部、法華經二部、孔雀經一部、阿彌陀經一部一卷、般若心經二部二卷を寫し奉り、兼ねては供養の道具を莊嚴し、三寶に供奠し奉る。

伏願馳斯寶輅奉駕。先慈。字字法身引盈盈之月曜。句句本尊熾爀爀之日光。懸智鏡於心臺。營醍醐于寶殿

【訳方】伏して願くは斯の寶輅を馳せて先慈を駕し奉らん。字字の法身盈盈たる月曜を引き、句句の本尊熾爀たる日光を熾にせん。智鏡を心臺に懸け、醍醐を寶殿に營めん

【字訓】○寶輅……上に記す所の經典を指し、その所寫の功德を指す。○先慈……先考を指す。○字字法身……聲字即實相を說く自宗としては聲字の體は五大、五大は是れ五字五佛及び海會の諸尊にして實相法身たる所以である。故に字字法身と稱す。○盈盈之月曜……盈盈と圓滿に輝ける月の光りの義で、惠に約して胎藏理法身を指す。○爀爀之日光……爀々と諸法を照す所の日の光りの義で、智に約して智法身を指す。○智鏡……佛智を指す。○心臺……一心を指す。

【拳意】忌齋の願意を明す。

【講義】伏して願くは所修の功德を廻らして先考の尊靈を佛果に引導し奉らんことを。即ち所寫の經典の一字一字皆これ無相法身なればその功德によりて盈々たる月光のその如くに、また所寫の經典の一句一句は皆これ本尊の三昧なればその威德によりて爀々たる日光のその如くに先考の幽靈を照顯し、佛智を一心の上に具顯し、以て佛法の醍醐味を七寶莊嚴の寶殿に於て味得せられんことを祈り奉る。

十世四恩萬方六趣。有頂無間鱗服羽衣。吐氣保身長眠永醉。同覺我我之幻炎。頓入如如之實相

【訳方】十世の四恩、萬方の六趣、有頂無間鱗服羽衣、氣を吐

き身を保ち長眠永醉せるもの、同じく我我の幻炎を覺つて、頓に如如の實相に入らしめん。

字訓 ○十世……過去、現在、未來の三世に各々過去、現在、未來の三世を具するが故に九世となり、それに總世を合して十世となす。○長眠永醉……三界の生死にさまよへるもの。○我々之幻炎……我々の所執は畢竟虚無なること幻、陽炎の如きなる義。

拳意 法界平等利益の義を示す。

講義 更に願くは此の功德によりて十世の四恩、萬方の六趣、或は有頂天より無間地獄、鱗服たる魚類、羽衣たる鳥類、氣を吐く所の有情、一身を保ち保護する所のものにして三界の生死にさまよへる一切のものに至るまで、皆同じく平等に我執幻炎の迷夢を覺つて、如々實相の佛果に悟入せしめんことを祈り奉る。

六四　爲菅平章事願文

爲菅平章事願文一首

菅平章事の爲の願文一首。

字訓 ○菅平章事……菅は菅野の略で姓、平章事は參議の唐名。菅野の參議とは『公卿補任』卷第二（延暦二十四年）によれば「參議從三位菅野朝臣眞道は百濟の國の人、山守の男、初の姓は攝津の連、延暦九年に表を上て連の姓を改めて朝臣を賜はらんことを請ふ。勅して菅野の朝臣を賜ふ。二十四年正月に參議兼左大辨東宮學士に任ず。大同二年に從三位行宮內卿常陸守に叙せらる。弘仁五年六月二十九日逝す。年七十四」と。

拳意 初に題名を掲ぐ。

講義 參議從三位菅野の朝臣眞道の爲の願文一首。

竊聞曦和麗天圓鏡引而焰發。月殿雲外方諸召而水流。無智孺濕有緣感應

竊に聞く、曦和天に麗けども圓鏡引いて焰發す。月殿雲の外なれども方諸召いて水流る。智無き孺濕に緣有れば感應す。

訓方 竊に聞く、曦和天に麗けども圓鏡引いて焰發す。月殿雲の外なれども方諸召いて水流る。智無き孺濕に緣有れば感應す。

字訓 ○曦和……太陽。○圓鏡……陽燧のこと。陽燧は銅を以て造り、形鏡の如く、日に向へば火を生ずるもの。因緣相應すれば感應ある義を示す。○方諸……月より水をとる鏡。これも因緣相應すれば感應ある義を示す。○孺濕……火水のこと。

拳意 非情に於てすら因緣相應すれば感應空しからざる義を明す。

講義 竊かに聞く、太陽は非常に高く遠き中空にあれども、圓鏡を之に向はしむれば火を生ぜしむることが出來、また月は雲の上遙か遠くに歷れども、方諸を以てすれば水を生ぜしむることが出來ると。その樣に識智なき火水に於てすらも因緣相應ずるときは感應空しからざるものである。

況乎眞如如智慈悲爲本。自覺覺他度生爲用。心遍太虛而谷響。聲韜洪音而鍾應。利見攝引思絕言斷之矣

訓方 況んや眞如如智は慈悲を本と爲。自覺覺他は度生を用と爲。心は太虛に遍じて谷のごとくに響き、聲は洪音を韜んで鍾のごとくに應ず。利見攝引の思ひ絕え、言斷えたり。

字訓 ○眞如如智……眞如は所證の理、如智は能證の智、卽ち佛をいふ。○自覺覺他……菩薩を指す。○谷響……幽谷に於ける響の如くに感應空しからざる義を示す。○利見……利益のこと。○攝引……攝取誘引のこと。○思絕言斷……佛が一切衆生を化益するその德の廣大なることは二乘凡夫等の思量をたち、言ふことも能はざる所であるの義。

拳意 前章に於て非情に於てすら感應の用あり、されば今有情に於て而も悲慈を垂れ給ふ佛に於ては尙更ら廣大無限の感應の功ある義を明す。

講義 非情に於てすらもか樣に因緣相應すれば感應の功虛しからざる程である

が故に況んや慈悲を根本とし給ふ處の佛、また自覺覺他の二利の働きに志す處の菩薩等に如法に祈誓致すならば、佛心は太虛一切に遍じてゐるものなる故に衆生の信心は佛菩薩に通じて感應あること恰も幽谷に於ける響きの如くに應じ、またその御聲は至らずといふことなきが故に衆生の祈誓の聲に和して感應あらせられ給ふこと恰も鐘が扣くに從つて響を出すその如くに必らず感應あらせられ給ふものである。か樣に佛が加持感應し、一切の衆生を利益し、攝取誘引し給ふその德の廣大なることは二乘凡夫等の思ひ量ること能はず、ましてや言ふことの出來ざる境界である。

夫君臣唱和首足相似。見危盡命不可尸默

訓方 夫れ君臣唱和すること首足相似たり。危きを見て命を盡す尸默すべからず。

字訓 ○君臣唱和……君が命ずれば臣これを奉じ和し隨ふをいふ。○首足……君と臣との關係は頭首と手足との關係の如きもので頭の命に從つて手足働き動くが如きものであるの意。○尸默……カタシロの如くに默して動かざる義。

拳意 君臣の關係を明し給ふ。

講義 譬つて思ふに夫れ君臣の關係は、君が勅を出して命ずれば臣は直ちにその勅を奉ずるもので、それは譬へば一身に於ける頭首が手足に命じて働かすその如くであらねばならぬ。また危を見れば身命を捧げて忠を勵み奉るべきものであつて、尸の如くに默し動かざることがあつてはならぬのである。

是故去寶龜年中栢原天皇鳳闕不豫之日。與故中納言從三位紀朝臣勝長。今宮內卿從三位春原朝臣五百枝。故右兵衛督從四位上紀朝臣木津雄等。相共祈誓。奉造四天王像。延山壽保海福

訓方 是の故に去し寶龜年中に栢原の天皇鳳闕不豫の日、故の中納言從三位紀の朝臣勝長、今の宮內卿從三位春原の朝臣五百枝、故の右兵衛の督從四位上紀の朝臣木津雄等與相共に祈誓すらく、四天王の像を造り奉り、山壽を延べ、海福を保たしめたてまつらんと。

字訓 ○寶龜……光仁天皇の曆號。○栢原天皇……桓武天皇の御こと。○鳳闕……宮城の御こと。○不豫……陛下の御病氣を稱し奉る。○勝長……本の名は梶長、大納言正三位贈右大臣正二位鎭守の長男。延暦二十二年に從三位に叙せられ、大同元年四月に中納言に任ぜらる。同年十月三日に薨ず。○五百枝……正五位下市原王の子、延暦二十五年宮內卿に任ぜらる。此の年表を上つて春原朝臣の姓を賜んことを請ふ。勅によりて之を許さる。弘仁三年に從三位、天長五年に正三位。天長六年十二月十九日薨ず。行年七十。○木津雄……木津魚とも書く。雄と魚と音相近きが故に通じ用ふ。延暦八年に右兵衛の督となる。九年二月に正五位下、三月壬辰に內匠の頭となる。同日右衛門の督となる。○四天王……持國天、增長天、廣目天、毘沙門天。○山壽……無量壽をいふ。

拳意 祈誓し奉るに至りし所以を明す。

講義 是の故に光仁天皇の寶龜年中に栢原天皇御不豫の日、故の中納言從三位紀の朝臣勝長、今の宮內卿從三位春原の朝臣五百枝、故の右兵衛の督從四位上紀の朝臣木津雄等と相共に諸佛に祈誓し奉る。卽ち四天王の尊像を造り奉り以て御寶算山壽の如くにして廣大無限に御幸福にましまされんことを祈り奉る。

於焉高天聽卑影響不虛。被限草草久韜二手

訓方 於焉高天卑きに聽いて影響虛しからず。草草に限て被れて久しく二手を韜む。

字訓 ○高天……上の四天王に係る。○聽卑……菅平章事等を云つて卑といい

ふ。されば菅平草事等の祈願をきこしめされての意。○影響不虛……影の形に從ひ、響の聲に應ずるが如く感應虛しからずして靈驗ありしをいふ。○限草草……限は阻でへだてはばまれること。草草は心を勞し忙しきこと。○韜二手……二手を袖に藏して用ひざることで、事を果さざるをいふ。

【參意】願望成就せしに拘らず、諸佛への誓ひのことを未だ果し居らざりしことを明す。

【講義】か樣に祈り奉りたるに、高く遠く隔てたる佛天、よくこの卑き我れらの祈りを納受し給ふて影の形に、響の聲に應ずるが如くに感應空しからずして御不豫御平癒遊ばされ給ふたのであつた。從つて最初の誓ひの如く願成就の供養を早く果すべきであつたのに草草として多忙に紛まれて久しくその事を果し得ざりし有り樣であつた。

理須慎終如始。所以追顧前疇。敬埏吠室羅末茶等四大天王像四身

【訓方】理須らく終を慎むこと始の如くなるべし。所以に追つて前疇を顧て敬つて吠室羅末茶等の四大天王の像四身を埏す。

【字訓】○埏……埴を延して佛像を造るをいふ。○吠室羅末茶……Vaiçravaṇa 毘沙門と譯す。

【參意】誓を果さんが爲めに四天王の像を造りしことを明す。

【講義】道理上からいふならば終りを全うすること、始め事を起せし時の心持の如く慎みなすべきである。ここを以て今追つて最初の誓願の時のことを顧思して敬んで毘沙門天王等の四天王の像四軀を造り奉る所以である。

又夫嚴父慈母天覆地載。風樹巨駐桑棠何及

【訓方】又其れ嚴父慈母天のごとくに覆ひ、地のごとくに載す。風樹駐り巨く、桑棠何ぞ及ばん。

【字訓】○嚴父……父を敬つて嚴父といふ。○風樹巨駐……『孔子家語』第二に曰く「樹靜かならんと欲すれども風止ず、子養はんと欲すれども親待たず。往て來らざる者は年なり、再び見ざるものは親なり」と。○桑棠……扶桑と落棠、扶桑は日の出づる所、落棠は日の入る所。要するに光陰をいふ。

【參意】父母の恩廣大にして存命中に報じ難きを明す。

【講義】嚴つてまたそれ思ふに嚴父慈母より蒙りし御恩は天の如く、地の如くに廣大無邊にして子としてそれに酬ひ奉らんとするに仲々報じ難く、それに剩へ風吹けば樹動くその如くに無常の風吹き來れば人忽ちに去るものにして止り難く、また光陰矢の如くに過ぎ去るものなれば父母の存命中に孝行すること十分に盡し得ざるものである。

不如追那舍之勝躅。濟冥䕶於蓮宮

【訓方】如かじ、那舍が勝躅を追つて冥䕶を蓮宮に濟はんには。

【字訓】○那舍之勝躅……これは『佛說灌頂神咒經』第十一に說かれたる那舍長者の供養を指すものである。卽ち那舍長者の父母が死して地獄に墮せることを知りて那舍は供養を修して遂に父母をして墮獄の苦しみから救ひしといふ。○冥䕶……暗冥の世界に行き去りて獨り旅をしてゐる聖靈のこと。○蓮宮……八葉蓮花臺上の宮殿、卽ち密嚴佛國土。

【參意】父母存命中に十分孝行を盡すこと能はざりし故に今となりては供養行を修して菩提を吊ふことが孝行中の最第一なることを明す。

【講義】か樣に父母存命中に十分に孝行を盡すこと能はざりしが故に、父母去り給ひし今となりては、かの那舍長者が供養行を修してその父母を墮獄の苦しみより救ひ給ひしといふ麗しき故事のその如くに、我れも今供養行を修して冥道に於ける父母の䕶靈をして八葉蓮花臺上の密嚴佛國土に往生せしめんことこそ最上の孝行であり、これに勝る孝はあり得ないのである。

是以奉爲先考妣敬造阿彌陀佛像一軀。觀世音菩薩。得大勢至菩薩像一軀

【訓方】是を以て先考妣の奉爲に敬つて阿彌陀佛の像一軀、觀世音菩薩、得大勢至菩薩の像一軀を造りたてまつる。

【參意】父母の奉爲に佛像を造進してその菩提を吊ふ旨を明す。

【講義】是の故に先考妣のおんために敬つて阿彌陀佛の像一軀、觀世音菩薩、得大勢至菩薩の像一軀等を造り奉つてその菩提を祈り奉る次第である。

若復一陽一陰何能化物。比羽比鰭人之常也

【訓方】若し復一陽一陰何ぞ能く物を化せん。羽を比べ、鰭を比ぶるは人の常なり。

【字訓】○一陽一陰等……一陽と一陰と和合せずんば萬物を化育せずとの意。○比羽……比翼鳥のことで、比翼鳥は雄雌共に一目一羽にして常に一體となりて飛ぶといふ鳥、轉じて夫婦の相親しみ離れ難き關係をいふ。○比鰭……比目魚のことで、その目一目にして二匹並んで泳ぐといふ。

【參意】亡妻の聖靈の得脫を祈らんとするに際して先づ夫婦の親和の情を明す。

【講義】若しまた思ふに一陽一陰のみにては物を化育することはどうしても不可能にして、萬物の化育には一陽一陰和合して始めて行はれるといふのが是れ物の常である。故に鳥にも比翼の鳥あり、魚にも比目魚ある所以である。

故內侍舟眞人氏。合巹而後婦德無缺

【訓方】故の內侍舟の眞人の氏、合巹して後婦德缺くること無し。

【字訓】○內侍……女官。○舟眞人……姓。○合巹……結婚式。巹はひさごの實を半切せる杯、昔支那にて婚姻の式に新郎新婦は其杯にて互に酒を酌みかはしたるによる。

【參意】亡婦の生前の德を歎ず。

【講義】故の內侍舟の眞人の氏は結婚してより後は女の踐み行ふべき道は少しも缺くる所なき良妻賢母であつた。

共仰金仙同發識誓。甘泉易竭雙鳧一飛

【訓方】共に金仙を仰いで同じく識誓を發す。甘泉竭き易く、雙鳧一り飛ぶ。

【字訓】○金仙……佛を指す。○發識誓……菩提心を發起すること。○甘泉易竭……甘味なる泉は竭き易きものであるが、その如く子供の爲に好味なる乳水も盡き易しとのことで、母の死滅を意味す。○雙鳧一飛……李陵と蘇武の二人匈奴を征伐せしとき二人共に捕はる。其の後蘇武は本國へ歸りたるも、李陵は殘さる。その時李陵詩を作り、蘇武へ與へて曰く、雙鳧俱に北に飛ぶ、一鳧獨り南に翔ると。これ蘇武一人飛び歸へりしを以て妻の一人死せしに譬ふ。

【參意】妻先沒せしを明す。

【講義】妻と我れと共に志を同じうして佛に歸仰して菩提心を發起し、ともに佛道を語りてひたすら信心し、妻は我が人生に於ける好伴侶であつた。併し古語に甘泉竭き易しとかいへる如く、この好伴侶たりし妻女に先き立たれてしまつた次第である。

願昔期約且造灌頂幡一旒。堂中小幡四十口。幷若干色物等

【訓方】昔の期約を顧て且つ灌頂の幡一旒、堂中の小幡四十口、幷に若干の色の物等を造れり。

【字訓】○昔期約……兼ねて誓願せし約束をいふ。

【參意】亡妻の聖靈の得脫の爲に幡等を造りしことを明す。

【講義】かつて昔幡等を製し供養すと誓願せしことを思ひ起して亡妻の菩提の爲に、灌頂用の幡一旒、堂中の小幡四十旒、幷に其の他若干の種々のものを製し供養し奉る。

爰則海目慈悲山毫光曜。刀劍孕智矛戟摧魔。玉幡玲玲寶蓋颯纚翻此德海洗滌四恩

【和方】爰に則ち海目の慈悲、山毫の光曜、刀劍智を孕み、矛戟魔を摧く。玉幡玲玲として寶蓋颯纚たり。此の德海を翻して四恩を洗滌せん。

【字釈】○海目慈悲……所造の阿彌陀如來の大慈大悲の德を嘆ず。即ち所造の阿彌陀如來の御眼の廣大に開き居るは恰も大海の如くに廣大なる大慈大悲の本願を象徴してゐるかの樣な御まなざしである。○山毫光曜……所造の阿彌陀如來の衆生化益の德を嘆ず。即ち阿彌陀如來の眉間の白毫相は十方法界中を光曜として能く照し衆生を化益し給ふことを象徴してゐるかの樣である。○刀劍等……四天王の持物を擧げてその德を嘆ず。○玉幡……諸の寶玉を瓔珞として莊飾せる幡。○玲玲……玉の聲。○寶蓋……寶蓋は若干の色の物等の中にあり。○颯纚……長きさま。○洗滌……あらひすゝぐこと。

【意味】所造の物體の功德を嘆ず。

【講義】さてこゝに新しく造り奉りし所の諸尊の像を仰ぎ奉るに、阿彌陀如來の御眼は大慈大悲の廣大の御德を表はし給ひ、またその眉間の白毫相は十方法界を光曜と照して衆生攝化を表し給ひまた、その眉間の白毫相は十方法界を光曜と照して衆生攝化を表し給ふて居り、また四天王の御所持物たる刀劍は智慧を表し、矛戟は魔障碎破の義を表し給ふて居らせらる。また他面に於ては玉幡の寶玉は玲玲と聲を發し、寶蓋は颯纚として長く垂れ微風にゆられてゐるのである。されぱそれらの諸尊像并に寶具その功德を垂れ給ふて四恩に報謝し奉らんことを。

三障霧卷四智月朗。超越溺海躋攀寶岸。國隆鬱單入壽非想

【和方】三障霧のごとくに卷き、四智月のごとくに朗かならん。溺海を超越して寶岸に躋り攀ぢん。國は鬱單よりも隆んに、人は非想よりも壽ながからん。

【字釈】○三障……煩惱障、業障、報障。○四智……大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智。○溺海……生死海。○寶岸……涅槃の岸。○鬱單……正しくは鬱單越で譯して勝處とも勝生ともいふ。四洲の中にありて有情も處も貨も皆最勝なるが故に勝處といふ。壽一千歳なりといふ。○非想……非想天の壽は八萬劫なりといふ。

【意味】正しく願意を明す。

【講義】仰ぎ願くはそれらの功德によりて三障、霧が卷き晴れるが如くに卷除し、四智明月の如くに朗かに体得し給はんことを。そして生死の世界を超越して涅槃の岸に躋り攀ぢて佛果に悟入せんことを。そして國は鬱單越の國よりも立派に榮え、壽は非想天の人の壽よりも永からんことを祈り奉る。

給爨九野牢籠十方。蠉飛蠕動毛鱗牙角。共沐平等之智水。優遊不染之蓮藏

【和方】九野を給ひ爨め、十方を牢籠して蠉飛蠕動毛鱗牙角共に平等の智水に沐して不染の蓮藏に優遊せん。

【字釈】○九野……八方と中央。要するに全世界のこと。○蠉飛……微細にして飛ぶ虫類。○蠕動……蠕形動物。○蓮藏……蓮花藏世界。

【意味】衆ねては一切有情平等利益を祈り給ふことを明す。

【講義】更に此の功德を九野十方の全世界に及ぼしてそれらの世界の蠉飛蠕動毛鱗牙角等に至るまで一切の有情に被らしめて、それらをして共に平等に佛智の功德を蒙り、清淨不染の蓮華藏世界に優遊し給はんことを祈り奉る。

六五　爲田小貳設先妣忌齋願文

爲田小貳設先妣忌齋願文一首

【和方】田小貳が先妣の忌齋を設くるが爲の願文一首。

【字釈】○田小貳……田は田中にして姓、小貳は官にして太宰府の次官なり。

【意味】初めに題名を掲ぐ。

【講義】小貳田中氏が先妣の忌齋を設くるに當りての願文一首。

恭惟陶冶身體二親恩重。酬報岳瀆非佛歸誰

【和方】恭んで惟れば身體を陶冶するは二親の恩重し、岳瀆を酬報せんこと佛に非んば誰にか歸せん。

【字釈】○陶冶……陶人の器を造り、鍛工の金を鑄るごとくに人才を育成すること。○岳瀆……五岳山と四瀆(四大河)のことで、恩の廣大無限にして深高なるをいふ。

【意味】父母の恩の廣大無限にして酬報し難きを明す。

【講義】恭んで惟れば我が身體を養育し、薫陶し給ひし所の父母の恩といふものは實に重く、それは五岳山よりも高く、四大河よりも猶深きものであつて、それに酬報し奉ることは仲々能はざる所にして、それは佛力を借らざれば誰れの力を以てするとも不可能のものであると信ず。

沒駄之力無所以不爲。憑之仰之怨親猶子。神通有緣悲願無極。利樂拔濟不憚身倦。汪汪之德言絶思斷之矣

【和方】沒駄の力以て爲さざる所無し。之を憑み、之を仰げば怨親猶し子のごとし。神通緣有り、悲願極り無し。利樂拔濟身の倦むことを憚らず。汪汪たる德、言絶え、思斷えたり。

【字釈】○沒駄……佛陀で佛のこと。○神通有緣……神通力を以て奇瑞を現して衆生を得度せしむる所の緣あること。○汪汪……深廣なるさま。

【意味】佛の不可思議力を嘆じ給ふ。

【講義】佛の力は不可思議にして、如何なることをもなし得るものである。之を信憑し、仰信する者は親疎怨親の隔てなく一樣に子の如くに救濟の手を垂れさせ給ふ。そして神通力を以て一切衆生を得度せしめ給ふ所の緣を以て且つ極りなき悲願を垂れさせ給ふて利樂拔濟するに佛一身の勞倦を厭はず、どこまでも一切衆生の得脫を計り給ふものである。されば佛のかくの如き汪汪として深廣なる御德は表現しようとしても我々の言を以てしては表現することも、また我々の相對的な思慮を以て想像することすらも出來ぬ程に廣大にましますのである。

伏惟先惟田中氏。婦德甃茂桃林。母儀芬馥蘭苑

【和方】伏して惟れば先妣田中氏は婦德桃林よりも甃茂たり。母儀蘭苑よりも芬馥たり。

【字釈】○甃茂……瓜の蔓の連つて茂々たるさまで、子孫綿綿として絶えずして盛興なるさまに譬ふ。○桃林……桃林の夭々とし、灼々として麗はしきをいふ。○母儀……人の母として模範たるもの。○芳馥……かほり高きこと。

【意味】母の生前の德を嘆ず。

【講義】伏して惟るに亡母田中氏はその婦德たるや誠に麗はしく、桃林の夭々灼々として麗はしきよりも猶麗はしく、然も甃茂のごとくに綿々として家を盛興ならしめ、その母儀たるや蘭苑の芳香よりも猶高き香りを放ち給ひし所の良妻賢母にましまされたのであつた。

所冀竭告面於芥刼。何圖害芝玉於露朝。嗚呼痛哉酷裂罪苦。弟子等呑火飲鴆。不記斗建漏鐘如矢周忌忽臨。其德厚深欲報罔極

【和方】冀ふ所は告面を芥刼に竭さんことを。何ぞ圖らん、芝玉を露の朝に害せんとは。嗚呼痛い哉。酷裂たる罪苦、弟子等火を呑み、鴆を飲がごとし。斗建を記せざるに漏鐘矢の如くにして周忌忽ちに臨めり。其の德厚く深うして報

せんと欲するに極り罔し。

【字訓】○告面……人の子たるもの外出に際しては必ず父母に告げ、歸宅しては父母の顏色を伺つてその安否を察知すべきもの。要するに面り直接親に事ふる孝行をいふ。○芥劫……芥子劫で、今はいつまでもの意。○芝玉……芝蘭や楚玉の如き麗しき御慢の意で、先妣に比す。○露朝……朝露のごとくに消え失せること。○酷愛……悲しさの餘り胸裂かるゝ思ひなるをいふ。○罪苦……過去世に於ける如何なる罪業によりてかゝる胸を裂かるゝが如き苦痛を受けねばならぬかの意。○塒……毒鳥、今は單に毒のこと。○斗建……年月のこと。○漏鐘……水時計のこと。光陰をいふ。

【拳意】母の他界の悲しみを記し、更に周忌を迎へしを明す。

【讀義】かゝ樣に良き母でありしが故に翼しことはいつまでも存命して頂いて面り孝行を芥劫が程に永遠に盡したかつたのであつた。然るに何ぞ圖らんや芝玉の如き麗しき我が先妣朝露と共に去り給ふとは。嗚呼誠に痛しき限りである。離苦の苦痛も胸を裂かるゝ思ひであり、またこれ過去世に於て如何なる罪業を造りてか、かくの如く酷しき苦惱を受くるに至つたのであらうか。弟子等恰も火を呑み、毒を飲むが如き程に悲しみ苦しんだのである。さ樣に悲苦に泣き叫んだその年月を記さざりしが、それから早くも光陰矢の如くに運り去りて、先妣の一周忌を迎ふるに至つたのである。顧れば先妣に蒙りしその恩德深厚にして酬報せんに極りなき程である。

是以大同二年仲春十一日。恭圖繪千手千眼大悲菩薩。幷四攝八供養摩訶薩埵等一十三尊。幷奉寫妙法蓮華經一部八軸。般若心經二軸。兼掃灑荒庭。聊設齋席。潔修香華。供養諸尊。伏願傾此德海。潤洗煢魂。褒妄霧。以覩大日。懷智鏡。以照實相。

【訓方】是を以て大同二年仲春十一日、恭んで千手千眼大悲菩薩幷に四攝八供養摩訶薩埵等の一十三尊を圖繪し、幷に妙法蓮華經一部八軸、般若心經二軸を寫し奉り、兼て荒庭を掃洒して聊か齋席を設けて潔く香華を修し、諸尊を供養す。伏して願くは此の德海を傾けて煢魂を潤洗せん。妄霧を褒げて以て大日を覩、智鏡を懷いて以て實相を照さん。

【字訓】○大同……平城天皇の暦號。○仲春……陰暦の二月。○四攝……鉤、索鎖、鈴の四攝の菩薩。○八供養……嬉、鬘、歌、舞、香、花、燈、塗の八供養菩薩。○掃洒荒庭……荒れ果て汚がれた處の庭を掃除し、水打ちして美しくすること。

【拳意】先妣の菩提を吊はんが爲めの供養とその願意とを明す。

【讀義】かゝる理由を以て大同二年二月十一日、謹んで千手千眼大悲菩薩幷に四攝の菩薩、八供養の菩薩等の十三尊の尊像を圖繪し奉ると共に、又他面に於ては妙法蓮花經一部八卷、般若心經二卷を寫し奉る。また兼ねては荒れ果てし庭を掃除し、水打ちして清め、聊か供養の齋席をしつらへて清淨の香華を辨備して諸尊を供養し奉る。伏して願くは此の功德を廻らして先妣の煢魂に蒙らしめ、迷霧を晴らして以て本來所具の大日如來を證顯せしめ、佛智を体得せしめて以て諸法實相を照らし輝かさんことを祈り奉る。

法之不思議用之無窮盡。福延現親壽考光寵

【訓方】法の不思議之を用ひて窮盡無し。福現親に延いて壽考光寵ならん。

【字訓】○現親……現世の父を指す。○光寵……光は光美、寵は壯んなること、されば相變らずうるはしく壯健なること。

【拳意】更に此の功德を以て現世に於ける父の壽長からんことを祈る。

【讀義】法は不思議神變なる故にその用に隨つて應用無窮なれば、福德を現親たる父に蒙らしめて父の壽命をして長からしめ、相變らず麗はしくして壯健ならむことを祈り奉る。

臣子有善必奉所尊。廻此勝福奉酬聖朝。金輪常轉十善彌新

【訓方】臣子善有れば必ず所尊に奉ず。此の勝福を廻らして聖朝に酬ひ奉り、金輪常に轉じて十善彌新ならん。

【字訓】○臣子有善等……『禮記』に曰く「天子善あるときは德を天に讓る。諸侯善あるときはこれを天子に歸す。卿大夫善あるときは諸侯に薦む。士庶人善あるときはこれを父母に本けてこれを長老に存す。祿爵慶賞これを宗廟に成す。順を示す所以なり」と。○所尊……臣子に係る。されば君親をいふ。

【拳意】更に此の福を聖朝に廻らし奉らんことを祈る。

【讀義】更にまたかくの如く聞き及んでゐる。即ち臣子善あるときは必ずそれを所尊に歸し奉るべきであると。されば今此の勝福を廻らして聖朝に酬ひ奉り、以て金輪常に轉じ給ひ、十善日々に彌新に行はれ天下益々泰平ならんことを祈り奉る。

春宮瓊枝宰輔百工。共竭忠義。福履綏之

【訓方】春宮瓊枝宰輔百工共に忠義を竭し、福履之を綏んぜん。

【字訓】○瓊枝……親王を指し奉る。○宰輔……宰相輔佐。○百工……百官。○福履……福祿。

【拳意】天下泰平を祈り奉る。

【讀義】かくて畏いこと乍ら春宮、瓊枝を始め奉り、宰輔百官に至るまで共に忠義を盡し奉り以て天下泰平に福祿豐かに綏んぜんことを祈り奉る。

五類提婆十方數生。同飽一味之法食。等遊一如之宮殿

【訓方】五類の提婆、十方の數生、同じく一味の法食に飽いて等しく一如の宮殿に遊ばん。

【字訓】○提婆……提婆(Deva)梵語にして譯して天といふ。○數生……梵語の補特迦羅(Pudgala)の譯にして、數取趣とも、人とも、有情とも譯す。有情流轉して數々に諸趣に生るゝ義。○法食……聞法のこと。

【拳意】一切有情平等利益の義を明す。

【讀義】更に願くは五類の諸天より十方の一切有情に至るまで同樣に眞如同一味の法門を十分に味得して等しく共に眞如一如の法界宮殿に優遊せんことを祈り奉る。

遍照發揮性靈集卷第七終

續遍照發揮性靈集補闕鈔卷第八

字訓 ○補闕鈔……『遍照發揮性靈集』は眞濟僧正の序文に記されたる如く最初は十卷あつたのであるが、第八、第九、第十の三卷散佚しぬ。よりて承暦三年(一七三九)冬南岳房濟暹僧都更に大師の遺稿四十七章を拾蒐して之を補ふ題して補闕鈔と曰ふ。

六六　大夫笠左衛佐爲亡室造大日槙像願文

大夫笠左衛佐爲亡室造大日槙像願文

訓方 大夫笠の左衛の佐亡室の爲に大日の槙像を造る願文。

字訓 ○大夫笠……笠の大夫で第七卷第五十六章にあり。○亡室……亡妻。○槙像……兩木に絹を張り展べて畫きし佛像をいふ。槙はハリツクこと。

拳要 初に題名を揭ぐ。

講義 笠の大夫左衛の佐が亡妻の菩提を吊はんが爲に大日如來の槙像を謹製し奉るに就いての願文。

恭聞。囃日囉也者智。鉢納麽也者理。智能照。物有。功。理則攝持無。亂

訓方 恭んで聞く、囃日囉は智なり。鉢納麽は理なり。智は能く物を照らすに功有り、理は則ち攝持して亂るゝこと無し。

字訓 ○囃日囉……囃日囉(Vajra)は梵語にして譯して金剛といふ。金剛には能斷と不壞の二用あり。よりて實智に名く。○鉢納麽……鉢納麽(Padma)梵語にして譯して蓮華といふ。蓮華に性淨無染の義あり、是の故に眞理に名く。理は一切の諸法を攝持して自性を亂さず。

拳要 總じて理智二法の德を明す。

講義 恭んで聞く、梵語の囃日囉は智であり、鉢納麽は理なりと。智はよく物を照らしてその本然の姿を表はす功用あり、また理は一切の諸法を攝持して自性を亂さざる力用があるのである。

攝持故大身孕。法界。而無外。光照故廣心呑。虛空。以無中

訓方 攝持の故に大身法界を孕んで外無く、光照の故に廣心虛空を呑んで以て中無し。

字訓 ○大身……十界輪圓の身。理。○法界……十界の依正。○無外、無中……廣無中邊の義。無邊と無外と同じ義。○孕、呑……自證の義を示す。

拳要 別して理智二法の德を明す。

講義 理は一切の諸法を攝持して亂さざるが故に理法身たる大身は周遍法界の体にして十界の依正を孕む。然も色心不二の故に心外のみにあるにあらず。また智は一切の諸法をよく光照するが故に廣心にして虛空を呑むものなれば我が心中にのみあるにあらず、太虛に遍じて際限なき存在であるのである。

理智非他。卽是我身心也。一三自法。外求者迷癡也

訓方 理智他に非ず、卽ち是れ我が身心なり。一三自の法、外に求むるは迷癡なり。

字訓 ○一三自……『釋摩訶衍論』第五に說く所にして『二教論』卷上に引證せる文なり。一法界心三自一心の義。一法界心は第八住心、三自一心は第九住心に當る。共にこれは生滅所入の無明の分域なり。

拳要 顯密對辨して上來を結ず。

講義 理智の二法とは我が身(理)心(智)そのものにしてこの我が身心を除いて他に存在するものではない。然るに一法界心を說く天台も、三自一心を說ずして華嚴も共に自他の差別を說き他に佛果を求めてゐることはこれ迷癡無明の分域にして未だ眞の佛果を語るものではない。

達。塵體之不二。覺滴心之如一。所謂我大師薄伽梵摩。訶毘盧遮那薩他怛揭多其人也

訓方 塵體の不二に達し、滴心の如一を覺るは所謂我が大師薄伽梵摩訶毘盧遮那薩他怛揭多其の人なり。

字訓 ○塵體……刹塵の體。○滴心……海滴の心。○薄伽梵等……世尊大日如來と譯す。

拳要 別して密敎を明し、大日の德を嘆ず。

講義 十界の衆生の色法は刹塵に過ぐる程無量なれども然れども同一の五大所成のものなれば皆不二一味平等であり、また十界の衆生所具の一心は海滴の無數なき如くに無數あれども皆これ同一識大にして一の如くにして平等である。かくこの理の一味、智の平等を覺悟し給へるものが卽ち我が大師世尊大日如來その人であらせらる。

又夫至剛馳。天下之柔。至柔逐。天下之剛。因緣唱隨合散物理

訓方 又夫れ至剛は天下の柔に馳せ、至柔は天下の剛に逐ふ因緣唱へ隨ひ合散するは物の理なり。

字訓 ○至剛……夫を指す。○至柔……婦を指す。○唱隨……夫唱婦隨のこと。○合散……合會あれば離散あること。

拳要 萬物の因緣を述べ、別して男和合女離散を明す。

講義 また夫れ思ふに天下の夫は婦の下に至り、天下の婦は夫の下に至り遂ひそこに因緣和合して夫唱婦隨の妙を極め、更にまた夫婦各々に離散して死別するに至るはこれ世の物の理りである。

惟亡藤五娘德容具而合巹功言備而醮適

訓方 惟れば亡藤五娘は德容具つて合巹し、功言備つて醮適す。

字訓 ○藤……姓。○五娘……第五番の女子。○德容……婦德の四德の中の二を擧ぐ。○合巹……結婚式のこと。○功言……婦德の四德の中の二を擧ぐ先の德容を合して四德となす。○醮適……醮は娘の嫁せんとするとき父母と離別の盃をすること。適は家を出て人に適くこと。

拳要 藤氏の第五女の人に嫁ぎしことを明す。

講義 惟れば藤氏第五女は德容具はり、功言備はり、才識兼備の麗はしき女として嫁いで來たのであつた。

牲牲之羽滿。門戶。甃甃之葉滋。庭除。

訓方 牲牲の羽門戶に滿ち、甃甃の葉庭除に滋し。

字訓 ○牲牲……衆く生じ竝び立つさま。○羽、葉……共に子に比す。○甃甃……綿綿と連り盛んなるさま。○庭除……庭は庭園、除は殿の陛。

拳要 子孫多くして繁榮のさまを明す。

講義 かくて子供達を多く產み、牲牲と多勢の子供達が門戶に滿ち、甃甃として多くの子孫が庭除に遊び集ひ、誠に一門の繁榮を來さしめたのであつた。

所。冀。比。東鰈。於。龜年。同。西鶴。乎鶴歲

訓方 冀ふ所は東鰈を龜年に比し、西鶴を鶴歲に同せんことを。

字訓 ○東鰈……東海に於ける比目魚で、二匹竝んで泳ぐといふ。○西鶴……西方に於ける比翼鳥で二匹竝んで飛ぶといふ。○龜、鶴……共に長壽に喩ふ。

拳要 俱に千歲の長壽を保つて連れ添はんことを祈りしを明す。

【講義】そこで常に冀ふ所はかの東鰈の如くに俱に竝んで亀のやうに長壽を保ちまた西鶼の如くに俱に仲好く連れ添うて鶴のやうに長壽を得て暮さんことをであつた。

豈圖哭生離於千里。喪偕老於一期

【訓方】豈に圖りきや。生離を千里に哭し、偕老を一期に喪はんとは。

【字訓】○生離……生きて死に別れること。○哭千里……『抄』によれば愁歎の深きことを言はんが爲めに千里といふと。○偕老……生死を共にすること。○一期……一時、一朝の義。

【學意】妻と死別せしことを明す。

【講義】然るに豈に思ひもうけよや、思ひもうけぬことであつた。卽ちかくも早く妻に死別されて最大の悲苦をなめ、生死を共にせんと契りしこの妻を一朝にして喪はんとは。

數箇孤雛蜿轉巢中。二三嬰稚匍匐帳裏

【訓方】數箇の孤雛巢の中に蜿轉し、二三の嬰稚帳の裏に匍匐す。

【字訓】○孤雛……孤露の嬰兒を鳥の雛に比す。○蜿轉、匍匐……共に腹行にて這ふこと。

【學意】母を失ひし子供等の愁を明す。

【講義】母を失ひし數人の子等は恰も雛が巢の中で母鳥を失つて蜿轉たる如くに家の中で轉び這ひ泣き叫んで居り、二三の嬰稚は帳の裏に這ひ舞つて中を尋ね求むる哀れさは誠に堪えがたきものである。

油雲忽斂蘭菊何長。甘澤倏竭松桂曷茂

【訓方】油雲忽ちに斂る、蘭菊何ぞ長せん。甘澤倏ちに竭く、松桂曷ぞ茂せん。

【字訓】○油雲……雨雲。母に譬ふ。○斂……晴るゝを指す。○蘭菊……子供に譬ふ。○甘澤……母に譬ふ。○松桂……子供に譬ふ。

【學意】慈母を失ひ子供達忽ちに困ることを明す。

【講義】油雲忽ちに晴れて水渇きなばどうしてや蘭菊生長しようや、その如く今慈母を失ひし子供達はどうしてや生長しやうや、また甘澤倏ちに渇きてしまふならば松桂繁茂すること能はず、その如く甘澤にも譬ふべき慈母を失つてしまつて子供達いかにして生育せんや。誠に心細き次第である。

嗚呼哀哉嗚呼哀哉。撫庭玉目汍瀾。見掌珠情悽愴

【訓方】嗚呼哀なる哉、嗚呼哀なる哉。庭玉を撫て目汍瀾たり掌珠を見て情悽愴す。

【字訓】○庭玉……愛子に喩ふ。○汍瀾……涙の流るゝさま。○掌珠……愛子に喩ふ。○情……こころ。○悽愴……かなしくいたましきこと。

【學意】遺子を見るにつけ悲しさ一入なることを明す。

【講義】あゝ哀なるかな、あゝ哀なるかな。遺されし愛子を撫育するにいとしさ胸に滿ちて目に汍瀾として涙流れ、掌珠の如き愛子を見るにつけ不憫さ心に滿ちて悽愴としていたましさに泪び泣く有り様である。

哀哉悲哉霜露易消電影難駐。日薄星廻莽齋奄臨

【訓方】哀なる哉悲しい哉。霜露消え易く、電影駐り難し。日薄り、星廻つて莽齋奄ちに臨めり。

【字訓】○霜露……人の命は朝の霜や露の如くにはかなきをいふ。卽ち無常をいふ。○電影……人の命が電影よりも速疾に消え去るをいふ。○薄……迫ること。○非齋……一週忌のこと。

【學意】悲しさの中に早や一週忌を迎ふるに至つたことを明す。

【講義】哀れなるかな悲しいかな。人の命といふものは無常にして朝の霜露の如くに忽ちに消え去り易く、電影よりもまだ早く過ぎ去るはかなきものであるとは。さはあれ妻去りてより日迫り過ぎ、星移り廻つて早や一週忌を迎ふるに至つたのである。

謹以天長四年五月二十二日。爲濟亡靈奉圖大日一印曼荼羅一鋪五幅。幷寫廣眼法曼荼羅一部七卷。兼就神護寺聊肆法席講大日經

【訓方】謹で天長四年五月二十二日を以て亡靈を濟はんが爲に、大日の一印曼荼羅一鋪五幅を圖し奉り、幷に廣眼の法曼荼羅一部七卷を寫し、兼て神護寺に就て聊か法席を肆べて大日經を講ず。

【字訓】○一印曼荼羅……金剛界九會曼荼羅中の一、中央の上方に位す。智拳印の大日一尊を畫けり。○廣眼法曼荼羅……大日經のこと。

【學意】供養物と場所について明す。

【講義】謹んで天長四年五月二十二日を以て亡妻の亡靈の菩提を弔はんが爲に金剛界九會曼荼羅中の一印會を一鋪五幅として圖し奉り、更に大日經一部七卷を寫し、兼て神護寺に於て聊か法席を設けて大日經を講讃し奉る。

松澗虛而鐘磬響。桂嶺高而日月明。朝雲舒幔夕霞張。幄竹風吟以疑秋。瀧水灑以似雨。飛錫之徒森羅。寫瓶之衆輻湊

【訓方】松澗虛ふして鐘磬響き、桂嶺高うして日月明かなり。朝雲幔を舒べ、夕霞幄を張る。竹風吟じて以て秋かと疑ひ瀧水灑いで以て雨に似たり。飛錫の徒森羅たり。寫瓶の衆輻湊す。

【字訓】○松澗……老松の生へたる谷。○虛……廣大の義。○飛錫之徒……『天台山賦』に曰く、「應眞錫を飛ばして以て虛を躡む」と。今は遊行の名僧をいふ。○森羅……澤山ならび立つこと。○寫瓶之衆……大師の御弟子達をいふ。○輻湊……集ること。

【學意】高雄山神護寺道場の景趣を明す。

【講義】神護寺道場の有り樣を遠ぶるならば、老松生へたる谷は廣大にして鐘磬の音おごそかに響き渡り、桂嶺高うして日月明らかに輝いてゐる。朝雲幔の如くに引き、夕霞幄の如くに張り、天然自然の妙自ら具はり、また他面竹を吹きわたる涼風、自然の妙音を出して秋かと疑はしめ、瀧に落つる水四散して以て雨に似て誠に暑氣を知らざる涼しき佳境である。かゝる佳境なれば名僧森羅として多勢集り、また法統を繼ぐ弟子達輻湊として多く集つて居る所の靈地である。

法界淨體乘月輪。以儼然。攝供侍者擎金蓮。以宛爾

【訓方】法界の淨體は月輪に乘じて以て儼然たり。攝供の侍者は金蓮を擎げて以て宛爾たり。

【字訓】○法界淨體……大日如來を指す。○乘月輪……金剛界の故に月輪に乘じ給ふ。○攝供……四攝と八供養菩薩とをいふ。○金蓮……金剛蓮華にして所持の蓮職をいふ。○宛爾……宛然。

【學意】曼荼羅の相を明す。

【講義】法界の淨體たる大日如來は月輪に住し給ふて儼然としてゐませらる。四攝の菩薩、八供養の菩薩等の侍者は各々金蓮等の三昧耶形を擎げて宛然として住し給ふてゐる。

字寫法然之文。義明無盡之旨。

【表方】字は法然の文を寫し、義は無盡の旨を明す。

【字訓】○法然之文……先佛より傳はりし所の自然法爾の文字。所寫の大日經を歎ず。

【拳意】寫し奉る所の大日經の文字はこれ先佛より傳はりし所の自然法爾の文字であり、その文字の意味する所は無盡の深義を含み明すものである。

【講義】

伏願乘此良緣資彼煢魂。法雷驚永蟄之佛性。甘露灑樹王之根葉。開覺眼於除蓋。朗心月於定觀。

【表方】伏して願くは此の良緣に乘じて彼の煢魂を資けん。法雷は永蟄の佛性を驚かし、甘露は樹王の根葉に灑がん。覺眼を除蓋に開き、心月を定觀に朗かんせん。

【字訓】○法雷……法門の聲を雷に譬ふ。○永蟄之佛性……胸中に潛める佛性で春雷が永蟄を呼び覺すに比す。○樹王……菩提心の樹王。○除蓋……除蓋障三昧にして初地所證のもの。○定觀……三昧にして上の除蓋障三昧を指す。

【拳意】正しく願意を述べ給ふ。

【講義】伏して願くは此の供養の功德の良緣によりて彼の煢魂の菩提を成ぜんことを。即ち法門の雷音によりて胸中深く眠れる所の佛性を呼び覺まさしめ、甘露の法門を菩提心樹王の根葉に灑いで增上せしめ以て覺眼を初地所證の除蓋障三昧と共に證得し、一心所具の智法身を初地三昧に於て朗らかに顯得せんことを祈り奉る。

五大所造一心所遍。鱗角羽毛之鄉。飛沈走躍之縣。同破四生之愛輪。共入一眞之覺殿。

【表方】五大の所造、一心の所遍、鱗角羽毛の鄉、飛沈走躍の縣、同じく四生の愛輪を破して共に一眞の覺殿に入らん。

【字訓】○五大所造一心所造……五大と一心とを合して六大とす。即ち法界の一切の有情をいふ。○一眞……一實如如の境界。

【拳意】一切の有情平等利益の義を明す。

【講義】更に願くは此の餘德を以て五大所造一心所造の一切の有情即ち鱗角の魚獸、羽毛の鳥獸、飛沈の鳥魚、走躍の獸等の世界に至るまで同じく四生の六道輪廻の迷執を破して共に一實如如の覺殿に悟入せんことを祈る次第である。

六七　藤左近將監爲先妣設三七齋願文

【表方】藤左近の將監、先妣の爲に三七の齋を設くる願文。

【字訓】○藤……藤原氏。○左近將監……左近衞府の判官。從六位上に相當す。

【拳意】初に題名を揭ぐ。

【講義】藤原左近將監先妣の爲に三七の齋會を儲すに就ての願文。

聞于先師。孕色者也空。呑空者也佛。佛之三密何處不遍。佛之慈悲天覆地載。悲則拔苦。慈能與樂。

【表方】先師に聞けり。色を孕む者は空なり、空を呑む者は佛なり。佛の三密は何れの處にか遍せざらん。佛の慈悲は天のごとくに覆ひ、地のごとくに載す。悲は則ち苦を拔き、慈は能く樂を與ふ。

【字訓】○先師……惠果和尙を指す。○孕色……孕は包容してゐること、色は一切の萬物。即ち一切の萬物を包容してゐること。○呑空……佛の三密は法界に遍じて餘す所なき故に、一切の世界を攝盡すること〻なる。故に呑空といふ。○天覆地載……天が一切の萬物を覆藏し、地が一切の萬物を載せ保つその如くに德の廣大さに喩ふ。

【拳意】所歸の佛の德を嘆ずる中、自證化他の德を讃嘆す。

【講義】吾が恩師惠果和尙より次の如く承つてゐる。即ち一切の萬物を包容してゐるものは大空であり、その大空を一心の中に攝盡してゐるものは佛であると。思ふに佛の三密は法界に遍じて餘す所なきが故に一切の世界を攝盡し、一切の世界を攝盡すると俱にその一切の世界の一切の萬物に慈悲の御心を垂れさせ給ふて洩らさざること恰も天が萬物を餘さず悉くこれを包攝し、地がすべての萬物を載せて餘りなきその如く廣大無邊である。かく佛は大慈大悲の御心を以て一切の萬物を救濟し給ふのであるが、その大悲は衆生の苦惱を拔除し給ふものであり、大慈は衆生に安樂を與へ給ふものである。

所謂大師豈異人哉。阿哩也摩訶味怛羅冒地薩埵即是也

【表方】所謂大師豈異人ならんや。阿哩也摩訶味怛羅冒地薩埵即ち是なり。

【字訓】○大師……佛を指す。○阿哩也等……阿哩也(arya)は梵語にして聖者とか大聖とかといふ。摩訶味怛羅(mahā-maitreya)を譯して大彌勒といふ。冒地薩埵(bodhi-sattva)を譯して菩薩といふ。要するに大聖彌勒菩薩の御名のこと。

【拳意】諸佛諸尊の中特に藤左近先妣の持念佛たりし彌勒菩薩を擧示す。

【講義】さて言ふ所の佛とは一体何佛を指すのであるか、それは他でもない大聖彌勒菩薩である。

住法界宮。輔於大日之德。居都史殿。扇乎能寂之風。

【表方】法界宮に住して大日の德を輔け、都史殿に居して能寂の風を扇ぐ。

【字訓】○法界宮……大日如來所居の胎藏曼荼羅の會場を指す。○輔於大日之德……主尊を輔佐して佛作を行ずるを大眷屬といひ、彌勒菩薩は大眷屬の中の上首なるが故に、大日の德を輔くといふ。○都史殿……兜率天のこと。兜率天は彌勒菩薩の住せる淨土なり。○扇……盛んなるさま。○能寂……能仁寂默で釋迦牟尼のこと。○風……敎のこと。

【拳意】彌勒菩薩所居の世界を明す。

【講義】その彌勒菩薩は大日如來の眷屬の上首となりて法界宮に住し給ふて大日如來の業用を輔佐し、また他面には兜率天の淨土にゐまして釋迦牟尼世尊の敎風を盛んならしめ給ふてゐる所の佛である。

尊位昔滿權冊宸宮。子于元元塗炭拔濟。無爲主宰誰敢名言

【表方】尊位は昔滿して權に宸宮に冊せらる。元元を子として塗炭を拔濟す。無爲の主宰誰か敢て名け言はん。

【字訓】○尊位……自證の佛果を指す。○昔滿……『慈心經』に曰く「乃往過去無量無邊阿僧祇劫に世界あり、勝華敷と名く、佛を彌勒と號す」と。要するに彌勒菩薩は過去世に於て既に佛果を成滿し給ふてゐたことを明す。○冊宸宮……冊は冊立のこと。宸宮は宸宮で、奉宮のこと。彌勒菩薩は補處の菩薩なるが故に譬ふれば太子の如き立場なるを以てかくいふ。○元元……人民のことで今は一切の衆生を指す。○塗炭……塗は泥、炭は火、即ち塗泥炭火の中にある如き困苦のこと。○無爲主宰……無爲の治化のこと、即ち治せずして亂れず、化せずして行はるゝこと。

【拳意】彌勒菩薩の自證化他の義を明す。

【講義】か樣に彌勒菩薩は既に大日如來の眷屬として久遠の昔に於て佛果を成滿し給ひし尊なるも、今は權に補處の菩薩の位に住して恒に一切衆生を塗炭の苦しみより救濟し給はれてゐる。その救濟の業用の有り樣は廣大無窮の無爲

の治化とも名け稱せらるるもので、それ以上に名け稱し難き程に廣大無窮の業用であらせらる。

伏惟從四位下藤氏。旦瑩四德晩崇三寶。朝厭閻浮夕欣都率。身與華落心將香飛

【訳方】伏して惟ればそれ從四位下藤の氏は旦に四德を瑩き、晩に三寶を崇む。朝に閻浮を厭ひ、夕に都率を欣ふ。身は華と與に落ちぬれども心は香と將に飛ぶ。

【字釈】○四德……婦人の四德で、婦德、婦言、婦容、婦功をいふ。○閻浮……閻浮提のことで、須彌山の南にある洲の名。また南贍部州ともいふ。今は單に浮世を意味す。○都率……都率天のこと。

【字意】先妣の德を讃ふ。

【講義】伏して惟るに從四位下藤原氏の先妣は、常に修養に志し、特に婦人としての四德を磨き、他面にはまた篤く佛教に歸依して三寶を敬ひ、浮世を厭つて都率淨土を信んじ慕ふてゐられたのである。さればその身体は落花のその如くに死滅すれども、その心はかの香煙に從つて昇天して都率の淨土に優遊し給ふてゐることであらう。

所葉時攀椿葉數嘗仙桃

【訳方】葉ふ所は時椿葉を攀ぢ、數仙桃を嘗めんことを。

【字釈】○椿葉……長壽に喩ふ。『莊子』に曰く「上古に大椿といふものあり、八千歳を以て春とし、八千歳を以て秋とす」と。○仙桃……これも長壽に喩ふ『拾遺記』に曰く、「磅礴山、扶桑を去ること五萬里、日の及ばざる所、地寒し、則ち桃樹千圍その花青黑色、萬歳に一び實る」と。

【字意】先妣の長壽たらんことを期待せしことを明す。

【講義】か樣に心は都率天に優遊するとはいへ、親族知己の者は等しくいつまでも此の世に住り、千萬歳の長壽を保たれんことを願ひ、かの椿葉や仙桃と共に長命たらんことを期待してゐたのであつた。

誰期秋葉易落夜燈忽暗面華不寫鵲鏡悲娥影滅兮臆月怨

【訳方】誰れか期せん、秋の葉落ち易く、夜の燈忽ちに暗からんとは。面華寫らずして鵲の鏡悲しみ、娥影滅えて臆月怨む。

【字釈】○面華……花の如く麗はしき顏なるも單に顏のこと。○鵲鏡……鵲を刻みつけた鏡のこと。これにつき故事あり、卽ち『神異記』に曰く「昔夫婦あり、まさに別れんとするとき、鏡を持して打ち破つて各々一片を執る。以て信とす。其の妻、人と祕かに通ず。其の片鏡化して飛鵲となり、夫の前に至つて之を知らしむ。後人鏡を作るに因んで鵲を背の上に安んず」と。○娥影……月光のこと。先妣に比す。○悲・怨……鵲鏡を見るにつけても悲哀の情しきりに催すに至るをいひ、窓の月を見るにつけても先妣の在らざることを思ひ出して窓月がうらめしくなるの意。

【意意】先妣の死滅せしことを悲しみ悼むことを明す。

【講義】されば誰れか先妣がかくもはかなく秋の木の葉の如く、また風前の夜の燈火のその如くに消え去らうとは思ひ設けようや、誰れも思ひ設けぬことであつた。今はたゞ顏を寫さぬ愛用の鏡を見るにつけても悲しさ一入に增し、先妣の面影減え去りて窓月を見るにつけても在りし日の面かげが偲ばれて窓月がうらめしく思はれる程である。

逝者休樂留人則苦。痛哉苦哉。弟子等早丁茶毒。擗踊難居。號天扣地肝腐心爛。緇管長運三七忽臨。不假三寶。何答岳瀆

【訳方】逝者は休樂すれども留人は苦しむ。痛しい哉、苦しい哉。弟子等早く茶毒に丁つて擗踊して居り難し。天に號び地に扣いて肝腐ち、心爛る。緇管長く運んで三七忽ちに臨めり。三寶に凭らずんば何ぞ岳瀆に答へん。

【字釈】○休樂……寂滅爲樂を指し、涅槃の樂果に入ること。○弟子……をさなきもの。○丁……當ること。○茶毒……茶はニガナで味苦くして辛く、能く物を殺すより害物、また苦しきに喩ふ。○擗踊……悲しみて胸をうち、をどりあがること。哀慟のさま。○緇管……光陰のこと。『後漢書』に曰く「候氣の法、室を爲ること三重、戸を閉ぢ、釁を塗つて密布の緇縞を室中に周らし木を以て案を爲る。律ごとに各之の如くす。內卑く、外高うす。その方位に從つて律を其の上に加ふ。葭莩の灰を以て其の內の端を抑ふ。案歷して之を候す。氣至るものは灰去る。其の氣の爲めに動かさるゝ者はその灰聚る。二至に乃ち候す」と。また『梁王僧孺が擣衣の詩』に曰く「金管の遽かなるを傷むに足り、多く緇光の促すことを愴む」と。○岳瀆……恩の重く深きことに喩ふ。卽ち恩の重きことを比ぶときは五岳山も輕し。深きことをはかるときは四瀆の流れも淺しの意。

【意意】先妣の三七日忌を修する所以を明す。

【講義】逝去せし者は寂滅涅槃の佛果に遊樂すれども、後に殘りし人々は別離の苦惱にさいなまれねばならぬ。これ誠に痛ましい限りである。殊に子供や親族等はか樣にも早く母に別れ茶毒の苦を受け、擗踊として悲しみ哀慟して堪え難き程である。天に向つて叫哭し、地を扣いて哀泣して身も心もくだくるばかりである。かく哀哭してゐる間に早や光陰は過ぎ去りて忽ちに三七日忌を迎ふに至る。徒らに哀哭しても如何にせん、三寶を供養して三寶の冥助を仰がずんばどうしてや岳瀆の大恩に報び奉ることを得ようや。

六道誰非佛子。不簡怨親。悉歸本覺之自性

謹於高雄道場轉諷妙法。禮供金仙。伏願乘此善業。運彼逝莞。心蓮發於八池。覺蘂開於九殿。法界惣是四恩。

【訳方】謹んで高雄の道場に於て妙法を轉諷し、金仙を禮供す。伏して願くは此の善業に乘じて彼の逝莞を運ばん。心蓮を八池に發き、覺蘂を九殿に開かん。法界は惣て是れ四恩なり、六道誰れか佛子に非らん。怨親を簡はず、悉く本覺の自性に歸らしめん。

【字釈】○妙法……經典のこと。○金仙……佛を指す。○逝莞……ひとり逝ける先妣の靈を指す。○八池……八功德池のこと。○九殿……九品蓮臺のこと。

【字意】供養の道場と先妣の菩提を弔ふ意と法界平等利益との意を明す。

【講義】謹んで高雄山の道場に於て妙法の佛典を讀誦し、佛を禮拜し供養し奉る。伏して願はくこの善功德の業力に乘じて先妣の莞靈を佛果に運ばんことをまたその心蓮をして八功德池に開かしめ、覺蘂を九品蓮臺の上に開かしめんことを。また法界はすべてこれ四恩に當り、六道の一切の衆生はこれ皆佛子に外ならぬ。されば怨親のへだてなく一切の衆生をして悉く皆この功德力により本覺の自性を体得して佛果を證せしめんことを。

六八　播州和判官攘灾願文

播州和判官攘灾願文

【訳方】播州の和判官攘灾の願文。

【字釈】○播州和判官……播磨の守和氣の朝臣勘解由の判官のこと。

【字意】初に題目を掲ぐ。

【講義】播磨の守和氣の朝臣勘解由の判官が不祥に遇ふて、その不祥を攘ひ除かんが爲めの法要に際しての願文。

能寂沒馱悲濟爲根。妙華達磨慈樂是最。歸者龍雲自
感。寫者虎吹速應。塵墨所以憑仰。涉點所以津梁

【訓方】能寂の沒馱は悲濟を根とし、妙華の達磨は慈樂是れ最なり。歸する者は龍雲自ら感じ、寫する者は虎吹速かに應ず。塵墨所以に憑み仰ぎ、沙點所以に津梁たり。

【字訓】○能寂沒馱……能仁寂默の佛陀で釋迦如來をいふ。○悲濟……大悲拔苦のこと。○妙華達磨……法華經を指す。○慈樂……大慈與樂のこと。○歸者……佛陀に歸依する者の意。○龍雲・虎吹……龍雲虎吹は共に感應の空しからざるに喩ふ。『周易註疏』第一に曰く「龍は是れ水畜、雲は是れ水氣なり。故に龍吟ずるときは景雲出づ。是れ雲龍に從ふなり。また虎は是れ威猛の獸、風は是れ震動の氣なり。此れまた是れ同類相ひ感ずるなり。故に虎嘯くときは谷風を生ず。是れ風虎に從ふなり」と。また『楚辭』に曰く「虎嘯て谷風至れり。龍擧て景雲從ふ。言物類の相ひ感ずるなり」と。○寫者……法華經を筆寫する者の意。○塵墨……衆生のこと。○沙點……恒河沙の點で衆生の多きに喩ふ。要するに衆生のこと。○津梁……渡し場と橋。彼岸に到る津梁で、法華經を彼岸に到る津梁とすること。

【參意】佛と經の功德の甚深なる義を明せしもの。

【講義】能仁寂默の佛陀たる釋迦如來は大悲拔苦、衆生濟度を根本とし給ひ、またそのお說き遊ばされたる法門たる法華經は大慈與樂を以て最第一となし給ふ。從つて若し人ありて佛に歸依せば、雲の龍に從ふその如くに感應空しからずして自ら利益を受け、また法華經を誠心を以て書寫せば、風の虎に從ふその如くに感應空しからずして速かに靈驗を蒙るに至る。か樣なわけであるが故に一切衆生は佛を贊仰し、經を彼岸に至る律樂として尊信するのである

故今和氏忽遇不祥。思託法祐。謹以良辰奉爲五類諸
天者。敬寫妙法經王一部八卷。兼嚴香華轉持玉偶。解
卷則心蓮自開。舒紙則佛智忽入

【訓方】故に今和の氏忽ちに不祥に遇ふて法祐に託かんことを思ふ。謹んで良辰を以て五類の諸天者の奉爲に敬んで妙法經王一部八卷を寫す。兼て香華を嚴うして玉偶を轉持す。卷を解けば心蓮自ら開け、紙を舒ぶれば佛智忽ちに入る。

【字訓】○法祐……佛法の靈驗を蒙ること。○五類諸天……五類天は上古より印度に崇拜せられたる神が佛教に歸入したるものにして、天空地三界の主領たる上界天、慾怒神の主領たる空行天、神の軍勢の統帥者たる住空天、神人間を交通する天使たる地居天、神の使命を果たすための神僕たる地下天とである。○佛智忽入……佛智が我が心中に忽ちに入るをいふ。

【參意】和の判官が攘災の供養會を修するに至る所以を明せしもの。

【講義】か樣な理由を以ての故に和氏は今此處に不祥に遇ひしを以て佛法の靈驗を蒙らんと欲し、謹んで吉日を選んで五類の諸天等の奉爲に敬んで法花經一部八卷を書寫し、兼ねては香花等の供養物を儼嚴し、經文を讀誦し奉る。此の經典の書寫讀誦の功德廣大なるが故に經卷を開き誦ずれば淨菩提心蓮自然に開け、書寫の紙を舒べ擴ぐために佛智忽ちに心中に入り、證菩提の妙果を體得するに至る。

伏願廻此介福。五天乘彼白牛之寶軒。六趣棄此黑羊
之弊車。

【訓方】伏して願くは此の介福を廻して五天は彼の白牛の寶軒に乘り、六趣は此の黑羊の弊車を棄てん。

【字訓】○介福……大なるさいはひ。○五天……五類の諸天を指す。○白牛寶軒……大白牛車のことで法華一乘を指す。軒は車のこと。○黑羊之弊車……羊車のことで小乘を指す。黑羊とは上に白牛と云つたから言葉の奇語の上から

單に黑と云ひしのみ。また弊車も上に寶軒と云つたからその對句として弊車と云ひしのみ。

【字訓】總じて此の供養會の功德を一切の衆生に廻施せんとする志を明せしもの

【參意】伏して願ふらくは此の經典書寫讀誦の廣大なる福分の功德を廻らして五類の諸天及び六趣の衆生にまでも及ぼし、以て五類の諸天をして法花一乘の大白牛車の速疾頓成の大乘敎に乘ぜしめて法花の妙法に趣入せしめ、また六趣の一切の衆生をして小乘の劣敎の羊車を弁てゝ法花一乘の妙法に歸入せしめて、以て甚深微妙の佛果を體得せしめんことを。

廻善施主轉禍爲福。常沐佛護鎭遊法苑。

【訓方】善を廻する施主は禍を轉じて福と爲し、常に佛護に沐して鎭へに法苑に遊ばん。

【字訓】○廻善……行者修する所の善根功德を廻らして一切衆生及び自己の菩提涅槃に向はしむるを云ふ。別して此の供養會の施主に利益あらんことを祈り、以て結言とす。

【參意】か樣に供養會を設け、その善根功德を一切の衆生に廻施せんとする所の施主に於ては何卒特に禍を轉じて福たらしめ、以て常に佛の守護を蒙り永遠に佛果の淨土に優遊せんことを祈る。

六九　林學生先考妣忌日造佛飯僧願文

林學生先考妣忌日造佛飯僧願文

【訓方】林學生の先考妣の忌日に佛を造り、僧に飯する願文。

【字訓】○林學生……林は姓、學生は書生のこと。○先考妣忌日……『便蒙』には林學生の父母同日に逝去せりと。

【參意】初に題名を掲ぐ。

【講義】林學生なるものが逝ける父母の忌日に當りて佛像を造り、僧に供養せんとするの願文。

夫身蓮等空二覺寂照沒馱之號也

【訓方】夫れ身蓮空に等じて二覺寂照なるは沒馱の號なり。

【字訓】○身蓮……身蓮は理であり、色であり、自身所具の理體を指す。○等空……虛空の遍滿するが如く前五大の理體が十界に遍滿するに喩ふ。○二覺……智であり、心であり、また本覺始覺の二、また自覺、覺他を意味す。○寂照……寂は平等の義、照は照了の義。○沒馱……佛陀に同じ。

【參意】所歸の佛德を明す中、一體三寶の義を示す。

【講義】夫れ色身所具の理體十方に遍じて一切のものと等同にして、本始の二覺無碍し、自覺覺他覺行圓滿して寂然として平等に諸法の實相を照してゐられるもの、此れを即ち號して佛陀と稱するのである。

語梵滿界軌則不刋寄名達磨。

【訓方】語梵界に滿ちて軌則刋らざるは名を達磨に寄す。

【字訓】○語梵……語密梵輪にして淸淨微妙なる佛の說法を指す。卽ち『智度論』に曰く「轉梵輪とは淸淨の故に梵と名く、佛の智慧及び智慧相應の法是を輪と名く佛の所說、受者法に隨つて行ず。是を轉と名く。また次に梵は廣に名く、佛の轉法輪は十方に遍せずといふことなし。故に廣と名く」と。○滿界……遍法界のこと。○軌則……經法のこと。○不刋……けづりとらざることで不變の義。○達磨……達磨（dharma）は梵語にして譯して法といふ。

【參意】法寶の德を明せしもの。

【講義】淸淨微妙なる佛の言語說法は遍法界に滿ち滿ちて而もそれは軌則を守りて變ぜず、三世に亘りて不改不變の眞理である。そこでこれを法と名けてゐるのである。

金剛三密無礙無數謂僧伽也。三寶寶號開之業除。四

攝攝生無疲無倦

【讃方】金剛の三密無礙無數なるを僧伽と謂ふ。三寶の寶號之を聞けば業除く、四攝攝生して疲るゝことも、倦むことも無し。

【字讃】○金剛三密……金剛は如來の身、口、意の三密の用に名く。卽ち身、口、意のはたらきよく惑障を打破するが故に金剛に喩ふ。金剛は三密の德用に約し、三密は名に約す。○無礙無數……和合の義。○僧伽……僧伽(Sangha)をまた畧して僧ともいふ。僧伽は譯して衆とも、一味和合とも云ふ。三人以上の比丘の一處に和合し集りて修行せるものを云ふ。出家の團隊なり、轉じて佛門に入り、袈裟を著して佛の道を傳ふる者を一人にても僧といふ。○四攝……布施愛語利行同事の四法にして共に菩薩大悲利他の行願によりて衆生を攝化する方便のこと。○攝生……衆生を攝引すること。

【會意】僧寶の德を明し、三寶の德用を記す。

【講義】身、口、意の三密の用が和合して無礙自在に働くものをば僧伽と稱するのである。上來明す所の佛、法、僧の三寶の寶號を若し心から敬ひ聞けば、但ちにその人の業障惱を除くに至るものであり、また佛菩薩は常に布施愛語利行同事の四攝の大悲利他の法を以て一切の衆生を攝引し給ふに疲るゝことも倦むこともなく永遠の救濟の御手を垂れさせ給ふてゐられるものである。

伏惟先考先妣天覆地載生我育我罪鬼業魔一奪二親

【讃方】伏して惟れば先考先妣天のごとくに覆ひ、地のごとくに載す。我を生み、我を育ふ。罪鬼業魔一び二親を奪ふ

【字讃】○天覆地載……天が上にありて一切の萬物を覆ひ、地が下にありて萬物を載せ保ち育むその如くに父母が我が身をはぐくみ給ふをいふ。○罪鬼業魔……罪業鬼魔で、罪業を以て鬼魔に譬へ、法譬並べ擧ぐ。此の意味は林生未だ幼にして父母を一時に失ひ、侍養し奉ることを得ず、これ子たる林生が罪業なりといふにある。

【會意】己が罪業の致す所より、未だ報恩の誠を致さざる中に父母逝去し給ひし義を明せしもの。

【講義】伏して惟るに我が父母は天の萬物を覆ひ、地の萬物を載せ育くむその如くに廣大の慈心を以て我が身を生み養育し給ふたものであり、その恩德は量り知る能はざる所である。然るにその恩德に未だ報ひ奉る年齢に達せざる中に父母は一時に逝去し給ふ。子として親に侍養し奉ること能はざることはこれ子たる林生が罪業の致す所である。

弟子童稚丁荼毒萬事也不知嗟呼桃李未華暴風折幹蘭菊未吐嚴霜萎苗朝衣夕飡誰憑誰仰髫之齔之無姑無姉蒼天蒼天劇剩無情不知逝者悲唯傷存者苦母也父也何生我用

【讃方】弟子童稚にして荼毒に丁つて萬事也知らず。嗟呼桃李未だ華かず、暴風幹を折り、蘭菊未だ吐かざるに嚴霜苗を萎ます。朝衣夕飡誰れをか憑み、誰れをか仰がん。之を髫し、之を齔するに姑も無く、姉も無し。蒼天蒼天劇だ剩へ情無し。逝者の悲しみを知らず。唯存者の苦しみを傷む母も父も何ぞ我を生んで用ある。

【字讃】○荼毒……苦痛の甚しきに喩ふ。○桃李、蘭菊……共に林生に比す。○暴風折幹、嚴霜萎苗……共に父母の逝去に比喩す。○髫齔……髫は小兒の垂れ髮を指す。今はその垂髮をくしけづること。齔は毀齒で、齒がはりの年齢卽ち七八才頃をいふ。七八才頃の子供の面倒を見てやることを指す。

幼にして父母に死に分れし悲歎の情を明す。

【講義】林生幼にして一時に父母を失ひ恰も荼毒の劇苦を受けしに同じく氣も狂はんばかりにて萬事萬端如何になすべきか判らず、たゞ悲歎にくるゝのみ。あゝ思へばこれ桃李未だ花咲かざるに暴風幹を折り、また蘭菊未だ香氣を放たざるに嚴霜苗を萎ましめ枯らせしに等しく、我れ幼にして未だ成人せざる中に父母に死別せしは全く殘念の極みである。かくては朝夕の衣食誰れにか頼むべき、誰れをか仰ぎ慕ふべきや。我が垂れ髮を梳き、身仕舞の面倒などを世話する姑もなければ姉とてもなし。餘りと云へば餘りにも無情なるは蒼天である。蒼天よ何が故にか我が父母を奪へるや。死に去れる人を悲しむこと、なくしてたゞ還つて我が存生せることを傷む。母も父もどうしてや我を生んで斯の如き悲歎の極に遭はしむるや。

盈盈月華幾圓虧。的的星菓今告朞。謹奉爲先考妣敬圖阿彌陀佛像一軀。幷寫法華經二部。奉入修理伽藍料米三十斛。海目發彩山毫放光。貝文連珠龍章金鬱。薩埵儼然幡華颯纚

【讃方】盈盈たる月華幾くか圓虧する。的的たる星菓今朞を告ぐ。謹んで先考妣の奉爲に敬んで阿彌陀佛の像一軀を圖し幷に法華經二部を寫し、伽藍を修理する料米三十斛を奉入す。海目彩を發して山毫光を放つ。貝文珠を連ね、龍章金のごとくに鬱く。薩埵儼然として幡華颯纚たり。

【字讃】○盈盈……みちみちたるさま。○月華……月光のこと。○的的……明らかなるさま。○星菓……星のこと。星が柑橘の實の如くに齔はしきより、星を柑橘の實に譬ふ。(第四卷、柑子を獻ずる表の中に出づ)。○朞……一周忌のこと。○海目、山毫……佛の相好を指す。卽ち佛眼の周ねきを海に喩へ、白毫のいかめしきを山に喩ふ。○貝文、龍章……共に經典を指す。卽ち梵文の經典は貝多羅葉に書せしが故に貝文といふ。文彩の麗はしきを龍に喩へ、文章の麗はしきを讃嘆して龍章といふ。○薩埵……今此處では阿彌陀佛の二爽侍たる觀音勢至の二菩薩を指して薩埵と云ひしならん。○颯纚……長きさま。

【會意】父母の一周忌に當りて供養會の有り樣を記せしもの。

【講義】盈盈として滿てる月光もその後幾度か滿ちては虧げ、虧げては滿ち、的々として輝ける星も夜々遷り回つて早や父母の一周忌となりぬ。此處に於て謹んで亡父母の奉爲に敬て阿彌陀佛の像一軀を圖し奉り、また法花經を二部書寫し奉る。そして更に伽藍の修理料として米三十斛を奉納す。圖し奉る所の佛像の御姿は海目として五彩を放ち、白毫燦然として光明を放てり。また書寫せし所の經文の麗はしさは珠を連ねたるが如く、正に龍章金の如くに馨かんかんと思はれる程である。阿彌陀佛の御前の二爽侍菩薩儼然と控へさせ給ひ幡華颯纚として長く垂れ下れるは誠に寂靜安樂の境地を象徴して尊き極みである。

伏願廻此勝功報彼恩德。擲金杵而摧障嶽。轉慧日以竭愛河。高臨法界之殿。深察眞如之底

【讃方】伏して願くは此の勝功を廻らして彼の恩德を報せん。金杵を擲つて障嶽を摧き、慧日を轉じて以て愛河を竭さん高く法界の殿に臨み、深く眞如の底を察せん。

【字讃】○金杵……阿彌陀佛の三昧耶形たる金剛杵のこと。阿彌陀佛の三昧耶形に三種あり、卽ち蓮華と五股金剛杵と獨股金剛杵とである。○法界殿……法界宮のこと。『法界次第』に曰ぐ、「佛智は如如實際の底を照し窮めて行位高く極れり」と。

【會意】正しく願意を明せしもの。

【講義】伏して願ふらくは、此の勝妙の功德力を廻向して父母の靈を安んじ奉り以て父母の恩德に報じ奉らん。阿彌陀佛の誓願の象徴たる金剛杵を擲つて以て業障の高嶽を摧破し、佛陀の慧日を以て生死の愛河を竭さんことを祈り奉

る。そして以て高く法界宮殿に趣入し、深く眞如實際の底を窮め盡して佛果を體得せられんことを。

牙劍角矛羽裳鱗衣夢鄉之幻士。影縣之編戸。同覺長眠共嘗一味之甘露

【訓方】牙劍角矛羽裳鱗衣夢鄉の幻士、影縣の編戸同じく長眠を覺して共に一味の甘露を嘗めん。

【字訓】○牙劍角矛羽裳鱗衣……牙あるもの、角あるもの、羽あるもの、鱗あるもので一切の生類を指す。○夢鄉、影縣……轉變極りなき有爲の里を指す。即ち三界の果報、六趣の依正夢の如く幻影の如くなるが故にかくいふ。○編戸……編戸の民のこと。編戸の民とは戸籍に編列せる民にして庶民の稱。

【要意】一切の有情平等利益の義を明して結言とす。

【讀義】牙あるもの、角あるもの、羽あるもの、鱗あるもの、乃至、庶民に至る迄の一切の有情、此の功德によりて長眠の迷夢より覺めて、一味平等の甘露の妙果を證得せんことを祈る。

七〇　爲弟子僧眞體設亡妹七七齋幷奉入傳燈料田願文

爲弟子僧眞體設亡妹七七齋幷奉入傳燈料田願文

【訓方】弟子の僧眞體亡妹の七七の齋を設け、幷に傳燈料田を奉入するが爲の願文。

【字訓】眞體……眞體法師の行狀は古來より未詳とされてゐる。『開書』には「眞體は和氣氏なり。大師の御弟子には多く眞の字を名けり」とあり。○傳燈料田……傳法の費に充てんが爲めの料田。

【要意】初に題名を揭ぐ。

【讀義】弟子の僧眞體が亡妹の四十九日忌を營むるに際し、幷に傳法の費として料田を神護寺に奉入せんが爲めの願文。

夫佛有五智因業各異所謂阿哩也囉多曩納婆縛多他揭哆卽是檀那之報德也

【訓方】夫れ佛に五智有り、因業各異なり、所謂阿哩也囉多曩納婆縛多他揭哆卽ち是れ檀那の報德なり。

【字訓】○五智……法界體性智、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智。○因業……因業圓滿して佛果を成ずるもの。五智はその果なり。果たる五智の因業は各各異るのである。○阿哩也……梵語の阿哩也(ārya)を譯して聖者とか大聖とか尊者とか等といふ。○囉多囊……梵語の囉多囊(Ratna)を譯して寶といふ。○納婆縛……梵語の納婆縛(Dhāva)を譯して生ずとか、發生すとかといふ。○多他揭哆……梵語の多他揭哆(Tathāgata)を譯して如來といふ平等性智を得て寶生如來となる。○檀那……梵語の檀那(Dāna)を譯して布施といふ。○報德……果報の功德のこと。

【要意】總じて佛德を明す中、特に寶生如來の德を明し給ふ。

【讀義】夫れ思ふに佛に多種多樣あれども此れを智德の上からいへば五智に總括することが出來る。この五智は各々異れる因業を成滿して體得したものである。即ち例へば大聖寶生如來は布施の果報の功德によりて平等性智を具現せられ給ふ。而寶生如來とならせ給へる佛であらせらる。

三世沒弟恒沙索多。發心修行入金剛寶藏者所乘不同

【訓方】三世の沒弟、恒沙の索多、發心修行して金剛寶藏に入る者の所乘不同なり。

【字訓】○沒弟……佛陀に同じ。○恒沙……恒河沙で多きに譬ふ。○索多……薩埵に同じ。薩埵に就いては『大日經疏』に曰く「阿闍梨の云く。具に正義に據らばまさに菩提索多といふべし。此に索多とは是れ忍樂修行堅持不捨の義なり。然も聲明に是の如くの法あり、若し文字を論ずれば其の義正しと雖も音讀或は流便ならざれば便を取て之を安んずることを得。故に世の論師謂て薩埵とす。傳習の者其の辭に隨順せり」と。○金剛寶藏……無盡莊嚴藏にして兩部の曼荼羅大日の海會を指す。初地より金剛寶藏の位に入ると大疏に說けり。

【要意】佛果を體得するに至るにその所乘不同なる義を明す。

【讀義】三世の佛陀及び恒河沙の無數の薩埵といへどもこれ發心修行して金剛寶藏の大日如來の境界に入らせ給ふたものであるが、その金剛寶藏の大日如來の境界に入らせられるまでには各々異れる因業を修められたのである。

雖云乘載各別終歸一味一味之海浩湍無邊。不二之嶽岌嶪無頂

【訓方】乘載各別なりと云ふと雖も、終に一味に歸す。一味の海浩湍として無邊なり。不二の嶽岌嶪として頂無し。

【字訓】○乘載……因業の法門を指す。○一味……金剛寶藏の位卽ち大日如來の境界を指す。○一味海……理を標す。○浩湍……水の廣々として深白なるさま。○不二嶽……智を標す。○岌嶪……高きさま。

【要意】金剛寶藏の位たる大日如來の一味の境界を讚歎せしもの

【讀義】金剛寶藏の位に到達せんが爲に修せし所の法門は各別なりといへども、併しその最極に歸入せし所の佛果、卽ち大日如來の境界は平等一味の悟界であり、その平等一味の悟界は大海の如くに浩湍として無邊であり、その體得せし不二の智の境界は極りなき高嶽のそれの如くに果しなきものである。

內心大我都法界而常恒。金蓮冒地會心殿以不變。不變之變遍刹塵應物之化滿沙界利人。體用大奇我大師薄伽梵其人也

【訓方】內心の大我は法界に都として常恒なり。金蓮の冒地は心殿に會して以て不變なり。不變の變は刹塵に遍じて物に應じ、應物の化は沙界に滿ちて人を利す。體用大奇なるは我が大師薄伽梵其の人なり。

【字訓】○內心大我……兩部不二の大日如來をいふ。また理界を指す。○法界、心殿……法界は卽ち心殿なり。併し嚴密に云へば法界は法界宮であり、心殿は五祇の心殿をいふ。○金蓮冒地……金胎二而の如來のこと。またこれ智界を指す。上の理界と共に五部の中の二を擧げて他の三を含め顯はす。○會……住すること。○不變等……『大疏』第十四に曰く、「毘盧遮那菩提心の體性に住して種種に示現し、普門の利益種種の變現無量無邊なるが如きは實には常住不動にして起滅の相なし。猶し車輪の復運轉無窮なりと雖も而も當中は未だ嘗て動搖せざるが如し。不動に由るが故に能く群動を制して窮極無し」と。○滿沙界……恒河にある所の沙の數程に多き佛世界に滿ち滿ちたること。○薄伽梵……世尊と譯す。

【要意】別して化他の用を讚嘆する中、先づ自性の德を嘆ず。

【讀義】心內の大我卽ち兩部不二の大日如來は常恒に法界宮に住したまひ、金胎二而の大日如來は自性の心殿に住して常恒に不動不變にましまします。かく不動不變なれどもそれは十方の刹塵に遍じて萬物に應同せるものである。かく萬物に應同して萬物を常に化益し給ふ所のものである。隨つて萬物に應同して化益をなし給ふてゐる所の諸佛諸尊は恒河の沙よりも多き佛世界に滿ち滿ちる程無量無數であつて、この無量無數の諸佛諸尊が人を利益救濟し給ふてゐる。されば自性の佛體の化他の用たるや誠にこれ奇妙にして廣大無邊の用きといふべきである。かゝる廣大無邊の用きをなし得るはこれ我が大師薄伽梵その御方であらせらる。

想亡妹和氣朝臣氏牝卦陶性柔氣治身。天地覆載早霧嬰孩之年。恃怙懷哺速孤匐匍之齒

【訓方】想へば亡妹和氣の朝臣の氏、牝卦性を陶き、柔氣身を

治く。天地の獨載早く嬰孩の年に露なり。恃怙の懷哺速かに匍匐の齒に孤なり。

字釈 ○牝卦……牝卦は坤卦なり。坤卦は牝馬の貞に利ありと。牝馬の貞とは柔順の德ありて能く事に堪へて成功するに喩ふ。○柔氣……柔和氣質。○治……治一本には治に作る。○天地……父母に譬ふ。○露……孤露で父母に離るゝこと。○恃怙懷哺……恃は母、怙は父の稱。懷はふところに抱かるゝこと。哺ははぐみそだつこと。要するに父母に抱かれ養ひ育てらるること。○匍匐之齒……はらばひする幼年の年頃。

拿意 亡妹の人となりを明す。

講義 考へ思ふに亡妹和氣の朝臣の氏は常に柔順の婦德を養ひ陶き、柔和の氣質をみがきおさめたる誠に婦人として典型的の人であつた。然るに早くより父母の養育より離れ、嬰孩の年には既に父母の死別に遇ふ。未だ父母の懷に抱かれはぐくみ育つ頃、卽ち匍匐の年頃に於て早くもみなし兒となつたのである。

所冀崇四德於母儀。何圖穿三泉乎夭死。嗚呼哀哉悲哉奈何

講方 冀ふ所は四德を母儀に崇めんことを。何ぞ圖らん三泉に夭死を穿せんとは。嗚呼哀れなる哉、悲しい哉、奈何せん。

字釈 ○四德……婦人の四德、言・德・功・容。○母儀……人の母たる模範。○穿……墓穴のこと。○三泉……地下にある三重の泉で死者の趣く所。○夭死わかじに。○奈何……何ぞかくの如きの意。

拿意 亡妹の夭折せしことを明す。

講義 眞體等が亡妹に對して期待し且つ冀ひしことは、亡妹がいつまでも永らへて婦人の四德を具へ、他の人々から人の母の模範として崇敬せられんことであつた。然るに何ぞ圖らんや夭死して早くも三泉の墓穴に旅立たんとは。あゝ哀れなるかな、誠に悲しいかな。どうしてやかくの如く不運なるや。

眞體等悲連枝之半枯。痛同氣之一休。淚與朝露泣泫。心將晨霜消竭

講方 眞體等連枝の半枯たるを悲しみ、同氣の一り休することを痛む。淚は朝の露と與に泣泫し、心は晨の霜と將んじて消竭す。

字釈 ○連枝……兄弟のこと。○同氣……兄弟のこと。○泣泫……泣哭して淚流れ悲慨慷慨するさま。○消竭……消えつくること。

拿意 眞體等の悲しく歎く有り樣を記す。

講義 眞體等已に兄弟の半數を失ひたるを常に悲しんでゐたのであるのに、今また殘りの兄弟の中の一人を失ひたることは堪へ得ざる痛痍事である。悲淚は露の如くに朝な朝なに流れ落ち、心は晨の霜の消えるその如くに滅入り、たゞたゞ悲しさのみ胸に迫り來る。

日月遄流七七忽臨。謹以天長三年十月八日。先人所遺土佐國久滿幷田村莊。美作國佐良莊。但馬國針谷田等。永奉入神護寺傳法料（田數在別）兼延龍象演說大日經。幷設百味奉獻三寶

講方 日月遄く流れて七七忽に臨めり。謹んで天長三年十月八日を以て先人の遺す所の土佐の國の久滿幷に田村の莊美作の國佐良の莊と但馬の國針谷の田等永く神護寺の傳法料に奉入す。（田數別に在り）兼て龍象を延べて大日經を演說

し、幷に百味を設けて三寶に奉獻す。

字釈 ○遄……速きこと。○延龍象……名僧を延請すること。○莊……莊田のこと。○百味……種々の好味より成れる食物を云ふ。百とは大數に就く語である。

拿意 七七日忌の供養會の有り樣を記す。

講義 日月速かに過ぎ去つて早や七七日忌に臨めり、謹んで天長三年十月八日の日附を以て祖先より傳はる所の土佐の國の久滿、並に田村の莊田と美作の國佐良の莊田と但馬の國針谷の田等を永く神護寺の傳法料として奉納す。（田數などは別の目錄に記す）兼ては名僧を延請して大日經を演說し、幷に百味等の種々の好味をしつらへて三寶に奉獻し、供養す。

伏願藉此妙業。濟拔殁魂。五智顯赫日之容。三部現坐月之貌。見本有之莊嚴。證妙覺之理智

講方 伏して願くは此の妙業に藉つて殁魂を濟拔せん。五智赫日の容を顯はし、三部坐月の貌を現じ、本有の莊嚴を見妙覺の理智を證せん。

字釈 ○三部……佛部・蓮華部、金剛部。五智は金界に約し、三部は胎界に約す。○坐月……月輪に坐すること。

拿意 正しく願意を明す中、特に亡妹の得脫を祈る。

講義 伏して願ふらくは此の勝妙の功德力によつて獨り逝ける亡妹の靈を拔濟せんことを。そして五智の光暉赫々と輝き顯はれ、三部坐月の貌を具現し、本有の莊嚴を圓成して妙覺の理智を證得せんことを祈る。

先考契一實於如如。先妣得十力乎智智

講方 先考一實に如如に契ひ、先妣十力を智智に得む。

字釈 ○契……契證のこと。○十力……是處非處力・業力・定力・根力・欲力・性力・至處道力・宿命力・天眼力・漏盡力。

拿意 願意を明す中兼ては父母の得脫を祈り奉ることを明す。

講義 兼ねては先考萬法如如の一實に契證し給ひ、また先妣は一切智智の十力を體得して遥かに佛果に悟入せしめ給はんことを祈り奉る。

無明黑暗之鄉。妄想顚倒之宅。同照心佛之光明。共焚慧炬之熾炎

講方 無明黑暗の鄉と妄想顚倒の宅、同じく心佛の光明を照して共に慧炬の熾炎を焚かん。

字釈 無明黑暗之鄉……衆生が無明（煩惱）によりて生死界に流轉し、光明なき生活をなすによりて黑暗の鄉といひしなり。○妄想顚倒之宅……非理を理と考へ、非常を常と思ふ顚倒の世界を指し、此れ迷ひの衆生をいふ。○熾炎……火の盛んに燃ゆること。

拿意 結言として一切衆生平等利益の義を明す。

講義 無明黑暗の鄉、或はまた妄想顚倒の宅に迷へる一切衆生たちも、皆等同に心佛の光明に照らされて共に佛智を盛んに輝かして、佛果に悟入せんことを祈る。

七一　爲弟子僧眞境設亡考七七齋願文

爲弟子僧眞境設亡考七七齋願文

講方 弟子の僧眞境が亡考の七七の齋を設くるが爲の願文。

字釈 ○眞境……眞境法師の行狀は古來より未詳とされてゐる。

拿意 初に題名を揭ぐ。

講義 弟子の僧眞境が亡父の七七日忌に當りて供養會を儲すの願文。

夫恩河深而無底。德山峻而衝天。林鳥猶知反哺。尤靈豈能遺忘

【讀方】夫れ恩河深うして底無く、德山峻ふして天を衝けり。林鳥猶ほ反哺を知る。尤靈豈に能く遺忘せんや。

【字釈】○德……父母の恩德を指す。○反哺……親に養はれし御恩を養ひかへすこと。○尤靈……萬物の中で最も靈なるもの、即ち人類をいふ。

【拳意】父母の御恩德の深高なるを明す。

【講義】夫れ恩ふに父母の御恩德は深河よりも深うして極れる底なく、高山よりも高うして天を衝く程である。此の父母の御恩德に對してはかの林に巣食ふ鳥ですらも反哺して御恩返しをなすとか、さればましてや萬物の中の最靈たる人類に於てはどうしてや忘れ得やうな、忘れ得ざる所のものである。

尼父誡其慎終。金仙示其擔棺。難忘難報者其只嚴父之德也

【讀方】尼父は其の終を慎むことを誡め、金仙は其の棺を擔ふことを示す。忘れ難く、報じ難き者は其れ只嚴父の德なり

【字釈】○尼父……孔子のこと。○誡其慎終……此れは『論語』に出でたる語で『論語』學而篇に曰く「終りを慎み、遠きを追ふときは民の德厚きに歸す」と。○金仙……釋迦如來を指す。○擔棺……釋尊が淨飯大王の黄金の棺を肩にになひ以て孝道を盡せしを指す。○嚴父……父をいふ。

【拳意】父母の御恩德に仲々報じ難きを明す。

【講義】かく樣に深高なるは父母の育養の御恩德であるけれど、併しその御恩德に對しては仲々報じ難きものである。かの孔子は論語の中に「父母の一生の終りの喪の禮を大切にせよ」と誡しめてゐる程なれば父母生存中の孝行は云ふも更なりであり、また釋迦如來は御父君淨飯大王の葬送に當りては父王の棺を肩に擔ひ以て最後の孝道を盡せしとかや。誠に忘れようとても忘れ得ざる

は父母の育養の御恩德であり、また報ひ奉らんとして仲々に報じ難きは全くこれ父母への御恩返しである。

伏惟先考故石州錄事參軍弓氏。庭訓有餘提撕無極

【讀方】伏して惟れば先考故の石州の錄事參軍弓の氏は庭訓餘り有り、提撕極り無し。

【字釈】○石州……石見の國。○弓氏……弓削の連にして姓。○庭訓……父子の間に於ける教訓の峻厳なること。此れは『論語』季氏篇に出でたる、孔子がその子たる鯉に對して私心なく峻厳に庭前に於て教へ訓せしことに基く。○提撕……後進を指導すること。

【拳意】眞境の亡父が生前よく子供達を教導せしことを明せしもの。

【講義】伏して惟れば我が先考たる故の石見の國の錄事參軍たりし引削氏は、子を教訓し、指導するに峻厳にして私心なく、然も懇切丁寧なること此の上もなき有り樣であつた。

常冀天福善兮帝私寵。弓門光乎瓜瓞蕃

【讀方】常に冀くは天善に福して帝私寵したまへり。弓門光て瓜瓞のごとくに蕃からんことを。

【字釈】○天福善……『尚書』に曰く「天道は善に福ひし、淫に禍ひす」と。○弓門……引削氏。○光……榮え耀やかす。○瓜瓞……瓞は小き瓜。瓜の蔓に澤山に小なる實を結びたることにして子孫の榮え絶えざるに喩ふ。○蕃……しげりはびこること。

【拳意】父のいつまでも幸多からんことを祈り、家門の繁榮を願望せしことを明す。

【講義】常に冀しことは、此の上とも天道より幸福を授り、上御一人より特別に寵遇を賜はり、以て弓削氏の家門此の上とも榮え輝きて瓜瓞の盛んに榮ゆるその如くに益々榮えんことを祈つて居つたのである。

何圖降年短兮返眞促矣

【讀方】何ぞ圖らん、降年短うして返眞促かならんとは。

【字釈】○降年……天よりうけたる命。○返眞……死のこと。『漢書列傳』三十七に楊王孫が曰く、「眞に返るときは冥冥として形もなく、聲もなし」と。

【拳意】眞境が父短命にして逝去せしを明す。

【講義】然るに矢のごときとをどうしてや思ひもうけよや、思ひもうけぬことであつた。即ち天命短くして逝去の事がかくも早からうとは。

弟子等心燒憂燼肝摧悲戟。烏光矢激七七忽臨。是故奉爲先考敬寫金剛頂瑜伽眞實大敎王經一部三卷。兼設齋筵供養三寶。鐘梵斷而亦續。香華散且聚

【讀方】弟子等心憂の燼に燒かれて、肝悲みの戟に摧く。烏光矢のごとくに激して七七忽に臨めり。是の故に先考の奉爲に敬んで金剛頂瑜伽眞實大敎王經一部三卷を寫して兼ねて齋筵を設けて三寶を供養す。鐘梵斷へて亦續ぎ、香華散じて且聚る。

【字釈】○燼……火のこと。○烏光……日光。○激……激迅で極めて早きこと。○鐘梵……鐘聲と梵唄。

【拳意】先考の七七日忌の供養會の有り樣を記せしもの。

【講義】弟子眞境等突然に父の死に逢つて心は恰も憂の火に燒かるゝが如くに悲苦に滿たされ、肝は恰も悲しみの戟に打ち摧かるゝ程に悲哀に閉ざされぬ。かく悲しみ悼みつゝある間に日光は矢の飛び去るが如くに極めて早く過き去つて早や七七日忌になりぬ。是の故に先考の追善の奉爲に敬んで金剛頂瑜伽眞實大敎王經一部三卷を書寫し來り、兼ねては齋食の法筵を設けて三寶に供養し奉る。その法筵の有り樣は鐘聲梵唄代る代る交々相ひ續いで響き渡り、香華或は散じ、或は聚りて盛んに供養され、法悅の境地を現出して隨喜此の上もなき有り樣である。

伏願藉此善業奉翊梵魂。三十七聖濡足本誓。一乘甘露灌頂佛種。開慧眼見不生。敷心蓮鑒圓鏡

【讀方】伏して願くは此の善業に藉つて梵魂を翊け奉つらん。三十七聖足を本誓に濡し、一乘の甘露頂に佛種を灌がん慧眼を開いて不生を見、心蓮を敷いて圓鏡を鑒ん。

【字釈】○三十七聖……金剛界三十七尊のことで、三十七尊とは五佛・四波羅蜜十六大菩薩・八供養菩薩・四攝菩薩である。○濡足本誓……濡足とは『淮南子』第二十泰族訓に曰く「溺れたるを拯ふの人は足を濡さざることを得ず」と。本誓とは佛が一切衆生を濟度し盡さずんば止まずとの誓願を指す。○灌頂佛種……一乘の法門を聖靈の頂に灌ぎ、心内の佛種を開顯すること。○敷心蓮……凡夫の心は合蓮華に喩へらる。よりてその合蓮華の心を開くことは開悟せしむることとなる。○圓鏡……大圓鏡智のこと。

【拳意】正しく願意を明せしもの。

【講義】伏して願くは此の妙善の功德力によりて獨り逝ける先考の靈を翊け奉らんことを。そして更に三十七尊の聖衆は一切衆生濟度の本誓を發揮せられて足を迷水に運ばれて溺れる梵靈を救濟し、一乘の甘露の法門を頂に灌ぎ心内の佛種を開顯し、慧眼を開いて本不生の眞理を悟り、心蓮を開いて眞如を覺り、大圓鏡智を如實に體得せんことを祈り奉る。

法水汲而無盡。佛力用而不窮。灑無盡之法水。沐無邊之有情。共照長夜之迷室。早遊常樂之覺路

【讀方】法水汲んで盡くること無し。佛力用ひて窮らず。無盡の法水を灑いで無邊の有情を沐して共に長夜の迷室を照し

て早く常樂の覺路に遊ばん。

字訓 ○常樂……常・樂・我・常の四德の中の二を揭ぐ。○覺路……菩提の道なり。

拿意 一切衆生平等利益を願つて結言とす。

講義 法門の功德水は汲めども盡きず、佛の救濟力は用ひても窮はまることなしとかや。されば無盡の功德水を以て無邊の一切の衆生に灌らしめ、共に一切衆生の迷妄を照破して速かに常樂の菩提の道に優遊せしめんことを祈る次第である。

七二 招提寺達嚫文

招提寺達嚫文

講方 招提寺の達嚫の文。

字訓 ○招提寺……今の唐招提寺のこと。唐招提寺は舊名を龍興寺または建初律寺といひ、略して招提寺といふ。天平寶字三年の建立なり。○嚫嚫文……達嚫（dakṣiṇā）は叶施又は施物と譯す。今此の達嚫の文は招提寺の如寶大德が齡八十に及んで四恩を報ぜんが爲に經を寫して講供せしときの表白なりと稱せらる。

拿意 初に題名を揭ぐ。

夫念風一扇識海波濤。覺月乍飛智山崛嶇。心暗卽所遇悉禍。眼明則觸途皆寶。如來覺之優遊萬德之殿。衆生迷之沈淪三途之獄。沈迷之端不可不驚。昇悟之機不可不仰

講方 夫れ念風一び扇ひで識海波濤し、覺月乍に飛んで智山崛嶇たり。心暗きときは卽ち遇ふ所悉く禍なり。眼明かなるときは途に觸れて皆寶なり。如來は之を覺つて萬德の殿に優遊し、衆生は之に迷つて三途の獄に沈淪す。沈迷の端驚かずんばあるべからず。昇悟の機仰がずんばあるべからず。

字訓 ○念風……一念不覺の無明煩惱のこと。○一扇……一び起ること。○識海波濤……識海は第八識の寂靜の海。波濤は六七二識の妄法の起ること。卽ち一念忽起の無明煩惱のこと。○覺月乍飛……覺とは始覺の智慧のこと。卽ち始覺の智慧が善知識の敎導に遇つて忽ちに發心すること。○智山……佛智の不動轉なること。○崛嶇……高くそばだてること。○觸途皆寶……六根の觸るゝ所悉く絕對の價値を發揮して一切のものを生かし、それぞれの物の本來の使命を認むること。○沈迷之端……上の念風一扇の文を受く。○昇悟之機……上の覺月乍飛の文を受く。

拿意 迷悟の相を並べ雜へ明す。

講義 夫れ思ふに一念不覺の無明煩惱一び起つて八識の寂靜海に迷妄の波濤盛んに起るに至るものであり、また始覺の智慧が善知識の敎誘に遇つて忽ちに發心するに至れば佛智の山高くそゝり立つに至るものである。煩惱に覆はれて心暗きときは卽ち見聞する所のもの悉く皆迷妄となり、若し心眼を開き佛眼の明を以て一切の物に接すれば一切の物の本當の價値を發揮せしめて皆寶となすことが出來る。如來は此の理りを覺つて萬德圓滿の佛果の殿上に優遊し給ふものであり、衆生は此の理りを悟らずして煩惱に迷はされ三途の獄界に沈淪してゐるものである。されば沈迷のきざしも一念の無明に起因してゐるのであるが故に、その起因たるは實に一念てふ些末の妄念にあることに氣附けばこれ誠に驚くべきことにあらずや。また覺悟の佛果に昇るはずみも發心の一念にかゝつてゐることなればこの理りをよく仰信し、考へねばならぬことである。

是故我大師薄伽梵能說此趣提撕一子。彼妙偈云。我覺本不生云云普賢法身遍一切云云諸行無常云云阿婆迷云云若有衆生一聞此法五逆氷銷四重露落。忽超凡境乍入佛位

講方 是の故に我が大師薄伽梵能く此の趣を說いて一子を提撕したまふ。彼の妙偈に云く、我覺本不生云云 普賢法身遍一切云云 諸行無常云云 阿婆迷云云 若し衆生有つて一び此の法を聞けば、五逆氷のごとくに銷え、四重露のごとくに落つ。忽ちに凡境を超えて乍ちに佛位に入る。

字訓 ○一子……一切衆生のこと。卽ち『涅槃經』卷第五四相品に曰く「如來等しく一切衆生を視ること猶し一子の如し」と。○我覺本不生……此れは『大日經』具緣品の文である。彼の品に曰く「我れ本不生を覺り、語言の道を出過し、諸過僻離することを得、因緣を遠離し、空は虛空に等しと知る」とあり。此れ悟界を示す。○普賢法身遍一切……此れは『略出經』第四の文である。卽ち曰く「普賢法身一切に遍じて能く世間の自在主となる。無始無終にして生滅なし。性相常住にして虛空に等し」とあり。○諸行無常……此れは『涅槃經』第十四聖行品の文である。彼の品に曰く「諸行無常、是生滅法生滅滅已、寂滅爲樂」とあり。○阿婆迷……此れは『大日經』具緣品の中に說かれたる入佛三昧耶の眞言である。彼の眞言に曰く「南麼三漫多勃陀南阿三迷毗履三迷三麼曳莎訶」とあり。○五逆……殺父・害母・破和合僧・出佛身血・殺阿羅漢の五無間業を指す。○四重……殺・盜・婬・妄の四波羅夷罪を指す。

拿意 佛の救濟の有り樣と、法門の功德力とを明す。

講義 そこで此の迷悟の理りについて我が大師薄伽梵たる大聖釋迦如來は能く說き明し給ひ、一切衆生を己が子の如くに憐愍し、敎導し給ふ。如何に敎導し給ふかといへば、かの『大日經』の中には「本不生を悟り、絕對の佛の境界に悟入す」等と說かれ、また『略出經』には「普賢法身たる金剛界大日如來は一切處に遍じて最妙善の德を成就圓滿したまへる尊なり」等と說かれ、また『涅槃經』には「諸行は無常なり、是れ生滅の法なり」等と敎誡し給ひ、また『大日經』には入佛三昧耶の眞言を說いて「阿三迷毗履三迷」等と說示せられてゐるのである。そこで若し衆生あつて此れらの法を心耳を澄ませて心に入れて聞くならば、その妙功德力によりて五逆罪も恰も氷が暑熱に遇つて溶くるが如くに消滅し、また四重罪も朝露の落つるが如くに消え去り、忽ちにして凡境を超越して佛位に入ることが出來ると說示せられてゐるのである。

伏惟招提法統律將。體潔浮華之世。心淸濁濫之時

講方 伏して惟れば招提の法統律將は體浮華の世に潔く、心濁濫の時に淸めり。

字訓 ○法統……『便覽』によれば宗首の類なり、古は僧統沙門などの勅號あり今は嘉稱して法統といふといへり。私に思ふに法統は法頭で、寺院を掌る僧官を指すならん。○律將……如寶は鑒眞和尙の弟子にして鑒眞の遺囑を受け繼ぎて律宗の法將なるを以て律將といひしなり。○浮華……輕々しくしてはでやかなること。○濁濫……にごりみだれたること。五濁のこと。

拿意 如寶和尙の德行の淸らかにして勝れたるを讚ふ。

講義 伏して惟るに唐招提寺の宗首にして律宗の法將たる如寶和尙は浮華の世に處し乍らも戒體を守りて身潔白に、末世濁亂の時世にあり乍らも心濁されず淸淨にまします。

羯磨百千波瀾口吻。調伏萬卷括囊舌上

講方 羯磨の百千口吻に波瀾し、調伏の萬卷舌の上に括囊す

字訓 ○羯磨……コンマ（kamma）は巴利語にして譯して作法、業、辦事と

いふ。○波瀾口吻……波瀾は文章や辯說の變化自在たること。口吻は口さきで辯說のこと。○調伏……律のこと。卽ち『名義集』第九三藏篇に曰く「毘奈耶は圓量の鈔に云く、此には調伏と云ふ。謂く三業を調練し、過非を制伏するなり」と。○括囊……括は結、囊は物を貯ふる所以、以て心の知を藏すに喩ふ。

參考 如寶がよく戒律に通曉せるを讚ふ。

講義 千萬の威儀作法悉くに通曉して之を說き明さざるはなく、また戒律の萬卷の經典を悉く讀破し、これを心に括囊して知らざるはなき大律學者である

救蟻之年入室寫瓶。乘法之日臨壇翻醍

譯方 救蟻の年室に入つて寫瓶し、乘法の日壇に臨んで翻醍す。

字釋 ○救蟻之年……八歲の異名、第二卷に出づ。○入室寫瓶……鑒眞和尙の弟子となりて法門を傳ふること。○乘法……羯磨の作法を以て具足戒を授くること。○醍醐……醍はこほずことで他の人に授けることを指し、醍は醍醐で、戒を醍醐に比す。卽ち他の人々に戒を授くること。

參考 傳法授法の有り樣を明す。

講義 如寶和尙は救蟻の年たる八才の時に鑒眞和尙の室に入りて法門を傳へ、後律家の法將となりて傳へし處の戒律をば壇上に登りて他の多くの弟子達に具足戒を授け、律の弘布に此れ精進し給ふ。

一人尊之拔任。四衆憑之受戒。可謂人中拔楚法城之葛亮

譯方 一人之を尊んで拔任し、四衆之に憑んで戒を受く。謂つ可し、人中の拔楚、法城の葛亮なりと。

字釋 ○一人……上御一人の御こと。○拔任……拔擢して招提寺の法統となせること。『元亨釋書』如寶傳に曰く「延曆二十三年に奏して律講を招提寺に開く」と。○四衆……比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷のこと。○拔楚……拔きんでゝ秀でたる人をいふ。卽ち拔楚とは衆木の中で尤も長く秀でたる木のこと。○法城……佛の敎法の堅固にして依憑すべきを城に喩へしもの。○葛亮……『蜀志』第五に曰く「諸葛亮は琅邪陽都の人なり。躬から隴畝に耕す。好んで梁父の吟を爲る。每ねに自ら管仲樂毅に比す。時に先主、新野に屯す。徐庶之に見えて謂て曰く、諸葛孔明は臥龍なり。將軍（劉備のこと）豈に見ることを願はんや。此の人就いて見るべくして屈して致すべからず。宜しく駕を枉げて之を顧るべし。先主（劉備のこと）遂に亮に詣る。凡そ三び往いて乃し見る。因て人を屏けて與に事を計る之を善しとす。是に於て情好日に密なり。關羽張飛等悅ばず。先主の曰く、孤（王侯の謙稱）が孔明あることは猶は魚の水あるがごとし。願くは復た言ふことなかれ。尊號を稱するに及んで亮を以て丞相となす」とあり。これ諸葛孔明が田夫に身を起して丞相となり、劉備をして予にとりては孔明は恰も魚と水との關係にありとまで信賴せらるゝに至りし程の人傑たるを指し、今は如寶が法城を護持するに於て劉備に於ける葛亮にも匹敵するの意。

參考 如寶の功績を讚ふ。

講義 上御一人に於かせられては如寶の才を認められ給ひ以て之を拔擢して招提寺の法統となし給ひ、四衆はその高德を慕ひ依憑して戒を受け、化を蒙むるに至る。誠にこれ人中に於ても最も傑出せる感人であり、佛法擁護に於てはかの劉備に於ける葛亮の如く感功を立たさせ給へる人といふことが出來るであらう。

于時年華數萎八十忽臨。所作已辦。何憂何慮。然猶思一乘可崇。四恩可答。謹率法弟壽延等。奉寫大般涅槃大乘印佛等一百二十七卷。兼延喝百僧講讀一乘。爾乃萬德開慈悲之蓮眼。一車揮智慧之刀刃。龍象透迤鐘梵寥亮。六樂雷震百供雲湧

譯方 時に年華數々萎み、八十忽ちに臨めり。所作已に辦

す。何をか憂へ、何をか慮らん。然れども猶ほ思はく、一乘は崇むべく、四恩は答すべし。謹んで法弟壽延等を率ゐて大般涅槃大乘印佛等の一百二十七卷を寫し奉り、兼ねて百僧を延嘱して一乘を講讀す。爾れば乃ち萬德慈悲の蓮眼を開き、一車智慧の刀刃を揮ひ、龍象透迤として鐘梵寥亮たり。六樂雷のごとくに震ひ、百供雲のごとくに湧く

字釋 ○年華……歲月のこと。○所作已辦……自利利他已に圓滿せること。○壽延……壽延の傳記未詳。○大般涅槃……大般涅槃經のことで、これに唐時代までに翻譯されしものに大般涅槃經三卷東晉法顯譯、大般涅槃經四十卷、北涼曇無讖譯等あり。○大乘印佛……印佛經は古來より未詳。○爾乃……以下は三寶の功德を讚歎す。○萬德……佛寶の德を明す。『舍利禮の文』に「萬德圓滿の釋迦如來」とあり。○一車……法寶を明す。一車は一乘の法門のこと。○龍象……僧寶を明す。○透迤……つらなりつゞくさま。盛んなるさま。○寥亮……靜澄のさま。また『便覽』には『王儉褚淵碑文』を引きて曰く「金聲玉振區宇に寥亮たり。輪が曰く、寥亮は聲の高きさま」と。されば聲の高きさまの形容なり。○六樂……黃帝以下六代の樂。卽ち黃帝樂（雲門）・堯帝樂（咸池）・舜帝樂（大韶）・禹王樂（大夏）・湯王樂（大護）・武王樂（大武）。○百供……種々の供具。○雲湧……其の多きを讚ふ。

參考 供養の有り樣を述べたまふ。

講義 かくの如くにして歲月は速かに過ぎ去り早や八十の齡に臨むに至る。自利利他所作悉く圓滿し給ふ今日に於て憂もなく苦慮もなし。然るにも拘らず思念し給ふに、一切衆生悉有佛性の義を宣示する所の涅槃經の一乘の法門は誠に此れ崇信すべきものであり、また四恩の高恩には報答せねばならぬと。そこで謹んで法弟壽延等を率ゐて大般涅槃經・大乘印佛經等一百二十七卷を書寫し奉り、兼ねては百僧を延請して一乘の經典を講讀し奉る。その講讀の有り樣は、萬德圓滿の佛は慈悲の蓮眼を開き給ふて拔濟の功德を垂れ給ひ、一乘の法門は眞實の智惠の刀刃を揮つて煩惱の縛を切り給ふ。衆僧は逶迤として相ひ連り、鐘聲梵唄代る代る交々續いて高らかに響き渡り、六樂雷のごとくに震ひ響き、種々の供養物雲の如くに無量無數に供養し奉り誠に盛大を極め、法悅至極の法筵である。

伏願擧斯白業。沃彼四恩。六大所遍。皆是我身。十界所有。並是我心。盡虛空洞法界。同飽一味之醍醐。齊登三點之覺苑。承和元年二月十一日

譯方 伏して願くは斯の白業を擧げて彼の四恩に沃がん。六大の遍ずる所皆是れ我が身なり。十界の有る所並に是れ我が心なり。虛空を盡し、法界を洞かんじて一味の醍醐に飽き、齊しく三點の覺苑に登らん。承和元年二月十一日。

字釋 ○白業……一切の善業のこと。○沃四恩……四恩に報謝すること。○六大……前五大と識大。○十界……六凡四聖のこと。○盡虛空等……虛空を盡し法界に遍滿すること。○一味之醍醐……一乘の法味のこと。○三點覺苑……三點は涅槃經に說く所の三點で法身・般若・解脫を云ふ。覺苑は覺りの世界のこと。

參考 正しく願意を明す。その中四恩までは正しく結願であり、六大以下は總願である。

講義 伏して願くは此の一切の善業を以てかの四恩に報謝せんことを。兼ねては六大の遍ずる所皆是れ我が身心であり、十界のあらゆるもの皆悉くこれ我が心身なれば盡虛空遍法界の一切の有情皆この一乘の法味の功德を蒙りて拔濟せられ、皆一樣に法身・般若・解脫の三點の覺りの世界に證入せんことを祈る次第である。時にこれ承和元年二月十一日なりき。

七三　爲亡弟子智泉達嚫文

爲亡弟子智泉達嚫文

【訓方】亡弟子智泉が爲の達嚫の文。

【字訓】○智泉……智泉は讃州の人、姓は菅原氏、母は佐伯氏の出にして大師の姉。延暦八年二月十四日生る。延暦二十三年十六歳にして剃髮受戒、大同末年河内高貴寺に寓す。後大師に侍し高雄山に居る。弘仁三年高雄山に三綱を置くや師擢でられて羯磨那陀に任じ、十二年四月大師の指授を蒙り、諸天灌頂神菩薩灌頂神二尊を圖寫す。夙に畫技に秀で、世にその畫風を智泉樣と稱せらる。天長元年九月高雄山神護寺二十一口定額の數に入る。翌二年病に罹り、二月十四日高野山の本院に寂す。壽三十七。臘二十二。

【事意】初に題名を揭ぐ。

【講義】亡弟子たる智泉の爲の達嚫の文。

夫寥廓性虛離諸因而凝然。飄蕩染海隨衆緣以起滅

【訓方】夫れ寥廓たる性虛は諸因を離れて凝然たり。飄蕩たる染海は衆緣に隨つて以て起滅す。

【字訓】○寥廓……ひろ〻として大なるさま。幽遠のさま。○性虛……法性の大空のこと。○離諸因……本不生を指す。卽ち『大日經疏』第六に曰く「遠離諸因緣とは若し法界の體　生滅の相あらば則ち因あり、緣あつて宣說することを得べし。而るに今法、緣に從つて生せば卽ち自性なし。若し自性なくば則ち本不生なり」と。○凝然……不生不滅にして不動轉のさまをいふ。以上は眞如門を說き明せしもの。○飄蕩……以下は生滅門を說き明す。飄蕩とはユレウゴクことで動轉することをいふ。○染海……七識波浪の妄海。○隨衆緣等……因緣業に依つて發起生滅するをいふ。

【事意】總じて眞如生滅の二門に就いて說き明せしもの。

夫れ寥廓たる性虛離諸因緣大幽遠なる法性の大空は諸因緣を離れたる本不生にして不生不滅不動轉常住の世界であり、飄蕩として動轉の妄法の海は諸の因緣業に依つて發起されたるものにしてこれ生滅・轉變有爲の世界である。

故能一念妄風鼓波濤心壑。十二因緣化生死迷夢。識幻構三有獄。色焰逸六趣野。

【訓方】故に能く一念の妄風は波濤も心壑に鼓ち、十二の因緣は生死を迷夢に化す。識幻三有の獄を構へ、色焰六趣の野に逸す。

【字訓】○一念妄風……一念忽起の妄法。○鼓波濤心壑……六七二識を第八識の大海の上に打ち起すこと。○化生死迷夢……生死の三界六道の迷夢を化作すること。○識幻……能緣の境界。○色焰……六七二識所緣の境界。○六趣野……六趣各々が所宅とする所。

【事意】別して生滅の相を明す。

【講義】そこで更に生滅の相を述ぶれば、無明の一念忽起することによりてよく妄法を六七の二識が第八識の大海の上に打ち起し、煩惱業の十二の因緣は三界六道の生死の迷夢をよく化作するに至るものである。されば六七の二識は能緣の主體となりて三有の獄界を構築し、また六七二識は恰も幻・陽燄の如き六趣所宅の野に執着せしめてほしいまゝにたはむれしむるに至る。

遂使無明羅刹斫龜鶴之命。異滅旋陀殺蜉蝣之體。乍無乍有旣如浮雲。忽顯忽隱還似泡沫。

【訓方】遂使じて無明の羅刹は龜鶴の命を斫り、異滅の旋陀は蜉蝣の體を殺す。乍ちに無く、乍ちに有ること旣に浮雲の如く、忽ちに顯れ、忽ちに隱るゝこと還つて泡沫に似たり

【字訓】○無明羅刹……『無明羅刹集』によれば、諸の羅刹衆の人命を奪ふの譬を說き、而して無明を羅刹と名け、識乃至生老死の十一支を所從の鬼神衆となすと說けり。羅刹は惡鬼の通名である。○龜鶴之命……長壽に喩へていふ。○異滅旋陀……異滅は生・住・異・滅の四相の中の二。旋陀は旋陀羅で、旋陀羅は屠殺などをなすもので印度の四姓の中の下位に屬するもの。今は屠殺者の義にとる。○蜉蝣之體……かげろふは朝に生じ夕に死す、その如く無常の體なること。

【事意】別して生滅の相を明す中の無常短命の相を明す。

【講義】かくの如くにして途には無明の羅刹鬼は龜鶴の如き壽命を斫り奪ひ、異・滅の二相は恰も旋陀羅屠殺者の如くに我れ等が蜉蝣の如き短命の體を殺するに至る。かくて生れ死し、死し生れて三界に生死流轉す。その生死流轉の速かなること恰も浮雲の如に忽ちに滅し、忽ちに生ず、忽ちに顯れ、忽ちに隱るゝことまた泡沫の如くにはかなきは我が命である。

苦樂天獄之縣。憂喜人畜之落。可歎可歎幻化子。悠哉悠哉乾城客

【訓方】天獄の縣に苦樂し、人畜の落に憂喜す。歎くべし、歎くべし幻化の子。悠なるかな、悠なるかな乾城の客。

【字訓】○苦樂……『摩訶摩耶經』卷上に曰く、「佛忉利天に昇つて摩耶の至るを見る。便ち梵音を以て摩耶に白して言く、身所經の處、苦樂と俱なり。まさに涅槃を修して永く苦樂を離るべし」と。○落……聚落で村里のこと。○幻化……幻事と變化なり。無明のために幻燄の如くに化作せられること。○悠……佛の境界をはるかに隔てる義。○乾城……乾闥婆城のことで三界六道の世界に譬ふ。

【事意】別して生死の相を明す中の三界六道の苦樂憂喜を明す。

【講義】生れては死し、死しては生れかくて三界六道に輪廻轉生し、或は天堂の世界に生れて樂しみ、或は地獄の世界に墮して苦しみ、或は人間界に生じて喜び、或は畜生界に墮して憂ひ悲しむに至る。誠になげかはしきにあらずや無明によりて幻の如くに化作せられたる三界六道の有情よ。佛の境界を遙か遠く離れたる三界六道の有情よ歎かはしきにあらずや。

爰覺王垂悲接誘羣迷。智臣騎忍汲引衆慈。廣投教網瀧沈淪之魚。高張法羅罻飛散之鳥。

【訓方】爰に覺王悲みを垂れて羣迷を接誘し、智臣忍に騎つて衆慈を汲引す。廣く教網を投げて沈淪の魚を瀧ひ、高く法羅を張つて飛散の鳥を罻く。

【字訓】○智臣……菩薩の聖衆を指す。○騎忍……忍波羅蜜を以ての意。六道の中で人を濟度するは忍波羅蜜が最第一なるが故に今忍を擧ぐ。○衆慈……衆生の惡しき者。○高張……無色界には二十八天ある故に高く張るといふ。『華嚴經』卷五十九入法界品に曰く、「佛教の網を張つて人天の魚を瀧ふ」と。○罻……長柄の小さき網。

【事意】佛の教法を說示せられし所以を明す。

【講義】こゝに於てか覺王たる佛陀は慈悲の心を垂れさせ給ひて迷へる一切の衆生を救濟せんとし給ひ、また菩薩の聖衆は忍波羅蜜を以て惡しき衆生を攝化せんとし給ふ。そこで廣く教法の網を投げ布きて三界六道に沈淪せる所の魚を瀧ひ助け、また高く無色界二十八天までも法門の網を張りて人天に飛散せる鳥を捕へ救ひ給はんとし給ふのである。

宰以智慧之刀。煮以一味之鼎。三點四德之客日夜般樂。不二一如之主歲時無爲。無爲之爲誰敢思議之矣

【訓方】宰するに智慧の刀を以てし、煮るに一味の鼎を以てす三點四德の客日夜に般樂し、不二一如の主、歲時に無爲なり。無爲の爲誰れか敢へて思議せん。

字釈 ○宰……宰割の義。上の魚鳥の文字を受けて宰といふ。○智慧之刀……佛智を以て刀となし、衆生を済度して煩惱を摧破する義。○煮……上の魚鳥の文字を受けて煮るといふ。○一味之鼎……一實の法味を以て鼎となし、衆生を救済する義。○三點……法身・般若・解脫。○四德……常・樂・我・淨の佛果の四德。○客……始覺の如來を指す。○般樂……樂みてかへるを忘るゝこと。○不二……凡聖不二。○一如……始覺本覺同一になりたること。○歲時……歲は一年、時は四時。○無爲……自性の理に契ひたる義。○無爲之爲……自性正體智の上に起る所の大悲化他の後得智の用を指す。

[illegible]義 佛の化他の德の至妙なるを明す。

講義 佛の救濟の有り樣は佛智を以て刀となして衆生の煩惱を宰割して衆生をして覺らしめ また一實の法味を以て鼎となして衆生の無明を燒き拂ひ給ふ。かくて法身・般若・解脫の三點の顯現と共に、常・樂・我・常の四德を體得するに至りし始覺の如來は日夜に法味を樂しむに至り、遂には凡聖不二一如の本覺の如來となりて年年に自性の理に契つて無爲の境界に住するに至る。そして更にその無爲の爲たる自性正體智の上に起る處の大悲化他の後得智の用たるや此れ亦不可思議にして凡人には思議すること能はざる所である。

念亡我法化金剛子智泉。俗家謂我舅。入道則長子。孝心事吾二紀于今矣。恭敬稟法兩部無遺

講方 念ればこそ亡せる我が法化金剛の子智泉は俗家には我を舅と謂ひ、道に入ては則ち長子なり。孝心あつて吾に事ふること今に二紀。恭敬して法を稟く、兩部遺すことなし。

字釈 ○法化……弟子のこと。○金剛子……金剛の佛子で入曼荼羅者の稱。○舅……をぢ。智泉は大師の姉の子なる故に、大師は智泉の叔父に當り、智泉は大師の甥に當る。○二紀……一紀は十二年、されば二紀は二十四年なり。

[illegible]義 智泉と大師との關係を明し給ふ。

講義 常に思ふに、先きに遷化せる我が弟子金剛佛子智泉は俗緣の上からいへば我を叔父といひ、佛道に於ては我が一番初めの弟子に當る。孝心ありて吾に事ふること今に二十有餘年。恭敬尊信の誠心を以て法を受傳し、兩部の秘法等遺すことなく悉く此れを受け學び傳へたのであつた。

口密無非。豈唯嗣宗之不言。怒也不移。誰論顏子之不貳

講方 口密には非無し。豈唯嗣宗が言はざるのみならん。怒れども移さず、誰れか顏子が貳びせざることを論ぜん。

字釈 ○口密……口業、言語のこと。○嗣宗……『文選』四十三絶交書に曰く「阮嗣宗口に人の過を論ぜず、吾れ每に之を師とすれども未だ及ぶこと能はず」と。○怒也不移……怒れどもその怒氣を顏色に顯はさず、人に怒りを示めさざること。○顏子之不貳……顏子は顏回のこと。『論語』雍也篇に曰く、「孔子、哀公に對へて曰く、顏回といふものあり、學を好みき。怒りを遷さず、過を貳びせず」と。

講義 智泉の人となりが嗣宗、顏回のそれより以上に立派なりしことを明す。

講義 更に智泉の人となりの立派さをいへば、固く言行を謹しみ、たとへ一言半句にても非理なこと、人の過ちなどに就いては絶對に喋ることなどはない。そうであるからしてかの嗣宗は口に人の過ちを論ぜずと稱せられてゐるが、智泉に於てはそれ以上に非理の言を謹んでゐた樣であり、また怒りの心をよく制御して怒りの態度を他人に示すやうなこともなく、誠にいかなる時いかなる場合にても正しき言行であつた。從つてかの顏回は過ちを再び繰り返へさずと稱せられてゐるが、我が智泉に於ては再びせずでなしに始めから過ちはなかつたので、過ちなどを論ずる必要はないのであつた。

斗藪與同和。王宮與山巖。影隨不離。股肱相從。吾飢。汝亦飢。吾樂汝共樂所謂孔門回愚釋家慶賢。汝卽當之

講方 斗藪と同和と、王宮と山巖と、影のごとくに隨つて離れず。股肱のごとくに相ひ從ふ。吾れ飢うれば汝も亦飢ゑ吾れ樂しめば汝も共に樂しむ。謂はゆる孔門の回愚、釋家の慶賢汝卽ち之に當れり。

字釈 ○斗藪……斗藪（dhūta）は梵語で、また頭陀とも書す。之を譯して修治、洗除などといふ。煩惱の塵垢を拂ひ去りて佛道を求むること。僧の行く行く鏟穀を乞ひて修行すること。修行と同義。○同和……六和敬のこと。卽ち六和敬とは身和同事・語和同默・意和同志・戒和同修・見和同解・利和同均。要するに家の中にありて和合同居すること。○王宮……王宮に侍奉する時。○山巖……山中で修行する時。○股肱……輔佐の役であるが今は單に家來の意。○回愚……『論語』政篇に曰く「吾れ回と言ふに終日違はざること愚なるが如し」と。要するに顏回が孔子の敎訓を只々はい〳〵と聞けることで、顏回の篤實なることを譽められたるものである。今その如く智泉も篤實なるを云ふ。○慶賢……阿難尊者のこと。阿難（Ananda）を譯して歡喜・慶喜・喜賢・慶賢などといふ。阿難尊者は二十有餘年間佛に隨侍し、多聞第一と稱せらる。

[illegible]義 大師に常に隨侍せしことを明す。

講義 我れと智泉とは常に同行し、世間を修行して往行する際は云ふに及ばず、家の中にありても常に和合同居し、或は王宮に伺候する時、或はまた山中に於て修行する時等、あらゆる場合に於て影の如くに隨侍して離れず、家來の如くに相ひ從ひ侍る。從つて吾れ飢うれば智泉も亦飢ゑ、吾れ樂しめば汝も亦樂しみ、常に苦樂を相俱にして一心同體となりて修行して來たのであり、これ謂はゆる孔子の門下の顏回が孔子に篤實に事へたと稱せられてゐるが今汝はその顏回に當り、またかの釋尊の弟子の中で阿難尊者は二十有餘年も釋尊に隨侍して多聞第一と稱せられてゐるが、今汝はその阿難尊者に該當すと云つて良いのである。

所冀轉百年之遺輪。驚三密於長夜

講方 冀ふ所は百年の遺輪を轉じて三密を長夜に驚かさんことを。

字釈 ○轉百年之遺輪……百年の長壽を保つて我が遺法輪を轉布せんこと。○驚三密於長夜……三密の法鼓を鳴らして五道の長眠を驚かすこと。

[illegible]義 智泉に期待せし所を明し給ふ。

講義 そこで我れが智泉に期待して冀ひし所のものは、智泉をして百年の長壽を保たしめ、以て我が遺せし所の法輪を轉布せんことをであり、また三秘密の法門の法鼓を鳴らして煩惱に迷ひ眠れる五道の長眠を驚かし覺ますことをであつた。

豈圖請棺槨乎吾車。感有慟乎吾懷。哀哉哀哉哀中之哀。悲哉悲哉悲中之悲

講方 豈に圖らんや棺槨を吾が車に請ひ、有慟を吾が懷に感せしめんとは。哀れなる哉、哀れなる哉。哀が中の哀なり。悲しい哉、悲しい哉。悲が中の悲なり。

字釈 ○諸棺槨乎吾車……『論語』先進篇に曰く「顏淵死す。顏路、子の車を以て之れが椁をつくらんと請ふ」と。これは孔子の弟子の顏淵死去せしとき家貧しくして外側の棺を買ふこと能はざりしかば、顏淵の父の季路は本意なく思ひて、孔子の乘らるる車を賣り拂ひてその代金にて顏淵の外側の棺を拵へたき由、申し請ひたる逸話を指すのであるが、今此處での意味は、弟子の智泉が不幸短命にして、師の大師よりも先きに遷化し、師匠がその棺槨の世話をせねばならぬことは、恰も孔子の弟子の顏淵が短命夭壽にして孔子よりも先きに死し、孔子の乘れる車を賣つて槨（外側の棺のこと）を作らんと請ひしに似てゐるといふにあり。○有慟……慟は泣き入ること。『論語』先進篇に曰く、「顏淵死す。子これを哭して慟ず。從者の曰はく子慟ぜりと。曰はく慟ずること有りや。夫の人の爲めに慟ずるに非ずして誰れが爲めにせん」と。卽ち孔子が顏淵の爲めに泣かずして誰の爲に泣かんやとて泣き入りたるその有慟を今智泉の爲に感ずること。

【章旨】智泉の遷化を悼む。

【講義】然るに豈圖らんや智泉不幸にして夭折し、かの孔子の弟子の顏淵が短壽にして師に先き立ち、その槨を作らんが爲めに師の車を請ひしが如く、師たる我れが、弟子の棺槨を作り、またかの孔子が顏淵の爲めに有慟せしといふその有慟を我が一心に感じて慟哭せんとは。これ誠に哀悼の中の哀悼であり悲思の中の悲思で、悲哀の極みである。

雖レ云覺朝無夢虎。悟日莫幻象。然猶夢夜之別不レ忍不覺之涙。

【講方】覺りの朝には夢虎無く、悟りの日には幻象莫しと云ふと雖ども、然れども猶夢夜の別れ不覺の涙に忍びず。

【字釈】○夢虎……慧影の『智論疏』第二に曰く「凡そ夢法を論ずるに睡眠の時始めて夢みる。眠らざれば夢みず。人の睡眠の夢の中に虎を見て畏れ號叫するが如き、覺者之を見て其の夢なりと知ること爾なり。夢虎自若なり。衆生も亦爾なり。生死の床に臥して無明に覆はれ、睡眠に昏せられ、眠に隨つて五塵の夢を生じ、五欲の想を起す。諸法に取著して我我所の見を生ず」と。要するにこれ有爲轉變の人生の憂樂は本皆夢なることを指し、覺めての後は夢なりと知る如く、大覺の後には此の憂樂なき義を明せしにある。○幻象……『華嚴經』卷第四十四十忍品に曰く「男女及び象馬牛羊等を幻作す。幻物は知覺なし。また住處あることなし」と。要するに實體なきものをあるが如く化作せしもので、覺りの後には本不生際を知りて、假體に迷はされざることを示す。○夢夜……夢中のこと。

【章旨】有爲轉變、生滅の理りはよく承知してゐるけれども然も猶別離の悲哀に堪えざる義を示す。

【講義】凡そ有爲轉變、生滅は宇宙の眞理であり、此の世の無常の眞理に眼覺めて宇宙の永遠の生命を體得せる所謂覺れる者にとりては恰も夢虎の如き憂悲はなく、また恰も幻象の如き假體に迷はされることもなしといはれてゐるがその道理はよく承知してゐるけれども、然れども猶夢中の別れに等しき死別の悲しみに不覺の涙自ら流るゝ有り様である。

巨壑半渡片檝忽折。大虛未凌一翎乍摧。哀哉哀哉復哀哉。悲哉悲哉重悲哉

【講方】巨壑半渡つて片檝忽ちに折れ、大虛未だ凌がざるに一翎乍ちに摧く。哀れなる哉、哀れなる哉、復哀れなる哉、悲しい哉、悲しい哉、重ねて悲しい哉。

【字釈】○巨壑……大海のこと。六波羅蜜の大海、即ち修行の全體を指す。○片檝……一本の檝。○一翎……片羽。

【章旨】智泉長生せずして修行半にして入滅せしを惜しみ給ふ。

【講義】思へば六波羅蜜の大海を半迄修し渡りたるとき無念にも檝折れ、六道の大空を未だ渡り切らざるに片羽くぢけたるとは。何とまあ哀れなことであるよ。悲哀の中の悲哀であり、悲しみの中の悲しみである。

又夫世諦事法如來存而不レ毀。眞言秘印汝已授而不レ謬。一字一畫呑衆經而不レ飽。一誦一念銷諸障以非難。證不生於一阿。得五智乎鑑水

【講方】又夫れ世諦の事法は如來すら存して毀りたまはず、眞言の秘印は汝已に授つて謬らず、一字一畫衆經を呑んで飽かず、一誦一念諸障を銷すこと以て難きに非ず。不生を一阿に證し、五智を鑑水に得。

【字釈】○世諦事法……世諦は世俗諦で有爲の諸法を指す。事法は生者必滅の理法。○如來存而不毀……覺悟せられたる釋尊には入滅あるべからざるに、然るに釋尊も猶腹痛を現じて不滅の身に滅を示し給ふて生者必滅の理法に從ひ給ひしを指す。○一字一畫……一字一畫に千理を含むこと。○呑衆經……衆經の義理を含んでゐること。○一誦一念等……眞言の功德を指す。○一阿……阿字は一切諸法の本初理智不二の體である。○鑑水……鑑字は毘盧遮那大悲水の種子の故に鑑水といふ。

【章旨】智泉が生前に既に眞言の秘印を授つてゐることを明す。

【講義】また夫れ思ふにかの釋迦牟尼如來に於てすらも、世俗諦の生者必滅の理法に從はれて入滅し給ふたのであるが故に今智泉が入寂するも亦致し方のないことであらう。そして又汝が已に存命中に眞言の秘印を授かつて自身即佛の理趣を謬らず體解して居つたといふことは不幸中の幸であらう。眞言の秘印秘明の功德は實に神變不可思議廣大無邊の功德を具ふるものであり、一字一畫に千理を含み、衆經の義理を含藏して盡きざるものである。されば これを本當に心から一誦し、一念することだけでも諸の罪障を消滅せしめて成佛することはむつかしいことではない。從つて阿の一字を一唱することによりて本不生の理を悟り、鑑の一字を一念することによりて五智を證得して即身成佛することも出來るのである。

法界三昧汝久修習。遮那四祕汝亦游泳。觀月鏡於心蓮。燒妄薪於智火。我則金剛我則法界。三等眞言加持故

【講方】法界の三昧は汝久しく修習す。遮那の四祕は汝亦游泳す。月鏡を心蓮に觀じ、妄薪を智火に燒く、我則金剛、我則法界、三等の眞言加持の故に。

【字釈】○法界三昧……毘盧遮那の瑜伽にして胎藏の大法を指す。○遮那四祕……金剛の四智印を指す。○月鏡……上の法界を受けて本有大日の理法身に喩ふ。○心蓮……衆生の自性淸淨心理德に喩ふ。○燒妄薪……百六十の煩惱の薪を佛智によりて燒くこと。『大疏』第一に曰く「如來の智火もまたまた是の如し。一切の戲論煩惱の薪を燒き盡す」と。○我則金剛……『吽字義』に曰く「我則金剛薩埵乃至我則天龍鬼神八部衆」と。○我則法界……『大疏』第七に曰く「阿耨多羅三藐三菩提は法に於て平等にして高下あること無しと。是の故に如來をまた一切金剛菩薩と名け、また四果の聖人と名け、また凡夫外道と名け、また種種惡趣の衆生と名け、また五逆邪見の人と名け、大悲曼荼羅正しく此の義を表するなり」と。また『大疏』第二十に曰く「金剛手とは即ち是れ大日如來なり。文殊師利とはまた是れ大日如來なり。乃至鬼神八部一一にまた此の義あり。また即ち是れ大日如來の體を成ず。所以に瑜伽の中に毘盧遮那の言はく、我は則ち是れ文殊觀音等なり。我は即ち是れ天なり。即ち是れ人なり。即ち是れ鬼神なり。即ち是れ龍鳥なり。是の如き等の即是にあらずといふことなしと云ふは此の義に由るなり」と。○三等等……上の意を釋結す。即ち三平等の眞言加持の故に我則法界、我則薩埵となること。

【章旨】智泉の德を明す。

【講義】胎藏大日如來の觀門たる法界の三昧をば汝は既に久しく修習して居り、また金剛界大日如來の內證に住して四印の妙用を揮ひ、それらの修行顯得して曼荼の境界に優遊せるものであり、また本有大日理法身の月鏡をば自性所具の心蓮の體性の上に觀證し、佛智を體得して百六十の煩惱の薪を燒き盡し更にまた三平等の眞言の加持力を蒙つて我則金剛薩埵、我則法界の理を證得して成佛の妙旨を悟つてゐたのである。

五相成身妙觀智力。卽身成佛。卽心曼荼。故經云。我覺本不生。又眞言曰。曩莫三曼多沒馱南阿三迷底里三迷三摩曳娑嚩訶。如是眞言。如是伽陀示法體此身。表眞理此心。一聞則除四重一闡提。一誦則證三等四法身。汝久解此義。吾重爲汝說

【講方】五相成身、妙觀の智力をもつて卽身成佛し、卽心の曼荼なり。故に經に云く、我覺本不生云云。又眞言に曰く

曩莫三曼多沒駄南阿三迷底里三迷三摩曳娑嚩訶云々。是の如くの眞言、是の如くの伽陀は法體を此の身に示し、眞理を此の心に表す。一び聞けば四重一闡提を除き、一び誦ずれば三等四法身を證す。汝久しく此の義を解す。吾れ重ねて汝が爲に說く。

字訓　○五相成身……五相成身とは通達菩提心・修菩提心・成金剛心・證金剛心・佛身圓滿なり。此の觀門は金剛界法の行用にして即身成佛の要道、頓證菩提の祕術なり。○妙觀智力……妙觀察智のことで、妙觀察智はまさに五相の觀に入らんとするときに先づこの觀に住するのである。此の觀に住すれば如來の不動智を得るに至る。○即心曼荼……曼荼は心佛に他ならぬ。『大疏』に曰く「心處をばまた名けて心位となすべし。卽ち此の衆生の自心の處を指す。即ち一切佛の大悲胎藏曼荼羅なり」と。○我覺本不生……『大日經』第二具緣品に曰く「我れ本不生を覺り、語言の道を出過し、諸過解脫することを得、因緣を遠離し、空は虛空に等しと知る」と。○眞言……入佛三昧耶の眞言で、その意味は普き諸佛に歸命す。等比すべきものなき三平等の三昧耶よソワカである。○伽陀……偈頌のことで、今は我覺本不生等の偈文を指す。○一闡提（Icchantika）は梵語にして譯して斷善根、信不具足などと譯す。本來解脫の因を缺きて到底成佛する能はざるもの。或はまた容易に成佛する能はざれども、遂には佛の威力に遇ひて成佛するもの。○三等……身・語・意の三平等、また自心と佛と衆生との三法無差別平等等の義。○四法身……自性身・受用身・變化身・等流身。

要旨　智泉の爲めに重ねて眞言秘敎の功德に就いて云へば、妙觀察智によりて不動智を體得し、それより更に五相成身觀を修し、此の觀門によりて卽身成佛することを得、自心曼荼の理を悟るに至る。此處を以て『大日經』に曰く、「我れ本不生を覺り、語言の道を出過し、諸過解脫することを得、因緣を遠離し、空は虛空に等しと知る」と云へるはその邊の消息を洩らすものであり、また入佛三昧耶の眞言にナウマクサンマンタボダナンアサンメイチリサンメイサンマエイソワカと云へるもこれ生佛不二の旨趣を標示せしものである。これらの眞言及び偈頌は佛身を此の我れらの身に具現することを示されしものであり、我々の心に凡聖不二の眞理が存せることを表はされしものである。か樣に尊き眞理を含藏せる眞言及び偈頌なるが故に一びこれを聞けばその功德力によりて四惡重罪、斷善闡提等の惡業も直ちに消除し、また一度これを誦ずれば三平等、四法身を證得して卽身成佛するに至る。智泉汝は既に存命中久しく此の義を解すと雖も吾今重ねて汝が爲めに之を說く。

仰願金剛界會三十七尊。大悲胎藏四種曼荼。入我我入加持故。六大無礙瑜伽故。與塵數眷屬無來而來。將海滴分身不攝而攝。開五智本有殿。授九尊性蓮宮。都法界。以稱帝。遍刹塵而撫民

講方　仰ぎ願くば金剛界會三十七尊大悲胎藏四種曼荼入我我入加持の故に、六大無礙瑜伽の故に、塵數の眷屬と與に、無來にして來り、海滴の分身と將に、不攝にして攝したまへ。五智本有の殿を開き、九尊性蓮の宮を授けたまへ。法界を都として以て帝と稱し、刹塵に遍して民を撫でん。

字訓　○三十七尊……金剛界曼荼羅の根本諸尊をいふ。五佛・四波羅蜜菩薩・十六大菩薩・八供養菩薩・四攝菩薩。○入我我入……一切の諸法は塵々法々皆悉く六大を備へざるなく、法界に遍じて至らざる所なく、攝せざる所なきが故に、本尊も遍法界身、行者も亦遍法界身なり。即ち本尊遍法界の身なれば我身本尊の身中に在り、是れ我入なり。行者の身遍法界の身なれば本尊の身行者の中にあり、是れ入我なり。かく本尊と我身と融會無碍なるを入我我入といふ。○六大無礙瑜伽……六大とは體大・體大とは宇宙法界の體性にして法につかば色心一如の法體、人につかば法身大日如來なり。此の色心一如の法體に於て色を開きて地水火風空の五大とし、心を一の識大とす。而も此の六大は常に無碍相應して能く十界の有情非情を緣起す。諸法能生の本體たり。故に此の點より云はゞ、衆生身卽佛身、佛身卽衆生身にして凡聖一如なり。○無來而來……六大無碍の義なるが故に、また我則法界なるが故に無來にして來となる。無來は本有門より云ひ、來は修證門よりいふ。即ち、本有門の上からいへば我々も六大、佛も六大にして我卽佛なり。依て始めより來ることなし。また修證門からいへば佛と凡夫とは一應差別があり、我々は煩惱に覆はれて居り、佛は全分の煩惱を斷滅してゐる。從つて我々と佛との間には隔りがある。故に來といふ。○不攝而攝……入我我入の義なるが故に、我則金剛なるが故に不攝にして攝となる。○開五智本有殿……聖靈の本覺を開くこと。○授九尊性蓮宮……第九識未敷蓮の體性の宮を授け開いての意。○撫民……衆生濟度のこと。

要旨　正しく願意を明す。

講方　仰ぎ願くは金剛界會の三十七尊及び大悲胎藏四種曼荼羅會上の諸尊よ、入我我入の功德力を以ての故に、また六大無礙常瑜伽の相應の功德力を以ての故に、無量無數の微塵數の眷屬とともに無來にして來り、また海滴の無量無數の分身とともに不攝にして攝入して凡聖不二の祕旨を顯現し給はらんことを。そして智泉の聖靈をして本覺の佛殿に開入せしめ、第九識未敷蓮の體性を授け開いて法界に住し、以て佛となり、刹塵に遍じて衆生を濟度せんことを。

有情所攝無明所持同悟此理速證自覺

講方　有情の所攝、無明の所持、同じく此の理を悟つて速かに自覺を證せん。

字訓　○無明所持……佛を除いての外は、等覺以下すべての有情は無明に拘持せられて有情數に墮することを免れざるもの。○自覺……自證の三菩提のこと。

要旨　一切有情平等利益の義を述べて結言とす。

講意　無明に覆持せられてゐる所の一切の有情達も皆同じくこの本覺三等の理を悟つて、速かに自證の三菩提を證して佛果の殿に優遊せんことを祈る。

七四　爲弟子求寂眞際入冥扉達嚫文

爲弟子求寂眞際入冥扉達嚫文

講方　弟子求寂眞際が冥扉に入るが爲の達嚫の文。

字訓　○求寂……求寂は沙彌（śrāmaṇera）の翻名なり。惡を息めて慈悲の行を修する出家の男子のことにして、出家して未だ修行熟せず、比丘（二百五十戒を持つ）となるまでのものをいふ。十戒を保つ。○眞際……眞際の行狀は古來より未詳なり。○冥扉……泉扉。

要旨　初に題名を揭ぐ。

講義　弟子の沙彌眞際が泉扉に入るが爲めの達嚫の文。

講方　夫れ三界の緣生は幻化のごとくにして留らず、四生の因起は電泡のごとくにして卽ち滅す。聖も也免かれず、何況凡夫。逝水藏舟良有以也

字訓　○緣生……因緣所生の略。有爲法はみな因緣の和合によりて生ずるもの故に緣生の法と名づく。○幻化……實體なきものをあるが如く化造したるもの。まぼろしのもの。○因起……因と緣との力によりて生起すること。○電泡……いなづまやあはのごとくに忽ちに消え果つること。○逝水……『論語』子罕篇に曰く、「子川の上に在りて曰く、逝く時は斯の如きか、晝夜を舍めず」と。要するに時の去ることの早きをいふ。○藏舟……『莊子』第三大宗

師當に曰く「舟を壑に藏し、山を澤に藏す。之を固しと謂ふ。然れども夜半に有力の者之を負て走る。昧者は知らず」と。『郭象注』に曰く「方に死生變化の逃るべからざるを言ふ」と。要するに暫興速歴の義。

【意】依正二報に約して無常を明す。

【講】夫れ思ふに三界の一切のものは因緣生のものにして恰も幻化のごときものにして暫くも留住すること能はざるものであり、また四生の一切の生物も因緣生起のものにして恰も電泡のごときものにして忽ちに滅するものである。この生者必滅の理りには聖者と雖も免かれざる所であるが故にましてや凡夫に於てをやである。かの孔子が水の流れ去るを見て逝者斯くの如きかと歎息せし、また莊子が生死變化の逃るべからざるを藏舟に喩へて諷刺せしも良にこれ理由のあることである。

念亡法子。性是顏回命則蜉蝣

【讀方】念へば亡せる法子、性は是れ顏回、命は蜉蝣なり。

【字釈】○顏回……『論語』公冶長篇に曰く「回は一を聞いて以て十を知る」と。聰利なるをいふ。○蜉蝣……蜉は蜉蝣でカゲロフで朝に生じて暮に死すといふ。蝣は朝菌で、朝菌は天陰れば生ひ、日光を見れば枯る。卽ち壽命の短きに云ふ。

【會意】眞際が性格とその短命とを明す。

【講】常に思ふに亡せる弟子眞際は恰も顏回と同じく、その性一を聞いて十を知る程に聰利なりしも、その壽命は恰も蜉蝣朝菌の如くに短命なりしは誠に悼しき限りである。

法味未飽那始闕養。每思寫瓶之有在。何謂入泉而不歸。哀哉哀哉。佳城邃隔樞衣永絕。哀悼哀悼

【讀方】法味未だ飽かず、那ぞ始めて養ひを闕ぐ。每に思ふ、寫瓶の在ること有るを何ぞ謂はん。泉に入つて歸らず。哀れなる哉、哀れなる哉。佳城邃かに隔て、樞衣永く絕えぬ哀悼し、哀悼す。

【字釈】○法味未飽……眞際が法味を未だ充分に味つてゐないこと。○闕養……親を養ふに喩ふ。卽ち大師に承事することを闕ぐことで、早世せしことを意味す。○寫瓶……付法のこと。○入泉……黃泉に入ること。○佳城……墳墓のこと。これについて故事あり、卽ち『西京雜記』第四に曰く「滕公駕して東都の門に至る。馬鳴いて跼て背て前まず。滕公士卒をして馬の踞む所の地を掘らしむ。入ること三尺許りにして石槨を得たり。銘あり、左右よく知ることなし。以て叔孫通に問ふ。通が曰く、科斗の書なり。（科斗の書とは古代文字の一種）今の文を以て之を寫すに曰く、佳地鬱々たり、三千年にして白日を見ん。あゝ滕公此の室に居らんと。滕公が曰く、あゝ天なり。吾れ死せば其れ卽ち此に安せんか。遂に焉に葬る」と。○樞衣……衣をかゝげて棺に升ることで、今は衣をかゝげて大師に弟子として仕へることを意味す。○哀悼……かなしみいたむこと。

【會意】眞際の早世を悼む。

【講】眞際未だ修行日淺くして法味を十分味はざるに遷化す。どうしてや我に、長く仕ふること能はざりしや、遺憾至極である。常に自分は將來汝に兩部の大法を付法せんものと思ひつゝありし次第なればどうしてやかくも早く世を去らうとは思ひもうけよや、思ひもうけぬことであつた。今や汝は黃泉に入りて再び歸へらず、哀れなるかな、哀れなるかな、幽明遙かに隔だたり、最早や汝が樞衣の給仕も永遠に見られず。誠に哀悼に堪えず。心から哀悼す。

合會有離大師誠言。生者必殞。我心有慟。亂彼生死。誰如法摶

【讀方】合會離るゝこと有るは大師の誠言なり。生ある者は必ず殞す。我が心に慟むこと有り、彼の生死を亂んこと誰れか法の摶くに如かん。

【字釈】○大師等……大師は釋迦牟尼世尊を指す。『涅槃經』第二壽命品に曰く「夫れ盛んなるものは必ず衰ふことあり、合會するものは別離することあり」と。○亂……治すること。○摶……摶は鷹に同じ。鷹はさしまねく義。

【會意】亡靈の爲めには法門を供養するに如かざる義を明す。

【講】會合するものには必らず別離があり、生あるものには必ず死滅があるとは我が大師釋迦牟尼世尊が我々に提示せられし教訓である。今此處に眞際の溺化に遇つて我が心に哀慟の念禁ず能はず。されど徒らに哀慟するとも何の益かあらん。生死の迷ひを治せんには法門の功德を指しまねき向けるには如かじと、されば今の場合彼れが爲めにも法門の功德を廻施することこそ最も意義のあることである。

所以誦此妙句。帆彼船筏。諸行無常云云。又諸法如影像云云。所願藉此善業。歸承本尊。遊戲法界。弘傳祕法。二利圓滿三身現證

【讀方】所以に此の妙句を誦じて彼の船筏に帆げん。諸行無常云云。又諸法如影像云云。願ふ所は此の善業に藉て本尊に歸承し、法界に遊戲し、祕法を弘傳し、二利圓滿して三身現證せん。

【字釈】○此妙句……諸行無常等の妙偈を指す。○諸行無常……『涅槃經』に說かれたる四句の偈。○諸法如影像等……『金剛頂經金剛界大道場毘盧遮那如來自受用身內證智菩薩法身異名佛最上乘祕密三摩地禮懺文』（大正藏一八・三三七・上）及び『金剛頂瑜伽中略出念誦經』卷第一（大正藏一八・二二四中）『大日經』卷第二（大正藏一八・一二・上）幷に『倭姫命世紀』等に曰く「諸法影如像、淸淨無瑕穢、取說不可得、皆從因緣生」と。○遊戲……『大日經疏義述』卷第一に曰く「遊戲とは自證以後の三業の所作なり」と。

【會意】正しく願意を明す。

【講】此の理由を以て諸行無常、及び諸法如影像の妙句を誦じ、此の功德力によりて彼岸の佛果に向つて帆をあげて發進せんことを期する次第である。伏して願ふことは此の善業によつて本尊佛に歸承し、法界に優遊せんことを、更にまた祕法を弘傳し、自利利他の二利を圓滿して三身を現證せんことを祈る。

七五　孝子爲先妣周忌圖寫供養兩部曼荼羅大日經講說表白文

孝子爲先妣周忌圖寫供養兩部曼荼羅大日經講說表白文

【讀方】孝子先妣の周忌の爲に兩部の曼荼羅大日經を圖寫し、供養して講說する表白の文。

【字釈】○表白……修法開白の時、本尊の寶前にて法事の旨趣を啓白するをいふ表は內心を表示する義、白は所願を啓白する義、卽ち行者心中所求の事を表顯して本尊聖衆に啓白する義なり。故にまた啓白とも云ひ、或は唱導とも稱す。一說には表とは下より上に言ふ義。白とは告白の義なりとす。『略出經』に「此の密語を以てまさに表白すべし」といへるを本據とす。

【會意】初に題號を示す。

【講】或る孝子が先妣の一周忌に當りて、その聖靈に供養せんが爲めに兩部の曼荼羅及び大日經を圖寫し、供養し、講說するの法莚を設くるに際しての表白の文。

隆崇頂不見妙高。渺漫底無知溟渤

【表方】隆崇として頂き見えざるは妙高、渺漫として底知ること無きは溟渤なり。

【字訓】○隆崇……高きさま。○妙高……須彌山のこと。○渺漫……廣くして遙かなるさま。○溟渤……北溟と渤海。北溟は北海のこと。

【宙宝】宇宙の廣大さを明す。

【講義】隆崇として高く、頂の見えざるは須彌山であり、渺漫として廣大にしてその底を窮め知る能はざるは溟渤の大海である。

毗嵐一發自爲埃塵。日輪七重盡皆涸燥。世上强鎭其如此。人間何物應常存。

【表方】毗嵐一び發すれば自ら埃塵と爲り、日輪七つ重なれば盡く皆涸燥す。世上の强鎭なる其れ此の如し。人間何物か常に存すべき。

【字訓】○毘嵐……世界中に於て大風の第一なるもの。『大智度論』第十一に曰く「大迦葉の言く、須彌山の如きは四邊風起て動ぜしむること能はざれども大劫盡るとき毗嵐一び起れば爛草を吹くに似たり」と。○日輪七重等……『便蒙』には『劫章頌』を引きて曰く「日加へて常熱に四倍すれば溝池乾き涸れて草木燋る。二三日出れば江河竭く。四五日現れば海泉盡く。六七興る時山石融す。爾の時に大池井に炎暉世界三千並に灰燼となる」と。○世上强鎭……上の妙高・溟渤を指す。

【宙宝】宇宙の廣大も生滅する所以を說き、以て人間の無常を明す。

【講義】か樣に高大無盡の須彌山と雖も、毗嵐一び起れば恰も塵埃の如くに無雜作に吹き飛ばされ、また深海測り難き溟渤と雖も、日輪七重出づるときはことごとく涸れ盡くるに至る。世の最高最大の高山深海と雖もかくの如くに變易す。されば宇宙の大に比して些々たる人間に於て何ぞ恒存すべきを得ようや、得る筈がない。

十號如來唱滅於林中。三明聖者起悲於河邊。何況凡庶類誰久保。霜露質何永存

【表方】十號の如來すら滅を林中に唱へ、三明の聖者すら悲を河邊に起す。何に況んや凡庶の類誰れか久しく保たん。霜露の質何ぞ永く存せん。

【字訓】○十號如來……釋迦如來を指す。十號とは應供・正徧知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊・如來。○唱滅於林中……『涅槃經』第一壽命品は曰く「一時佛拘尸那城力士生地阿利羅跋提河の邊、娑羅雙樹の間に在して二月十五日涅槃に臨むとき、佛の神力を以て大音聲を出して其の聲乃至有頂に徧滿す。その類音に隨て普く衆生に告ぐ、大覺世尊まさに涅槃せんと欲す」と。○三明……三達ともいふ。阿羅漢果の聖者の有する三種の智明。即ち宿住智證明（過去のことに通達す）死生智證明（未來のことに通達す）漏盡智證明（現在のことに通達す）の稱。六通の中、宿命通・天眼通・漏盡通に同じ。今三明の聖者とは阿難尊者を指す。○起悲於河邊……『法顯傳』に曰く、「阿難摩竭國に從り、毘舍離に向ふ。般涅槃せんと欲す。諸天阿闍世王に告ぐ、阿闍世王即ち駕を嚴て士衆を將て追て河上に到る。毘舍離の諸梨車阿難來ると聞いてまたまた來り迎ふ。俱に河上に到る。阿難思惟すらく、前まば阿闍世王恨みを致さん。還らば則ち梨車また怨まん。則ち河の中央に於て火光三昧に入り、身を燒いて滅泥洹す。身分て二分と作す。一分は一岸の邊りに在り、こゝに於て二王各半身の舍利を得て還歸て塔を起つ」と。

【宙宝】如來及び聖者の入滅する所以を說き、以て凡人の死滅するは當然の理なることを明す。

【講義】十號の釋迦如來すらも娑羅林中に於て入滅し給ひ、また三明の聖者たる阿難尊者すらも毘舍離の河邊に於て入寂し給ふ。まして況んや凡人たる凡夫に於ては誰れ一人として永世久保し得ようや、それは恰も朝の霜露の如くにはかなく死滅するものである。

伏惟爲孝子。先妣尊靈。仁愛深於物。貞義超於人。誰量至孝無感早閉泉扉。有始有終是世之常理。生者必滅卽人之定則。去年七月中旬。貞心示空病。潔儀隨無常。

【表方】伏して惟れば孝子が爲の先妣尊靈仁愛物に深く、貞義人に超えたり。誰れか量らん、至孝感無うして早く泉扉を閉んとは。始あり、終りあるは是れ世の常の理はりなり生ある者は必ず滅す。即ち人の定れる則なり。去し年の七月中旬に貞心空病を示し、潔儀無常に隨ふ。

【字訓】○泉扉……墳墓で死滅する義。○貞義・潔儀……共に母を指す。『千字文』に「女慕貞潔」とあり。○空病……『首楞嚴經』に曰く「空魔あつてその心腑に入て乃ち持戒を誘して名けて小乘となす」と。今は死して空となるべきの病を指す。

【宙宝】孝子の先妣の人となりと、その死滅の樣を記す。

【講義】伏して惟るに孝子の先妣の人となりは仁愛を以て一切のものに接し、貞義の婦德人に勝れたる賢母であられた。從つてまた子供達もよく母に仕へ、百年の壽命を願つてゐたのである。然るにこの孝心の願ひも感應あらずしてかくも早く逝去しようとは誰れが量り知らうや。誰れも思ひ計らざる所であつた。思ふに始あるときは終りあるはこれ世の道理であり、また生あるものは必ず滅するは卽ち人間に於ける定れる法則である。そこで先妣に於ても去年の七月中旬に死滅の空病にかゝり遂に逝去し給ふ。

於此孝子。夜臺失滿月之光。日天迷黑雲之影。眼泉悲淚燥無燥心。竈憂炎無休棄味絕。交愁哀之際。居諸疾廻一周之忌忽。爾臨來

【表方】此に於て孝子夜臺に滿月の光を失ひ、日天黑雲の影に迷ふ。眼泉悲淚燥くこと無く、心竈憂炎休むこと無し。味を棄て、交を絕ち、愁哀の際居諸疾く廻つて一周の忌忽爾として臨み來る。

【字訓】○夜臺……墓穴をいふ。また一說には下の日天に對する語なれば單に夜を意味すと。此の義可なり。○日天……費のこと。○無燥……淚流れて盡きざること。○心竈憂炎……『詩經』に曰く「憂心燔の如し」と。今は憂ふる心が竈の如くに焦るゝこと。○棄味絕交……喪に服してゐること。

【宙宝】先妣の死を悲しむと共に、早や一周忌となりしことを明す。

【講義】かく母に死別して孝子は夜滿月の光明を失ひたるが如く、また日中太陽を黑雲に蔽はれ失ひたるが如くに迷ひ悲しむ。その悲淚とりどめもなく流れて盡くることなく、憂心胸中に燔の如くに燃えこがされて一時も休むことなし。かくて味を棄て交を絕つて喪に服しつゝあつたのであるが、早や既に日月廻り去つて忽ちに一周忌を迎ふるに至つたのである。

因茲移法身海會。作兩部曼荼。留內證微言。書七軸眞典。晝時唱尊經題。夜間供養海會尊。四衆之倫尊敬集法庭。五方之佛隨喜何不臨。願曼荼羅海會一切諸尊。無緣之慈照孝子之願。不請之願慈報恩之事。必定成就孝子至願

【表方】茲に因て法身の海會を移して兩部の曼荼を作くり、內證の微言を留めて七軸の眞典を書す。晝の時は尊經の題を唱へ開き、夜の間は海會の尊を供養して四衆の倫尊敬して法庭に集る。五方の佛隨喜して何ぞ臨みたまはざらん。願くば曼荼羅海會の一切の諸尊無緣の慈をもつて孝子が願

を照し、不請の願をもつて報恩の事を感みたまへ。必定して孝子が至願を成就せん。

字訓 ○海會……諸尊堪衆會合の座、德の深きと數の多きとを海に譬へて海會といふ。○内證微言……法身の說法をいふ。○七軸眞典……大日經を指す。○五方佛……曼荼海會の五佛を指す。○無緣慈……無緣の慈悲のことで、無緣の慈悲は三種慈悲心の一で、此の慈悲はたゞ諸佛にあり。何となれば諸佛の心は有爲無爲性の中に住せず、過去現在未來世の中に住せず、諸緣の不實顚倒虛妄なるを知るが故に心に所緣なく、ただ佛衆生の諸法實相を知らず五道に往來して心諸法に著し、取捨分別するを以ての故に心に衆生を緣ずることなく、一切衆生に於て自然に拔苦與樂の益を獲しむるが故に、これを無緣の慈悲と稱するのである。

會意 正しく願意を明す。

講義 此處に於て法身大日如來を初め諸佛諸尊の集會し給ふ所の兩部の大曼荼羅を圖寫すると共に、法身の内證の理を說かれる大日經一部七軸を書寫し奉り、そして更に日中は尊經を開いて讀誦し、夜は諸佛諸尊を恭敬供養念誦し奉る。此の法莚には四衆の人々尊敬の心を以て集ひ來る。されば此の盛儀に感じて五佛等の諸佛諸尊もどうしてや隨喜して來臨し給はざらんや、必ず來臨影向し給ふことであらう。願くは兩部曼荼海會の諸佛諸尊、無緣の慈悲心を以て孝子の願望を照鑒し、不請の願を以て報恩の誠を感み給ひ、必定して孝子の至願を成就せしめ給はんことを。

七六　爲忠延師先妣講理趣經表白文

爲忠延師先妣講理趣經表白文

譯方 忠延師が先妣の爲に理趣經を講ずる表白の文。

字訓 ○忠……延弘法大師十大弟子の隨一。性實詳かならず。一に藤原忠仁公

（良房）の子にして、母は宗方氏なりと云ふ。天長の初年東大寺戒壇に登りて滿分戒を受け、諸寺を巡遊し、性相の義を極め、天長元年九月二十七日高雄山神護寺定額二十一僧の一員となる。

會意 初に題名を揭ぐ。

講義 忠延師が先妣の爲に理趣經を講ずるに當りての表白文。

弟子歸命兩部四印等。

譯方 弟子兩部の四印等に歸命したてまつる。

字訓 ○四印……大智印・三昧耶智印・法智印・羯磨智印で四種曼荼羅のこと。

會意 一切諸佛に歸命し奉る義を明す。

講義 弟子忠延兩部大曼荼羅會上の諸佛諸尊に歸命し奉る。

嘗聞林烏微禽有反哺之志。泉獺愚獸致祭魚之誠。

譯方 嘗聞、林烏の微禽反哺の志有り、泉獺の愚獸祭魚の誠を致す。

字訓 ○林烏……『文選』に曰く「嗷々たる林烏哺を子に受く」と。○泉獺……『禮記』に曰く「獺魚を祭り、然して後に虞人澤梁に入る」と。

會意 總じて禽獸にすら孝心あることを明す。

講義 我は次の樣に聞き及んでゐる。即ち林に巢ふ烏の如き微禽ですらも親に哺を反すの孝心あり、また淵瀨に住む獺ですらも魚を供へて祖先を祭るの孝心の誠ありとかや。

何況天性之孝易感。罔極之恩難答

譯方 何に況んや天性の孝感じ易く、罔極の恩答し難し。

字訓 ○天性孝……父子恩親の情これ天然自然の道なりと『孝經疏』に云へり。されば子として親に孝を盡さねばならぬといふことはこれ天然自然の道理であつて、誰れでもがよく知つてゐることである。○罔極之恩……父母より蒙りし所のきはまりなき廣大無邊の恩德のこと。

會意 別して親に孝を盡すべきを明す。

講義 か樣に禽獸に於てすらも親に孝を盡すのであるが故に、まして人類たる我々に於てはいかでか親に對して孝を盡さずにおられよう。人間たる以上誰れしもが皆等しくこの天然自然の道理たる親に孝を盡すべき道理を知つて居り、孝行をせねばならぬといふことは心に感銘してゐるのである。かく誰れしもが孝行を盡し度いとは感じてゐるけれども、父母より蒙りし所の廣大無邊の御恩德に報ひ奉るといふことは仲々むつかしいことであり、實行の出來難いものである。

至如屈十力而擔棺。乘六通而饋鉢。大孝之稱於焉顯矣。酬德之理誰敢遺乎

譯方 十力を屈して棺を擔ひ、六通に乘じて鉢を饋るが如きに至つては大孝の稱於焉顯はる。酬德の理誰れか敢て遺れんや。

字訓 ○十力擔棺……十力は如來の別稱。釋迦如來を指す。釋迦如來が父王たる淨飯大王の金色の棺を擔ひたる孝心を指す。○六通而饋鉢……目連尊者が父母を餓鬼道の苦より救ひし故事を指す。即ち『佛說盂蘭盆經』に曰く、「大目犍連始めて六通を得て即ち道眼を以て其の亡母の餓鬼の中に生れて飲食を見ず、皮骨連立せるを見る。目連悲哀して即ち鉢を以て飯を盛りて往いて其の母に餉る。食未だ口に入らざるに化して火炭となる。遂に食することを得ず。佛、目連に告げたまはく、十方の衆僧自恣の時、飯百味五菓等を具へ、世の甘味を盡して以て袋の中に著て、十方大德の衆僧に供養せよと。是の時に目連の母即ち是の日に於て一劫の餓鬼の苦を脫るゝことを得たり」と。

會意 佛敎に於ける孝、即ち大孝の所以を明す。

講義 かの十力の如來たる釋迦牟尼世尊に於かせられても父王淨飯大王の金色の棺を擔はせ給ひたるが如き、また目連尊者が六通力を以て己が母の餓鬼道に於ける憂苦を拔濟し、以て解脫に至らしめたるが如き、何れもこれ孝が中の孝であり、これを大孝と稱すべきで、孝も此處に至りて窮まるといふべきである。か樣に佛陀に於てすらも、また目連尊者に於てすらも大孝の範を垂れさせ給ひたるが故に誰れ一人として此の孝行を盡すことを忘れようや、誰れも皆忘れざる所である。

伏惟先妣宗方朝臣氏。生我之功高於五岳。育我之德深於四瀆。濕乾忘勞提哺不倦

譯方 伏して惟れば先妣宗方の朝臣の氏、我生ずるの功五岳よりも高く、我を育するの德四瀆よりも深し。濕乾勞を忘れ、提哺倦まず。

字訓 ○五岳、四瀆……恩德の高大深厚なるに喩ふ。○濕乾……『涅槃經』第九如來性品に曰く「奇なる哉我が母大苦惱を受く、十月を滿足するに我を胎に懷抱す。既に生じての後乾を推りて濕を去け、不淨大小便利を除去す」と。また『父母恩重經』に曰く、「子、乾る床に臥さば母は濕へる地に移る」と。要するに親が自己の身を犧牲にして子を育つるをいふ。

會意 忠延が母の育養の德を讚ふ。

講義 亡母宗方の朝臣氏が我を生み育て給ひしことを伏して思ふに、我を生み育て給ひしその御恩德の高きことは五岳よりも高く、その深厚なることは四瀆よりも深厚である。その育養に當りては自己の身を犧牲にして自ら濕寒に居り、子を乾暖に臥せしめる等自らの勞苦を厭はずして乳哺長養に之れつとめ給ひしものである。

常思與三曜色養。將兩儀告面

譯方 常に思ひき、三曜と只んじて色養し、兩儀と將んじて告面せんと。

字訓 ○三曜……日・月・星のこと。○色養……親の意を察し、其の欲する處に從ひ、又顏色を和らげて父母を養ふこと。『論語』爲政篇に曰く「子夏、孝を問ふ、子の曰く、色難し」と。色難とは父母の顏色を承け望むを乃ち難しとすと苞子が註疏第二に云へり。○兩儀……天地のこと。○告面……告面の孝で、『禮記』に說かれたる孝行の一つである。卽ち人の子として外出するに際しては親にその旨を告げ、歸宅すれば面接して親の安否を尋ねばならぬといふ。

章意 永遠にいつまでも親に孝を盡さんと願ひつゝありし忠延の孝心を明す。

讀義 か樣に乳哺長養して頂きしが故に、その御恩德に對しては三曜の續く限りいつまでも色養の孝を盡し奉り、また天地の續く限り告面の孝を行はんものと常に思ひ期しつゝあつたのである。

豈圖蒼天奪我親玉儀入月城

讀方 豈圖りきや、蒼天我が親を奪ひ、玉儀月城に入らんとは。

字訓 ○玉儀……母を指す。○入月城……恒娥が月中に趣入せしに比す。死をいふ。

章意 母の逝去を明す。

讀義 かく天地とともに親に孝を盡さんものと期しつゝありし自分なるが故に、どうしてやかくも早く蒼天が我が親を奪ひ去り、かの恒娥が月中に趣き去りしその如くにあはたゞしくも逝去しようとは思ひ設けぬことであつた。

弟子履霜之感千爛我肝沐雨之悲百碎我心

讀方 弟子霜を履むの感千たび我が肝を爛らし、雨に沐するの悲しみ百たび我が心を碎く。

字訓 ○履霜、沐雨……時節の至る毎に親を思ひ出す義。『禮記』に曰く「秋の霜露既に降るときは君子之を履んで必ず悽愴の心有り、其の寒きを謂ふに非ず。春の雨露既に濡すときは君子之を履んで必ず怵惕の心有り、まさに見んとするが如し、樂んで來るを迎へ、哀んで往くを送る。故に禘（夏）には樂しみあつて、嘗（秋）には樂しみなし」と。此の文の中、春夏は其の來るを迎へる所以、秋冬はその往くを送る所以を示す。

章意 母の逝去を悼む。

讀義 圖らずも母の逝去に遇つて弟子忠延は秋の霜露を履んでは去り給ひし母を思ひ浮かべて我が胸は千々に爛裂する思ひに憂ひ悲しみ、また春の雨露に濡れては在せし母の面影を偲びて我が心百たび碎かれる程に悲しみ悼み憂ひに閉ざさるゝのである。

訴蒼天無感逝水不還星霜改變諱日斯臨謹奉爲先妣奉寫大三昧耶理趣經幷講演文義兼陳列大曼荼羅奉獻隨力珍供仰願

讀方 蒼天に訴ふるに感なし。逝水還らず、星霜改變して諱日斯に臨めり。謹んで先妣の奉爲に大三昧耶理趣經を寫し奉り、幷に文義を講演し、兼ねて大曼荼羅を陳列して隨力の珍供を奉獻す。仰ぎ願くは。

字訓 ○逝水不還……『法句譬喩經』第一無常品に曰く、「世尊偈を說いて言く河の駛く流れ往いて還へらざるが如く、人の命も是の如し。逝く者は還へらず」と。○諱日……忌日のこと。○隨力……『筆削記』第六に曰く「隨力の言兩意あるに似たり。一には貧富の力に隨ふ。二には捨施の力に隨ふ。若し其の力に隨へば必ずしも强てなさず。惱を生ずることを免る」と。○仰願……『便蒙』によれば仰願の下は闕文なり。此の篇は諸經開題集の中に之を載す。仰願の下の闕此に同じ。次に理趣經開題の解釋數十行あり。薩州の僧の曰く、州に古本あり。仰願の下に理趣曼荼一十七尊金剛界會三十七聖開五智本有之殿授九品性蓮之臺の三十字ありと云ふと註せり。

章意 講讚供養の法莚の有り樣を明す。

讀義 蒼天に叫び訴へて我が母の再生を祈れども感應なきこと、恰も逝水の再び還へらざるが如くである。悲哀の中に早や星霜移り變りて忌日を迎ふるに至る。ここに於て謹んで先妣の來爲に大三昧耶理趣經を書寫し、幷に理趣經の文義を講演し、兼ねては大曼荼羅を陳べ祭りて應分の珍供を獻じ奉り、至心に恭敬供養す。仰ぎ願くは此の功德によりて佛果に優遊せしめ給はんことを。

七七　三島大夫爲亡息女書寫供養講說表白文

三島大夫爲亡息女書寫供養法華經講說表白文

讀方 三島の大夫亡息女の爲に法華經を書寫し、供養して講說する表白の文。

字訓 ○三島大夫……三島は姓、大夫は五位の通稱。『便蒙鈔』に曰く「續日本紀三十五を按ずるに光仁帝の朝に三島の眞人大湯坐と云ふ人あり」と。

章意 初に題名を揭ぐ。

讀義 三島の大夫が亡息女の爲に法華經を書寫し、供養し、且つ講讚するに際しての表白の文。

弟子正五位上三島眞人助成歸命三寶夫殑河女人因愛子而生天上坐海丈夫發慈悲以成大覺

讀方 弟子正五位上三島の眞人助成三寶に歸命したてまつる夫れ殑河の女人は子を愛するに因つて天上に生じ、坐海の丈夫は慈悲を發して以て大覺と成る。

字訓 ○殑河女人等……殑河は恒河に同じ。『心地觀經』第二報恩品に曰く「昔女人あり、遠く他國に遊ぶ。所生の子を抱いて殑伽河を渡る。其の水漲り漂つて力前むこと能はず。愛念して捨てず。母子俱に沒す。是の慈心善根力を以ての故に卽ち上色究竟天に生じて大梵の主となることを得」と。○坐海丈夫等……『經律異相』第九に曰く「昔菩薩五百の商人とともに海に入つて寶を採る。まさに本土に旋らんとするに道に颶風に逢ふ、雷電地に震ひ、水神雲のごとくに集る。衆人啼いて曰く、吾等死なん。天に仰いで哀みを求む。菩薩愴然として曰く、吾が佛を求むることたゞ衆生の爲めのみ。海神の惡む所は死屍なり。其が爲に命を危うして衆を濟はん。斯れ乃ち開士の尙業なり。衆人に謂つて曰く、爾等手を屬ねて相持して並に吾が身を援け、衆人命を承く、菩薩卽ち刀を引いて自ら害す、海神焉を惡んで舟を漂はして岸に上ぼす。衆人誓ひて濟ふ。蹙踊して天に呼ぶ、寧ろ吾等が命をして死むとも上德の士を喪すこと無けん。天帝釋菩薩の弘慈を覩て天の神藥を以て其の口中に灌ぎ、並に屍に塗る。菩薩卽ち蘇り、忽然として起坐す。衆と相勞す。累劫に精進して休まず。遂に得佛に至る。身を殺して衆を濟ふ者は吾が身是れなり。天帝釋は彌勒是れなり。五百の商人は今座中の五百の應眞是れなり」と。

章意 三島大夫の歸佛と慈悲の德を明す。

讀義 弟子正五位上三島の眞人助成敬んで三寶に歸命し奉る。夫れ思ふに慈悲の德たるや廣大無邊にしてかの殑河の女人は慈心の善根力に依りて天上界に趣入することを得しとかや、また薩埵は海上に身を犧牲にして五百の衆人を救濟し、その救濟の功德力によりて大覺世尊となること。を得しとかや聞き及んでゐる。誠に廣大無邊の功德あるは慈悲行である。

然則兼愛受樂之因大悲脫苦之本三世如去因之成道十方薩埵行之證滅

讀方 然れば則ち兼愛は受樂の因、大悲脫苦の本なり。三世の如去之に因つて道を成し、十方の薩埵之を行じて滅を證す。

字釈 ○兼愛……『増一阿含經』第二十二須陀品に曰く「布施兼愛し、利人等しく利す」と。要するに自他親疎の別なく兼ねて一様に愛すること。上の疏河の女人を受く。○受樂之因等……涅槃樂果に至る因のこと。『大疏』第一に曰く「一切の諸佛是の如くの安樂の性を得て直ちに涅槃の中に至る。今の佛も亦是の如く去り給ふ故に如去といふ」と。○大悲……上の坐海の丈夫の文を受く。○證滅……滅は涅槃のこと。卽ち涅槃を證すること。

書意 別して無悲の功德こそ佛果に至る大道なることを明す。

講義 そういふわけであるが故に自他親疎の別なく兼ねて一様に慈愛する所の兼愛の行はこれ涅槃の樂果に趣入する所の善因であり、大慈悲行を以て一切の人々の苦を拔く救濟行は大覺世尊となる根本の道でありしことが解る。三世の佛も之の行を行ずることによりて成道し給ひしものであり、十方の諸の薩埵も之を行ずることによりて涅槃を證し給はれたものである。

因果相感宛如聲響業緣唱和還均形影生緣聚則春苑之華不足譬其咲死業至則秋林之葉何得喩其悲一生一死令人溺苦樂之水乍離乍沒幾許絶人間之腸哀哉悲哉

講方 因果相感ずること宛も聲響の如し。業緣唱和すること還つて形影に均し。生緣聚るときは春苑の華も其の咲めるに譬ふるに足らず。死業至るときは秋林の葉も何ぞ其の悲しみを喩ふることを得ん。一びは生れ、一びは死して人をして苦樂の水に溺れしむ。乍ちに離れ、乍ちに沒して幾許か人間の腸を絶つ。哀れなる哉、悲しい哉。

字釈 ○聲響等……『仁王經』卷下囑累品に曰く「響の如く、影の如く、人の夜書に火滅すれども字存するが如し。三界の果報も亦復是の如し」と。○業緣……因果のこと。業は因。緣は果に當る。○唱和……報應のこと。卽ち業因と緣果と相ひ和して空しからざること影の形に隨ふが如きをいふ。○生緣……『大毘婆沙論』第七十有情納息品に曰く「彼の生緣速かに和合すれば此の中有の身卽ち少時住す」と。

書意 因果の相を示して生者必滅の理を述ぶ。

講義 因果應報の理の正しきことは恰も響の聲に應ずるが如くであり、業因、緣果の相ひ和して空しからざること恰も影の形に隨ふが如くである。生緣聚つて生るゝに當りては一門眷屬各々聚り來つて共に悅び笑むこと春の花の咲めるも譬へにあらざる程に喜び合ひ、また死業襲ひ來り死滅に際しての悲哀は秋の木の葉の凋落も喩へにあらざる程に悲しみ悼む。一びは生れ、一びは死して苦樂に疲らしむ。乍ちに生れ離れ、乍ちに死し沒して六道に輪廻し、生死幾度か輪廻して幾度か人々をして人生最大の悲哀を味はしめし。思へば哀れなるかな。悲しいかな。

伏惟今日法主三島眞人氏昔植良因今鍾善果氏是族姓人則珪璋一心事百君四攝引羣生

講方 伏して惟れば今日の法主三島の眞人の氏は昔良因を植ゑて今善果に鍾る。氏は是れ族姓、人は則ち珪璋、一心を百君に事ふまつり、四攝羣生を引く。

字釈 ○鍾……當る義。○族姓……貴家のこと。立派な家柄のこと。『大日經』第一住心品に曰く「若しは族姓の男、族姓の女」と。○珪璋……圭玉を帶びたる貴人であり、また器量の勝れたる人をいふ。○一心事百君……忠節の一心を以て主君に仕へ奉ること。○四攝……布施・愛語・利行・同事にして共に菩薩大悲利他の行願によりて衆生を攝化するの方便なるが故に四攝又は四攝法といふ。

書意 三島氏の人となりを讃歎す。

講義 伏して惟れば今日の法莚の施主たる三島の眞人の氏は宿世に於て善因を行ひ植ゑし結果として今日善果の報ひを得らる。卽ち族姓の貴家に生れ、圭玉を持てる貴官を獲て器量勝れたる人となることを得。そして忠節の一心を以て君主に仕へ奉り、他面に於ては四攝の化他の行を行じ、萬民を濟度し給ふ所の高德の士であらせらる。

粤有一鍾愛女息婦容具而至孝婦德備而醮人所冀保龜鶴之永歲遊椿桃之遐年

講方 粤に一りの鍾愛の女息有り、婦容具つて至孝なり。婦德備つて人に醮す。冀ふ所は龜鶴の永歲を保ち、椿桃の遐年に遊ばん。

字釈 ○鍾愛……いたくめづること。○婦容、婦德……婦人の四德の中の二。○醮……冠婚の禮祭のこと。嫁に行くこと。○椿桃……椿とは『莊子』に云へる大椿樹で、八千歲を以て春とし、八千歲を以て秋とすと稱せられる。桃は『拾遺記』に說かれたる千圍の桃樹で、その花萬歲に一び實るといふ。要するに椿桃は長年月をいふ。○遐年……長壽のこと。

書意 三島眞人の息女の人となりを讃嘆す。

講義 さてこゝに三島大夫に一人の鍾愛の娘ありき。彼の女は婦容よく整ひ、親に孝心厚くよく仕へて誠に良き令孃であつた。かくて婦德備はり、立派な婦人となりて人に嫁す。此處に於て願ふ所は龜鶴のその如くに永久に長壽を保ち、椿桃のそれの如くに永遠に生き長らへんことを祈るのみであつた。

誰圖四大毒蛇忽鬪身城五蘊惡鬼乍亂心府洗胃名醫針灸無驗返魂妙香空焚無力

講方 誰れか圖らん四大の毒蛇忽ちに身城に鬪ひ、五蘊の惡鬼乍ちに心府を亂さんとは。胃を洗ふ名醫針灸驗無く、返魂の妙香空しく焚いて力無し。

字釈 ○四大毒蛇……『最勝王經』に曰く「地・水・火・風共して身を成す。彼の因緣に隨つて異果を招く。同じく一處に在つて相違害す。四の毒蛇の一饕に居するが如し。四種の毒蛇の中に於て地水の二蛇は多く沈下し、風火二蛇は性輕擧す。此に由て乖違して衆病生ず」と。○身城……身中のこと。○五蘊惡鬼……五蘊は色・受・想・行・識で、此の五蘊が假りに因緣によりて和合し積聚して人體を形成す。因緣解くれば人體滅ぶ。故に人體を殺すものとして惡鬼に喩ふ。○洗胃名醫……華他なる名醫を指す。卽ち『後漢書』方術列傳七十二下に曰く「華他字は元化、沛國譙の人なり。養性の術を曉れり。年まさに百歲になんなんとして猶壯容たり。方藥に精し。處齊數種に過ぎず。若し疾發して內に結して針藥及ぶこと能はざる所の者をば乃し先づ酒を以て麻沸散を服せしめ、既に醉つて覺る所なきときに因て腹背を刳き破り、積聚を抽き割く。若し腸胃にあるときは斷截して湔ぎ洗つて疾穢を除去す。既にして縫ひ合はせて傅るに神膏を以てす。四五日にして創愈へ、一月の間に皆平復す」と。○返魂妙香……『十洲記』に曰く「聚窟は西海の中申未の地に在り。地方三千里、東岸を去ること二十四萬里、上に眞仙靈宮あり、山に大樹多し。樞木と相ひ類す。花葉香しうして數百里に聞ゆ。名けて反魂樹といふ。其の根心を伐つて玉釜の中に於て煮て汁を取る。更に微火を以て煎ずれば黑煙の狀の如し。之を丸すべからしむ。名けて鷺精香と曰ふ。或は之を名けて却死香と爲す。香氣數百里に聞ゆ。死せる者地に在つて香氣を聞けば乃ち卻つて活く。征和三年に武帝安定に幸す。月支國の王使を遣はして香四兩を獻ず。大さ雀の卵の如し。後元元年に長安城の內病者數百、亡する者太半、帝試に之を城內に燒く、其の死して未だ三月ならざる者は皆活く」と。

書意 息女の別離の哀慟を明す。

講義 然るに次の如きことは誰れが圖りのらうや、誰れも圖り知らざる所である。卽ち四大の毒蛇身中に鬪つて、遂に四大不調を來し、五蘊の惡鬼因緣の和合を搖き亂して身を死滅させんとは。死期迫りての後はかの華他の如き胃を洗ふ名醫も施すすべなく、針灸も何の効驗もなく、また返魂の妙香を燒くとも何の効力もなし。

遂乃去年七月十七日露珠翻荷上霜鐘散枝下紗窓

朝鏡忽失照覽之影羅帳夕燈空餘燒心之焰嗚呼哀哉嗚呼哀哉

【讀方】遂に乃ち去し年の七月十七日に露珠荷の上に翻れ、霜鐘枝の下に散ず。紗窓の朝の鏡忽ちに照覽の影を失ひ、羅帳の夕の燈空しく心を燒くの焰を餘す。嗚呼哀れなる哉、嗚呼哀れなる哉。

【字釈】○露珠翻荷上……荷上の露がこぼれ落つることで死滅をいふ。○霜鐘散枝下……霜葉が枝下に散滅することで死滅をいふ。鐘とは上の珠に對する言葉で付字である。○紗窓……薄絹を張りたるまど。○羅帳……うすぎぬのまく。

【拳意】息女の逝去を明す。

【講義】遂にかくて去年の七月十七日に、恰も荷上の露珠がこぼれ落つるその如くに、また霜葉靜かに枝下に散滅するその如くに逝去しぬ。も早や紗窓の朝の鏡には主を失つて照影する人もなく、羅帳長く垂れる居室の夕の燈、恰も近親者の胸を燒きたゞらすが如き焰となりて、主なき居室を照らしてゐることも哀れである。あゝ哀れなるかな、哀れなるかな。

雖云千空生死之夢萬觀陽炎之假天性之悲易感鍾愛之哀難抑

【讀方】千たび生死の夢を空じ、萬たび陽炎の假なることを觀ずと云ふと雖ども、天性の悲しみ感じ易く、鍾愛の哀しみ抑へ難し。

【字釈】○空生死之夢……生死は恰も夢の如くに實體なく、自性なきものと觀ずること。○觀陽炎之假……生死は恰も夢の如くに實體なく、自性なしと觀ずること。○天性之悲……父が子の死を思ひ悲しむはこれ天性なりの意。○鍾愛之哀……特別に可愛いがりし子の死別を哀悼すること。

【拳意】子を失ひし父の悲哀の心情を明す。

【講義】生死は恰も夢の如くに實體なく空なりと、またそれは陽炎の如くに無自性にして假有なりと千たびも萬たびも觀じて能く承知してはゐるものゝ、父として愛し子を失ひ、その悲しさを感ずることはこれ天然自然の情であり、鍾愛の子に先き立たれ、その哀憐の情抑へ難く、哀悼するもこれ父としてはまた本能の然らしむる所である。

雖朝夕流涙日夜含慟無益亡魂是故爲濟亡兒煢靈謹奉寫金字妙法蓮華經一部般若心經一卷兼延五十八法侶講宣妙經奥義仰願鷲峯海會釋迦尊多寶分身三世佛開示悟入一乘經普賢文殊觀音等舍利迦葉同聞衆天龍八部五類天還念本誓利生願哀愍加護證明知見

【讀方】朝夕に涙を流し、日夜に慟を含むと雖ども亡魂に益無し。是の故に亡兒の煢靈を濟はんが爲に謹んで金字の妙法蓮華經一部、般若心經一卷を寫し奉り、兼て五十八の法侶を延いて、妙經の奥義を講宣す。仰ぎ願くは鷲峯海會の釋迦尊、多寶分身三世の佛、開示悟入の一乘經、普賢文殊觀音等、舍利迦葉同聞衆、天龍八部五類の天、本誓利生の願を還念して哀愍加護し、證明知見したまへ。

【字釈】○鷲峯海會——五類天……所歸の境、卽ち三寶と餘類の諸天とを擧示す。その中、釋迦と多寶と分身と三世佛とは佛寶に當り、一乘經は法寶に當り、普賢、文殊、觀音は大乘の菩薩衆、舍利、迦葉、同聞衆は小乘の菩薩衆で共にこれ小僧實に當る。次に天龍、八部、五類の天はこれ法華曼荼羅の聖衆なるが故に擧げて所歸となす。

【拳意】正しく供養會の有り樣と願意とを擧示す。

【講義】死別せし息女を偲びて朝夕に涙を流して悲しみ、日夜に哀慟し、慟哭するとしても亡魂には何の利益をも齎らさない。是の故に亡兒の煢靈を救濟せんが爲に、謹んで金泥を以て妙法蓮華經一部、般若心經一卷を書寫し奉り、衆て五十八人の僧侶を延請して法華經の奥旨深義を講讃し奉る。仰ぎ願はくは鷲峯海會の釋迦牟尼世尊、多寶佛、分身及び三世の諸佛、或はまた開示悟入四佛知見の法花經、或はまた普賢菩薩、文殊菩薩、觀音菩薩等の大乘の諸菩薩、并に舍利弗、迦葉及びその他同聞衆の小乘の羅漢、乃至は天龍、八部五類の諸天に至るまでの一切の諸佛諸菩薩諸天善神、本誓利生の願を還念し給ひて、哀愍加護し、證明知見したまはれんことを。

七八　講演佛經報四恩德表白

講演佛經報四恩德表白

【讀方】佛經を講演して四恩の德を報ずる表白。

【字釈】○四恩……國王・父母・衆生・三寶の四種の恩を云ふ。衆生は皆此四恩を受くるが故に常に其の恩德報謝の念を忘る可からず。恩を知らざれば善根斷絶すと經に教誡せり。四恩は要するに佛敎に於ける倫理觀の根本中樞を占むる重要なる思想である。大師も法界四恩の爲めに三寶を供養し給ふ。今はその表白文である。

【拳意】初に題名を揭ぐ。

【講義】佛經を講演して四恩の德を報じ奉るに就いての表白文。

弟子某甲歸命法界三昧之薄伽梵竭財金剛等至之契線

【讀方】弟子某甲、法界三昧の薄伽梵に歸命したてまつり、財を金剛等至の契線に竭くす。

【字釈】○法界三昧之薄伽梵……法界體性智毗盧遮那佛を指す。○金剛等至之契線……金剛乘祕密經を指す。等至とは三昧、定のこと。契線とは契經のこと。

【拳意】佛・法に歸命し奉ることを明す。

【講義】弟子某甲、法界三昧の薄伽梵たる法界體性智毗盧遮那佛に歸命し奉り、また財物を金剛等至の契線たる金剛乘祕密經に傾け盡してその講讃流布に務む。

仰于塡刻檀之誠尙精進剝皮之信

【讀方】于塡刻檀の誠を仰ぎ、精進剝皮の信を尙んで。

【字釈】○于塡刻檀之誠……『西域記』第二に曰く「憍賞彌國城內の故宮の中に大精舍あり、刻檀の佛像あり。上に石蓋を懸けたり。鄔陀衍那王（優塡王のこと）の作る所なり。初如來天宮に昇つて母の爲に說法したまふ。三月還らず。其の王思慕して形像を圖せんことを願ふ。乃ち尊者沒特伽羅子を請じて神通力を以て工人を接して天宮に上り、親ら妙相を觀たてまつつて栴檀を彫刻す。如來天宮より還りたまふときに刻檀の像起つて世尊を迎ふ」と。されば優塡王が佛を思慕の餘り、佛の像を刻檀せし故事を指す。○精進剝皮之信……愛法梵志の精進波羅蜜行の故事を指す。卽ち『智度論』第十六に曰く「また次に愛法梵志の如きは十二歲遍く閻浮提に聖法を知らんことを求むるに而も得ること能はず。時に世に佛なく、佛法もまた盡きぬ。一婆羅門あり、言く我に聖法の一偈あり、若し實に法を愛せば當に以て汝に與ふべし。答て言く、實に法を愛す。婆羅門の言く、若し實に法を愛せばまさに汝が皮を以て紙とし、身骨を以て筆となして血を以て之を書すべし。まさに以て汝に與ふべし。卽ち其の言の如く、骨を破り、皮を剝ぎ、血を以て偈を寫せり、如法に修行すべし。非法をば受くべからず。今世及び後世行法者安隱ならん」と。

【拳意】佛・法に歸命の誠信を捧げし故事を揭ぐ。

【講義】 佛・法への歸命の誠信を捧ぐるに當りては昔かの于塡王が佛を思慕の餘り、佛の像を刻み奉りしその誠信さ、或はまたかの愛法梵志が法を愛信するの餘り、骨を以て筆とし、皮を以て紙として法門を寫傳せしその誠信さを仰ぎ尙び、その如くに誠信を傾け盡さんとするのである。

奉造五十五之大曼荼如來書寫十一部之達磨曼荼羅

【講方】 五十五の大曼荼の如來を造り、十一部の達磨曼荼羅を書寫し奉る。

【字釋】 ○大曼荼如來……彫刻の佛像を指す。『即身義』に曰く「大曼荼羅、謂く一一の佛菩薩の相好の身なり」と。○達磨曼荼羅……達磨は譯して法といふ。されば法曼荼羅のこと。

【宗意】 刻像書寫の供養行を明す。

【講義】 五十五軀の佛像を彫刻し、十一部の法曼荼羅を圖寫し奉る。

洗身垢於鏤字大悲乳水蕩心塵於訶字大願力風薰五分妙香於法界宮殿飛一覺虹幡於圓寂高嶽覆報恩雲乎無邊際艤妙法筏乎有情界撞鯨鐘震法鼓大因大緣者

【講方】 身垢を鏤字大悲の乳水に洗ひ、心塵を訶字大願力の風に蕩し、五分の妙香を法界宮殿に薰じ、一覺の虹幡を圓寂の高嶽に飛ばす。報恩の雲を無邊際に覆ひ、妙法の筏を有情界に艤ひす。鯨鐘を撞き、法鼓を震るふ大因大緣なる者なり。

【字釋】 ○身垢……煩惱障。○鏤字大悲乳水……鏤字は水大の種子にして大悲心に住して甘露水を流注し、衆生界を潤すが故にかく名く。○蕩……蕩除ではらひのぞくこと。○心塵……所知障。○訶字大願力風……訶字は風大の種子にして一切の業煩惱を害し、欲を離れしむる義あり、卽ちこれ大願力に當る故にかくいふ。○五分妙香……五分は戒・定・慧・解脫・解脫知見の五分法身のこと。五分法身を妙香に譬ふることは『增一阿含經』に曰く、「佛の言く、妙香に三種あり、謂ゆる戒香・聞香・施香なり。此の三種は逆風順風に皆香し。最も殊妙たり。與等あることなし」と。また香は惡氣を去り、心識を清淨ならしむる作用あり。○法界宮殿……法界を以て所住とする法身大日如來を指す。○一覺虹幡……一覺は一本覺で、一切衆生に皆一本覺を具す。虹幡は高きをいひ、また虹には五色具するが故に幟に喩ふ。一本覺の體性を表したるものが此れ幡に當る。○圓寂高嶽……圓滿寂靜なる涅槃の境界をいふ。○報恩雲……四恩を報ずる大心を雲に喩ふ。○妙法筏……經敎を筏に喩ふ。○有情界……生死海。○鯨鐘……鐘のこと。『文選』第一西京賦に曰く、「海中に大魚あり。鯨と曰ふ。海邊に又獸あり、蒲牢と名く。蒲牢素鯨を長る。鯨擊てば蒲牢轟ち大いに鳴く。凡そ鐘は聲をして大ならしめんと欲ふが故に蒲牢（リュウグ）を上に作る。鐘を撞く所以のものに鯨魚（シュモク）と名く」と。○震法鼓……法門を講演すること恰も攻め大鼓を打つが如く盛んなるに譬ふ。○大因大緣……一切衆生をして生死を解脫せしむる大因緣たること。

【宗意】 法・佛の供養によりて轉迷開悟の功德あらんことを明す。

【講義】 法・佛の恭敬供養によりて、佛の大慈大悲の甘露水を一切衆生に灌らしめて衆生所具の身垢を洗ひ清めて佛果に至らしめ、また佛の一切衆生救濟の大願力を以て一切衆生所具の心塵を蕩除し給ふて佛果を體得せしめんことを。五分法身の妙香を、法界を以て所住とし給ふ所の法身大日如來に薰じ供養し奉り、一切衆生各具の一本覺の體性をして圓滿寂靜の涅槃の境界に至らしめ、報恩の心品の德を法界に遍ぜしめ、彼岸に到る筏たる經法を讀誦して有情界に灌むらしめ、鯨鐘を鳴らし、法鼓を打つて盛んに法門を講演し奉る。これ卽ち一切衆生をして生死の苦海より解脫せしめんが爲めの大因緣となさんが爲めである。

夫生也非我願無明之父生我死也非我欲因業之鬼殺我生是非樂衆苦所聚死亦不喜諸憂乍逼

【講方】 夫れ生は我が願ひに非ず。無明の父我を生ず。死は我が欲するに非ず。因業の鬼我を殺す。生は是れ樂に非ず。衆苦の聚る所なり。死も亦喜にあらず、諸憂乍ちに逼る

【字釋】 ○生也非我願等……『孟子』に曰く、「生はまた我が欲する所、死はまた我が惡む所なり」と。今はその逆用なり。要するに生死の因緣を示す。○無明之父等……『入楞伽經』第五佛心品に曰く「貪愛を名けて母とし、無明は則ち父たり」と。また『涅槃經』には無明を以て父母に喩ふ。

【宗意】 生死の因緣を明す。

【講義】 夫れ思ふに生は前世に於ける無明業力の因緣によりて自然に生じたものであり、また死は人の欲不欲にかゝわらず、因業極まれば自然に死滅するに至る。また我々凡夫の生涯は樂しきもののみに非ず、時としては苦患に滿ちくしものであり、死もまた喜にあらず、六道輪廻の掟に從つて餓鬼地獄等諸の憂苦乍ちに逼り來り、苦惱にさいなまるゝ所である。

生如昨日霜鬢忽催强壯今朝病死明夕徒恃秋葉待風之命空養朝露俟日之形此身脆如泡沫吾命假如夢幻無常之風忽扇四大瓦解閻魔之使乍來六親誰憑

【講方】 生は昨日の如くなれども霜鬢忽ちに催す。强壯は今朝病死は明夕なり。徒らに秋の葉の風を待つの命を恃んで空しく朝の露の日を俟つの形を養ふ。此の身の脆きこと泡沫の如く、吾が命の假なること夢幻の如し。無常の風忽ちに扇げば四大瓦のごとくに解け、閻魔の使乍ちに來るときは六親誰をか憑まん。

【字釋】 ○霜鬢……白き鬢の毛で老人をいふ。○强壯……「曲禮」上篇に曰く「三十を壯と曰ひ、室あり。四十を强と曰ひて仕ふ」と。要するにつよくさかんなる年頃で壯年をいふ。○秋葉、朝露……人の命のはかなさをいふ。○閻魔使……「長阿含經」第十九地獄品、及び「經律異相」四十九地獄部に曰く、閻羅王に三使者あり、一には老、二には病、三には死なり。若し衆生あつて、三業惡を行じて身壞し、命終して地獄に墮すべし。王の曰く、汝第一の使者を見るや、不や。汝人中にありしとき、頭白く齒落ち、目視ること矇々たり。皮緩み、肌皺み、傴脊杖を拄へて呻吟して行くを見るや、不や。罪人の言く見き。汝何ぞ自念せざる。我も亦まさに得るべし。又問ふ、汝第二の使を見るや、不や。汝本人たりしとき羸る病困篤にして屎尿處處に身其の上に臥し飲食人を須ひ、百節酸疼して流淚呻吟して語言すること能はざるを見るや、不や。答へて曰く、見き。又問ふ。第三の使を覺や、不や。顚る人死して身壞し、命終して諸根永く滅し、身體挺直にして猶し枯木の如し。家間に捐棄せられて鳥獸に食はるゝを見るや、不や。答へて曰く、見き。語已て獄卒に付して大地獄に詣らしむ」と。○六親……父母兄弟妻子。

【宗意】 無常の相を明す。

【講義】 昨日生れたばかりと思つてゐたのに光陰矢の如くに運つて早や白毛の鬢となる。今朝は强壯にして元氣盛りと見受けしに、早や朝夕には病死と聞くは世の常である。か樣に無常にしてはかなきが人の命である。然るに此の理りを悟らずして無闇に恰も嵐の前の秋の木の葉の如き命を恃んで、無益にも日の出の前の朝の露の如き無常の體を養ふ。此の身の脆くはかなきこと恰も泡沫の如く、また我が命の假有にしてはかなきこと夢幻の如くである。無常の風忽ちに吹き來り、因緣解くれば四大瓦の如くに壞滅し、閻魔の使者來れば乍ちに冥途に赴かねばならぬが、死滅に際しては六親眷屬と雖も頼みたよること能はず、誰れ一人として助けるものとてはない。

朝朝夜夜勞衣食之奴歲歲月月繫恩愛之繩心肝爛離父離母之哭涕淚溢喪偶子之悲地獄猛炎發殺生之業餓鬼醜形生慳貪之罪死此生彼生死之獄難出作人作鬼病苦之怨易招

讀方　朝朝夜夜衣食の奴に勞し、歲歲月月に恩愛の繩に繫がる。心肝父に離れ、母に離るるの哭に爛れ、涕淚偶を喪ひ、子を喪ふの悲しに溢る。地獄の猛炎は殺生の業より發り、餓鬼の醜き形は慳貪の罪より生ず。此に死し、彼に生じて生死の獄出で難く、人と作り、鬼と作つて病苦の怨招き易し

字釋　○心肝……心臟と肝臟、轉じて心のこと。○偶……夫妻のこと。○殺生之業……『華嚴經』廿四十地品に曰く「殺生の罪はよく衆生をして地獄、畜生餓鬼に墮せしむ」と。○慳貪之罪……『辯意長者子經』に曰く「また五事あり、餓鬼の中に墮す。何をか謂つて五とする、一には慳貪、布施を欲せず」と。

摩意　無常にして六道輪廻の相を明す。

講義　日日夜々衣食のための奴隷となり、年々歲々父母妻子の恩愛のきづなにつながれ、若し父母妻子に死別せんか心爛裂する程に涕涙泣哭して悲哀の淵に沈む。かくて死滅せんか六道に輪廻するに至るのであるが、地獄に趣き八寒八熱の劇苦を受るはこれ在世に於ける殺生の業因によるものであり、また餓鬼道に墮して飢渴に逼められるゝのはこれ在世に於ける慳貪の罪業の報ゆる所である。六道の中、此虚彼處と次々に輪廻して生死界にさまよひ、生死界の六道の世界より脱れ出づること能はず、人となり鬼となつて六趣の苦果を招いてゐる有り樣である。

悲哉悲哉三界之子苦哉苦哉六道之客自非善知識善誘之力大導師大慈之功何能破流轉之業輪登常住之佛果

讀方　悲しい哉、悲しい哉、三界の子。苦しい哉、苦しい哉六道の客。善知識善誘の力、大導師大慈の功に非ず自りんば、何ぞ能く流轉の業輪を破し、常住の佛果に登らん。

字釋　○善知識……正法を說きて人をして佛道に入らしめ、解脫を得せしむる人をいふ。高德の賢者のこと。今は菩薩に約す。○大導師……佛のこと。

摩意　三界六道の輪廻よりよく救濟し得るものは佛菩薩のみなることを明す。

講義　三界に迷へる衆生を思へば悲しき極みであり、苦しき極みにあらずや六道に輪廻しつゝある衆生よ。いかでかかの善知識善誘の力、或は大導師の大慈悲の功力を蒙るにあらざれば、三界六道流轉の業輪のきづなを斷ち切ることを得、常住不滅の涅槃の樂果を證得することを得ようや。

又夫此身非從虛空化生非從大地變現必資四恩之德保是五陰之體

讀方　又夫れ此の身は虛空從り化生するにも非ず。大地從り變現するにも非ず。四恩の德に資つて是の五陰の體を保つ

字釋　○從虛空化等……『智度論』第十九に曰く「是の身は臭穢たり、華の開けたるより生ずるにもあらず。また膽蔔よりするにもあらず。また寶山より出るにもあらず」と。○五陰體……色、受、想、行、識の五蘊のしばらくかりに和合せるものが人體である。

摩意　總じて四恩を明さんが爲めに先づ四恩の由來を明す。

講義　また夫れ思ふに此の我々の身體は虛空より化生せるものにもあらず、大地より變現せるものにもあらずしてこれ父母の恩德に依つて生れ出しものであり、生れ出でゝこの五陰の身體を保持するに當りては四恩の高德の庇護を

蒙りて長養してゐるのである。

所謂四恩者一父母二國王三衆生四三寶生我育我父母之恩高於天厚於地粉身損命何劫得報

讀方　謂ゆる四恩とは一には父母、二には國王、三には衆生四には三寶なり。我を生じ、我を育するは父母の恩天よりも高く、地よりも厚し。身を粉にし、命を損しても何れの切にか報ずることを得ん。

摩意　總じて四恩を明すと共に別して父母の恩を說き明す。

講義　謂ふ所の四恩とは一には父母の恩、二には國王の恩、三には衆生の恩、四には佛、法、僧の三寶の恩である。その中特に我を生み、我を育養せし所の父母の恩は天よりも高く、地よりも厚き程に深厚のものである。されば粉骨碎身、命を捧げて報恩の行を積むとも永遠に報じ盡すことは出來ぬ程に深厚である。

雖云父母生我若無國王強弱相戰貴賤刼奪身命難保財寶何守安萬生之室宅興四海之康哉封其官邑授其爵祿爲現世之顯榮流後葉之美聲國王之力能使然

讀方　父母我を生ずと云ふと雖ども、若し國王無くんば強弱相ひ戰ひ、貴賤刼奪して身命保ち難く、財寶何ぞ守らん萬生を室宅に安んじ、四海の康哉を興へ、其の官邑を封じ其の爵祿を授け、現世の顯榮を爲し、後葉の美聲を流すは國王の力能く然ら使む。

字釋　○强弱等……『禮記』に曰く「强きは弱きを脅かし、衆きは寡を暴ふ。知者は愚を詐り、勇者は怯を苦しむ。此れ大亂の道なり」と。○刼奪……おどしてうばふこと、刼は理不盡に掠め取り、奪は理あつて押へ奪ふこともある義。○安萬生等……『薩遮經』第三王論品に曰く「王者は民の父母、法を以て衆生を攝護して安樂ならしむるが故に」と。○康哉……やすらかなること。

摩意　四恩の中、別して國王の恩の廣大なるを讃ふ。

講義　父母我を生み給ふと雖も、若し國王ゐまさずと假定せば、强弱相ひ戰ひ貴賤刼奪を蒙りて身命すらも保ち難く、況んや財產などはどうしてや守り藏することが出來ようや。萬民をそれ〴〵の住居に安樂に生活せしめ、一天四海をやすらかにし、賢臣忠臣をそれ〴〵適當に官邑に封じ、且つ爵祿を授與し、以て臣民として現世に於ては榮譽を顯はし、後世に於てはその美名を傳へ殘し、家門の繁榮を來さしむるは國王の御慈悲の然らしむる所である。

衆生於我有何恩德吾是從無始已來四生六道之中爲父爲子何生不受何趣不生若以惠眼觀之一切衆生皆是我親是故經云一切男子是我父一切女人是我母一切衆生皆是吾二親師君所以衆生之恩亦須報酬

讀方　衆生我に於て何の恩德か有る。吾は是れ無始從り、已來た四生六道の中に父となり、子となつて何れの生をか受けざる、何れの趣にか生せざる。若し惠眼を以て之を觀ずれば一切の衆生は皆是れ我が親なり。是の故に經に云く、一切の男子は是れ我が父、一切の女人は是れ我が母、一切の衆生は皆是れ吾が二親師君なり。所以に衆生の恩亦須らく報酬すべし。

字訓 ○衆生恩等……『心地觀經』第二報恩品に云く「衆生の恩とは即ち無始よりこのかた一切衆生五道に輪轉して互に父母となる。故に一切の男子は即ち是れ慈父、一切の女人は即ち是れ悲母なり。昔生生の中に大悲あるが故に猶現在の父母の恩の如く等じて差別なし」と。

掌珠 四恩の中、別して衆生の恩を明す。

講義 衆生の恩と言つてゐるが、一體一切衆生が我れに如何なる恩德があるのであらうか。それに就いて思ふに吾吾は無始の昔よりこのかた生れ代り死に代り、四生六道の中に、或るときは父となり、或るときは子となりて輪廻轉生してゐるもので、六親九族其の他あらゆる立場の、あらゆる有情として生を受けしものである。そこで若しこのことを佛陀の慧眼を以て徹底的に觀察するとき一切の衆生は皆これ曾ては我が親なりと見做すことが出來るのである。從つて『心地觀經』に云く「一切の男子は是れ我が父、一切の女人は是れ我が母。一切の衆生は皆是れ我が二親及び師君に當る」と。か樣なわけであるが故に、一切の衆生の恩もまた我が只今の父母の恩と同樣に之を報謝しなければならぬ筈である。

世間父母但育一期肉身。國王恩德亦助凡身。若能斷生死之苦。與涅槃之樂。三寶之德。不可思議。言三寶者。一佛寶。二法寶。三僧寶。佛寶則具一切智智。示衆生之正路。法寶則具難思功德。能令持者。與世出世之樂。佛之與法雖有如是功德。若無僧寶。不得流通。言僧者有菩薩聲聞等別。菩薩若聲聞。不論凡聖。不簡持破。誦傳經論。授人智慧者。皆是名僧寶。

講方 世間の父母は但一期の肉身を育ふ。國王の恩德も亦凡身を助く。若し能く生死の苦を斷じ、涅槃の樂を與ふるは三寶の德なり。思議すべからず。三寶と言者、一には佛寶二には法寶、三には僧寶なり。佛寶は則ち一切智智を具して衆生に正路を示す。法寶は則ち難思の功德を具して能く持者をして世出世の樂を與へしむ。佛と法と是の如くの功德有りと雖ども、若し僧寶無んば流通することを得じ。僧と言者、菩薩聲聞等の別有り、若は菩薩、若は聲聞、凡聖を論せず、持破を簡ばず、經論を誦傳して人に智慧を授くる者皆是れ僧寶と名く。

字訓 ○一切智智……一切の智の中にて最尊最勝なる智をいふ。即ち大日如來自然覺の眞智のこと。○正路……正覺の道。○難思……甚深微妙不可思議のこと。○世出世之樂……人天及び佛果の樂。○不簡持破……持は持戒、破は破戒、持戒者も破戒者も俱に、若し法を傳ふれば即ち僧寶に當る義。即ち、『十輪經』第三無依行品に曰く「佛の言く、若し諸の比丘若し戒を護持せば、謫罰閉繫し、乃至命を奪ふべからず。若し破戒の比丘有つて諸の煩惱結使のために壞せらるゝとも猶能く一切天龍人非人等に無量の功德珍寶伏藏を開示す。是を以て若は持戒、若は破戒、我れ悉く聽さず」と

掌珠 四恩の中、別して三寶の恩を明す。

講義 世間の父母の恩德は一生涯の我々の肉身を育養し給ふ所のものであり、また國王の御恩德は凡身を助け護り給ふ所のものであらせらる。然るに三寶の恩德は生死の苦源を斷除して涅槃の樂果を與へ賜ふ所のものであり、それは凡人の測り知り難き程の廣大の德である。いふ所の三寶とは、一には佛寶二には法寶、三には僧寶、この佛法僧の三寶の中で佛寶とは一切智々を具足し給ふて我々衆生に正覺の正道を指示し給ふものであり、次に法寶には甚深微妙不可思議の功德を具して、よく經法持誦者をして人天及び佛果の般樂を豪らしむるものである。佛と法とには上述の如き甚深の功德を具へてゐるとはいへ、若し僧寶なければこれを流通することは能はず。僧とはこれに菩薩、聲聞等の區別があるが、併し乍ら菩薩或は聲聞、凡位・聖位それらの區別を論ぜず、乃至は持戒　破戒を論ずることなく、すべて經論を誦傳して人に眞實の智慧を授くるものを皆これ僧寶と名くるのである。

風聞三世如來十方菩薩。報四恩德。悉誓菩提。是故奉爲四恩敬造某甲佛等。敬寫某甲經若干。兼發普賢大士菩提行願心。觀音慈氏大慈悲心。今日今辰拂洒荒穢之山亭。鋪肆經王之妙筵。驚覺法界諸尊。延屈羅漢龍象。講宣甚深之奥祕。供養諸尊之妙典。

講方 風に聞く、三世の如來、十方の菩薩、四恩の德を報じて悉く菩提を證す。是の故に四恩の奉爲に敬つて某甲の佛等を造り、敬つて某甲の經若干を寫し、兼て普賢大士の菩提行願の心、觀音慈氏の大慈悲の心を發して今日今辰荒穢の山亭を拂洒して經王の妙筵を鋪き肆ぶ。法界の諸尊を驚覺し、羅漢の龍象を延屈して甚深の奥祕を講宣し、諸尊の妙典を供養したてまつる。

字訓 ○風聞……うはさに聞くこと。○普賢大士……『華嚴經』普賢行願品第四十によれば普賢菩薩には十種の無盡の菩提の行願ありと說かる。○觀音慈氏……觀世音菩薩及び彌勒菩薩には大慈大悲の救世の大用あり。○山亭……庵室のこと。○鋪肆……しきつらねること。○妙筵……法筵のこと○羅漢龍象……僧の尊稱。○供養諸尊之妙典……諸の尊經を書寫し供養すること。此の文の次に更に文章ありしも、今は闕げりと『便覽』には註せり。

掌珠 四恩に報謝せんが爲めの廻向供養會の有り樣を記す。

講義 風かに聞けば、三世の如來も、十方の菩薩衆も四恩の德を報謝して悉く皆菩提を證したまはれたのであると。此の理由を以て四恩の奉爲に敬つて某甲の佛等を造り、また敬つて某甲の經若干を書寫し奉る。衆ねてはかの普賢菩薩の菩提行願心の如き衆生濟度の大慈悲心、またかの觀世菩薩や彌勒菩薩の救世の大願心の如き大慈悲心を發して、今日の吉辰をトして荒穢の庵室を拂ひきよめ、秘密經王の法筵を設けて以て法界の諸尊を請延して驚覺し奉り羅漢の龍象を延屈して甚深微妙の經典の奥秘を講宣し、更にまた諸の尊經を書寫し、供養し奉る。

七九　爲先師講釋梵網經表白

爲先師講釋梵網經表白

講方 先師の爲に梵網經を講釋する表白

字訓 ○先師……『便覽』によれば先師とは石淵の贈僧正勤操を指すなりと。勤操大德の入滅は天長四年五月七日にして、西寺の北院に於て寂せらる。此の講は翌年四月十三日のことである。

掌珠 初に題名を揭ぐ。

講義 先師石淵の贈僧正勤操大德の爲に梵網經を講釋するに際しての表白文。

維天長五稔孟夏之十三。日惟丁卯。曜惟那頡。返眞法將僧正鄔波馱野法化某乙

講方 維天長五稔孟夏の十三、日は惟れ丁卯、曜は惟れ那頡なり。返眞の法將僧正鄔波馱野の法化某乙。

字訓 ○丁卯……ひのとう。○曜……七曜のこと。○那頡……『宿曜經』卷下に曰く「金精は太白、胡には那頡と名づけ、波斯には數森勿と名づけ、天竺には戎訖羅と名づく」と。金精とは金曜のこと。○返眞……入寂のこと。○法將……菩薩のこと。『智度論』第七に曰く「佛は法王たり、菩薩は法將たり」と。○僧正……『僧史畧』中卷に曰く「僧正とは正は政なり。自ら正し、人を正し、克く政令を敷くが故に德望ある者を擇んで、法を以て之を綱して平正に歸せしむるが故に僧正といふ。此れ僧秦（姚秦のこと）僧䂮を以て始とし、本朝には

高麗の觀勒を以て僧正の始とす」と。○鄙波耽野……梵語のウパーダヤ（Upadhyāya）の音譯で、略して和尚といひ、轉して親教師といふ。中世より高僧の尊稱に用ひ、近時は住職以上の僧の稱呼とす。○法化……法門を開く處の所化なる故に弟子のこと。

【參考】最初に時と人とを明す。

【講義】ここに天長五年四月十三日は干支に於ては丁の卯に當り、七曜に於ては金曜日に當る。故法將僧正鄙波耽野の弟子たる某乙。

髮侵肌甲削膚洗情塵於本淨水焚信香於法界爐

【講方】髮は肌を侵し、甲膚を削る。情塵を本淨の水に洗ひ、信香を法界の爐に焚く。

【字訓】○髮侵肌甲削膚『文選』四十二、應璩が岑文瑜に與へし書に曰く「髮を割ること宜く膚に及ぶべし。爪を剪ること宜く肌を侵すべし」と。要するに髮を剃り、爪を剪るは出家の常の作法であるが、在家の人の髮を斷ち爪を剪つて以て丹懇を表するに譬ふ。○情塵……三毒の煩惱等の一切の煩惱。○本淨水……『華嚴經』七十八入法界品に曰く「菩提心とは淸淨の水の如し。性本より澄潔にして垢濁無きが故に」と。捨劣得勝の菩提心を指す。○信香……香は信心を標示するが故に信香といふ。○法界……『大日經疏』第七に曰く「夫れ法界とは即ち是れ心界なり」と。今は自身所具の一心を指す。

【參考】身心俱に淸淨無垢、精進潔齋の旨を明す。

【講義】我が身を淸淨に整ふるに當りては髮は肌に及ぶまで奇麗に、爪は膚を侵すまでも深く剪り以て形を淸淨に整へ、捨劣得勝の菩提心を以て六欲五塵等の心垢を洗ひ除き、信心の香を法界の爐たる自身所具の一心の上に焚き起す

燃慧燈乎一如室散覺華乎三點堂歸命臺上之大日投身樹下之能仁敢告訴乎心疾仰願慈悲三尊有靈證明

【講方】慧燈を一如の室に燃し、覺華を三點の堂に散ず。命を臺上の大日に歸し、身を樹下の能仁に投じて敢て心疾を告げ訴ふ。仰ぎ願くは慈悲の三尊靈あらば證明したまへ。

【字訓】○慧燈……智慧を燈明となす。○一如……一如本覺の道場のこと。○覺華……菩提の散華となす。○三點堂……三點は法身、般若、解脫。三點の佛果の道場をいふ。○臺上大日……梵網經の教主報身盧遮那佛を指す。盧遮那を譯して光明遍照といふ。故に義は大日と同じ。○樹下能仁……菩提樹下の釋迦で、梵網經に說く所の千百億の變化身の釋迦如來のこと。○心疾……三毒等の煩惱の義。○三尊……三寶を指す。

【參考】祈願の意を示す。

【講義】智慧の燈明を燃して一如本覺の理たる境界を照らし、菩提の散華を三點の佛果の道場に散じ、以て臺上の大日如來と、樹下の釋迦如來とに歸命敬禮し奉つて、敢へて心疾たる煩惱を斷除し給はらんことを訴ふ。仰ぎ願くは慈悲の三寶靈あらば降臨して證明したまらんことを。

風聞無情杞梓猶有父子之禮無智烏獺亦懷親息之孝何況天地之尤靈含氣之最貴誰忘父母之恩何忘師僧之德

【講方】風に聞く、情なき杞梓猶父子の禮有り、智なき烏獺も亦親息の孝を懷く、何に況んや天地の尤靈氣を含むの最貴誰か父母の恩を忘れ、何ぞ師僧の德を忘れん。

【字訓】○杞梓……杞梓は橋梓の寫誤ならんと『使臺』に註せり。橋梓とは二木の名、橋は高くして仰ぐ父の尊嚴に似たり、梓は俯して子の卑しきが如し。故に父子の尊卑に喩ふ。即ち『文選』四十六、王文憲集の序に曰く「孝友の性は豈に伊橋梓ならむ」と。『注』に向が曰く「伯禽、康叔成王に朝して周公に見ゆ。三び見へて三び笞たる。乃ち商子に問て曰く、吾れ二子周公に見ゆ。三び見へて三び笞たるゝは何ぞや、商子が曰く、南山の陽に木あり、橋と名く南山の陰に木あり、梓と名く。二子何ぞ往いて觀ざる。是に於て二子往いて之を觀る。橋木を見れば高うして仰ぐ、梓木を見れば實て俯す。二子還つて告ぐ。商子が曰く、橋は父の道なり。梓は子の道なり」と。○烏獺……返哺獺祭の孝行をいふ。○尤靈……生物の中で最も靈なるもので人間をいふ。『列子』上卷天瑞篇に曰く「天萬物を生ずるたゞ人を貴しとなす」と。

【參考】四恩を明す中、初めにその由來を明す。

【講義】風聞するに、たましひなき橋梓すら猶父子の尊卑の禮あり、また智慧なき烏獺にも返哺獺祭の親を思ふの孝行ありとかや。さればいかに況んや天地間に於ける萬物の中で最靈最貴たる人類に於ては誰れか父母の恩を忘れ、師の恩德を忘れようや、忘れる者は一人もない筈である。

經中佛說有恩處有其四種父母國王衆生三寶父母則生我哺我之功過於厚地國王則安我貴我之德逾於高天衆生則三世達親皆是考妣三寶者佛法僧也佛能開我生盲導示險夷法能沃我甘露除去熱惱僧寶之中有二種菩薩聖僧以四攝引我迷以四量醒我醉現前師僧之德四恩之中尤高尤深

【講方】經の中に佛恩處有りと說きたまふ。其の四種有り、父母、國王、衆生、三寶なり。父母は則ち我を生じ、我を哺する功厚地に過ぎたり。國王は則ち我を安んじ、我を貴ふするの德高天に逾えたり。衆生は則ち三世の達親皆是れ考妣なり。三寶とは佛、法、僧なり。佛は能く我が生盲を開き、險夷を導き示す。法は能く我に甘露を沃ひで熱惱を除去す。僧寶の中二種有り、菩薩、聖僧なり。四攝を以て我が迷を引き、四量を以て我が醉を醒す。現前師僧の德は四恩の中に尤も高く尤も深し。

【字訓】經中等……『心地觀經』第二報恩品に曰く「佛の言く、世間の恩に其の四種有り、一には父母の恩、二には衆生の恩、三には國王の恩、四には三寶の恩、是の如きの四恩一切衆生平等に荷負す。父母とは父に慈恩あり、母に悲恩あり、若し我れ世に住して一劫說くとも盡くすこと能はず、二に衆生の恩とは無始以來一切衆生五道に輪轉して互に父母となる。各大恩あるが故に。三に國王の恩とは福德最勝にして人間に生ずと雖も大自在を得、三十三天常に其の力を以て國界を護持す。山河大地盡く國王に屬す。是の故に大聖王正法を以て化し、能く衆生をして悉く皆安樂ならしむ」と。○恩處……恩の所在。○達親……達は通、通親は行き渡れる親ですべての親のこと。○考妣……亡父と亡母。○險夷……險は三惡道、夷は三善道及び出世の由來。○熱惱……『釋摩訶衍論』第六に曰く「妄法、眞心を燒く、是の故に熱と名く。又是を以て諸の衆生を惱亂す。是の故に惱と名く」と。○四攝……布施、愛語、利行同事。○四量……慈、悲、喜、捨の四無量心。

【參考】正しく四恩を明す。

【講義】經典の中に佛は恩德に就いて說き給ふ。即ち謂く、其の恩德に四種あり謂ふ所の四種とは父母、國王、衆生、三寶である。父母は我を生み、我を哺育す、その恩德地の厚きよりもより以上に厚深である。國王は我を安樣に過させ給ひ、且つ祿と位を得させ給ふに至るその恩德は高天よりもより以上に高厚である。衆生は三世に亘つてすべての親は皆是れ皆ては我が考妣たりしものである。三寶とは佛、法、僧であり、その中佛德とは、佛はよく我が心盲を開き、險夷の三惡道三善道等を諭示して導き給ひ、また法はよく我に甘露の味を味はせて心の熱惱を除去し、僧寶とは此の中に菩薩と聖僧との二種があり、此の二種の師よく四攝を以て我れ等が迷者を引攝して佛果に至らしめ、又四無量心を以て我れ等が生死の醉を醒す。されば現前に於ける師僧の恩德は四恩の中に於ては尤も高く、尤も深きものである。

何者父母之恩唯養一生之肉身。國王之德亦安一世之凡體。三寶雖遍法界。而都無見聞。所以知四恩之所在。識三寶之可歸。得現前之安樂。證後世之菩提者。皆是現前師僧之功也

【講方】何んとなれば父母の恩は唯一生の肉身を養ひ、國王の德は亦一世の凡體を安んじ、三寶は法界に遍すと雖も都て見聞することなし。四恩の所在を知り、三寶の歸すべきを識り、現前の安樂を得、後世の菩提を證する所以は皆是れ現前師僧の功なり。

【今講】○法界……法界とは實には自己の一心なり。○都無見聞……同體三寶なるが故に自己の一心中に遍滿せるが故に見離きなり。

【筆意】四恩の中特に現師の恩の勝れたるを明す。

【講義】何が故に現師の恩が勝れてゐるかといへば、父母の恩はたゞ肉身の一生を育養し給ひしものであり、國王の恩高厚なれども一世に於ける凡身の體を安穩に護り給ふものであり、三寶は法界に遍滿すれども、法界とは實には自己の一心に外ならぬ、されば自己の一心の中に遍滿し給ふものなれば見聞しがたく、感じ難きものである。我々が四恩の所在を知り、三寶の歸依すべきことを覺り、現前の安樂を得、後世の菩提を證する理りを知るに至る所以のものは實に皆是れ現前師僧の恩德によるものなればなりである。

是故斷臂仰不生之觀。投身渴寂滅之偈。良有以也

【講方】是の故に臂を斷つて不生の觀を仰ぎ、身を投じて寂滅の偈を渴ふ。良に以有り。

【今講】○斷臂……神光慧可禪師が達磨大師を小林寺に訪ひ、雪中に左臂を斷ちて、求道の誠を示せし故事を指す。此の故事は既に第七卷壽夢願文の下に出づ。○投身……雪山童子が樹上より身を投じて四句の偈の半偈を求め、遂に生滅滅已寂滅爲樂の半偈を求め得て佛果を体得せし故事を指す。此の故事も第七卷清丹州達覩に出づ。○不生觀……心不可得の安心のこと。

【筆意】師の教導の貴きことを故事を引きて明す。

【講義】こういふわけであるからしてかの慧可禪師は達磨禪師を訪ひ、臂を斷つて求道の誠を示し、以て師より心不可得の安心を授り、また雪山童子は樹上より身を投じて四句の半偈を願ひ求め、遂に生滅々已寂滅爲樂の偈を得て佛果を得るに至りしと稱せられてゐる。されば現師の恩の尊しといへることも良に理由のあることである。

伏惟先師德下。人形佛心。凡色聖神。智慧懷胸照世之德宛如日月。慈悲涌心濟人之功還同船筏。群品之耶孃。一人之歸憑。況復覆我如天載我如地。撫我若孃提。我如父潤吾似雨照我似燈

【講義】伏して惟れば先師德下、人の形にして佛の心なり。凡の色にして聖の神なり。智慧胸に懷きて世を照すの德宛も日月の如し。慈悲心に涌きて人を濟ふの功還つて船筏に同じ。羣品の耶孃、一人の歸憑なり。況や復我を覆ふこと天の如く、我を載すること地の如し。我を撫ること孃の若く、我を提ぐること父の如し。吾を潤すこと雨に似たり。我を照すこと燈に似たり。

【今講】○人形佛心……『涅槃經』第二純陀品に曰く「南無純陀、人身を受くと雖ども心は佛心の如し」と。○群品耶孃……群品は多くの民、耶孃は父母、要するに多くの人々のこと。○覆我等……『表制集』第四惠勝祭不空文に曰く「恩我を載すること地の如く、德我を覆ふこと天の如く、惠我を照すこと日の如く、法我を潤すこと泉の如し」と。

【筆意】先師の德を讃歎す。

【講義】伏して惟れば先師の德行たるや身は人身或は凡夫身なれどもその心は聖人の神であり、全くそれは佛心に等しきものであられた。般若の智慧を胸中に懷かれて世を照らし給ふこと宛も日月の光の如くに遍く照被し給ひ、慈悲心心中に湧ち〳〵て人を救濟する所の功力また船筏の人を利すると同じであつた。かくの如くなるが故に多くの人々の歸依を得、また御一人の御信任を添うせり。從つてまた弟子である所の我を覆ふこと天の如き高德を以て導き我を載すること地の如き深厚の恩を垂れて教ボし給ひ、我を撫育すること母の如く、我を提撕し給ふこと父の如くに慈育し給ふ。また法を以て吾を潤すこと雨の如くに、般若の智惠を以て我を照らし教ゆること燈光に似たり。

誰圖一朝天忽顛乎。一夕地忽裂。一夜燈乍滅兮。一旦河忽涸。悲哉悲哉痛乎痛乎。日月忽落世間乍暗。舟筏忽筏衆生無拯

【講方】誰か圖らん、一朝に天忽ちに顛へり、一夕に地忽ちに裂け、一夜に燈乍ちに滅え、一旦に河忽ちに涸れんとは悲しい哉、悲しい哉。痛しいかな、痛しいかな。日月忽ちに落ちて世間乍ちに暗く、舟筏忽ちに沒して衆生拯ふこと無し。

【今講】○河忽涸等……『涅槃經』第十九梵行品に曰く「甚深の法河今に於て涸れんと欲す。大法の明燈まさに滅えなんとすること久しからず。又曰く、法船沈みなんと欲す。迦葉赴く」と。

【筆意】入滅の相を明す。

【講義】かゝる様に德行高く、誠に佛の如き師なれば永く世に住り、世人を救濟せんことを願つてゐたのであるが故に誰か夭の如きことを思ひ設けようや、思ひ設けざる所であつた。即ち恰も一朝にして天顛り一夕にして燈光消え、一旦に渡水涸れ果つるかの如くに入滅し給ふの悲慘事が起らうとは、悲しき極みであり、痛しき限りである。師に先き立たれては恰も日月の光を失つて世間が暗迷になりしに等しく、また恰も河海に於て舟筏沈沒して渡るに由なきその如くに師に去られては最早や衆生を救濟するすべもなきに等しいのである。

法華座上釋迦倏匿。跡。三論堂中龍猛忽滅。影。四魔未除法將乍隱。三界未盡法幢倏摧

【講方】法華の座の上に釋迦倏ちに跡を匿し、三論の堂の中に龍猛忽ちに影を滅す。四魔未だ除かざるに法將乍ちに隱れぬ。三界未だ盡きざるに法幢倏ちに摧けぬ。

【今講】○釋迦、龍猛……共に先師に比す。即ち法華を講ずること恰も釋尊の如くであり、三論を講ずること龍猛の如くに達人なりしの意。○四魔……蘊魔・煩惱魔・死魔・天魔。

【筆意】先師の早世を悼む。

【講義】先師が法華經を講ずること恰も釋尊の說法の如くに巧みであらせられたのに、今やその法華經を講じ給ひし講座の上に先師跡を匿して在まさず、また先師が三論を講ずること恰も龍猛菩薩の如くに巧みであらせられたのに、今やその三論を講ぜし講堂の中には影を沒して在まさざるは淋しき極みである。我れ等弟子達が未だ四魔を除斷せざるに早や法將の菩薩たる師去り給ひぬ。師もまた未だ三界の人々を救濟し盡さざるに法幢たる師、早くも入滅し給ふ。

經行階頭苔生無跡。坐臥席中塵暗誰拂。簾月爲誰流

光苑華爲誰染色。松風每聽爛肝。竹籟觸目絶腸

【講方】経行の階の頭には苔生ひて跡無し。坐臥の席の中には塵暗うして誰か拂はん。簾月は誰が爲にか光を流す。苑の華は誰が爲にか色を染むる。松風聽く毎に肝を爛らし、竹籟目に觸れて腸を絶つ。

【字釈】○經行……『要覽』巻下に曰く「慈恩の法花玄賛第二に曰く、西域には地湯ふ、塼を畳んで道とす。中に於て往來す。布の經の如し。故に經行といふ」と。今は單に行歩の義。○階頭……堂にのぼる道のあたり。○竹籟……竹を吹く風。

【要意】滅後の憂ひを明す。

【講義】先師が常に行歩し給ふてゐた所の堂にのぼる道のあたりには、今や誰れも歩行せざるが故に苔生ひて先師の影もなし。また常に坐臥し給ひし所の部屋の中は今や主なき故に掃除する人もなく、塵が薄黒く積つてゐるのも哀れである。簾を照らす月影も光赫たれども誰れが爲めにか光照せるや。園の花盛んに咲き競ふてゐるけれども誰れが爲めにか咲ける。松風聽くごとに先師の在りし日を偲びて肝を爛らし、竹風吹き來るを見ては先師の恩德を思ひ浮べて腸を絶たるゝ程に悲しみを覺ゆ。

天上天下之中何處更謁。世出世間之裏何刹遊化。若歸多寶塔中耶。當還鷲峯窟裏耶。一乘妙法何方演說。三身歸命向誰吐響

【講方】天上天下の中には何れの處にか更に謁せん。世出世間の裏には何れの刹にか遊化したまふ。若し多寶の塔の中に歸るか。當鷲峯の窟の裏に還るか。一乘の妙法をば何れの方にか演說する。三身の歸命をば誰に向つてか響を吐かん

【字釈】○天上天下……天上は二十八天、天下は三界を指す。即ち天地間宇宙全体の義、○多寶塔……先師を多寶塔に比す。多寶塔は大日如來の三昧耶身を表す。○鷲峯窟……先師を鷲峯山の釋迦に比す。○三身歸命等……此の意味は、師已に滅度して世三身を失ふ。誰に向かつてか歸命の聲を吐かんやといふにある。

【要意】滅度の後の師を追慕する義を明す。

【講義】三界二十八天中何れの處に於てか再び謁ゆることが出來るのであらうか世出世間の中、何れの刹土に於てか優遊化益し給ふや。若しは自性の境界たる多寶塔の中に歸趣し給ふや、はたまた耆闍窟の中に歸入し給ふや。一乘の妙法をば何れの處に於てか演說し給はんとするや。今や師滅度して世三身を失ひぬ。誰れに向かつてか歸命の聲を吐かんや。

迦陵哀音而今而今欲聽。象王威儀何辰何辰得見

【講方】迦陵の哀音而今も而今も聽かんと欲ふ。象王の威儀をば何れの辰、何れの辰か見ることを得ん。

【字釈】○迦陵哀音……迦陵は迦陵頻伽（Kalavinka）で妙聲、好聲と譯す。鳥の名、此の鳥、穀中にありて聲を發す。其の聲の妙なる餘鳥に超え、如來の音聲を除きては天人等も及ぶものなしといふ。雪山に生むといひ、又極樂鳥ともいふ。哀音の哀は悲哀の哀の義ではなく、今の場合は哀は愛に通じ愛音の義で、美音のこと。即ち迦陵頻伽鳥の美聲を指し、その如くに勤操大德が美聲なりしに喩ふ。○象王……『涅槃經』に曰く、「大象王とは謂く諸佛なり」と。勤操の威儀が佛の如くに正しきに喩ふ。

【要意】重ねて師を思慕する義を明す。

【講義】かの迦陵頻伽鳥の聲に譬に麗はしき妙聲であると言はれてゐるが、我が先師の聲もその如くに麗はしき聲なりしが故に先師の麗はしき御聲の說法を今も今も猶聽聞せんと願ひ欲する所である。また佛の如く正しき威儀に住し給はれた先師に何れの日、何れの時にか謁ゆることを得ん。最早や永遠に謁ゆること能はざることを思へばうたた感慨に堪えぬ。

哀哉哀哉悲哉悲哉。弟子等歎雲涌胸悲雨灑面。迷日月之遄流。忘忌日之速臨。今僅爲報罔極之恩澤。答昊天之德海。謹奉寫梵網之妙經。講演了義之奥旨

【講方】哀れなる哉、哀れなる哉。悲しい哉、悲しい哉。弟子等歎きの雲胸に湧き、悲しみの雨面に灑ぐ。日月の遄く流るゝに迷ひ、忌日の速かに臨むことを忘る。今僅かに罔極の恩澤を報じ、昊天の德海を答せんが爲に謹んで梵網の妙經を寫し奉り、了義の奥旨を講演す。

【字釈】○悲雨……涙のこと。○忌日等……『楞嚴經』に曰く「時に波斯匿王其の父王の爲に諱日に齋を營み、佛を宮掖に請じたてまつる」と。○罔極……さはまりなきこと。○昊天德海……天の際限なきが如く、師の恩惠の大なるを云ふ。○了義……『楞嚴經疏』第一に曰く「了義とは說教化他なり。義理を詮表して覆藏あること無し。理を窮め、性を盡して實に稱つて談ずるが故に」と。

【要意】供養の相を明す。

【講義】かくも早く恩師を失ひしことは恂に哀悼の極みであり、悲しみの極みである。そこで弟子等悲歎の心雲の如くに胸に涌き、涙はらはらと頰に流る。日月光陰といふものは水の流るゝが如くに早く過ぎ去るといふことを悟らずして一週忌の忌日も目前に迫れることをうつかりと忘る。今僅かに罔極の恩澤に報ひ、昊天の恩惠を報答せんが爲めに梵網經を書寫し奉り、その所詮の義理の奥旨を講演する次第である。

仰願蓮華臺上盧舍那如來。千百億國釋迦尊。與四十心地法門眷屬十方塵刹一切賢聖衆

【講方】仰ぎ願くば蓮華臺上の盧舍那如來千百億國の釋迦尊と四十心地の法門眷屬十方塵刹の一切賢聖衆と。

【字釈】○蓮華臺上等……『梵網經』巻上に曰く「爾の時に蓮華臺藏座上の盧舍那佛廣く答へて千の釋迦、千百億の釋迦に告げたまはく、問ふ所の心地法品とは諸佛當に知るべし。堅信忍の中に十發趣の心をもつて果に向ふ。是の十發趣の心より堅法忍の中に入て十長養心をもつて果に向ふ。是の十長養心より堅修忍の中に入て十金剛心をもつて果に向ふ。是の十金剛心より堅聖忍の中に入て十地をもつて果に向ふ。是の四十の法門品は我先に菩薩たりし時修して佛果に入るの根源なり」と。○盧遮那佛……報身の盧遮那佛。○千百億釋迦……葉中の小釋迦にして穢土の化身を指す。○四十心地法門……三賢十地の法門。○眷屬……『玄義釋籤』第八に曰く「眷屬とは只是れ彼の修多羅に隨順せる流類の法のみ」と。一本には賢聖衆の下に云云の字ありと稱せらる。

【要意】正しく願意を明し給ふ。

【講義】仰ぎ願はくは蓮華臺上の盧遮那如來、葉中の千百億國の釋迦世尊と三賢十地の法門及びそれに隨順せる所の流類の法、乃至は十方微塵國の一切の賢聖衆とともに佛國に優遊し給はらんことを。

八〇　有人爲先舅修法事願文

有人爲先舅修法事願文

【講方】有人先舅の爲めに法事を修する願文。

【要意】初に題名を掲ぐ。

【講義】或る人が亡せる母方の伯父のために法事を修し營むるに際しての願文。

如來調御已示化滅。非想長壽豈有長存。有始有終生者有死。合會有離良以有也

【讀方】如來調御已に化滅を示す。非想の長壽豈長く存することと有らんや。始有れば終有り、生ずる者は死すること有り合會して離るゝこと有りといふ良に以有り。

【字訓】○如來調御……如來も調御も倶に佛の十號の一つなり。○悲想長壽……『心地觀經』第五阿蘭若品に曰く「三界の頂非非想天八萬劫盡きぬれば下地に還生す」と。

【筆意】世の無常の義を明す。

【講義】永遠不滅の眞理を證得し給へる調御の如來も已に化滅の相を示し給ふ。されば長壽を誇る非非想天と雖ども いかでか長らうべき。宇宙の節理として始めあれば必ず終りあり、生ずるものは必然的に死するものであり、會合すれば必ず別離あり、所謂愛別離苦會者定離等と言はれてゐることは良に穿てる眞理である。

先舅某氏。春秋稍高。冀終耆壽。誰圖此界緣盡。男女孤露痛當奈何。痛當奈何

【讀方】先舅某の氏は春秋稍く高うして終を耆壽に冀ふ。誰れか圖りし此の界の緣盡きて男女孤露ならんとは。痛ひかな當に奈何せん。痛ひかな當に奈何せん。

【字訓】○舅……母方の伯父。○耆壽……耆とは『禮記』には六十歲の稱とし、『曲禮』には八十歲の稱とす。今は後者の義とす。要するに長命のこと。○男女孤露……先舅の子供達が孤兒となること。

【筆意】先舅某氏の逝去を明す。

【講義】先舅某氏は齡を段々に重ねてその終命を耆壽の高齡まで保たれんことを冀つてゐた次第である。然るにかくも早く此の浮世の因緣盡きて逝去すとは誰れが圖り知らん。今やその子息子女達孤兒となる、痛ひかな痛ひかな。一体如何にせば良いであらうか。

夫生死長夜假惠日以照朗。衆生無歸依救世而得酬

【讀方】夫れ生死の長夜は惠日を假つて以て照朗し、衆生の無歸は救世に依つて酬ふることを得。

【字訓】○假惠日……太陽の如き佛智を假りての意。○無歸……歸託する所なき衆生をいふ。○救世……『大日經疏』第十九に曰く「救世者は即ち是れ佛なり」と。○得酬……亡者の遺恩を酬報することを得るの意。

【筆意】佛によりて亡者の遺恩を酬報し得る義を明す。

【講義】夫れ思ふに生死の長夜は太陽の如き佛智を假りて照朗することに依りて始めて明證することを得るものであり、また歸託する所なき衆生は救世者たる佛の威力を假り憑ることによりて亡者の遺恩を酬報し得るに至るものである。

伏願彌陀種覺濡足本誓。觀音勇猛接手悲願。橋艤八難之河。化生八德之蓮

【讀方】伏して願くは彌陀種覺、足を本誓に濡し、觀音勇猛、手を悲願に接へて八難の河に橋し、艤して、八德の蓮に化生せしめたまへ。

【字訓】○種覺……佛のこと。『法華文句』五之一に曰く「十方の種覺共に稱譽する所」と。○濡足本誓……足は大悲化他の御足、本誓は因位の誓願。即ち大悲化他の御足を生死の大海に濡して一切の衆生を攝化したまへの義。○勇猛……菩薩の翻名。されば菩薩のこと。一說には勇猛は得大勢至菩薩なりとも稱せうる。○八難……『維摩經』に出づ。佛を見ず、正法を聞くを得ざるを難といふ。これに八種あり。在地獄の難、在畜生の難、在餓鬼の難、在長壽天の難、在北鬱單越洲の難、盲聾瘖瘂の難、世智辯聰の難、生佛前佛後の難。○八德……極樂界のこと。即ち『釋摩訶衍論』第一序に曰く「蓮極を八德の珠池に植ゑたり」と。

【筆意】正しく願意を明す。

【講義】伏して願はくは阿彌陀佛大悲化他の御足を生死の大海に濡らして一切衆生拔濟の誓願を顧られて救濟力を垂れ、また觀自在菩薩大悲の誓願の御手を垂れさせ給ふて引導攝化し給ひ、以て恰も河に橋を架け、船渡しするその如くに八難に墮せる人々を救濟して、彌陀の極樂淨土に導き給はんことを祈り奉る。

聽苦空以開心蓮。觀山毫而入無生。廣及含靈同遊覺道

【讀方】苦空を聽いて以て心蓮を開き、山毫を觀て無生に入らん。廣く含靈に及ぼし、同じく覺道に遊ばん。

【字訓】○聽苦空以開心蓮……阿彌陀佛の說法を聞いて悟りを開きし故事を指す。即ち『觀經』に曰く「阿彌陀佛諸の比丘眷屬とともに圍遶せられて其の人の所に至つて苦空無常無我を演說し給ふ。即ち極樂世界に往生することを得蓮華尋いで開く」と。○山毫……白毫相が須彌山の如く高大なるをいふ。即ち『觀經』に曰く「無量壽佛の白毫を五山に喩ふ。而も須彌の高さ三百六十萬里、縱橫も亦然り。毫相此れに過ぎたること五倍なり」と。○入無生……無生法忍の位に入ること。○廣含靈……一切有情のこと。

【筆意】一切有情平等利益の義を明す。

【講義】阿彌陀佛の敎化敎誘に接し、以て苦空無常無我の敎說を聽聞してたちまちに心蓮を開きて悟證し、また彌陀佛の眉見の白毫相を拜して諸法實相の高大の理を體觀して無生法忍の位に入り給はんことを、そして更に一切の含靈にまで此の功德力を及ぼして以て一切の有情をして悉く皆覺道に優遊せんことを祈り奉る。

八一　和尚奉爲祈皇帝轉讀大般若經願文

和尚奉爲祈皇帝轉讀大般若經願文

【讀方】和尚皇帝を祈りたてまつらんが奉爲に大般若經を轉讀する願文。

【字訓】○和尚……『便蒙』によれば「此の法會は勅命によりて行はせられしものである。然るに和尚の二字を安ずることは何ぞや。西山の撰集には此れ等の疎漏なし」と云へり。

【筆意】最初に題名を掲ぐ。

【講義】和尚　皇帝の御安泰を祈り奉らんが奉爲に大般若經を轉讀し奉るに際しての願文。

作過者也暗爲福者也明。明暗不偕。一張一弱。覺智强則萬德圓。愚迷弱則千殃侵。强弱非他我心能爲。能爲白淨何讀經爲。不知此義自他俱勞。能覺此趣我師種智者也

【讀方】過を作す者は暗、福を爲す者は明なり。明暗偕らず一つは强く、一つは弱し、覺智にして强なるときは萬德圓なり。愚迷にして弱なるときは千殃侵す。强弱他に非ず、我が心能く爲す。能く爲して白淨ならば何ぞ經を讀むことを爲む。此の義を知らざれば自他俱に勞す。能く此の趣

を覺るは我が師の種智なる者なり。

【字訓】○過……罪のこと。○暗……無明のこと。○明……覺智のこと。○一强一弱……暗强きときは明弱く、明强きときは暗弱きこと。○愚迷弱……愚迷にして覺智弱きときはの意。○我師種智……我師とは佛のこと。種智とは一切種智のこと。

【拳意】唯心所變の理、即ち煩惱無体なれども凡夫の迷執より顯るゝことを明す

【講義】凡夫は忽念念起の無明煩惱に覆はれて諸法の道理に暗きが故に諸の惡業罪過を作るに至るものであり、佛は覺智を体得して諸法の道理に明るきが故に現當二世に於て善業功德を積みて福を得るに至れるものである。されば明と暗、即ち覺智と無明とは相反するものであり、その力用は同一平均たることは許されない。明强きときは暗弱く、また暗强きときは明弱きに至る。若し明たる覺智あくまで强きときは萬德圓滿して佛果を体得するに至る。之に反して愚迷にして覺智弱きときは千殃に侵かされ嗚ひきる。一体然らば此の强弱は何處に於て左右されるかといへばそれは他でもない我が心が能くなす所である。であるから我が心に於て若し覺智に對して能く强にして白淨信心であるならば、それで最早や悟りを得たことになるのであるが故に、何ぞ經典を讀誦するなどの修行を必要とせんやである。此の根本義を知らざれば自他俱に勞し、勞するとも益なし。能く此の義趣を覺ればこれ佛智を体得せる所謂佛そのものなのである。

伏惟我皇帝陛下。定慧構體智慧熏心。濡足五濁授手四生。三界之耶萬方之孃

【譯方】伏して惟れば我が皇帝陛下、定慧體を構へ、智慧心に熏ず。足を五濁に濡し、手を四生に授く。三界の耶、萬方の孃なり。

【字訓】○定慧……定は散亂亂動を離れたるを云ひ、慧は正見正思を以て諸法の實相の道理を覺智する智慧を指す。○智慧……大悲後得智をいふ。慧の字に就いて『私記』には古本には「悲」の字に作ると注記せり。○五濁……『法華經』第一方便品に曰く 劫濁・煩惱濁・衆生濁・見濁・命濁なりと。

【拳意】皇帝陛下の御高德を讃嘆し奉る。

【講義】伏して惟れば 皇帝陛下におかせられては清淨無垢の覺智を以て玉體を御構成し給ひ、大悲後得智を以て大御心となし給ひ、その大悲後得智を以て心内の煩惱を照破し給ひ以て大悲の御手を一切の有情に指し延べさせ給ふて御救濟し給ふ。されば三界の衆生は父の如くに仰ぎ尊び、萬方の一切の衆生は母の如くに慕ひ尊び奉る。

堯子不肖釋兒狂狠。元元罪深旱疫爲瘼。愍此險炭屈尊接佛。洗心爲香恭體爲華。百僧克念轉讀大般若經。觀念三解脫門

【譯方】堯の子は不肖にして釋兒は狂狠たり。元元罪深うして旱疫瘼を爲す。此の險炭を愍んで尊を屈して佛に接す。心を洗ふて香と爲、體を恭んで華と爲し、百僧克念して大般若經を轉讀し、三解脫門を觀念す。

【字訓】○堯子……堯帝とその子丹朱。堯帝は聖天子にまします。依て今 陛下を堯帝に比し奉り、その子丹朱は不肖にして天下を授くるに至らず、よりて今人民を丹朱に比す。○釋兒……釋尊とその子善星。釋尊は佛であり、今陛下を釋尊に比し奉り、その子善星は一偈一句一字の義をも解せず、惡友に交り、惡邪見をなせし不肖の子である。依て今人民を善星に比す。○狂狠……心の亂れくるへること。○元元……人民のこと。○旱疫……旱魃と疫病○瘼……病のこと。くるしみわずらふこと。○險炭……險難塗炭の苦しみのこと。○香等……清淨信心を以て香花等に喩ふ。○克念……よく思ひをこらすこと。○三解脫門……『法界次第』に出づ。また三空門、三三昧ともいふ。『大智度論』第五に曰く「諸の三昧とは三三昧なり。空・無作・無相なり。諸禪定法の中に此の三定法を以て三解脫門とす。亦名て三三昧とす」と。

【拳意】上御一人は至德至善にましまされるけれども萬民狂狠なるが故に旱疫起る所以と、その旱疫除滅を祈らせ給ふ大御心とを明し給ふ。

【講義】かの堯帝や釋尊に聖德にましますけれどもその子供達は不肖狂狠たるその如く、今上御一人は至德至善にましますけれど諸の元元狂狠にして罪深きが故に旱魃疫病など起りて人々患ひ苦しむ。此處に於て元元のこの險難塗炭の苦しみを愍れみ給ふて、諸佛諸尊を迎請して清淨の信心を以て香を献じ、華を供養して此れ等の苦患を祈り給ふ。此處に於て百僧克念に思を致して大般若經を轉讀し、般若の空理の至極たる三解脫門に觀念をこらし奉り、以て一切の災厄の除滅を祈り奉る。

仰願空空一字蕩吾民之業。智智二理茂吾君之福

【譯方】仰ぎ願くは空空の一字吾が民の業を蕩し、智智の二理吾が君の福を茂くせん。

【字訓】○空空一字……大般若經の經文の一字一字が皆空空の理を說けるものなるをいふ。空々とは内身外境ともに空なれども、其の空も亦空にして執着すべきものなきこと。○智智……上の智は人空智卽ち能觀の智。下の智は法空智卽ち所證の智を指す。○二理……智智所證の人無我、法無我の理にして是れ經の所詮なり。

【拳意】正しく願意を明し給ふ。

【講義】仰ぎ願ふらくは經文の一字一字に含める所の空空の妙理によりて元元の惡業を除滅し、大般若經所詮の理趣たる智智所證の人法二無我の妙理の功德によりて、吾が君の御福祉益々御倍增あられんことを祈り奉る。

不勞石舞甘澤汎溢不用柳枝毒氣殄滅

【譯方】石舞を勞せずして甘澤汎溢し、柳枝を用ひずして毒氣殄滅せん。

【字訓】○石舞……石燕が飛ぶことで風雨の降る兆のこと。これは『湘州記』に出でたる故事にして既に第六卷雩の願文に出づ。○甘澤……良き水田のこと。○柳枝……禪提比丘が捨てし所の齒木より芽を出せし柳枝を以て水を灑げば疫病癒ゆと云ひし故事のこと。即ち『灌頂經』第九（大正藏二十一・五二二頁）の取意を記して曰く「昔維耶黎城の民、疫に遭ふ。一りの年少の比丘あり、禪提と名く。摩訶神呪を持し、往いて爲めに之を除る。疫人皆癒ゆ。其の遷化するに至つて民また疫に遭ふ。民禪提を思つて遂に其の住所に往くに たゞ嚼む所の齒木、地に擲つて林をなすを見る。林下に泉あり、民其の水を酌んで楊枝を折つて搦抑して灑げば病者皆癒え、毒氣消亡す」と。

【拳意】法の功德を讃嘆す。

【講義】かくの如く丹心を竭めて祈願し奉りしことなればやがて法の功德顯著にしてかの石燕の乱舞を待たずして慈雨良田に滿ち溢ふれ、又かの柳枝を用ひずして直ちに疫魔除滅し、惡病治癒するに至り、萬民安穩にして天下泰平となることであらう。

上無爲而尊。下無事而安。五類之天八道之神同沐法水共登覺道

【譯方】上無爲にして尊く、下無事にして安からん。五類の天八道の神、同じく法水に沐して共に覺道に登らん。

【字訓】○五類天……上界天・虛空天・地居天・遊虛空天・地下天。○八道之神……『文選』第四廿泉賦に曰く「八神奔て聲蹕す」と。注に曰く、八神には八方の神なりと。今は八方の鬼神を指す。

【拳意】諸天諸鬼神平等利益の義を明し給ふ。

【講義】かくて上御一人にかかせられては御高德極りなく無爲の治益々盛んにならせ給ひ、愈尊く、愈長し。また下萬民は無事安穩ならん。五類の諸天、八方の鬼神皆平等に此の法水に沐して共に覺道に優遊せんことを祈り奉る。

八二　有人爲亡親修法事願文

有人爲亡親修法事願文

【訳方】有る人、亡親の爲めに法事を修する願文。

【字訓】『便覽』に此の願文は大師の作に非ずと疑つて曰く、「此の願文は表白體なり。或る人疑つて謂へらく、此の篇恐くは大師の草する所にあらず」と。

【會意】初に題名を掲ぐ。

【義】或る人が、その亡親の爲めに法事を修するに際しての願文。

聞夫牟尼善逝開六行於娑婆、同利三根之客。

【訳方】聞くならく、夫れ牟尼善逝は六行を娑婆に開いて同じく三根の客を利し。

【字訓】○牟尼善逝……善逝は佛の十號の一。即ち釋迦牟尼世尊のこと。○六行……六度の行のこと。○娑婆……又は娑詞、索詞とも書し、梵音サハ（Sahā）の音譯字にして、此れを意譯して忍土、忍界などと譯す。内に諸の煩惱、外に寒暑風雨等の苦を堪え忍ぶ國土の義にして、この世界のこと。○三根……上根・中根・下根のこと。一義にはまた三乘を指すともいふ。

【會意】釋尊の利益行を明す。

【義】次の如くに聞き及んでゐる。即ちかの釋迦牟尼世尊は六度の行を娑婆世界に行じて以て三根の衆生即ち一切の人々を悉く皆平等に利益し安樂ならしめ給ひ。

藥師如來發十二於嚴城、悉引四部之類。

【訳方】藥師如來は十二を嚴城に發して悉く四部の類を引く。

【字訓】○十二……藥師如來の十二大願のこと。○嚴城……毘舍離、唐には廣嚴といふ。謂く此の城廣大寬博にして嚴飾淨美なるが故に廣嚴城といふ。この義ならば釋尊が藥師の本願を說き給ひし會場を指す。『閑書』に曰く、「藥師、因地に在せし時東方淨瑠璃界の嚴飾なるを我れも當來作佛せば彼の界に於て此の如く嚴淨ならんと誓はせるを發嚴城と云ふ。法藏比丘の西方の淨土を見願を發し、今現に果を得たまふが如し」と。此の說ならば藥師の淨土甚嚴城の義なり。○四部……比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆のこと。

【會意】藥師如來の化他の德を嘆ず。

【義】また藥師如來の十二大本願を廣嚴城に開說して菩薩道を行ぜしより以來悉く一切の四衆を引導敎化し給ふ。

明知攝引之力逐物多端。將導之化隨類殊門。彌乃出火宅之寶車。入淨土之妙門。良不由如此眞典也

【訳方】明に知んぬ。攝引の力物に逐つて端多く、將導の化類に隨つて門を殊んず。爾うして乃し、火宅を出づるの寶車淨土に入るの妙門良に此の如くの眞典に由らざらんや。

【字訓】○攝引……攝取誘引。○將導……釋尊を指す。○火宅……三界のこと。○寶車：『心地觀經』第二報恩品に曰く「法寶は正しく是れ三乘の寶車なり衆生を運載して火宅を出づるが故に」と。○眞典……牟尼の開說藥師の本願の如きの經を指す。

【會意】敎法萬差なる所以を明す。

【義】如上の實例に徵して明かに知んぬ。即ち攝取誘引の方法は物に應じて複雜多岐に亘るものである。從つて釋尊の敎化は衆生の機類の差別に隨つて其の敎化敎導の內容を殊にし給ふに至つたのであると。か樣な理由があるが故に三界の火宅より出離の敎、即ち三乘の敎法、或は淨土に入るの妙門等種々の法門が說かれてゐる次第であるが、か樣に多種多樣の敎法を說かれてゐるけれどもその根本はかの釋迦牟尼開說の藥師本願經の如く、一切衆生利益救濟といふことにあるのである。

但秋黃葉繽紛終無返枝之期。夏蓮華萎落豈有託臺之期。此知難會易別者慈親芳儀易去難留者恩愛之香中

【訳方】但し秋の黃葉繽紛として終に枝に返るの期無し。夏の蓮華萎み落ちて豈に臺に託くの期有らんや。此に知んぬ。會ひ難うして別れ易きは慈親の芳儀、去り易うして留り難きは恩愛の香しき中なり。

【字訓】○繽紛……木の葉の亂れ散るさま。○臺……蓮臺のこと。○芳儀……芬芳たる姿儀。

【會意】有爲無常の相を明す。

【義】轉つて思ふに秋の黃葉繽紛として亂れ散りて終に枝に返るの時なく、また夏の蓮花萎みて池水に落ちては再び元の蓮臺に返り託くの時なきその如く一切のものは死滅して再び逢ふことなし。此れ宇宙の眞理である。此處に於て知んぬ。會ひ難うして別れ易きは慈親の芳姿であり、去り易うして留り難きは恩愛の麗姿である。げに生者必滅會者定離の理りは如來の金言である。

以是今日檀主。爲兼報四恩德。次摧病患怨。得全身。爲未來脫惡趣。得解脫身。寫大乘等。莊嚴道場。設純陀之妙供。開須達之寶藏。供養一切三寶。

【訳方】是を以て今日の檀主、兼て四恩の德を報じ、次に病患の怨を摧いて身を全うすることを得んが爲に、未來に惡趣を脫れて解脫の身を得んが爲に、大乘等を寫し、道場を莊嚴して純陀が妙供を設け、須達が寶藏を開き、一切の三寶を供養す。

【字訓】○兼報四恩……今此の法會は亡親の爲めに催ほせしものなるが故に親の爲めにするといふべきであるのに、特に親の爲めにすると云はざるは四恩の中に父母あるが故である。兼ての字此の意味を彰はす。○純陀妙供……純陀の最後の供養を指す。即ち『涅槃經』第二純陀品に曰く「爾の時に會中に優婆塞あり。是れ栴尸那城の工巧の子なり。名を純陀と曰ふ。悲泣墮淚して佛に白して言さく、たゞ願くは世尊我れ等が最後の供養を受けたまへ。無量の諸の衆生を度せんが爲めの故に。爾の時に世尊、純陀に告げて曰く、我れ今汝が最後の供養を受けて汝をして檀波羅蜜を具足せしめん」と。○須達之寶藏……善施長者の財施を指す。即ち『西域記』第六に曰く「蘇達多唐には善施と言ふ。舊に須達と曰へるは訛なり。善施長者仁あつて聰敏なり。積んで能く散ず。乏を賑はし、貧を濟ひ、孤を哀れみ、老を卹む、時に其の德を美めて給孤獨と號す」と。

【會意】檀主の願意と至心供養を明す。

【義】是を以て今日の法莚の檀主、四恩の德を報謝し、併せて心病の根源を摧破して身を全うせんが爲めに、また未來に於ける惡趣の果報を脫却して解脫身を得證せんが爲めに大乘の諸經典を書寫し、道場を莊嚴して、かの純陀の妙供の如くに丹誠を籠めて供養物を辦じ、またかの須達の施物の如くに仁慈の心を以て施物をなす等、一切の三寶に至心に供養し奉る

以此功德奉資爲二所御靈等。阿彌陀如來示得道於六八之廣津。觀世音大士開攝化於九品之正路。早遊極樂之刹。令生蓮臺之上云云。檀主樹罰之德等須達云云西洞之九千命每人令招。蛇估之八萬壽各令受之云云

【訳方】此の功德を以て二所の御靈等の爲めに資し奉る。阿彌陀如來、得道を六八の廣津に示し、觀世音大士、攝化を九品の正路に開きたまへ。早く極樂の刹に遊び、蓮臺の上に生せしめん。檀主樹罰の德須達に等しからむ。西洞の九

千の命人毎に招かしめ、蛇估の八萬の壽各各之を受けしめん。

字訓 ○二所御靈……父母の靈を指す。○六八廣津……阿彌陀如來の四十八の本願を指す。○九品之正路……往生淨土の修因のこと。○檀主樹罰等以下……此の三句三十三字は古來より未詳とさる。恐く寫誤あるならん。

掌意 正しく廻向菩提の義を明す。

講義 此の功德を以て父母の御靈等を翼け奉らんが爲めの資となし奉る。されば阿彌陀如來は四十八願の得道の救濟力を垂れ、觀世音大士は九品淨土往生の正路を開示して攝化したまはんことを。そして早く極樂の世界に優遊せしめ、蓮臺の佛果に上生せしめんことを。檀主樹罰の德、須達に等しからしむ云云。西洞王母の九千歲の壽命を人毎に保たしめ、蛇估の八萬の壽齡を各人毎に受けしめんことを。

不入黃泉之九途。不掌琰魔之二使。直向安養之寶刹。必昇兜率之天宮。

講方 黃泉の九途に入らず、琰魔の二使に掌られず。直ちに安養の寶刹に向ひ、必らず兜率の天宮に昇らん。

字訓 ○黃泉……地下の泉。死者の行く所。○九途……九重のこと。地に九重あるが故に九泉とも九重ともいふ。よみぢのこと。○琰魔二使……牛頭獄卒、馬頭羅刹をいふ。○安養……安樂、極樂のこと。

掌意 平等利益の義を明す。

講義 かくて一切の人々黃泉の九重に墮入せず、また琰魔の二獄卒にも縛せられず、直ちに安養極樂世界に向ひ、或は兜率天宮に昇入せんことを。

八三　有人爲先師修法事願文

有人爲先師修法事願文

講方 有る人、先師の爲めに法事を修する願文。

字訓 ○有人……先師が比丘尼なるが故に有人もまた尼なることを知る。

掌意 初に題名を揭ぐ。

講義 或る尼僧が、先師の爲めに法事を修するに際しての願文。

夫大海雖深羅睺之脚能極其底。蘇迷雖大大士之手能擲他界。

講方 夫れ大海深しと雖ども羅睺が脚能く其の底を極む。蘇迷大なりと雖ども大士の手能く他界に擲つ。

字訓 ○羅睺之脚等……羅睺阿修羅王が深海の底を極めし故事を指す。即ち『大集經』第十八不可說菩薩品に曰く「大海中の如き、羅睺羅阿修羅王あり、また其の餘の衆生の類あり。たゞ阿修羅能く其の底を得、餘は則得ず」と。羅睺については『法華文句』第二之二に曰く「羅睺此には障持と云ふ。身を化して長八萬四千由旬、手掌を擧げて日月を障ふ」と。○大士之手等……『維摩經』第六不思議品に曰く「不可思議解脫に住する菩薩は三千大千世界を斷取す。陶家の輪の如く、右の掌の中に置け、恒河沙世界の外に擲過す。其の中の衆生已が往く所を覺らず、知らず」と。即ち菩薩が三千大千世界を擲過せしといふ故事を指す。

掌意 一心の妙用無碍自在なる義を明す。

講義 夫れ思ふに大海深しと雖ども羅睺阿修羅王は能くその底を極め、また須彌山高大なりと雖も菩薩大士は手を以て掴んで能く他の世界に擲つと稱せらる。

然則深海不足爲深。大山不足爲重。雖云二親之恩粉身難報。嚴君之德殞命巨酬。然猶養四大之肉身。榮一世之富貴。

講方 然れば則ち深海も深しと爲るに爲らず、大山も重しと爲るに足らず。二親の恩身を粉にしても報じ難く、嚴君の德命を殞しても酬ひ巨しと云ふと雖ども、然れども猶四大の肉身を養ひ、一世の富貴を榮かす。

字訓 ○嚴君……上御一人を指し奉る。○四大之肉身……地水火風因緣和合して身を成す、故に四大の肉身といふ。肉身を養ふは父母の德による。○富貴……俸祿を受くる故に富といひ、官位を受くる故に貴といふ。

掌意 次下に師德を嘆ぜんが爲めに、今はそれに先き立つて父母と國王の御恩德を讃へしもの。

講義 して見れば深海も量り得るものであるが故に深しとするに足らず、また大山も掴んで擲つことの出來るものとすれば重しとするに足らざるものである。たゞ本當に深且つ重なるものは父母の恩であり、國王の御恩である。即ち父母の產生の恩は身を粉にしても報じ難きものであり、國王より蒙れる御恩德は生命を捧げて酬報し奉るともまだ酬報し得ざるものである。かゝる御恩德を蒙れる上に然も猶加ふるに四大の肉身を育養して頂きし父母の恩、一世の富貴を賜ふに至りし國王の御恩德、それらを思ひ思へば感泣の外はない。

至如照迷心以智燈。長智身以法食。拔三界之苦因。與四德之樂果。大師之恩廣而無際。大悲之德高而無頂。則知易沐難報暫受永逸嚴師之功歟

講方 迷心を照すに智燈を以てし、智身を長ずるに法食を以てし、三界の苦因を拔き、四德の樂果を與ふるが如きに至つては、大師の恩廣うして際無く、大悲の德高うして頂き無し。則ち知んぬ、沐し易うして報じ難く、暫く受けて永く逸きは嚴師の功歟。

字訓 ○智身……法身の惠命。○法食……閑法のこと。○四德……常・樂・我・常の四德。○大師……師僧のこと。○暫受永逸……師から閑法するは暫時であるが、師の敎化により永遠の生命を体得するに至りしはこれ永遠に安泰なり。○嚴師……師を敬していふ。

掌意 師の德を嘆ず。

講義 次にまた我々の迷心を照破するに智慧の燈明を以てし、法身の惠命を長養するに閑法を以てし、三界の惡業の苦因を拔除して四德の樂果を得さしむるといふことは師の恩德である。されば師の恩德は廣大にして際限なく、師の大悲の恩德高うして頂きなしといふべきであらう。そこで知り得ることは受け易うして報ひ難く、暫時學び受けて、永遠に逸樂なることを得るは嚴師の恩德の功によれるものであらうか、さやうである。

伏惟故禪尼某甲。久植德本。廣引衆迷。形示柔儀。業過丈夫。志均除疑之根微。心似四波之縛底。

講方 伏して惟れば故の禪尼某甲久しく德本を植ゑて廣く衆迷を引き、形柔儀を示して業は丈夫に過ぎたり。志は除疑の根微なるに均しく、心は四波の縛底に似たり。

字訓 ○德本……善根をいふ。○柔儀……やさしきすがた。○過丈夫……丈夫にも勝れたる尼僧なる義。○除疑……除疑天女が釋尊の會座に於て定に入り人天大會鐘鼓の聲にも驚かざるを指す。即ち『大日經疏』第一に曰く「除蓋障菩薩法會の中に於て佛身の量を知らんと欲ふ。乃至周ねく十方を極め、其の神通勢力を盡せども測ること能はず、歸て方に除疑天女を見るに佛を去ること遠からずして見に三昧に入る。又心力を盡して之を觀ずれども其の心の所行の處を測らず。無量の天鼓を聚集すること須彌山王の如く、神力を以て同時に聲を發して出定せしめんと欲すれども得ること能はず。佛の言く、我れ未だ菩提心を發さざるとき是の天女已に能く此の三昧に住す」と。○根微……根は意根、微は微妙、即ちその心所行の處測る能はざること。○四波

……金・寶・法・業の四波羅蜜菩薩」金剛界大日如來の四親近にして大日如來の大圓鏡智等の四佛智より出生す。諸尊能生の母にして、定尊、女形を示す。○縛底……縛底の解釋に就いて『開書』には種々の說を出せどもその中縛底は婆訶嚩底（Bhagavate）の略で、婆訶嚩底は譯して世尊といふ。されば四波の尊といふ義なりといへり。此の義可ならん。

拳意 先師たる故禪尼の人となりを讃ふ。

講義 伏して惟れば故の禪尼某甲は、久しく善根の功德を積みて廣く衆迷の人を攝化し給ふ。形はやさしき柔儀を示し、そのはたらきは丈夫に勝る程の活動をなし、その志はかの除疑大女の意志强固にして測り知る能はざりしその强固さに等しきものであり、その心は四波の尊の智慧に似し程の智慧の持主であられた。

毎至曉鍾振響夕鼓吐音。念念爲思人生非百年共營萬藏業。業賊日聚陳四魔之軍。命藤夜斷入死王之殃。

講方 曉鐘響を振ひ、夕鼓音を吐くに至る毎に念念に思を爲す。人生百年に非れども共に萬歲の業を營む。業賊日に聚つて四魔の軍を陳ね。命藤夜斷えて死王の殃に入る。

字訓 ○念念爲思……弟子尼が朝夕の鐘鼓の音を聞く毎に先師を思ひ浮べて悲歎に暮るゝこと。○人生非百年等……人生七十は古來稀なるを覺らずして耽樂して萬歲の業を造ること。○四魔……蘊魔・煩惱魔・死魔・天魔の四種の魔。○命藤……黑白の二鼠が命の藤を嚙んで命を斷たんとすること。此の故事は既に第四卷內公主遺言に出づ。○死王……閻魔王を指す。

拳意 故禪尼の入滅を明す。

講義 曉の鐘の音、夕の鼓の音を聞く毎に思師の在りし日を思ひ浮かべて一入悲悼す。思へば人生七十は古來稀なりといへる古諺の通り、百歲の齡を重ねることは稀れであるのに、然るにそれを覺らずして耽樂して萬歲に亘りて輪廻する所の惡業を造る。從つて業賊日に聚つて四魔盛んに競ひ、かくて遂に命藤を斷たれて閻魔王の殃罰を受くるに至るがこれ世の常である。

雖然深醉癡愛醒悟無日。久覆無明還源無期。自非朝烏擧曜春雷解蟄。何驚長眠之子昇大覺之岸。兼紹先師之貽。

講方 然りと雖ども深く癡愛に醉つて醒悟に日無く、久しく無明に覆れて還源期無し。朝烏曜を擧げ、春雷蟄を解くに非ず自んば、何ぞ長眠の子を驚かして大覺の岸に昇り、兼て先師の貽に紹かん。

字訓 ○癡愛……おろかなる愛。○醒悟……さとること。○無日等……『釋摩訶衍論』第三に曰く「自性淨心を隱滅して還源日なし」と。○烏日……佛日を指す。○春雷……法雷のこと。○貽……貽謀。貽字以下闕文。

拳意 佛の功德を歎じ、併せて先師の遺志を紹ぐ旨を明す。

講義 かゝに無常は世の常であり、それを悼むも亦人の情であらうけれども然れども徒らに癡愛に引かれて悲哀に泗んでゐては醒悟する日は遂には來らじ。それでは永遠に無明によりて自性淨心を隱滅されて還源する時期は來ない。そこで佛日を仰いで、佛智の光に照曜され、法雷を聞きて胸中に眠れる心眼を醒すにあらざれば、どうしてや長眠の子たる凡夫は自覺して大覺の岸に渡り昇り、兼ねては先師の遺志たる一切衆生救濟の謀を紹ぎ得ようや。

八四　被修公家仁王講表白

被修公家仁王講表白

講方 公家の仁王講を修せ被る表白。

字訓 ○仁王講……仁王會のことにして仁王會は鎭護國家萬民豐樂のために、仁王般若經を講讃する勅會にして御齋會と相並びて國家の要典たりしもの、今此の仁王會は天長二年七月十九日、淳和天皇の勅命によりて修し奉れるものである。

拳意 初に題名を揭ぐ。

講義 勅命を蒙りて仁王會を修し奉るに際しての表白。

唐矣三尊耶嬢六趣構殿大虛之無際建都妙空之不生。五眼高照赫日之光非儔四量普覆靉雲之冪何喩

講方 唐なるかな三尊、六趣に耶嬢たり。殿を大虛の無際に構へ、都を妙空の不生に建つ。五眼高く照して赫日の光儔に非ず。四量普ねく覆ふて靉雲の冪何ぞ喩へん。

字訓 ○唐……大。○三尊……仁王般若能說の敎主たる釋迦・普賢・文殊の三尊を指す。○大虛之無際……遍法界を指す。○妙空……眞空のこと。○五眼……舊譯『仁王經』序品に曰く「五眼法身大覺世尊」と。○四量……新譯『仁王經』に曰く「四無量心普覆一切」と。されば五眼は佛、四量は法。○靉靆……雲の盛んなるさま。○冪……覆。

拳意 仁王經敎主の三尊の德を嘆ず。

講義 誠に大なるかな三尊の德、即ち六趣たる一切有情の耶嬢に當り、遍法界を宮殿とし、妙空の不生を敎都として建立し、五眼法身大覺世尊として高く照曜すること太陽の光りの比類にあらず、四無量の慈心を以て一切の衆生を覆化すること盛んにしてかの靉靆の盛んに覆ふことも比喩する能はざる程である。

吾子多病醫藥不遑。奇哉大哉欲談舌卷

講方 吾子多病にして醫藥遑あらず、奇なる哉、大なる哉、談ぜんと欲するに舌卷く。

字訓 ○吾子……衆生のこと。『法花經』第二譬喩品に曰く「今此の三界は皆是れ我が有なり、其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり」と。○醫藥不遑……救療の閑暇なきをいふ。○奇哉大哉……四量普覆の無邊なることを歎ぜしなり

拳意 別して三尊の德用を嘆ず。

講義 一切の衆生皆心病を患ふが故に三尊の佛救療に遑なし。その三尊の救濟即ち、四無量心を以て一切衆生普覆の作用たるや誠に奇妙絕大にしてそれを語らんとするも舌卷きもつれて說く能はざる程に奇妙絕大のものである。

伏惟我皇帝陛下百億之一一得之貞

講方 伏して惟れば我が皇帝陛下百億の一、一得の貞なり。

字訓 ○百億之一……百億萬の中の御一人であらせらること。○一得之貞……一は道を指す。『老子』下卷昔之得一章に曰く「天一を得て淸めり、地一を得て寧し。王一を得て天下の貞たり」と。

拳意 淳和帝の御高德を讃嘆し奉る。

講義 伏して惟れば淳和帝におかせられては百億萬人の中の御一人にましまされ、道を得させ給ひてよく萬邦を保正し給ふ所の聖天子にましまされる。

悲物濡足濟時申手。切軫一物納隍常憂萬黎安堵

講方 物を悲んで足を濡し、時を濟ふて手を申ぶ。切に一物を軫んで納隍し、常に萬黎を憂へて安堵せしむ。

字訓 ○濡足……溺れるを拯ひ給ふこと。○濟時……世を濟ひ給ふこと。○申手……哀愍し給ふこと、○軫一物……軫は痛むこと。一物の所を失はんことを軫み給ふこと。○納隍……隍は溝。即ち溝に納るゝ義で、苦しみ給ふこと○萬黎……萬民のこと。○安堵……安心。その居に安んじて遷動せざること

拳意 淳和帝の御仁慈にましませれ給ふことを讃嘆し奉る。

【講義】更に御仁恵にましませ給ふ御事は云ふも長いこと乍ら、庶民の苦難を悲しませ給ふて之を救済し給はれ、また世を哀愍して之を救済し給ふ。更にまた切に一物の所を得ざることにさへも御宸襟を悩ませ給ひ、また常に萬民に就いて大御心を用ひさせ給ふて萬民をして居に安んじさせ給ふ。

謹天長二年閏七月十九日。於宮中及五畿七道設一百師子座。延八百怖魔人。一日兩時奉演仁王護國般若經

【訓方】謹んで天長二年閏七月十九日、宮中及び五畿七道に於て一百師子の座を設け、八百怖魔の人を延いて一日兩時に仁王護國般若經を演べ奉る。

【字訓】○五畿……畿内の五國。即ち山城・大和・河内・攝津・和泉。○七道……東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道。○師子座……説法の座のこと。『仁王經』下卷護國品に曰く「爾の時に世尊波斯匿王等の諸大國王に告げたまはく、一切の國土若し亂れんと欲はるゝ時、諸の災難有つて賊來つて破壞せんに、汝等諸王道場を嚴飾し、百の佛像、百の菩薩像、百の師子座を置いて百の法師を請じて此の經を解説し、諸の座前に於て一切の供事をもつて毎日二時、此の經を講讃し、如法修行すれば災難即滅す」と。○怖魔……比丘のこと。

【參意】仁王會を修するに至りし所以と、その有り様を記し給ふ。

【講義】謹んで天長二年閏七月十九日、宮中及び五畿七道に於て一百の師子座を設け、八百の比丘を招きて一日朝夕二度、仁王護國般若經を演説し奉る。

五忍開義乍褰咎氛之霧。二諦審理乍聚休徵之祥

【訓方】五忍義を開いて乍ちに咎氛の霧を褰げ、二諦理を審んじて乍ちに休徴の祥を聚む。

【字訓】○五忍……『仁王經』に説かれたるものにして菩薩の階位を五種に分ちたるもの。伏忍（地前三賢位の菩薩は煩惱を伏するも斷ずること能はざるが故に名く）。信忍（初地、二地、三地の菩薩は無漏信を得るが故に名く）。順忍（四、五、六地の菩薩は菩薩道に順じて無生果に趣向するが故に名く）。無生忍（七、八、九地の菩薩は妄惑已に盡きて諸法の不生を了知するが故に名く）。寂滅忍（十地、等覺、妙覺に至れば諸惑を斷盡して清淨無爲湛然寂靜なるが故に名く）。○咎氛……咎は災、氛は天氣のこと。○二諦……勝義諦と世俗諦。○休徴……休は美、徴は驗、即ちめでたききざしのこと。

【參意】仁王經の功德を贊ふ。

【講義】次に仁王經の功德に就いて明せば、五忍の義理を開説してその實義を體得するに至れば忽ちにして災殃天氣の霧を拂ひ除き、また二諦の理に審かに徹してその奥旨を體得するに至れば乍ちに休徴の祥、即ち吉祥の幸福を招來するに至るのである。

物此白業奉資聖體。伏願教令五忿揮輪劍而降魔怨。自性十六麁惟寶而滋福壽

【訓方】此の白業を物べて聖體に資し奉る。伏して願くは教令の五忿、輪劍を揮つて魔怨を降し、自性の十六惟寶を麁いて福壽を滋くしたてまつらんことを。

【字訓】○白業……淨業。○教令……教令輪身即ち忿怒。○五忿……五大力菩薩のこと。○輪劍……五忿怒尊の三昧耶形。○魔怨……惡魔怨敵。○自性……自性輪身のこと。○十六……十六大菩薩のこと。○惟寶……寶珠のこと。良貫の『仁王經疏』下三に曰く「震豹末尼此れには思惟寶と云ふ。會意して翻じて如意寶珠と云ふ。意求むる所に隨つて皆滿足す」と。また『大疏』一に曰く「眞陀摩尼諸寶の王たり」と。

【參意】正しく願意を示し給ふ。

【講義】此の淨業の功德を總じて、玉體に資し奉る。伏して願くは教令輪身の五大力菩薩その本誓及び輪劍等の三形を振つて惡魔怨敵を降伏し、自性輪身の十六大菩薩麁惟寶を滋くしたてまつらんことを。

十善之風扇四天。以不鳴條。萬民之廩貯九年。以不拾遺。忘其帝力。悟其垂拱

【訓方】十善の風四天に扇いで以て條を鳴らさず、萬民の廩九年を貯へて以て遺ちたるを拾はず、其の帝力を忘れて其の垂拱を悟らん。

【字訓】○十善……天子の御こと。○四天……金輪王の統御し給ふ所。○不鳴條……天下泰平の樣をいふ。『西京雜記』第五に曰く「太平の世には風條を鳴らさず、甲を開き崩を散ずるのみ」と。○貯九年……天下泰平をいふ。『禮記』に曰く「國に九年の蓄へなきを不足と曰ふ。六年の貯へなきを急と曰ふ。三年の蓄へなきを其の國に非ずと曰ふ。三年耕すときは必らず一年の食あり、九年耕すときは必らず三年の食あり、三十年の通を以てするときは凶旱水溢ありと雖ども民菜色なし」と。○忘其帝力……天子の御高德によりて天下泰平となり、その御高德たるや余りにも高大過ぎて凡人にはその御高德に氣づかぬといふ壤父の故事を指す。（第一卷喜雨歌に出づ）。○垂拱……無爲にして治るをいふ。

【參意】天下泰平を壽ぎ奉る。

【講義】上御一人の德風四海に蒙りて天下泰平を來たし、五風十雨時に隨つて起り、かの周公の世に風條を鳴らさずと稱せられてゐるが、今もその如くに風條を鳴らさず天下泰平たり。萬民は藏に九年の貯蓄を致し、道に落ちたる物を人拾はざる程に豐かにして平和たり。此處を以て民は、上御一人の御高德の餘りにも廣大にあらせ給ふが故に氣附かざる有り樣であるが、併し乍ら遂には無爲にして能く天下治まるに至りし所以を悟るならん。

十六大菩薩、寶珠をさしまねきて以て益福壽を增し奉らんことを。

洪祚永永。哈芥石於猶短。玉體堅密。咲金剛乎易滅

【訓方】洪祚永永にして芥石を猶短きに哈り、玉體堅密にして金剛を滅え易きに咲はん。

【字訓】○洪祚……洪は大、祚は位。寶祚の御こと。○永永……未來永遠のこと。○芥石……芥子劫と拂石劫で長年月のこと。

【參意】寶祚、玉體の永遠に亘らせ給はんことを祈り奉る。

【講義】寶祚永遠に亘らせ給ふて芥子劫、拂石劫の無限の長時すらも猶短しとなし給ふ程に永遠に亘らせ給ひ、玉體堅密に亘らせ給ふてかの永遠不滅をほこる金剛すらも滅え易しとさへ稱する程に堅固不壞、永遠に亘らせ給はんことを祈り奉る。

上福七廟。益彼三明。永拔無明根。常遊大覺觀

【訓方】上は七廟を福して彼の三明を益さん。永く無明の根を拔き、常に大覺の觀に遊ばん。

【字訓】○七廟……『禮記』に曰く「天子は七廟なり。三昭、三穆、大祖の廟と而も七つ」と。此れ周の制なり。今はそれに準じて皇祖を指し奉る。○三明……阿羅漢果の聖者の有する三種の智明。即ち宿住智證明、死生智證明、漏盡智證明の稱。○觀……臺のこと。

【參意】皇祖の增福を祈念し奉る。

【講義】上みは皇祖に福祉を增し奉り、三明を益々照曜し給はらんことを、更にまた無明の根を拔き、鎭へに大覺のうてなに優遊し給はらんことを祈り奉る。

太上天皇姑射之遊。與八仙無其極。襄城之德將千葉流其芳

【訓方】太上天皇姑射の遊び八仙と與んじて其の極りなく、襄城の德千葉と將んじて其の芳しきを流さん。

【字訓】○姑射……仙洞御所を稱し奉る。○八仙……八公のこと。即ち『神仙傳』第

四に曰く「漢の淮南王劉安は高帝の孫なり。八公門に詣でたるときに皆鬚眉皓白なり。王聞人をして自ら意を以て難問せしむ。言未だ竟らざるに八公皆變じて童子となる。年十四五ばかりなり。角髻青綵色桃華の如し。王之を聞きて迎へて弟子の禮を執る。後に八公、安をして山に登つて大に祭らしむ。即ち白日に天に昇る。八公と安と踏む所の山上の石皆陷て跡を成す。今に至るまで猶存せり」と。○襄城……太上皇の宮殿を指し奉る。（第二卷益田碑銘に出づ）○千葉……千歳。○芳……芳聲。

書意 太上天皇の御德益盛んにあらせられ給はんことを祈り奉る。

講義 太上天皇仙洞御所に於て、かの八公の長壽に倣りなしと言はれてゐるがその八公の長壽より以上に御長壽にましまられ給ふて、その御高德は益々盛んにあらせられて千萬歳の後々までもその御芳聲を傳へ奉るに至らんことを祈り奉る。

震位貳君。名齊文王世子。德比悉陀薩埵

講方 震位貳君、名文王世子に齊しく、德悉陀薩埵に比せん

字訓 ○震位貳君……皇太子を稱し奉る。震は東、貳は副の義。○文王世子……皇太子の御叡明にましまされ給ふことを喩を以て表し給ふ。文王世子のことに就いては『禮記』文王世子篇に曰く「文王の世子たりしときに王季に朝することに三たび、雞初めて鳴いて衣服して寢門の外に至つて內豎の御者に問つて曰く、今日安否如何。內豎の曰く安し。文王乃ち喜ぶ。日中に及んで又至る。亦之の如し。莫に及んで又至る。亦之の如し。其れ節を安んぜざることあるときは內豎以て文王に告ふす。文王色憂へて行くときに正しく履むこと能はず。王季膳に復りて然して後にまた初めに復る。食上つるときに必ず在に寒暖の節を視る。食下るときに膳する所を問ふ。膳宰に命じて曰く、原することあることなかれ。應へて曰く、諾、然して後に退く」と。○悉陀薩埵……釋迦如來。

書意 皇太子の御德益盛んにあらせられ給はんことを祈り奉る。

講義 皇太子にあられられては、かの文王世子の譽れ高き、それ以上に御芳聲の譽れ高くあらせられ給ひ、又その御高德は悉陀太子より以上であらせられ給ふて益々御高德にあらせられんことを祈り奉る。

監國之譽彌新紹構之功不墜

講方 監國の譽れ彌新にして、紹構の功墜ちず。

字訓 ○監國……晉時代に主君他國に行きしとき、國に殘り居りて國事を監督せしことの故事を指す。即ち『左氏傳』に曰く「太子は冢祀社稷の粢盛を奉て朝夕を以て君の膳を視る者なり。故に冢子と曰ふ。君行くときは守る。守りあるときは從ふ。從ふを撫軍と曰ひ、守るを監國と曰ふ」と。○紹構……堂構を紹ぐこと。堂構は德業のこと。

書意 德業を紹ぎ奉つて益榮え給ふを祀し奉る。

講義 かくて監國の譽れ彌盛にましまし、德業を能く受け繼ぎ給ふてその御功績を益々御發揮し給ふ。

宮貴飛美文武効能。繞北極而竭力。仰南風而解慍。鼎食有餘冠帶無盡

講方 宮貴美を飛ばして文武能を効さん。北極を繞つて力を竭し、南風を仰いで慍を解かん。鼎食餘り有つて冠帶盡くること無からん。

字訓 ○飛美……美聲を傳ふること。○文武……文官、武官のこと。○効……致すこと。○北極……上御一人を指し奉る。○仰……仰慕。○南風……南風の薰りで、天下のよく治ること。『孔子家語』に曰く「昔舜五絃の琴を彈じて南風の詩を歌ふ。其の詩に曰く、南風の薰以て吾が民の慍りを解くべし。南風の時以て民の財を阜にすべし」と。○鼎食……三公のこと。○冠帶……群臣を指す。

書意 御德治益々盛んにならせ給はんことを祈り奉る。

講義 御宮貴に於かせられては御仁惠の御美聲つとに傳はり給ふに至り、また

文官武官は全智全力を發揮して何れも皆等しく上御一人に向つて忠節を盡し奉り、御一人の御高德を仰慕し奉つて喜悅限り無く、賢臣智謀の士輩出して三公の士に乏しからず、忠良なる群臣盡くること無き程に多數におはして國力益々盛んならんことを祈り奉る。

普潤幽明。廣及動植。共沐般若之甘露。同昇解脫之蓮臺

講方 普ねく幽明を潤し、廣く動植に及ぼし、共に般若の甘露に沐して同じく解脫の蓮臺に昇らん。

字訓 ○幽明……六趣の衆生。○動植……情非情のこと。

書意 結言として一切平等利益の旨を明し給ふ。

講義 普ねく幽明の六趣の衆生に及ぼし潤し、廣く動植の情非情の一切の衆にまでも蒙らしめて、共に般若の妙法の甘露の功德に浴さしめ、皆等同に解脫佛果の蓮臺に昇らんことを祈り奉る。

八五　高野山萬燈會願文

高野山萬燈會の願文

講方 高野山萬燈會の願文。

字訓 ○萬燈會……衆鞭を懺悔し、四恩に奉答するために、一萬の燈明を獻供する法會をいふ。高野山にては天長九年八月二十二日弘法大師上表して勅許を得、同年九月二十四日始めて此の會を行ふ。

書意 初に題名を掲ぐ。

講義 高野山に於て萬燈會を修するに際しての願文。

恭聞黑暗者生死之源。遍明者圓寂之本。原其元始各有因緣

講方 恭んで聞く、黑暗は生死の源、遍明は圓寂の本なり。其の元始を原ぬれば各因緣あり。

字訓 ○黑暗……無明のこと。○遍明……本覺のこと。○圓寂……涅槃のこと。○各有因緣……生死に流浪し、圓寂に歸入するは皆それ〴〵因緣ある義。

書意 迷悟の所以を明す。

講義 恭んで聞く、黑暗の無明は生死流轉の源であり、また本覺の遍明は圓寂の涅槃に趣入するの根本となるものであると。そこでこの生死に流浪すると圓寂に歸入するとその抑もの始まりを尋ねしらべるに各々にそれ相當の深い因緣が潛んでゐるのである。

日燈擎空唯除一天之暗。月鏡懸漢誰作三千之明。至如大日遍照法界智鏡高鑒靈臺內外之障悉除。自他之光普擧。欲取彼光何不抑止

講方 日燈空に擎げて唯一天の暗を除き、月鏡漢に懸けて誰れか三千の明を作さんや。大日遍く法界を照し、智鏡高く靈臺を鑒るが如くに至つては內外の障り悉く除き、自他の光り普く擧ぐ、彼の光りを取らんと欲はゞ何ぞ抑止せざらん。

字訓 ○三千……三千大千世界のこと。○靈臺……心をいふ。○內障……無明のこと。○外障……業障。○自他光普擧……自利利他二利圓滿すること。○彼光……大日遍照の光りを指す。○抑止……能く信んじて仰ぎ見ること。

書意 遍明に就いて明す。

講義 かの太陽の燈光はたゞ一天の暗を照すのみであり、月の鏡光は天にかゝ

りて耀くのみ、されば どうしてや三千大千世界を照明せんや、之に反して大日如來の光明は遍ねく法界を照らし、智鏡高く心の靈臺を瑩察すると云ふ點に至つては、内障たる無明、外障たる業障も悉く除滅し、自利利他二利圓滿するに至る。そこで大日遍照の光を體得せんと思はゞ宜しく能く信じ、仰望しなくてはならぬ。

於是空海與諸金剛子等於金剛峯寺聊設萬燈萬華之會奉獻兩部曼荼羅四種智印所期毎年一度奉設斯事奉答四恩虛空盡衆生盡涅槃盡我願盡

訓方 是に於て空海諸くの金剛子等と與んじて金剛峯寺に於て、聊か萬燈萬華の會を設けて兩部の曼荼羅、四種の智印に奉獻す。期する所は毎年一度斯の事を設け奉つて、四恩を答し奉つらん。虛空盡き、衆生盡き、涅槃盡きば我が願ひも盡きん。

字訓 ○於是空海……三寶に歸命し奉るが故に御自名を擧げらる。○四種智印……大智印、三昧耶智印、法智印、羯磨智印の四印で、四種曼荼羅のこと。○虛空盡等……『華嚴經』第二十四十地品に曰く「佛子此の大願十盡句を以て成就することを得ん。謂はゆる衆生界盡き、世界盡き、虛空界盡き、法界盡き、涅槃界盡き、佛出現界盡き、如來智界盡き、心所緣界盡き、佛智所入境界盡き、世間轉法輪智轉界盡き、若し衆生界盡きば我が願も盡きん。若しは世界乃至世間轉法輪智轉界盡きば我願も盡きん」と。

會意 萬燈萬華會を修するに至る所以を明す。

講義 ここに於て空海三寶に歸命し奉つて諸の金剛の弟子等とともに金剛峯寺に於て聊か乍ら萬燈萬華の法會を催し、金胎兩部の曼荼羅乃至は四種曼荼羅等の一切の曼荼羅諸尊に奉獻す。期待する所は今後毎年一度此の萬燈萬華會を修し奉つて四恩に報答し奉らんことをである。この法會は虛空のある限り衆生の存する限り、涅槃の續く限り、年々歳々永久に亘つて修し奉りたいのである。若し虛空盡き、衆生盡き、涅槃盡きなば我が此の願も盡きるが、それまでは願望してやまず。

爾廼金峯高聳下睨安明之培塿玉毫放光忽滅梵釋之赫日

訓方 爾れば廼ち、金峯高く聳えて安明の培塿を下し睨、玉毫光りを放つて忽ちに梵釋の赫日を滅さん。

字訓 ○廼……一本には乃に作る。○金峯……金剛峯寺のこと。○安明……須彌山のこと。『法華文句』二之二に曰く「須彌此には安明と翻ず。四寶所成なり。高廣三百二十六萬里」と。○培塿……蟻づか。小さき丘。○玉毫……白毫。『西域記序』に曰く「若し夫れ玉毫照を流して甘露大千に灑ぐ」と。○梵釋之赫日……梵天帝釋の光明は日暉の如くであるとしても、萬燈會の功德聚たる白毫の光りはかの梵釋の光りを打ち消す程盛んに照り輝けること。

會意 高野山の淸淨靈地たらんことを明す。

講義 此處に於て萬燈會の功德によりて金剛峯寺の一山は高く聳えてかの須彌山の高峯も蟻塚の如くに小さく低く之を見下す程に高大となり、また此の功德によりて當山安置の本尊の白毫の光り赫々と輝き、かの梵釋の日輝の如き光明も忽ちに打ち消さるゝが程に盛んに照り輝くに至らん。

濫字一炎乍颺法界除病質多萬華含笑諸尊開眼

訓方 濫字の一炎乍ちに法界に颺して病を除き、質多の萬華笑を含んで諸尊眼を開かん。

字訓 ○濫字……濫字は煩惱淨除の慧火を表す。○質多……質多（Citta）は慮知心のこと。

會意 功德觀を明す。

講義 奉獻の萬燈の濫字の智火法界を照して衆生黑暗の病を除き、所供の萬華は聖衆の心蓮となり、心蓮咲んで衆生界に向ひ、五眼を豁開して有情を加持し給はらん。

仰願藉斯光業拔濟自他無明之他忽歸自明本覺之自乍奪他身

訓方 仰ぎ願くは斯の光業に藉つて自他を拔濟せん。無明の他忽ちに自明に歸し、本覺の自乍ちに他身を奪はん。

字訓 ○光業……光は大、卽ち大業のこと。○無明之他等……『釋摩訶衍論』第二に曰く「楞伽王契經の中に是の如くの說を作す。諸佛子我れ往昔を念ふに出る時の中に於て我來つて他に依る。入る時の中に於て他來て我に依るが故に。此の經文は何の義を明す。我は謂く卽ち是れ眞如本覺如來藏の佛なるが故に。來は謂く受熏の義の故に。他に依るとは自の本体を背く無明の他に依るが故に」と。

會意 正しく願意を明す。

講義 仰ぎ願くは此の大功德業によつて自他を拔濟せんことを。以て無明忽ちに自の本體に歸伏し、自の眞如本覺の如來藏乍ちに無明の他身を奪はんことを。

無盡莊嚴放大日之慧光刹塵智印發朗月之定照六大所遍五智攸含排虛沈地流水遊林惣是我四恩同共入一覺　天長九年八月二十二日

訓方 無盡の莊嚴大日の慧光を放ち、刹塵の智印朗月の定照を發かん。六大の遍ずる所、五智の含ずる攸、排虛沈地、流水遊林、惣べて是れ四恩なり。同じく共に一覺に入らん

天長九年八月二十二日。

字訓 ○無盡莊嚴……無量無邊の三密を以て莊嚴せるをいふ。『大日經疏』第一に曰く「一一の三業差別の相は皆邊際なし。度量すべからず。故に無盡莊嚴藏と名く」と。○刹塵智印……『大日經疏』第一に曰く「云ふ所の十佛刹微塵數とは如來の差別智印其の數無量なり。且く如來の十種の智力を以て各々一佛刹微塵に對して以て衆會の數を表す」と。○朗月……明月。○六大所遍……衆生。○五智攸含……佛。佛果に約す。○排虛……飛鳥。○沈地……昆蟲。○流水……鱗類。○遊林……毛族。

會意 結言として一切衆生平等利益の總願を明す。

講義 三密を以て無盡の莊嚴をなし、大日如來の智慧赫々と光りを放ち、又諸尊の內證智、明月の定照の如くに光明を發して一切の衆生を拔濟せんことを。六大所遍の衆も、五智攸含の佛も、乃至は飛鳥・昆蟲・鱗類・毛族等すべてこれ我が四恩なり。さればそれらすべてのものに此の功德を廻らして等同に共に平等の一味の佛果に證入せんことを祈る。

八六　勸進奉造佛塔知識書

勸進奉造佛塔知識書

訓方 勸進して佛塔を造り奉る知識の書。

字訓 ○塔……塔婆此には高顯と翻ず。また功德聚ともいふ。『戒壇圖經』卷中に曰く「原れば夫れ塔の字、此の方の字書には乃ち是れ物の靡なり。もと西土の號に非ず、若し梵本に依らば佛骨をうづむ所を名けて塔婆と曰ふ」と。○知識書……昔は化緣の書を知識の文といふ。

會意 初に題名を揭ぐ。

講義 勸進して佛塔を造營し奉るに就いての知識の文。

敬勸應奉造佛塔曼荼等書

夫諸佛事業以大慈爲先。菩薩行願以大悲爲本。慈能與樂悲能拔苦。拔苦與樂之基示人正路是也。所謂正路有二種。一定慧門。二福德門。定慧以開正法修禪定爲旨。福德以建佛塔造佛像爲要。三世諸佛十方薩埵。皆營斯福智圓滿佛果。

【訓方】敬つて勸む。佛塔曼荼羅等を造り奉る應き書。

夫れ諸佛の事業は大慈を以て先と爲、菩薩の行願は大悲を以て本と爲、慈は能く樂を與へ、悲は能く苦を拔く。拔苦與樂の基人に正路を示す是れなり。謂所る正路に二種有り、一には定慧門、二には福德門なり。定慧は正法を開き禪定を修するを以て旨と爲、福德は佛塔を建て、佛像を造するを以て要と爲。三世の諸佛、十方の薩埵皆斯の福智を營んで佛果を圓滿す。

【字訓】○敬勸等……敬觀等の一行十二字は題號にしてこれ包紙の上書の題號ならん。○正路……『佛知衆生知論』（廣弘明集第二十五）に曰く「佛地の知る所は得善の正路、凡夫の知る所は失善の邪路なり」と。○二種……『智度論』第十五に曰く「佛道を成ぜんと欲はゞ凡そ二門あり。一には福德、二には智慧なり。施戒忍を行ずる是れを福德門とし、一切諸法の實相を知る是を智慧門とす。般若波羅蜜は要らず禪定門に因る。禪定門は必らず大精進力を須ふ。何を以ての故に欲界は亂心にして諸法の實相を見ることを得ず。禪定智慧は福を以て願求すべからず」と。

【會意】包紙の題及び塔婆の功德を言はんが爲めに先づ諸佛菩薩の大悲大慈に依つて減罪生善する義を明し給ふ。

【講義】敬つて勸む。佛塔曼荼羅等を造り奉るべきの書。夫れ思ふに諸佛の化他の事業は大悲の御心がその根本となつて居り、また菩薩の化他の願は大悲の心がその根本となつてゐるのである。悲はよく衆生に樂を與へ、悲はよく衆生の苦を拔くものであるが　その拔苦與樂の根本はといへばそれは要するに人に得善の正路を開示するといふことにある。言ふ所の得善の正路に二方面がある。卽ち一は定慧門であり、二は福德門である。その中定慧門は正法を開示して禪定を修するを以て旨とし、福德門は佛塔を建て佛像を造するを以てその要旨とす。三世の諸佛、十方の菩薩達は皆この福智の二門を修して佛果を圓滿し給はれたのである。

是故比年。爲拔濟四恩具足二利。於金剛峯寺奉建毘盧遮那法界體性塔二基及胎藏金剛界兩部曼荼羅

【訓方】是の故に比の年、四恩を拔濟し、二利を具足せんが爲に金剛峯寺に於て毘盧遮那法界體性の塔二基、及び胎藏金剛界兩部の曼荼羅を建て奉る。

【字訓】○比年……近年。○塔……毘盧遮那の三摩耶形法界體性の標幟なり。○二基……大塔と西塔なりと。

【會意】造塔の功德と造塔の所以とを明す。

【講義】是の故に近年福德門を修して四恩に報答し、また二利を圓滿せんがために金剛峯寺に於て毘盧遮那如來の三摩耶形にして法界體性の標幟たる塔を二基と、胎藏、金剛界兩部の曼荼羅を建立し奉らんことを計る。

然今工夫數多粮食難給

【訓方】然るに今工夫數多にして粮食給ぎ難し。

【會意】造塔の費用の足らざるを明す。

【講義】然るに此の工事に取りかゝれども工夫多數にしてその粮食のみにても仲々給し難ぎ有り樣である。

今思與諸貴賤四衆同斯功業。所以一塵崇大嶽。一滴深廣海。同心戮力之所致也

【訓方】今思はく諸の貴賤の四衆と斯の功業を同うせん。一塵大嶽を崇ふし、一滴廣海を深うする所以は、心を同うし力を戮するが致す所なり。

【字訓】○大嶽等……『管子』第二十形勢解篇に曰く「海は水を辭せず故に能く其の大を成す。山は土を辭せず故に能く其の高きこと成す」と。

【會意】萬人力を戮すことによりて大事業を完遂する所以を明す。

【講義】今思ふに、諸の貴賤の四衆の御援助により、彼れ等とともに此の大事業を完成せんことを願ふ次第である。その理由はかの一塵の土塊が積り積つて大嶽を高うするに至り、一滴の水が溜り溜つて廣海を深うするに至つたのであるが故に、今も萬人心を併せ、力を戮はすことによりてよく此の事業を完遂するに至るものであるが故にである。

伏乞諸檀越等。各添一錢一粒之物。相濟斯功德

【訓方】伏して乞ふ、諸の檀越等各一錢一粒の物を添へて斯の功德を相ひ濟へ。

【字訓】○檀越……施主のこと。『要覽』上に曰く「檀越と稱するとは檀は卽ち施なり。此の人施を行じて貧窮の海を越ゆればなり」と。

【會意】願意を明す。

【講義】伏して乞ふ諸の檀越等各各一錢一粒の物を施捨して此の功德業を資け給はんことを。

然則所營事業不日而成。所生功德萬劫而廣。四恩飽現當之德。五類饒幽顯之福。同脫無明鄉。齊遊大日殿。敬勸

【訓方】然れば則ち營む所の事業不日にして成り、生す所の功德萬劫にして廣からん。四恩は現當の德に飽き。五類は幽顯の福を饒にせん。同く無明の鄉を脫して齊しく大日の殿に遊ばん。敬つて勸む。

【字訓】○五類……五類の天、この五類の天の中で、遊虛空天及び龍をば顯に攝し、餘は幽に攝す。

【會意】造塔完成の上の功德を明す。

【講義】若し萬人力を戮はて此の事業を資けるならば幾何もならず成就するに至るであらう。造塔完成せばそれより生ずる所の造塔の功德は萬劫に亘つて豪るに至り、廣大至極のものであらう。そして四恩は現當の功德を充分に豪り五類の天は幽顯の福祉を豐かに豪り、皆平等に無明の世界を脫却して齊しく大日の殿に優遊するに至らん。敬つて勸む。

續遍照發揮性靈集補闕鈔卷第八　終

八七　宮中眞言院正月御修法奏狀

宮中眞言院正月御修法奏狀

【訓方】宮中眞言院の正月の御修法の奏狀。

【字訓】○宮中眞言院……宮中後七日御修法の道場を稱し奉る。當院は承和元年弘法大師大唐内道場の例に準じて宮中に之を建立し、曼荼羅壇を造り、毎年正月後七日御修法を勤修せんことを奏請し、同二年竣工す。爾來東寺長者は毎年定額僧二十一口を率ゐて參院し、御修法を勤修し奉りもの。

【拿意】初に題名を揭ぐ。

【講義】宮中に眞言院を設けさせ給うて正月後七日御修法を勤修し奉らんが爲の奏狀文。

承和元年十一月乙未。大僧都傳燈大法師位空海上奏曰。空海聞如來說法有二種趣一淺略趣。二祕密趣。言淺略趣者諸經中長行偈頌是也。祕密趣者諸經中陀羅尼是也。淺略趣者如大素本草等經。論說病源。分別藥性。陀羅尼祕法者如依方合藥。服食除病。若對病人披談方經無由療痾。必須當病合藥依方服食。乃得消除病患保持性命。

【訓方】承和元年十一月乙の未、大僧都傳燈大法師位空海上奏して曰く。空海聞く、如來の說法に二種の趣有り、一には淺略趣、二には祕密趣なり。淺略趣と言ば諸經の中の長行偈頌是れなり。祕密趣とは諸經の中の陀羅尼是れなり淺略趣とは大素、本草等の經に病源を論說し、藥性を分別するが如し。陀羅尼の祕法とは方に依つて藥を合せ、服食して病を除くが如し。若し病人に對つて方經を披き談ずとも痾を療するに由無けん。必らず須らく病に當つて藥を合せ、方に依つて服食して乃ち病患を消除し、性命を保持することを得。

【字訓】○大素……隋の楊上善が素問內經の旨に通じ、大素三十卷を編集す。○本草……本草經三卷神農の作なりと傳ふ。

【拿意】顯密差別を明し給ふ。

【講義】承和元年十一月乙未、大僧都傳燈大法師位空海上奏して曰さく。空海久の如く聞き及んでゐる。卽ち如來の說法に二種の趣きがある。卽ち一には淺略趣であり、二には秘密趣であると。言ふ所の淺略趣と申すのは諸經の中長行、偈頌等が是れに當り、秘密趣とは諸經の中の陀羅尼が是れに當る。此れを更に詳しく述ぶれば、淺略趣とは譬へば大素、本草等の經に病源を說き明し、藥性を分別して說けるが如きものであり、陀羅尼秘法とは處方箋に隨つて藥を合せ以て之を服食して病を除くが如きものである。若し病人に對つてたゞ單に病源や藥性を書いた方經を披き話すとも病を療するすべもなし。病を療するには必ずすべからく病に應じて藥を調劑し、處方箋の示す通り之を服食することによりてこそ初めて病患を消除し、性命を保持することを得るに至るのである。

然今所奉講最勝王經。但讀其文空談其義。不曾依法畫像結壇脩行。雖聞演說甘露之義。恐闕嘗醍醐之味。然乞自今以後。一依經法講經。七日之間將擇解法僧二七人沙彌二七人。別班嚴一室。陳列諸尊像。奠布供具。持誦眞言。然則顯密二趣契如來之本意。現當福聚獲得諸尊之悲願。

【訓方】然るに今講じ奉る所の最勝王經は但其の文を讀み空しく其の義を談じて曾て法に依つて像を畫き、壇を結んで修行せず。甘露の義を演說することを聞くと雖ども、恐くは醍醐の味を嘗むることを闕きてん。

【字訓】○雖聞演說等……『首楞嚴經』第一に曰く「多聞有りと雖ども若し修行せざれば聞かざると等し。人の食を說くに終に飽くこと能はざるが如し」と。

【拿意】實修實行の要を明す。

【講義】然るに從來より講じ奉る所の最勝王經はたゞ其の文を讀み、空しく其の義理を談ずるのみにして未だ曾て如法に像を畫き、壇を結んで修行せることなし。思ふに甘露の妙義を演說することを聞くと雖ども、たゞ聞くのみにてはその醍醐の味ひを味ふといふことは出來ないであらう。

伏乞自今以後。一依經法講經。七日之間將擇解法僧二七人沙彌二七人。別班嚴一室。陳列諸尊像。奠布供具。持誦眞言。然則顯密二趣契如來之本意。現當福聚獲得諸尊之悲願。

【訓方】伏して乞ふ。今自以後、一ばら經法に依つて經を講じ七日の間將に解法の僧二七人、沙彌二七人を擇んで別に一室を莊嚴し、諸尊の像を陳列し、供具を奠布して眞言を持誦せん。然らば則ち顯密の二趣、如來の本意に契ひ、現當の福聚、諸尊の悲願を得ん。

【字訓】○解法僧……法によく通解せる僧のこと。○沙彌……梵音のシュラマネラ（Śrāmaṇera）の音譯にして、之を意譯して息惡、勤策男と譯す。惡を息めて惡業の行を修する出家の男子のことにして、出家して未だ修行熟せず、比丘となるまでのものをいふ。○奠布……奠は陳、つらねならべること。○持誦……『不思議疏』下卷持誦品に曰く「能修の心の中に、所修の法則了了記持するが故に持と言ひ、所修の法則口中に能誦するが故に誦と言ふ」と。

【拿意】正しく願意を明し給ふ。

【講義】伏して乞ひ奉る。自今以後一ばら經に說かれたる法則に從つて經を講じ奉り、七日の間まさに解法の僧二七人、沙彌二七人を擇び、また一室を特別に莊嚴し、諸尊の像を陳列し、供養する所の道具類を嚴り、以て眞言を持誦し奉らんとす。かくなすことによりて顯密二趣共々に如來の出世の本懷本意に契ひ奉り、現當の福聚、顯密の諸尊の大悲の本願を獲得し奉らん。

勅依請修之永爲恒例

【訓方】勅す。請うに依る之を修して永く恒例と爲よ。

【拿意】畏くも上の奏狀に對する勅答であらせらる。

【講義】勅す。請を許す。永く修して恒例とせよ。

八八　祈誓　弘仁天皇御厄表

祈誓弘仁天皇御厄表

【訓方】弘仁天皇の御厄を祈誓したてまつる表。

【字訓】○御厄……御不豫の御こと。

【拿意】初に題名を揭ぐ。

【講義】嵯峨天皇御不豫にましまされ給ふが故にその御平癒を祈誓し奉つて奉進せんが爲めの上表文。

沙門空海言。伏承聖體乖豫。心身無主

【訓方】沙門空海言す。伏して聖體の乖豫を承つて心身主無し

【字訓】○聖體……玉體を稱し奉る。○乖豫……不豫に同じ。

【拳意】御不豫を承つて日夜に憂慮し奉ることを明し給ふ。

【講義】沙門空海謹んで奏上す。伏して　玉體の御不豫を承はつて日夜に憂慮しきりにして心は我が身より失せたるが如くにたゞたゞ心痛の餘り茫然自失の有り樣である。

即與諸弟子僧等。依法結期一七日夜。從今月八日至于今朝。一七日欲畢。持誦之聲響不間絶。護摩之火煙接晝夜。以仰神護於佛陀。祈誓平損乎天躬。

【訓方】即ち諸の弟子の僧等と法に依て一七日夜を結期して今月八日從り、今朝に至るまで一七日畢へなんと欲す。持誦の聲響き間絶せず。護摩の火煙り晝夜を接す。以て神護を佛陀に仰ぎ、平損を天躬に祈誓す。

【字訓】○護摩……護摩(homa)を譯して焚燒といふ。爐中に火を燃し、供物を燒きて聖尊に供養する法にして、火供養法ともいひ、畧して火供養・火供・火法とも名く。是れ內外理事に偏せざる中道正觀の智火を以て煩惱業苦の株杭を燒き、六度四攝の供具を以て心王心數の諸尊に供する義である。○平損……平癒損減のこと。○天躬……玉體の御ことの。

【拳意】御平癒を祈誓し奉れることを明し給ふ。

【講義】此處に於て諸の弟子の僧等と共に法則の示す通りに一七日夜を結界の期限となし、去る今月の八日より今朝に至るまで一七日間正に畢らんとしてゐるのである。此の間眞言持誦の聲絶えず響き、護摩の火煙り晝夜を分たず立ち昇り、かくて丹誠を籠めて神佛に冥護を仰ぎ、玉體の御不豫の御平癒を謹んで祈誓し奉つたのである。

感應未審。尅己爛肝。伏乞體察。謹加持神水一瓶。且勒弟子沙彌眞朗奉進。願以添藥石除却不祥。沙門空海誠惶誠恐謹言

弘仁七年十月十四日沙門空海上表

【訓方】感應未だ審んぜず、己を尅めて肝を爛す。伏して乞ふ體察したまへ。謹んで神水一瓶を加持して且つ弟子の沙彌眞朗を勒して奉進す。願くば以て藥石を添へて不祥を除却したまへ。沙門空海誠惶誠恐謹言。

弘仁七年十月十四日沙門空海上表す。

【字訓】○尅己……己が身を苦しめ惱むこと。○體察……身にひきあてゝ察すること。今は單に推察の義。○神水……水を加持せるが故に神用あり、故に神水といふ。○藥石……藥のこと。○不祥……乖豫。

【拳意】祈誓終つて神水奉進の所以を明し給ふ。

【講義】丹誠を拔きんで肝膽を碎いて御平癒を祈誓し奉るも未だ御平癒し給はざるは我が丹心の足らざるためなりと、己が心を尅め惱み、肝爛るゝ程に苦しく存ずる次第である。伏して乞ひ奉る。我が微衷を御推察したまはらんことを。謹んで神水一瓶を加持し奉れるものを、弟子の沙彌眞朗に捧持せしめて奉進す。願ふらくは藥を添へて御用ひ給ひ、以て乖豫を御除却したまはらんことを祈り奉る。沙門空海誠惶誠恐謹んで言す。弘仁七年十月十四日沙門空海上表す。

八九　贈玄賓法師勅書

註。此の一篇は勅書なるを以て謹んで省畧す。

九〇　大僧都空海嬰疾上表辭職奏狀

大僧都空海嬰疾上表辭職奏狀

【訓方】大僧都空海疾に嬰つて上表して職を辭する奏狀。

【拳意】初に題名を掲ぐ。

【講義】大僧都空海疾に嬰つて上表して大僧都の職を辭する奏狀文。

沙門空海言。空海從沐恩澤。竭力報國歲月既久。常願奮蚊虻力。答海岳德。

【訓方】沙門空海言す。空海恩澤に沐せし從り、力を竭して國に報ずること歲月既に久し。常に願ふらくは蚊虻の力を奮つて海岳の德を答せんと。

【字訓】○蚊虻力……微力をいふ。○海岳德……高大無邊の御恩德のこと。

【拳意】高大無邊の御恩德を蒙りしを明し給ふ。

【講義】沙門空海上言す。空海廣大なる御恩澤を蒙りしより力を竭して國家の御爲に忠節を勵みて歲月既に久しきに亘る。そして常に心に願ひ期することは蚊虻の如き我が微力を傾け盡して上御一人より蒙りし所の海岳の如き高大無邊の御恩德に對して報答し奉らんといふことである。

然今去月盡日。惡瘡起體吉相不現

【訓方】然るに今去し月の盡日に惡瘡體に起つて吉相現ぜず。

【字訓】○盡日……晦日。月の末日。○吉相……快癒の吉相。

【拳意】發病を明し給ふ。

【講義】然るに今は、去月盡日に惡瘡が體に起つてその快癒の吉相も見えざる有り樣である。

兩楹在夢。三泉忽至。戀龍顏而呼咽。顧鸞闕而爛肝

【訓方】兩楹夢に在り、三泉忽ちに至る。龍顏を戀ひて呼咽し鸞闕を顧て肝を爛す。

【字訓】○兩楹在夢……孔子が夢に兩楹の間にありと見て死せし故事を指す。今は死期近づけりとの意。○三泉……死のこと。○鸞闕……宮城の御ことの。

【拳意】病篤うして御恩德を顧て感泣せしことを明し給ふ。

【講義】かの孔子が兩楹の間に在りと夢見て他界せしとかと稱せられてゐるが、今私もその兩楹の夢が眞近に來り、三泉の旅路も忽ちに至らんとす。此の期に臨んで上御一人より蒙りし處の御恩德を偲びて呼咽し、その御恩德のなみなみならざりしことを顧みて、その報恩の果す能はざりしことを思へば肝爛れる程に苦しく存ずる次第である。

夫許由小子猶脫萬乘。況乎沙門何願三界。伏乞永解所職。常遊無累。

【訓方】夫れ許由が小子なる猶萬乘を脫かる。況や沙門何ぞ三界を願はん。伏して乞ふ永く所職を解いて常に無累に遊ばん。

【字訓】○許由……志の異なるものを與へられても辭退するの故事を指す。

【拳意】志出世衆生拔濟にある旨を明して御解職を乞ひ奉る。

【講義】夫れかの堯の世の許由は禪授を脫かれしとかと聞く。なる程許由は無欲恬淡にして高士なれども、然れども彼れは猶一世の謀のみしか知らざる小子であつた。然るに今自分は出家出塵の沙門なれは三界を捨て、現當二世の衆生を拔濟せんことに志す者であるが故に、伏して乞ひ奉る、永く此の大僧都を御解職給はつて、官職に心用ふることなく、自由の身として化道の業に就

かしめられんことを。

但愁幸逢輪王不遂所願。伏請陛下賜顧臨終之一言。不棄三密之法教。生生爲陛下之法城。世世作陛下之法將。心神悅忽思慮不陳云々

天長八年五月庚辰日大僧都空海上表

漢方 但愁ふらくは幸に輪王に逢ひたてまつて所願を遂げざらんことを。伏して請ふ陛下終りに臨むの一言を顧ることを賜ふて、三密の法教を棄てたまはざらんことを。生生に陛下の法城と爲り、世世に陛下の法將と作らん。心神悅忽として思慮陳べず。云云。

天長八年五月庚辰の日大僧都空海上表。

字訓 ○一言……解職を乞ひ奉るといふ一言。○三密の法教……眞言宗の法門 ○悅忽……明らかならざるさま。○云々……誠惶誠恐謹言等を省略せること

會意 宗教報國に邁進する決心を披瀝し給ふ。

講義 たゞ愁ふらくは幸にも金輪聖王の聖天子に逢ひ奉ることを得て、官に任ぜらる。從つて今解職を乞ひ奉るとも御聽許したまはざらんことをである。伏して請ひ奉る。陛下、哀愍を垂れ給ふて臨終の解職を乞ひ奉る一言を御聽許し賜ひ、且つ三密の法教を棄てざらんことを祈り奉る。解職の御仁慈を蒙り得たならば今後益々宗教報國に邁進し、生々に日本國家を佛法を以て守護し奉り、以て 陛下の法城となり、世々に 陛下の法將となりて萬民を教化教導して佛者としての盡忠の誠を捧げ奉らん。たゞたゞ心神悅忽として思慮陳說し難し。誠惶誠恐謹言。天長八年五月庚辰の日大僧都空海上表す。

勅答

勅。忽省抗表。知禘綱維。啻期撥繁。未允通論。何者粹哲世出。道存是崇。達鑒應機。濟物不倦。曷必繦鐶仁義。桎梏負任。掩耀言歸。鎖聲咄哉者乎

漢方 勅す。忽ちに抗表を省て綱維を禘つることを知んぬ。啻繁を撥ふことを期すれども未だ通論に允はず。何んとなれば粹哲の世に出づる道存するを是れを崇しとす。達鑒の機に應ずる物を濟ふて倦ます、曷ぞ必ずしも仁義を繦鐶にし、負任を桎梏なりとして耀りを言の歸に掩ひ、聲を鎖すは咄哉なる者なり。

字訓 ○省抗表……省は視、抗表は上に表文をたてまつること。卽ち上表を視給ふこと。○禘……禘は諦に通ず。諦は去る義。○綱維……僧都の職。通論……天下一般に通じて稱する論。○粹哲……粹は勝れたるもの、哲は智者。○達鑒……達觀のこと。○繦鐶仁義……仁義を以て衆生を導き理を覺らしめる管なるに何ぞ身を束縛せられたる如く思ふかとの御意。○桎梏負任……負任は官職、官職に束縛せられたること。○耀……德光。○言歸……上表文の趣旨。○銷聲……名聲を世上から消すこと。○咄哉……つたないかなの義。

會意 大師解職を乞ふの意を御斥け給ふ。

講義 勅す。突然に抗表を視て僧都の職を去り度き旨を知んぬ。たゞ事の繁多といふことによりて此の職を辭せんと期し望んでゐるけれども、それは通論に允はざる所である。何となれば勝れたる智者が世に出現すれば道を說き、道よく世に行はるに至る。このことが誠に尊いからである。世上をよく達觀して萬機に應じて人々を救濟して倦まざることこれ佛菩薩の本願にあらずや。然るに曷ぞ仁義を以て衆生を導き理を覺らしめる管なるに身を束縛せられたる如く思ひ、また官職を桎梏の如くに思ひなして德光を上表文の趣きを以て掩ひ隱し、名聲を世上から消すといふことは此れ實につたないかな。

況雖密門稍啓。眞言載敷。而學之者纔踐其階庭。褒之者未踐其堂廡。自非公輸。如蟠節何。宜審法流。勿辭統號

漢方 況んや密門稍く啓け、眞言載て敷ぐと雖ども、之を學ぶ者纔かに其の階庭を踐んで之を褒ぐる者未だ其の堂廡を踐まず。公輸に非ず自んば蟠節を如何んがせん。宜しく法流を害ほして統號を辭すること勿るべし。

字訓 ○敷……揚と同じ。○載……始の義。『毛詩』に曰く「春の載て陽かなり」と。○踐其階庭……庭のきざはしを昇ることで、未だその堂奥に達せず、物事のやつと始り、序の口にすぎぬことの喩へ。○未踐其堂廡……廡を密學に喩ふ。密學の堂の廡にも達せざる義。○公輸……公輸般、木を以て蒿を造り之を飛ばしむるに三日間飛びて集らずと傳ふ。それ程に名人であつた。○蟠節……曲りくねりたる木を、直なる竹の筒に入れるには直くすることで、大師程の名匠に非ざれば衆生の曲木をば如何に直くすべきやの意。○統號……僧都の職を指す。

會意 辭職を思ひ止まらしめ給ふ。

講義 ましてや密敎の法門稍く開拓され、眞言宗の名始めて揚ると雖ども、之を學ぶ者に至りてはまだ纔かに其の階庭、卽ちやつとその端緒に著いたに過ぎず、また之を修行し學ばんとするものは未だその堂廡にも達せざる有り樣である。かつ公輸般の如き名匠にあらざれば曲木を直竹に入るる能はざる如く、空海程の名師に非ざれば曲れる衆生をば濟度すること能はじ。餘の人々には如何がせんや。宜しく密宗の徒を化益して僧都の官職を辭退することなかるべし。

昔道問臨危而更保。慧慶將沒而蒙全。斯固實德內充徵衛外發

漢方 昔道問危きに臨んで更に保ち、慧慶將に沒せんとして全きことを蒙る。斯れ固に實德內に充ち、徵衛外に發すればなり。

字訓 ○道問……『高僧傳』梁傳第十二に曰く「釋の道問、姓は馬、扶風の人なり。初め出家して道懿の弟子となる。懿病ひす。嘗て問等四人を遣て河南の霍山に至つて鍾乳を採らしむ。穴に入ること數里、木に跨り、水を渡る。三人溺れ死す。炬火久亡ぬ。問判ずるに濟ふ理なし。問素より法華を誦ず。たゞ誠を此の業に憑む。久觀念を存念す。頃くあつて一の光の螢火の如くなるを見る。之を追ふに及ばず、遂に穴を出ることを得たり。是に於て遂んで禪業を修す。節行彌新なり。後に同學四人と南の方上京に遊ぶ。風化を觀闖す。夜氷に乘つて河を渡る。中道にして氷破れて三人沒死す。問久誠を觀音に歸す。乃ち脚下に一物有り自ら跂つ如くなるを覺ゆ。また赤光前に在るを見る。光に乘じて岸に至つて都に達す。南澗寺に止る。常に般舟を以て業とす。宋の元嘉二十年廣陵に終る」と。○慧慶……『高僧傳』梁傳第十二に曰く「釋の慧慶、廣陵の人なり。出家して廬山寺に止る。學經律に通ず。淸潔にして戒行あり。法華十地思益維摩を誦ず。每夜吟諷す。常に闇中に彈指讚嘆の聲有るを聞く。嘗て小雷に於て風波に遇ふ。船まさに覆沒せんとす。慶たゞ經を誦ふこと輟まず。船浪中に在つて人有つて之を牽くが如くなることを覺ゆ。倏忽として岸に至る。是に於て篤く厲ますこと彌勵なり。宋の元嘉の末に卒す。春秋六十有二」と。○徵衛……徵は効驗、衛は衛護。『高僧傳』梁傳第十二に曰く「諷誦の利大なり。而れども其の功を成す者の希れなり。經に說く所の如し、止た一句一偈を復るも亦是れ聖の稱美したまふ所なり。是を以て曇鸞、神を石壇に通し、僧生術を空山に感ず。道問危きに臨んで濟るることを獲たり。慧慶まさに沒せんとして全きことを蒙る。斯れ皆實德內に充つるが故に徵應をして外に啓かしむるなり」と。

會意 信仰の力によりて災難を征服せしことを故事を引き徵せられ給ふ。

講義 昔道問危きに臨んで而も濟はれて更に生命を保つことを得、またかの慧慶は風浪烈しきに遭ひまさに船沈沒せんの難に逢ひ乍らもよく免かれて全き

ことを得　これ皆もとより日比の修行の實德内に充つるが故に効驗術護外にあらはれて救濟せらるゝに至つたものである。

然則法師現病終告自詳。亦宜厝心善加救療

【訓方】然れば則ち法師病を現じて終を告ぐること自ら詳かんずれども亦宜しく心を厝して善く救療を加ふべし。

【參考】救療に厝むべしとの御仁慈の御旨を明し給ふ。

【講義】かゝる樣に道岡や悲慶は信仰の効驗によりて危難を救はる。然れば則ち今汝法師も病に罹りて自らは正に滅に近づけりと明かに知り、告げてゐるけれども、道岡や悲慶の如くに心を厝まして佛を念じ、佛の加被力を蒙つて平癒すべく專心に救療すべきである。

道林微笑重來肅祖之朝

【訓方】道林微笑して重ねて肅祖の朝に來り。

【字釋】○道林……『高僧傳』第四に曰く「支遁字は道林、本姓は關氏、陳留の人。或が曰く、河東林慮の人なり。幼にして神理あり。聰明秀徹なり。初め京師に至る。太原の王濛甚之を重ず。曰く造微の功輔嗣に減らずと。年二十五にして出家す。謹肆に至る毎に善く宗會を標す。而も章句或は遺るゝ所有り、時に守文の者の爲めに陋んぜらる。謝安聞きて善して曰く、此れ乃ち九方皐が馬を相するなり。其の玄黃を晷して其の駿逸を取る。又迹を剡山に投じて沃州の小嶺に於て寺を立てゝ行道す。僧衆百餘常に隨つて學ぶ。晚に石城山に移る。又棲光寺を立て、山門に宴坐し、心を禪苑に遊ばしむ。木食澗飲して無生に浪志す。晉の哀帝の即位に至つて頻りに兩使を遣はして徵請す。都に出でゝ東安寺に止り、道行般若を講ず。白黑欽崇し、朝野悅服す。遁京師に淹留すること三載になんなんとするに涉る。乃ち東山に還り、上書して辭を告ぐ。詔して即ち許す。晉の太和元年、閏四月四日を以て所住に終ふ。春秋五十有三」と。○重來等……『便蒙』に曰く「傳の中に重ねて肅祖の朝に來るの事無し。蓋し大師を以て道林に比するが故に帝自ら肅祖と稱し給ふなりん」と。

【參考】平癒の上は再び參内せよとの御優詔の御旨趣を喩を以て示し給ふ。

【講義】かの道林法師が微笑し乍ら哀帝の召に應じたといふが、その如くに汝法師も平癒の晩には微笑を以て再び參内せよ。

竺法被衲再入琅耶之邸　天長八年六月日

【訓方】竺法衲を被て再び琅耶の邸に入らん。

天長八年六月日

【字釋】竺法……『高僧傳』梁傳第四に曰く「竺道潛字は法深。姓は王、琅耶の人なり。晉の丞相武昌郡公郭が弟なり。年十八にして出家す。浮華を剪削し本を崇め、學を務む。微言興化にして譽れ西朝に洽し。風姿容貌堂堂如たり。年二十四に至つて法華大品を講ず。既に深解を蘊めり。また能く說を善くす。故に風を觀じ、道を味ふ者常に數五百に盈てり。晉の永嘉の初め亂を避けて江を過ぐ。中宗元皇及び肅祖明帝、丞相王茂弘、太尉庾元規并に其の風德を欽み、友として敬す中宗肅祖昇霞し、王庾父薨ずるに及んで乃ち迹を剡山に隱して以て當世を避る。蹤を追て道を問ふ者已にまた侶を山門に結ぶ。哀帝に至つて好んで佛法を重んず。頻りに兩使を遣はして殷勤に徵請す。潛詔旨の重きを以て暫く宮闕に遊ぶ。即ち御筵に於て大品を開講す。上及び朝士并に善と稱す。晉の寧康二年を以て山館に卒す。春秋八十有九」と。○琅耶……傳の中に哀帝の朝に再び宮中に入る。故に琅耶は哀帝を指し奉るならん。

【參考】前章の意に同じ。

【講義】かの竺法深が威儀を正して再び哀帝の召に應じて參内せしと稱せられてゐるが、汝法師も平癒の上は再び參内せよ。天長八年六月の日。

九一　奉造東寺塔材木曳運勸進表

奉造東寺塔材木曳運勸進表

【訓方】東寺の塔を造り奉る材木を曳き運ぶ勸進の表。

【參考】初に題名を揭ぐ。

【講義】東寺の塔を造建し來るに就いて、材木を曳き運ぶを勸進するの上表文。

右東寺別當沙門少僧都空海等奏。空海等聞興隆三寶唯憑一人

【訓方】右東寺の別當沙門少僧都空海等奏す。空海等聞く、三寶を興隆することは唯一人に憑る。

【字釋】○別當……寺院に於ける長官。○一人……一人は天子を指し奉る。

【參考】三寶興隆は偏へに上御一人の御力にかゝり給ふことを明す。

【講義】右東寺の別當沙門少僧都空海等奏上す。空海等かく聞き及んでゐる。即ち三寶を興隆することは偏へに上御一人の御力に憑るものであると。

一人所務惟孝惟德。德之所聚者塔幢是最也。塔名功德聚。幢號與願印。功德聚則毘盧遮那萬德之所集成。與願印則寶生地藏之三昧身

【訓方】一人の務むる所は惟れ孝、惟れ德なり。德の聚る所は塔幢是れ最なり。塔をば功德聚と名け、幢をば與願印と號す。功德聚は則ち毘盧遮那萬德の集成する所、與願印は則ち寶生地藏の三昧身なり。

【字釋】○塔……具には率都婆（Stūpa）と云ひ、功德聚・靈廟・高顯・方墳等と譯す。密敎に於ては塔婆を以て大日如來の三昧耶身とし、其の主要なるものを二種とす。一は五輪所成五字所成の塔、一は鑁字所成の塔なり。前者は胎藏五大の德を表示せる本有の理塔にして五輪、後者は金界智德を表示せる修生塔なり。弘法大師高野山に建立せる大塔は後者にして、東寺に造立せる五重の塔は前者に屬す。○幢……梵に馱縛若（dhvaja）と云ふ。種々の絲帛を以て莊嚴せる一種の旗なり。密敎には大菩提心の標幟とし、莊嚴具に用ふ。又幢竿の頭に如意寶珠を安んぜるを特に寶幢・如意幢・摩尼幢と云ひ、與願印とも名く。寶生如來・金剛幢菩薩・除蓋障菩薩・地藏菩薩等の三昧耶形なり。又『便蒙』には幢は九輪なりと註せり。○地藏等……地藏菩薩は寶珠又は幢を以てこ形とす。但し寶珠を幢上に置く故に二者併せ用ふ。是れ地に種々の珍奇を藏して盡きざる如く、寶幢より無量の功德寶を出して法界衆生を利する義なり。

【參考】塔幢の功德を明す。

【講義】上御一人の御德行は上は惟孝にましまし下は萬民に對して惟德にまします。德の聚る所は塔幢その最たるものである。塔をば功德聚と名け、幢をば與願印と號す。更にその功德聚たる塔は大日如來の三昧耶形にして大日如來の萬德が此れに集成せることを標幟せしものであり、與願印たる幢は寶生如來及び地藏菩薩の三昧耶形にして無量の功德寶を出して法界の衆生を利益する義を標幟せるものである。

是故建塔建幢福德無盡。近作人天王。遠爲法界帝

【訓方】是の故に塔を建て、幢を建つるは福德無盡なり。近くは人天の王と作り、遠くは法界の帝と爲る。

【字釋】○作人天王……『寶篋印陀羅尼經』に曰く「若し末世四輩の弟子善男善女あつて無上道のために力を盡して塔を造り、神咒を安置せば所得の功德說くとも盡くべからず。或は人、力に隨つて一丸の泥を以て塔の壞れたる處を塗り、一拳の石を運んで塔の礎の傾くを扶けば此の功德に由つて福を增し壽を延べ、命終の後に轉輪王と成らん」と。その他『造塔功德經』に詳しく說けり。

【參考】造塔の功德を明す。

【講義】是の故に塔を建て、幢を建つる者にはその福德の功德無盡にして說き難

き程である。今その一端を述ぶれば造塔の功德は近くは轉輪王となりて須彌四洲を統領するとまで說かれ、遠くは大悟徹定して法界の主、卽ち佛となるに至るとまで說かれてゐる位である。

東寺者先帝之御願也。雖帝經四朝年逾三十。然猶紹構未畢。道俗觀者咸願早成。何況先聖盡願御願速畢

【讀方】東寺は先帝の御願なり。帝四朝を經、年三十に逾えたりと雖ども、然れども猶紹構未だ畢らず、道俗觀る者の咸く早く成んことを願ふ。何に況んや先聖盡ぞ御願速かに畢ることを願ひたまはざらん。

【字訓】○先帝……桓武天皇を指し奉る。○四朝……桓武天皇より淳和天皇に至る四時代を指し奉る。○紹構……先聖の構へ起され給ひし事業を受け繼ぎ給ひしこと。○先聖……桓武天皇を指し奉る。

【事意】轉つて東寺が御願寺なることと、その規模未だ完成してゐないことを明し給ふ。

【講義】東寺は先帝桓武天皇の御願によりて御營造を始め給ひし所謂御願寺なのである。御營造を始めさせ給ふてより今に四朝三十年を經過してゐるけれども然も猶未だ構築の事業が完成してゐないのである。從つて道俗觀るもの皆咸く早く完成せんことを願ふてゐる次第である。であるからましてや御營造を御發企遊ばされ給ひし所の先聖桓武天皇に於かせられては一日も早く完成して以て御願の速かに遂げられんことを願ひたまはざらんや、必ず願ひ給ふであらう。

空海等謬代良匠。叨預御願。驅馳日夕。經營東西

【讀方】空海等謬つて良匠に代つて叨りに御願に預れり。日夕に驅馳して東西に經營す。

【字訓】○良匠……名匠。○御願……東寺御造營の御願。○經營……往來すること。卽ち『後漢書』に曰く「五山を經營す。注に經營は猶ほ往來のごとし」と。

【事意】東寺御造營の任を預りしことを明す。

【講義】空海等謬つて名匠に代つてみだりがましく東寺御造營の任を預るに至る。日夕に働きまはり、東西に往來して造營の完成に專心これ務む。

今塔幢材木近得東山。僧等從今月十九日與夫曳運。木大力劣成功太難。譬如蟾蜍對車。蚊虻負嶽。自非一人孝恩百官忠心。何能莊嚴先聖御願。成就廣大佛事

【讀方】今塔幢の材木近く東山に得たり。僧等今月十九日從り夫を與に曳き運ぶ。木は大きに力は劣にして功を成さんこと太だ難し。譬へば蟾蜍の車に對ひ、蚊虻の嶽を負はんが如し。一人の孝恩、百官の忠心に非ず自りんば何ぞ能く先聖の御願を莊嚴し、廣大の佛事を成就せん。

【字訓】○與夫……『便蒙』には一本には與夫と作ると註せり。夫は人夫のこと。○蟾蜍、蚊虻等……其の任に勝へざることを喩を以て明す。

【事意】塔幢の材を運ぶに力の足らざることを明し給ふ。

【講義】今塔幢の材木を東寺より程近き所の東山に求め得たり。そこで僧等今月の十九日より、人夫等とともに之を曳き運ぶ。然れども材木は大きく曳く力は劣弱なるが故に運搬の功を成さんこと太だ困難である。譬へばかの蟾蜍がその臂を怒らして車轍に向ふが如きに等しく、また蚊虻が山を負ふにも等しきもので其の任に勝へざること明らかである。依りて上御一人の御力を蒙り、百官の御盡力に預かることにあらざればどうしてやよく、先聖の御造營の御願を麗しく莊嚴し、廣大無邊の此の一大佛事を成就し得ようや。

今望令六衞八省親王京城等勤力竭誠各曳一味

【讀方】今望むらくは六衞八省親王京城等をして力を勤せ、誠を竭して各曳くこと一味ならしめん。

【字訓】○六衞……左近衞・右近衞・左衞門・右衞門・左兵衞・右兵衞。○八省……中務省・式部省・民部省・治部省・兵部省・刑部省・大藏省・宮內省。○京城……左右京職。

【事意】百官の協扶あらんことを乞ふ。

【講義】今希望し奉ることは親王を初め奉り、六衞八省京城職等の百官力を戮せ誠を竭し、心を木を曳くことの一心に致して力を合はせてたすけしめられんことを。

但令東西二寺工夫。各持引木按材相刻。然則子來人夫如雲而集。塔幢材木不日而到

【讀方】東西二寺の工夫をして各持ち引けらん。木をもつて材を按じて相刻ましめん。然れば則ち子來の人夫雲の如くに集り、塔幢の材木不日にして到りなん。

【字訓】○工夫……工匠や人夫のこと。○木按材相刻……材木を按排して相共に用材に刻り刻むこと。

【事意】協扶を蒙れば速かに成るの意を明し給ふ。

【講義】更にまた東西二寺の工匠人夫をして各々持ち引き來らしめ、その持ち引き來た所の材木を按排して用材として刻刻せしめんことを。左樣に致したならば雲の如くに大勢の人夫が、子が親の元に集り來る如くに速かに集り來る。從つて塔幢の材木も日ならずして到着し、造營の功も完成するに到らん。

僧等微願如是。天慈允許宣付諸司

天長三年十一月二十四日

【讀方】僧等微願是の如し。天慈允許せば諸司に宣付したまへ

天長三年十一月二十四日。

【事意】天慈を乞ひ奉る。

【講義】僧等微願し奉ること是の如くである。若し幸ひにして上御一人哀憐して御慈悲を垂れさせ給ひ以て允許し給はゞ、どうか諸司百官に宣付し給はらんことを。天長三年十一月二十四日。

九二　永忠和尙辭少僧都表

永忠和尙辭少僧都表

【讀方】永忠和尙少僧都を辭する表。

【字訓】○永忠……永忠は法相宗の人なり。年老ひたるを以て少僧都の官、勤め難き故に辭職せんと欲す。その辭職の上表文を弘法大師に依頼さる。永忠の事については『元亨釋書』第十六に曰く「永忠は京北の人、姓は秋篠氏、實龜の初め、入唐留學す。延曆の季に使に隨て歸へる。經論に涉り、晉律を解す。善く威儀を攝めて齋戒缺ぐことなし。桓武帝勅して梵釋寺を主しむ。弘仁七年四月に減す。歲七十四」と。

沙門永忠謹言。去弘仁元年九月十七日詔書。以永忠爲少僧都。寵命自天載懷感惕誠惶誠恐。永忠狂費程粮實慙非才。歷任登用事同濫吹

【讀方】沙門永忠謹んで言す。去し弘仁元年九月十七日の詔書に永忠を以て少僧都と爲せり。寵命天自りす。載はち感惕を懷ひて誠惶誠恐。永忠狂げて程粮を費して實に非才を

慙づ。歴任登用事濫吹に同じ。

字訓 ○寵命……御寵愛を蒙ること。○感惕……惕は懼るゝこと。感悅して恐懼すること。○程懼……旅の途上の食糧で極く僅かの俸秩のこと。○歴任……職位を歴て擧用せらるゝこと。○濫吹……齊の宣王に關するの故事で、竽を吹かぬものが能く竽を吹く者の中に濫りに混つて、竽を吹くものと同樣に俸祿にありつたことで、即ち才能なくして祿を得しことを指す。

筆意 御寵命を蒙りしを明す。

講義 沙門永忠謹んで言上す。去る弘仁元年九月十七日附の詔書を以て永忠を少僧都になし給ふ。寵命を蒙り感悅恐懼し、誠惶誠恐として感泣す。永忠をして特別の御仁慈を以て抜げて俸祿を下し給ふ。顧て自己を思ふに、自分は非才にしてその器にあらざるが故に衷心よりその職に慚づる次第である。かく其の器にあらざる者を職位に擧げ用ひらるゝことは濫竽、即ち名實に乖けるものといふに似てゐるのである。

況乎如今行年七十。筋骨劣弱。窮途將迫。殘魂餘喘能得幾時。即弛僧綱之綱紀。又闕統理之師表。

訓方 況んや如今行年七十、筋骨劣弱にして窮途將に迫りなんとす。殘魂餘喘能く幾くの時をか得ん。即ち僧綱の綱紀を弛へ、又統理の師表を闕きてん。

字訓 ○窮途……窮の心に疑惑を生ずるをいふ。即ち死期の近づけるをいふ。○殘魂……餘命幾何もなきこと。○餘喘……絶えんとする命。死に近づきたる命のこと。○綱紀……おほづなとこづなで轉じてのり。又のつつとりおさむること。○統理……すべおさむこと。○師表……人の手本となるべきもの

筆意 官職に在りてその職責を全うし能はざることを明す。

講義 況んや更に私は今や七十歳となり、筋骨も劣弱に衰へ、死期もまさに迫り來らんとし、殘魂餘喘餘命幾何もなく、何時迄生き永らへようか、最早や幾何もないことである。かく老衰を來しては僧綱の職に在つてもその職責を果す能はず、綱紀弛緩し、統理の師表を闕ぎ、他の人々に惡影響を及ぼすことであらう。

伏願知足罷歸。靜坐念佛以報國恩。

訓方 伏して願らくは足ることを知つて罷げ歸り、靜坐して佛を念じて以て國恩を報せん。

字訓 ○知足……『遺教經』に曰く「知足の法は卽ち是れ富樂安穩の處なり」と。○罷歸……『漢書』列傳四十三に曰く「韋賢骸骨を乞うて罷げ歸る」と。罷は休。

筆意 骸骨を乞ひ奉る旨を明す。

講義 伏して乞ひ奉ることは、少欲知足の沙門の本分に從つて骸骨を乞ひ奉つて退き歸へり、靜坐觀法して念佛三昧に耽り、以て國恩に報答し奉らん。

不任下情謹詣闕進表以聞。誠惶誠恐謹言

某年某月日

訓方 下情に任へず、謹みて闕に詣でゝ進表以聞す。誠惶誠恐謹んで言す。某の年某の月日。

筆意 臣下たる永忠の眞實の願望に任へずして謹んで宮闕に詣でゝ表を上り、奏聞し奉る。誠惶誠恐謹んで言す。某年某月日。

九三　永忠僧都辭少僧都表勅答

註。永忠に與へられ給ひし　勅答なるを以て謹んで省畧す。

九四　於紀伊國伊都郡高野峰被請乞入定所表

於紀伊國伊都郡高野峰被請乞入定所表

訓方 紀伊の國伊都の郡高野の峰に於て、入定の所を請け乞ふの表。

筆意 初に題名を揭ぐ。

講義 紀伊の國伊都の郡高野の峯を入定の場所として賜はらんことを乞ひ奉るの上表文。

沙門空海言。空海聞山高則雲雨潤物。水積則魚龍產化。是故嗜闍峻嶺能仁之迹不休。孤岸奇峰觀世之蹤相續。尋其所由地勢自爾。又有臺嶺五寺禪客比肩。天山一院定侶連袂。是則國之寶民之梁也

訓方 沙門空海言す。空海聞く、山高きときは雲雨物を潤し水積るときは魚龍產化す。是の故に嗜闍の峻嶺には能仁の迹休まず。孤岸の奇峰には觀世の蹤相續ぐ。其の所由を尋ぬるに地勢自ら爾なり。又臺嶺の五寺には禪客肩を比べ天山の一院には定侶袂を連ること有り。是れ則ち國の寶、民の梁なり。

字訓 ○嗜闍……嗜闍崛山で、また靈鷲山ともいふ。中印度摩揭陀國王舍城の東北に聳ゆる山にして釋尊說法の地なり。○孤岸奇峯……湖や海に面し絶壁になる高峰。今は補陀洛山をいふ。補陀洛山には三つあり、一は印度の南海孟買に近き所にあり。二は支那浙江寧波府の海中、舟山島にある山。三は西藏の中部、拉薩の地。共に觀音菩薩にちなめる名所にして古來より信仰の靈地なり。○觀音之蹤……『西域記』に曰く、「秣羅耶山の東に布怛洛迦山あり。山頂に池あり、側に石天宮あり。觀自在菩薩往來遊舍したまふ」と。○臺嶺……五臺山のこと。五臺山は支那山西省にあり。後漢の明帝永平十年、摩騰竺法蘭印度より佛經を傳へ來りて後此山に登り、弘法結界の地として草庵を結びたりと傳ふ。後杜順、道宣等の名僧此の山にありて研學修行したりといふ。○五寺……『表制集』第二に曰く「代州の五臺山金閣、玉花、清涼、華嚴、吳嶾子等の寺」と。○天山一院……天臺山國清寺を指す。天臺山は支那浙江省臺州府天台縣の北にあり、天台宗の根本地にして智者大師の開く所。隋の煬帝が智者の爲に建立せる國清寺あり。○袂……袖のこと。○國之寶……『隨煬帝詔』に曰く「國の寶器、其れ賢を得るに在り」と。○梁……橋梁の義。

筆意 高山峻嶺の地が佛道修行者にとりて好適地なることを明し給ふ。

講義 沙門空海言し奉る。空海聞く、山高きときは雲集り、降雨多くして草木を潤し以てよく繁茂さすに至り、また水深きときは魚龍多く集り住み、その繁殖も盛んなりと。是の故にかの天竺にある嗜闍崛山の峻嶺に於ては能仁釋迦牟尼世尊垂迹し給ひ、後々までもその奇瑞やまず。またかの孤岸の奇峯たる補陀洛山には觀世音菩薩應現の靈蹤相續いで顯はれてゐる。そこでそれらの所由を尋ね考ふるに、それら高山峻嶺の地勢が自然に靜寂にして靈域の雰圍氣となつてゐるが故である。また五臺山の五寺には修禪修行の客肩を比べる程に多く集り、また天臺山の國清寺には禪定三昧を修する法侶袖を連ぬる程に多く集り住してゐるのである。かく高山峻嶺の地を修行の道場となして名僧知識を輩出せしめ、萬民救濟の橋梁となすことはこれ國家にとりてはなくてはならぬ寶である。

伏惟我朝歴代皇帝留心佛法。金刹銀臺櫛比朝野。談義龍象每寺成林。法之興隆於是足矣。但恨高山深嶺乏四禪客。幽藪窮巖希入定賓。實是禪教未傳。住處不相應之所致也

訓方 伏して惟れば我が朝歴代の皇帝心を佛法に留めたまへり。金刹銀臺櫛のごとくに朝野に比び、義を談ずる龍象、寺每に林を成す。法の興隆是に於て足んぬ。但だ恨

むらくは高山深嶺に四禪客乏しく、幽藪窮巖に入定の賓希なり。實に是れ禪教未だ傳はらず。住處相應せざるが致す所なり。

字釈 ○歴代皇帝……欽明天皇の時代に佛教渡來す。よりて欽明天皇より此の上奏文を上れる嵯峨天皇に至る御歴代の天皇を指し奉る。○金剛銀臺……伽藍や僧房をいふ。即ち楊衒の『洛陽伽藍記』第一序に曰く「招提櫛のごとくに比び、寶塔駢羅たり。爭つて天上の委を寫し、競つて山中の影を摸す。金剛と靈臺と高きことを比し、宮殿阿房と共に莊なることを等うす」と。○談義……經論の深義を說くこと。○龍象……高僧のこと。龍は水の王、象は獸類の王にして大力あるもの。智行兼ね備はり、高德傑秀なる僧を之に喩ふ。○四禪……『十卷楞伽經』第三に曰く「また次に大惠四種禪あり。何等をか四となす。一には愚癡凡夫所行禪。二には觀察義禪、三には念眞如禪、四には諸佛如來禪なり」と。『開書』には此れを空に配禪して曰く「第一は人空。第二は法空、第三は人法二空、是れ大乘至極の空なり。第四は是れ眞言定なり」と。○幽藪……奥深き大澤にして草木密生せる所。○窮巖……深山の巖壁。○入定賓……『開書』には總じて修禪の人をいふと註せり。○禪教……『大日經』に說かれたる眞言宗教の光明禪など、密教に於ける阿字觀・月輪觀等の觀法の教を指す。

掌意 修禪の教と修禪の道場なきことを明す。

講義 伏して惟れば我が朝に佛教渡來してよりこのかた、歴代の皇帝陛下に於かせられ給ひては佛法に對して御關心を留めさせたまへり。また他面には金剛銀臺の莊麗極まる官院私寺が櫛の齒の如くに多く立ち竝び、教法の深義を演說する龍象寺毎に林の如くに無數に居住す。かくて佛法の興隆は此れで充分である。然るにたゞ一つ遺憾に思ふことは高山深嶺に四禪を修するの求道者乏しく、山藪窮巖に入定の求法者希れなることである。是は實に一面に於ては禪定の教法未だ傳はらず、他面に於ては高山峻嶺に於ける修禪の道場なきこと、即ち能住の人と所住の處と能く相應せざるが爲めである。

今准禪經說深山平地尤宜脩禪空海少年日好涉覽

山水從吉野南行一日、更向西去兩日程有平原幽地。名曰高野。計當紀伊國伊都郡南。四面高嶺人蹤絶蹊。今思上奉爲國家。下爲諸脩行者。芟夷荒藪聊建立脩禪一院。經中有誡。山河地水悉是國主之有也。若比丘受用他不許物。即犯盜罪者

訓方 今禪經の說に准ずるに深山の平地尤も脩禪に宜し。空海少年の日好んで山水を涉覽せしに、吉野從り南に行くこと一日、更に西に向つて去ること兩日程にして平原の幽地有り、名て高野と曰ふ。計るに紀伊の國、伊都の郡の南に當れり。四面高嶺にして人蹤蹊絶えたり。今思はく上は國家の奉爲に、下は諸の脩行者の爲に荒藪を芟り夷げて、聊か脩禪の一院を建立せんと。經の中に誡め有り、山河地水は悉く是れ國主の有なり、若し比丘他の許さざる物を受用すれば即ち盜罪を犯す者なり。

字釈 ○禪經……『大日經』を指す。『大日經』第一具緣品に曰く「行者悲念の心をもつてまさに爲めに平地を擇ぶべし。山林に華果多く、悅意の諸の清泉は諸佛の稱歎したまふ所なり。圓壇のことを作すべし」と。又同經第七學處品に曰く「智者、師の許可を蒙り、已つて地分の所宜の處に依るべし。妙山と補峯と半嶺との間、種々の龕窟と兩山の中と一切の時に於て安穩を得べし」と。○人蹤……人の通つた足あと。○蹊……こみち。○芟夷……刈り盡すこと。○經中有誡……『大乘本生心地觀經』第二報恩品に曰く、「其の國界山河大地より、大海際を盡すまで國王に屬せり」と。○犯盜罪……『梵網經』卷下に曰く「若し佛子自ら盜し、人を敎へて盜せしめ、方便して盜し、呪して盜せん。盜の因、盜の緣、盜の法、盜の業あらば乃至鬼神と有主の劫賊との物にまれ、一切の財物一針一草までも故さらに盜することを得ざれ。是れ菩薩の波羅夷罪なり」と。

掌意 高野の地に修禪の一院を建立したき旨を明し給ふ。

講義 今大日經等の說になぞらへ考ふるに、深山の平地が修禪の道場として尤も好適の所である。空海少年の日好んで山水を涉覽す。その涉覽の際に吉野より南に行くこと一日、更に西に向つて去ること兩日程にして高山の上に平原の幽地があり、名て高野と曰ふ。此の土地の位置を計るに紀伊の國、伊都の郡の南に當る。四面高嶺にして人の足跡も、小道も絶えてなき、謂ゆる人跡未踏の地である。今思ふに、上は國家の奉爲に、下は多くの佛道修行者の爲めに生ひ茂れるおどろを刈り盡し以て聊か乍ら修禪の一院を建立せんと欲す。然るに經の中に次の如く誡しむ。即ち山河地水は悉く是れ國王の御所有にかゝる。若し比丘、他の許さざる物を受け用ふることは即ち盜罪を犯すものなりと、か樣に謂へり。

加以法之興廢悉繫天心。若大若小不敢自由。望請蒙賜彼空地。早遂小願。然則四時勤念以答雨露之施。若天恩允許請宣付所司。輕塵宸扆伏深悚越。沙門空海誠惶誠恐謹言

弘仁七年六月十九日沙門空海上表

訓方 加以ず、法の興廢は悉く天心に繫れり。若しは大若しは小、敢へて自由ならず。望み請ふらくは彼の空地を賜ることを蒙つて早く小願を遂げん。然れば則ち四時に勤念して以て雨露の施を答したてまつらん。若し天恩允許せば、請ふ所司に宣付したまへ。輕しく宸扆を塵して伏して深く悚越す。沙門空海誠惶誠恐謹んで言す。弘仁七年六月十九日沙門空海上表す。

字釈 ○四時……晨・午・昏・夜半。『三摩地儀軌』に曰く「晝夜四時に精進して修す」と。○宸扆……宸は天下に關し奉ることに就いて添へていふ語。扆はつひたてにて、天子が諸侯を御引見の際に依て立てゝ之を負ふ。而して南面して諸侯に對す。今は天子の御尊體を稱し奉るについて畏いが故にその側近の物を擧示して玉體を指し奉る。

掌意 高野の地を乞ひ奉る旨を明し給ふ。

講義 更にまた法の興隆廢滅といふことは一に此れ上御一人の御心にかゝつてゐるのである。事の大小に拘らず悉く皆個々の者が自由勝手になしてはならないのである。そこで望み請ひ奉りたきことは彼の高野の空地を賜はることを蒙つて早く我が小願を果さんことである。そして修禪の道場完成せば日日晝夜四時に上堂して精進修行し、國家安穩を祈念し奉り、以て上御一人の御高恩を報答し奉らん。若し幸ひにして哀愍を垂れ給ふて允許を賜はらば所司に其の御旨趣を御宣付したまはらんことを請ひ奉る。輕々しく、御威光輝ける、玉體を塵し奉つて深く悚越す。沙門空海誠惶誠恐謹んで言す。弘仁七年六月十九日沙門空海上表す。

九五 高野四至啓白文

高野四至啓白文 在紀伊國在田郡石垣上莊一處四至有

訓方 高野四至の啓白の文（紀伊の國、在田の郡、石垣の上の莊に在り、一處四至有り）

字釈 ○四至……至は極、即ち四方の極のこと。四方の境のこと。○在田郡……先きには伊都郡といひ、今在田郡といふ此の山廣大にして二郡に涉るが故なり。

掌意 初めに題名を揭ぐ。

【講義】高野山四方の極を定むる啓白の文。（高野山は紀伊の國在田の郡石垣の上の莊に在り。此の一場處に四方の極あり。）

葱嶺挾銀漢、白峰衝碧落、吾居住時頻有明神衛護、卽限山四至、永獻三寶、表仰信情云々

【講方】葱嶺銀漢を挾み、白峰碧落を衝けり。吾れ居住の時頻りに明神の衛護有り、卽ち山の四至を限つて永く三寶に獻つて、仰信の情を表すと云云。

【字釈】○葱嶺……青峯。○碧落……青ぞら。○明神……丹生・高野兩大明神を指す。

【拳要】丹生明神より高野山の地を三寶の爲に獻じられしを明す。

【講義】高野の青峯天の河を挾みたるかと思はれ、また雲のかゝれる高野の白峯天を衝けるかと思はるゝ程に高く聳ゆ。此の高野の地に吾れ居住の時度々明神の御衛護を蒙る。卽ちその御衛護を蒙りし中特に記すべきことは高野山の四方の極を限つて永久に三寶に獻じて仰信の情を表せらるると仰せられしことであつた。

不因乘査忽入雲漢。不嘗妙藥得見神窟。一喜一悲心魂難持。山之爲狀也。東西龍臥有東流水。南北虎踞棲息有興。指妙高以爲儔。引輪鐵而作帶。日光出地不假天眼。萬里目前何更乘鵠。見砌中圓月知普賢之鏡智。仰空裏惠日覺遍知之在我。託此勝地聊建伽藍名金剛峰寺。住此修道四上持念。觀華藏於心海。念實相於此山。以崇神威饒國皇福。所有佛業不能縷說。日車難駐人間易變。從心忽至四蛇虛羸。攝誘是努能事畢矣。承和元年九月十五日金剛峰寺大僧都空海書

【講方】査に乘るに因らずして忽ちに雲漢に入り。妙藥を嘗めずして神窟を見ることを得たり。一びは喜び、一びは悲んで心魂持ち難し。山の狀爲らく、東西は龍の臥せるがごとくして東流の水有り、南北は虎の踞れるがごとくして棲息するに興有り。妙高を指して以て儔と爲、輪鐵を引いて帶と作せり。日光地より出でて天眼を假らずして萬里目の前なり。何ぞ更に鵠に乘らん。砌りの中の圓月を見て普賢の鏡智を知り、空裏の惠日を仰では遍知の我に在ることを覺る。此の勝地に託いて聊か伽藍を建て、金剛峰寺と名く。此に住して道を修し、四上持念す。華藏を心海に觀じ實相を此の山に念ず。以て神威を崇めて國皇の福を饒にせん。所有の佛業縷しく說くこと能はず。日車駐り難く、人間變じ易し。從心忽ちに至つて四蛇虛羸す。攝誘是に務めて能事畢んぬ。承和元年九月十五日金剛峰寺大僧都空海書す。

【字釈】○砌中……池中を指す。○華藏……華藏世界。○心海……一切衆生の一心をいふ。

【拳要】以下の文章、第二卷所載の「沙門勝道上補陀洛山碑」の文に大同小異。その文の構想同じきなり。本書五二頁以下參照のこと。

【講義】昔査に乘つて牽牛星を訪れたと言はれてゐるが、今自分は査に乘らずして直ちに天の河に至ることが出來、又仙人となり、神仙窟を訪れるためには靈を藥服せざれば不可能であると稱せられてゐるけれども、今自分はそれらの神藥を服せずして仙境を訪れることが出來た樣な氣がするのである。高野山上に登り得た刹那のその喜びたるや實に大きく、されど登山中の苦辛は又より以上に大であつた。彼此併せ考ふれば我が心は悲喜交々の情感に打たれ耐え難きほどである。さて高野山の山の形狀について一言せんに、此の山の形たるや、東西は龍の臥せるが如くに細長くして東に向つて川水が流れて居り、南北は虎が踞れるに似て雅致に富み、住居するには誠に興趣のある所である。この山を瞰へて云ふならば恰も須彌山のそれにも等しきもので、あたりの他の山々よりも一きは高く聳え立ち、その山の腰には恰も須彌山に於ける鐵圍山のそれの如くに、他の低き山が帶の如くにぐるりと取り卷いてゐるのである。此の山は高きが故に日光は平地より出で來り、天眼通を借りずとも一眺萬里をおさめ、眼前に自ら見ることが出來、昔かの黃鶴仙人は鵠に乘つて空を飛んだと稱せられてゐるけれども、自分は今雲の上に來てゐるが故に黃鶴仙人の如く鵠に乘る必要は最早やない。また山上に池あり、その池面に宿せる所の滿月を見るにつけてはあの滿月こそはこれ普賢菩薩が普ねく人々に行きわたり藏してゐる所の淨菩提心を悟れるその悟りの境界であらうと想察せられ、又大空に赫々と輝ける日輪を仰ぎ見ては佛智の根本たる大日遍照となり得る佛性も畢竟は我が心中に在してゐることが自らうなづけるのである。か樣に勝れた土地なるを以て、此の勝地に於てさゝやか乍らも伽藍を建立して金剛峯寺と名け、此處に住して佛道を修し、四時に上堂して持誦祈念す。かくて修觀に際して、心海にも譬ふべき池水を見ては思はず知らず華藏世界を觀ずるに至り、又須彌山にも譬ふべき高野山に登りて下界を見れば萬里卽目なることを得、よりて如來の實相智を自然に念ずる樣になるはこれ畢竟か樣な勝景の地の然らしむる所以である。此の勝地に於て神威を崇信し奉り、上御一人の御繁榮を益々饒かに增し奉らんことを祈念し奉らん。その他種々の佛作佛業等については今は詳しく說き記すこと能はず。

思へば太陽過ぎ去つて駐まらざるが如く、人間も亦變じ易く老ひ易く從心の齡忽ちに至り、地・水・火・風の四大も離分して虛しくおとろふ。終りに至るまで一切衆生を攝取誘引、專心利他の行にこれ務めて、なすべき所のわざは皆果し畢り、何ら思ひ殘す所はないのである。承和元年九月十五日金剛峯寺大僧都空海書す。

註。此の文『洛山記』と大都同じきを以て古來より大師の御製作にあらずとの疑問あり。文の終りの「從心」とは七十歳なれば六十歳の大師の御年には合致しがたきこと、「攝誘是務能畢」の一句も大師御自身の事業に對する御言葉としては少しく疑問に感ぜらる。此れ等の點より古來より御置撰といふことに就いては疑問を挿んでゐる樣である。

九六　唱鐘知識文

唱鐘知識文

【講方】鐘の知識を唱ふる文。

【字釈】『私記』には「此の文は餘人、大師に賴んで書せしむ。何れの寺の鐘と言ふことを知らず」と註せり。

【拳要】初に題名を揭ぐ。

【講義】鐘を鑄造せんが爲めに勸化して寄進を唱ふるの文。

夫滄海者鱗甲所潛。泰岳者翔蹄所集。則知智池者坌塵所浴。靈鐘者苦類所息

【講方】夫れ滄海は鱗甲の潛まる所、泰岳は翔蹄の集る所なり。則ち知んぬ。智池は坌塵の浴する所、靈鐘は苦類の息ふ所なり。

【字釈】○鱗甲……鱗は龍魚、甲は龜鼈。○翔蹄……禽獸のこと。○坌塵……ちりあくたで煩惱に喩ふ。○靈鐘等……『行事鈔』に曰く「此の鐘を鳴らすことは十方の衆僧を召さんがため、又諸の惡趣受苦の衆生をして停息すること寺大僧都空海書す。

を得せしめんの故に」と。

【摩】鐘の功德を說がん爲めに先づその發端の語を示す。

【講】夫れ滄海の功たるや龍魚をかくれ住ましめ、泰岳の功たるや貪獸を集め住ましむ。また智池の功德たるや全塵たる煩惱を洗浴せしむるの功あり、靈鐘の功德たるや惡趣受苦の衆生をして休息せしむるの功ありと稱せらる。

然則洪鐘隆鼓焉。非但留吒王之望劍。兼亦蘇灰河之難獄。

【講方】●然れば則ち洪鐘隆りに鼓す。但だ吒王の望劍を留むるのみに非ず、兼ては亦灰河の難獄を蘇がへらしむ。

【字訓】○吒王之望劍等……『付法藏傳』第五に曰く「昔、安息王性甚だ頑暴なり。闍膩吒王を伐つ。闍膩吒王も亦即ち兵を厳くしうして兩陣交戰す。尋いで勝つことを得て安息人を殺すこと凡そ九億。馬鳴の說法を聽きし緣に由て大海の中に生じて千頭の魚となる。劍輪廻り注いで其の首を斬り截る。續いでまた尋いで生ず。展轉して乃至無量なり。須臾の間に頭大海に滿つ。時に羅漢あり、僧の維那たり。王即ち白して言く。今此の劍輪鞿稚の音を聞けば即ち停止す。其の中間に於て苦痛小しき息む。唯願くは大德豈矜愍することなからんや。若し鞿稚を鳴らさば延いて長久ならしめよ。羅漢ために長く打つ。七日を過ぎ已つて苦を受くること便ち畢んぬ。此の寺彼の王に因るが故に次第に相承して長く鞿稚を打つ。今日に至つて猶本の如し」と。○灰河之難獄……灰河地獄のこと。『因本經』に曰く「雞地獄よりまた灰河地獄に入る。灰河騰涌して流れに隨つて出沒す。河邊河底に皆鋒刃あり。徧ねく身體を割き、處として破らずといふこと無し」と。

【摩】正しく鳴鐘の功德を明す。

【講】か樣に鐘の功德たるや受苦の衆生の苦を除くのであるが故に洪鐘を盛んに打ち鳴らすのである。此の洪鐘を長く打ち鳴らすときはかの闍膩吒王が鐘の音を聞きて劍輪の難より救濟されしのみならず、灰河地獄の苦難からさへも免れ脫することを得しとさへ稱せられる程に廣大の功德があるのである。

故經云。一打鐘聲當願。衆生脫三界苦得見菩提。

【摩方】故に經に云く、一び鐘を打たん聲ごとに當に願ふべし。衆生三界の苦を脫れて菩提を得見せんと。

【字訓】○經云……『諸經要集』第二十に『增一阿含』を引きて曰く「若し鐘を打たん時ごとに一切惡道の諸苦并に皆停止と願ふべし」と。

【摩】打鐘の功德を經證を引きて明す。

【講】此の故に增一阿含經には一度鐘を打ち鳴らすごとに當に衆生三界の苦を脫却して菩提を得見せんことを願ふべしと說示せられてゐる。

九七　紀伊國伊都郡高野寺鐘知識文

紀伊國伊都郡高野寺鐘知識文

【摩方】紀伊の國伊都の郡高野寺鐘の知識の文。

【摩】初に題名を揭ぐ。

【講】紀伊の國伊都の郡高野山金剛峯寺の鐘を鑄造するに際して寄進を乞ふ文。

應鑄造鐘事

夫揵槌一打三千之衆雲集。霜鐘三振四生之苦氷銷。

【摩方】鐘を鑄造るべき事。

夫れ揵槌一び打てば三千の衆雲のごとくに集り、霜鐘三び振るへば四生の苦氷のごとくに銷ゆ。

【字訓】○揵槌……揵槌（Ganḍī）譯して所打木と譯す。印度寺院にて用ひたる

一種の鳴物にして木にて作りしもの。後世には獨り木製のみならず鐘・磬等打ちて音を發する物は總べて揵槌と稱するに至る。○三千之衆……三千世界の聖衆のこと。○霜鐘……霜降るときは鐘自ら鳴ることであるが、今は單に鐘をいふ。

【摩】鐘を鑄造すべきことと、打鐘の功德とを明す。

【講】鐘を鑄造すべきこと。夫れ打鐘の功德たるや鐘を一度打ち鳴らせば三千世界の大衆雲のごとくに集り來り、また之を三度打ち鳴らせば四生の苦患氷の如くに滅除すと稱せられる程に廣大の功德がある。

故能闍尼免刀輪。獄率休鑊湯。長眠聞之而驚覺。永夜因之而忽曉。八部所以駢塡。三尊所以輻湊。般若之標道場之主。只在鳴鐘乎

【摩方】故に能く闍尼刀輪を免れ、獄率鑊湯を休む。長眠之を聞いて驚覺し、永夜之に因つて忽ちに曉けぬ。八部所以に駢塡し、三尊所以に輻湊す。般若の標道場の主只鳴鐘に在るか。

【字訓】○闍尼等……闍尼吒王が劍輪の苦難を受けしとき、鐘の聲を聞きて免かれしといふ故事。前章に出づ。○長眠……無明の眠り。○永夜……生死の暗○驚覺……鐘に眠を覺し、曙を告ぐるの用あり、故に般若の實智に類して長眠を驚覺し、永夜忽曉と云ひしのみ。○道場之主……若道場鐘なきときは則ち虛しきが如し。衆を集め、道を行ずること此より先なるはなし。これ道場の主となる所以である。

【摩】打鐘の功德を更に詳しく明す。

【講】此の故にかの闍尼吒王は鐘の音を聞くことによりて刀輪の苦難を免かれ得、否更に鑊湯地獄の獄率の鑊湯の極苦からすらものがれ得し程である。また此の鐘の音を聞くことによりて衆生をして泰眠曙の眠りより覺ましむるその如くに無明の長眠より覺まさしめ、また秋の長き夜の眠りを覺さしむるその如くに生死迷夢より醒さしむ。この功德あるが故に一び鐘を鳴らせば天龍等の八部衆駢塡と集會し、法・報・應の三尊輻湊として集會し給ふ。かく鐘は人をして覺醒せしむるの用あるが故に此れを標示すれば般若の智慧に當りまた道場に於て道場の主たることを標示するにも衆を集め、道を行ずることを宣言する爲めに鐘を打ち鳴らすことによりて初めて知れ亘る所以である。

然今金剛峯寺。堂舍幽寂尊容滿堂。禪客溢房鴻鐘未造。今思奉爲四恩鑄造七尺銅鐘。雖然道人淸乏有志無力。伏乞有緣道俗各添涓塵相濟斯願。生生吐如來之梵響。世世脫衆生之苦聲。今不任至願。謹奉勸

【摩方】然うして今金剛峯寺は堂舍幽寂にして尊容堂に滿ち、禪客房に溢れども、鴻鐘未だ造らず。今思はく四恩の奉爲に七尺の銅鐘を鑄造らんと。然りと雖ども道人淸乏にして志有つて力無し。伏して乞ふ。有緣の道俗各涓塵を添へて斯の願を相ひ濟へ。生生に如來の梵響を吐き、世世に衆生の苦聲を脫せん。今至願に任へず。謹んで勸め奉る

【字訓】○鴻鐘……鴻は洪に同じ。洪鐘のこと。○淸乏……淸貧のこと。○有緣……未だ嘗て相識らずと雖も而も斯の願を相濟はん者は乃し宿緣ある故に有緣といふ。○涓塵……一しづくの水とほこりのことで少なきに喩ふ。○生生……『使臺』に依れば「生生の上に一本には伏願の二字あり」と註せり。○梵響……六十四の梵音。如來の說法をいふ。

【摩】銅鐘を鑄造せんとするが故に此の一大佛事を助援せんことを奬む。

【講】然るに今金剛峯寺は諸堂房舍幽遠、且つ靜寂にして多くの佛像諸堂に滿ち、修禪修道の客房舍に滿ち溢るゝ程に多數居住するに至る。それだのに洪鐘未だ造らず、常に此れを遺憾とす。今思ひ願ふことは四恩を報答し奉らん

が爲めに七尺の銅鐘を鑄造せんことである。然りと雖も佛道の人は清貧にしてたゞその志あつて、その財力なし。伏して乞ふ。有緣の道俗各々涓塵の微財と雖も此れを添へて此の願を相ひ濟はんことを。幸ひにして鐘出來上れば永遠の生々に亘りて此の鐘は梵聲を吐き、永遠の世々に亘りて此の鐘の音は衆生をして苦患より脫ぜしむることであらう。至願に任へずして謹んで勸め奉る次第である。

九八　勸諸有緣衆應奉寫祕密藏法文

勸諸有緣衆應奉寫祕密藏法文

【訓方】諸の有緣の衆を勸めて祕密藏の法を寫し奉る應き文。

【拳意】初に題名を揭ぐ。

【講義】諸の有緣の衆に祕密佛敎の聖典を書寫し奉るべきことを勸誘する文。

奉勸諸有緣衆應奉寫祕密法藏合三十五卷（具目載別紙）

【訓方】諸の有緣の衆を勸め奉て祕密の法藏合せて三十五卷を寫し奉る應し。（具なる目、別紙に載せたり。）

【字訓】○勸諸有緣衆……有緣の衆を勸めて寫經するに至りし理由は下にある如く、機緣の衆の爲めに讀誦宣揚して佛恩を報じ奉らんと欲す。然れども猶其の本多からず。法流擁滯するが爲めである。○三十五卷……『便蒙』には古鈔を引きて曰く「大日經七卷、敎王經三卷、略出經四卷、大日經疏二十卷、菩提心論一卷都合三十五卷なり」と。また一說には略出經四卷を除いて蘇悉地經三卷、聖位經一卷を加ふと。

【拳意】書寫し奉るべき聖經の卷數を明す。

【講書】諸の有緣の衆を勸め奉つて眞言祕密の聖經、合計して三十五卷を書寫し奉るべし。（その三十五卷の細目に就いては別紙に此れを記載せり。）

夫敎冥衆色法韞一心迷悟機殊感應非一

【訓方】夫れ敎は衆色に冥ひ、法は一心に韞めり。迷悟機殊にして感應一に非ず。

【字訓】○敎冥衆色……敎はもと一なれども機非一なる故に敎も萬差なる義。譬へば寶珠の衆色に冥會して影を分ち色を殊にするが如くである。○法……所詮の理の法體。○韞一心……韞は包藏、一心は衆生の一心。能詮の文は種々異れども其の所詮の理は皆衆生の一心に包藏してゐること。○迷悟……迷は六道の衆生。悟は二乘以上の一分の悟を得てゐるもの。○機殊……機根千差萬別のこと。

【拳意】世に敎法の興起することを明す。

【講義】夫れ敎は本より一なるものなれども、かの寶珠が衆色に冥會して影を分ち色を殊ずるの如くに衆生の機根非一なるが故に千差萬別の敎が出來、また所詮の法體は衆生の一心に包藏され、六道の衆生は之を悟らずして三界に迷ひ、菩薩佛は此れを悟つて佛となるのであるが、それら迷悟の機根は實に千差萬別なるに依つて佛がその信力に從つて感動して應同することも亦一ならず。無量無數となるわけである。

是故應身化身分影隨類理佛智佛祕宮受樂一乘三乘分鑣驅生顯敎密敎逗機證滅

【訓方】是の故に應身化身影を分つて類に隨ひ、理佛智佛祕宮にして樂を受く、一乘三乘鑣を分つて生を驅り、顯敎密敎機に逗つて滅を證す。

【字訓】○應身化身……應身は報身にして大の釋迦を云ひ、百億世界に出現する釋迦を指す。化身は應化身にして小の釋迦、即ち一國一釋迦にして百億國に各々一人出現する釋迦を指す。並に是れ顯敎の敎主なり。○理佛智佛……自性理法身と自受用智法身にして此の理智の二法身は秘密の法界宮、即ち自證會場の境界に於て自受法樂の爲に互爲主伴、各々三密を說くのである。並に是れ密敎の敎主である。『分別聖位經』に曰く「自受用佛は心より無量の菩薩を流出す。皆同一性なり。謂く金剛の性なり。是の如くの諸佛菩薩自受法樂の故に各自證の三密門を說く」と。○一乘三乘……『便蒙』には一乘も三乘も共に顯敎とす。『開書』には密敎を一乘とし、顯敎を三乘とす。下の顯密と對句をなす點よりせば後者の義可ならん。○分鑣……鑣は上の乘の字に懸る。敎法を分つ義。○驅生……一切衆生を驅遂して佛果に歸入せしむること。○證滅……滅は理のこと。理を證得すること。

【拳意】上の迷悟機殊を受けて敎法多種の義を明す。

【講義】かく機根千差萬別なるが故に報身、應化身等分身を示現して機類に從つて應同し給ひ。また自性理法身、自受用智法身即ち理智の二法身は秘密の法界宮に於て自受法樂の爲めに自證の三密門を說き給ふ。此れ卽ち前者は三乘にして顯敎、後者は一乘にして密敎であるが、か樣に一乘、三乘等と敎法を分ちて一切衆生を佛果に驅遂し、かく顯敎密敎と敎義は分れてゐるけれども何れも皆衆生の機根に契達して理を證得して佛果に證入してゐるのである。

所謂顯敎者報應化身之經是也。密藏者法身如來之說是也。顯則以因果六度爲宗。是則菩薩行。隨他語方便門也。密則本有三密以爲敎。具說自證理。如義語眞實說者也

【訓方】謂所る顯敎とは報恩化身の經是れなり。密藏とは法身如來の說是れなり。顯は因果の六度を以て宗と爲。是れ則ち菩薩の行、隨他語の方便の門なり。密は本有の三密を以て經と爲。具に自證の理を說く如義語眞實の說なる者なり

【字訓】○報應化身……報は他受用報身、應化身は變化身釋迦牟尼佛のこと。○法身……理智二法身のこと。○因果六度等……顯敎は因果隔歷し、位次差別あり。久しく三大無數劫を經て六度を勤修する敎である。○隨他語……隨機の說、四種の言說なり。『法花玄義』第七に曰く「鹿苑種種の方便は隨他意語に此の二智を說く」と。○本有三密等……密敎は本有の三密を以て宗旨とし、因卽是果と說く、卽ち『大日經疏』第一に曰く「卽ち平等の身口意秘密加持を以て所入門とす。故に加持受用身を建見す。是の如くの加持受用身は卽ち是れ毘盧遮那遍一切の身なり。遍一切の身とは卽ち是れ行者平等の智身なり」と。

【拳意】顯密二敎の相違を明す。

【講書】さて謂はゆる顯敎とは他受用報身、變化身等の說き給へる敎法がこれであり、密敎とは法身如來の說き給へる敎法がこれである。●顯敎は因果隔歷し、位次差別して久しく三大無數劫を經て六度を勤修して佛果を体得するといふことを宗旨となすものである。是れ卽ち菩薩の行、隨他意語の方法の敎である。密敎は本有の三密門を說くを以て宗旨とするものであり。詳細に自證の理を說き、如義語を以て說き明す處の眞實の敎を說くものである。

故楞伽經具列四種佛之說法相云。分別虛妄體相是名法佛說法相。應化佛者作化衆生事異眞實說法。不說內所證法聖智境界。法佛者說內證聖行境界

【訓方】故に楞伽經に具に四種の佛の說法の相を列ねて云く虛妄の體相を分別する是を報佛說法の相と名く。應化佛は化衆生の事を作すこと眞實の說法に異なり、內所證の法、聖智の境界を說かず。法佛とは內證聖行の境界を說く。

【字訓】○楞伽四佛……『十卷楞伽經』第二に曰く「復次に大惠法佛の報佛の說は一切の法の自相同相の故に虛妄の體相に執着して分別の心熏習するに因る

を以ての故に大悪是を分別虚妄休相と名く。大悪是を報佛説法の相と名く。大悪法佛の説法とは心相應の体を離れたるが故に内證聖行の境界なるが故に大悪是を法佛説法の相と名く。大悪應化佛の所作、應佛の説は施戒忍精進禪定智悪の故に陰入界解脱の故に識想差別の行を建立するが故に諸の外道無色三摩拔提の次第の相を説く。大悪是を應佛の所作應佛の説法の相と名く。復次に大悪法佛の説法とは攀緣を離れ、能觀所觀を離れたるが故に、所作の相量の相を離れたるが故に、聲聞緣覺外道の境界に非るが故に」と。要するにこれ第一は報身、第二は理法身、第三は化身、第四は智法身である。

【參意】楞伽經の四佛の説法の相をなす。

【讀意】此の故に楞伽經には詳細に四種の佛の説法の相を説き明して曰く、虚妄の自体の假相を分別して説き明す是を報身佛説法の相と名け、應化佛は一切衆生を化益することを説き明すものであり、これは施設方便の説にして眞實の説法そのものを明すものではない。從つて自性法身の心内證得の内所證の法、また實相智の境界などは説き明さない。然るに理智の二法身佛は佛の自内證の聖行の境界を説き明せるもので、此れを法佛の説法の相となすと説き明かされてゐる。

華嚴地論述果分不可説法華止觀談祕密不能傳空論則述第一義中無言説有宗則顯眞諦廢詮談旨

【讀方】華嚴の地論には果分不説可を述べ、法華の止觀には祕教不能傳を談ず。空論には第一義の中に言説なしと述べ、有宗には眞諦の廢詮談旨を顯す。

【字訓】○華嚴地論……十地經論で、華嚴經の十地品の註釋である。故に華嚴地論といふ。『十地經論』第二に經の偈を釋して曰く「前に十地の義是の如きは説聞すること得べからずと。今我れ但一分を説くと。此の言何の義かある。是の地の所攝に二種あり、一には因分、二には果分。説とは謂く解釋なり。一分とは是れ因分、果分に望めて一分と爲。故に我但説一分と言ふ」と。

○法華止觀……『止觀』第一に曰く「教は是れ上聖の下に被るの言なり。聖は顯秘の二説を能し、凡人の宣述は只顯を傳ふべく、秘を傳ふること能はず」と。○空論等……『般若燈論』第十五觀涅槃品の頌に曰く「彼の第一義の中には佛本より説法したまはず」と。○有宗等……『唯識述記』第一に曰く「四には廣詮談旨諦謂く一眞如なり。体妙離言を已に勝義と名く。俗、勝義に過ぐるをまた勝義と名く」と。

【參意】四家大乘の果分不可説の義を證文を引きて明す。

【讀意】次に四家大乘に於ける果分不可説の義を明せば、華嚴宗の十地經論には因分可説、果分不可説の義を明し、また法華の止觀には顯教は傳へ説くことを得れども秘教は傳ふること能はずと説き、また三論宗の般若燈論には第一義たる佛果の境界は言顯心滅にて言説なしとさへ説き、また法相宗の唯識述記には眞如の世界、佛界の眞諦の世界は廣詮談旨にして説法なしと説かれてゐるのである。

上從應化經下至論章疏韞自證而不説隨他病以垂訓雖云希有甚深而是權非實傳法聖者非不知祕而傳顯知而相讓良有以也

【讀方】上王化の經從り、下論章疏に至るまで自證を韞んで説かず、他病に隨つて以て訓を垂る。希有甚深なりと云ふと雖ども而も是れ權にして實に非ず。傳法の聖者祕を知らずして顯を傳ふるには非ず。知つて相讓る。良に以有り。

【字訓】○應化……上に謂ふ所の應身化身、即ち報化二身をいふ。○論章疏……論は菩薩の造る所、章疏は人師の造る所なり。○韞自證……自内證の眞實證得したる所のものは秘して包藏して説き教へざること。○隨他病……他の一切衆生の機根の千差萬別なるに隨ひ、衆生の煩惱の病を療せしむること。○相讓……時を待ち機を待つ所以を云ふ。

【參意】顯教に果分の義を説き明かさざる所以を明す。

【讀意】上は他受用報身及び應化身の如來より、下は菩薩人師の論章疏に至るまで皆自内證の眞實の果分の法を包み込んで説き給はず、一切衆生の機根の萬差なるに隨つてその衆生の千差萬別の煩惱の病を療せんが爲めの法を説く。從つてこれ希有甚深の妙法ではあるけれども併しそれは權方便の假説にして眞實の法ではない。然らば顯教の傳法の聖者が眞實の果分の秘教を知らずして顯教の中に説かなかつたのかと云へば、然らずして能く知つてゐて説かなつたのである。時期到來せざるが故に後人に相讓つて説かなつたのである。良にこれ理由のあることである。

末學不知此趣人人以自學爲是家家以未知爲非教是迷方示南開示衆生之迷衢欲證佛智不可局執一步即憩誰見寶城

【讀方】末學此の趣を知らず。人人自學を以て是と爲、家家未だ知らざるを以て非と爲。教は是れ迷方の示南なり。衆生の迷衢を開示す。佛智を證せんと欲はゞ局執すべからず。一歩して即ち憩はば誰れか寶城を見ん。

【字訓】○人人・家家……四家大乘の顯の傳法の聖者を指す。○未知……上述の秘教を説かざりし理由を知らざること。○示南……指南。○寶城……寶處のこと。

【參意】自説に固執すべからざることを明す。

【讀意】然るに顯の傳法の聖者此の旨趣を知らず、悟らず。徒らに自學を以て無上の教となし、また此の義を知らざるが故に徒らに他の教法を非とし、劣と思ひなすのである。併し乍ら教法はこれ方角に迷へる者に對する指南車にも等しきもので、迷へる衆生を指導して一心の本源に立ち歸へる道を開示するものである。されば佛智を證得せんと欲したならば自宗の教法にのみ固執すべきものではない。一歩進みて休憩し、そこに停滯してゐてはどうしてや如來の寶處即ち佛果を證見することが出來ようや、出來やしないではないか。

貧道雖愚墮承訓先師貧道遠遊大唐求訪深法幸得遇故大廣智三藏付法弟子青龍寺法諱惠果阿闍梨受學此祕密神通最上金剛乘教

【讀方】貧道愚墮なりと雖ども訓を先師に承けたり。貧道遠く大唐に遊んで深法を求め訪ふ。幸に故の大廣智三藏の付法の弟子青龍寺の法の諱惠果阿闍梨に遇ひたてまつることを得て、此の祕密神通最上金剛乘教を受學す。

【字訓】○貧道……謙遜したまへる御自稱。○大廣智三藏……不空三藏のこと。○神通……『大日經疏』第一に曰く「若し神通に乘ずる人は發寂の頃に於て便ち所謂に至る。發意間に云何到ることを得ると云ふことを得ず。神通の相は爾なり。疑を生ずべからず。則此の經の深旨なり。又同疏に曰く、大那羅延力執金剛とは謂く秘密神通の力を持するなり」と。○最上乘……最上乘とは即ち是れ毘盧遮那の所證の理を云ふ。

【參意】大師が眞言祕密最上金剛乘教を惠果阿闍梨より傳へ來りたるを明す。

【讀意】貧道愚墮なりと雖ども顯密の相違に就いては先師惠果和尚より承つたのである。即ち貧道は遠く大唐に遊學すること得て、最上無二の深法を求め訪ふことが出來たのである。そして幸ひにも唐の都に於て故の大廣智不空三藏の付法の弟子であらせられる青龍寺の法の諱惠果阿闍梨に遇ひたてまつることを得て、此の祕密神通最上金剛乘教、即ち眞言密教を受學したのである。

和尚告曰若知自心即知佛心知佛心即知衆生心知三心平等即名大覺欲得大覺應當學諸佛自證之教自證教者所謂金剛頂十萬偈及大毘盧遮那十萬偈經是也此經則淨妙法身大毘盧遮那佛與自眷屬法

佛在法界祕密心殿中。常恒所演說自受法樂之敎也。故金剛頂經說。自受法樂故說此理趣。不同應化佛之所說。又龍猛菩薩云。自證三摩地法諸敎中闕而不書也。言但此祕密經論中說也。自外顯經論中不說也。從法身如來。暨我大廣智三藏和尙。師師傳受於今六葉。佛法深妙亦在此敎。欲證菩提斯法最妙汝當受學自覺覺他者

【訓】 和尙告げて曰たまはく、若し自心を知るは卽ち佛心を知るなり。佛心を知るは卽ち衆生の心を知るなり。三心平等なりと知るを卽ち大覺と名く。大覺を得んと欲はゞ當に諸佛自證の敎を學ぶ應し。自證の敎とは所謂る金剛頂十萬の偈及び大毘盧遮那十萬の偈の經是れなり。此の經は淨妙法身大毘盧遮那佛自眷屬と與に法佛法界祕密心殿の中に常恒に演說したまふ所の自受法樂の敎なり。故に金剛頂經に說かく、自受法樂の故に此の理趣を說くと。應化物の所說には同じからず。又龍猛菩薩の云く、自證の三摩地の法は諸敎の中に闕して書せずと。言ふこころは但此の祕密の經論の中にのみ說けり。自外の顯の經論の中には說かず法身如來より、我が大廣智三藏和尙に暨るまで師師傳受して今に六葉、佛法の深妙亦此の敎に在り。菩提を證せんと說法なるが故に自證果上の法門の理趣を說くと、從つて應化佛の方便施設の敎とは同じものではない。遙かに異つてゐるのであると。又龍猛菩薩は菩提心論の中に說いて曰く、自證の三摩地の法は顯敎の經論の中には闕いで記載されてゐないと。此の意味する所は祕密の經論の中にのみ說き、密敎以外の經論の中には說き記してゐないといふにある。かくて此の祕密の法敎を說き遊ばされた法身大日如來より我が大廣智不空三藏和尙に至るまで師師傳へ受けて今に六葉。佛法の最深妙の敎理は此の祕密敎の中に說かれてゐるのである。菩提を證せんと欲せばこの法最妙甚深なるが故に汝きさに受學して自ら覺り。また他を覺らしむべきものであると言はれたのである。

貧道謹承教命。服勤學習以誓弘揚。貧道歸朝雖歷多年。時機未感不能廣流布。水月易別幻電難駐。元誓弘傳何敢韜默

【訓】 貧道謹んで敎命を承けて服勤學習して以て弘揚を誓ふ。貧道歸朝して多年を歷と雖ども時機未だ感せず。廣く流布すること能はず。水月別れ易く、幻電駐り難し。元より弘傳を誓ふ、何ぞ敢て韜默せん。

【字】 ○敎命……惠果和尙の告ぐる所。○水月……水逝き月移るを以て人事の遷變し易きに喩ふ。○韜默……つゝみかくし、だまること。

【拳】 惠果和尙に眞言密敎を弘揚すべきことを誓ひしを明し給ふ。

【義】 貧道謹んで師たる惠果和尙の敎命を承つて服勤學習して以て眞言密敎の法を弘傳宣揚せんことを誓ふ。そこで貧道歸朝して多年を歷と雖ども、その弘揚の時機未だ來らず、廣く流布すること能はざる次第であつた。かく時機到來を待つてゐる間に水逝き月移つて年月經ち、光陰は幻電の如くに遠かに過き去るばかりである。併し乍ら元より弘傳せんことを惠果和尙に誓ふが故に、敢へて自分は韜默してゐるのではない。時機到來せば大いに弘傳宣揚せんと心に期してゐる次第である。

今欲爲機緣衆。讀講宣揚奉報佛恩。然猶其本不多。法流擁滯。是以差弟子僧康守安行等發赴彼方。若有神通乘機善男善女若緇若素。與我同志者。結緣此法門。書寫讀誦。如說修行如理思惟。則不經三僧祇。父母所生身超越十地位。速證入心佛

【訓】 今機緣の衆の爲めに讀講宣揚して佛恩を報じ奉らんと欲ふ。然れども猶其の本多からず。法流擁滯す。是を以て弟子の僧康守、安行等を差して彼の方に發赴せしむ。若し神通乘の機の善男善女、若しは緇、若しは素、我れと志を同じふせん者有らば、此の法門に結緣して書寫し、讀誦し、說の如く修行し、理の如く思惟せば三僧祇を經ずして父母所生の身に十地の位を超越し、心佛に證入せん。

【字】 ○機緣衆……此の敎に相應の機、有緣の人。○擁滯……ふさぎとどこほること。○差……使のこと。○彼方……諸處の義。『使蒙』には隨州の德一菩薩、下野廣智禪師、甲州の藤太守を擧げ記せり。○不經三僧祇……『大日經疏』第二に曰く「眞言門の行者また一劫を越ゆれば更に百六十心等の一重の極細妄執を度して佛惠の初心に至ることを得。故に三阿僧祇劫成佛と云ふ。若し一生に此の三妄執を度すれば卽ち一生に成佛す。何ぞ時分を論ぜんや」と。○父母所生等……『菩提心論』に曰く「若し人佛慧を求めて菩提心に通達すれば父母所生の身に速かに大覺の位を證す」と。又曰く「瑜伽勝上の法を修する人は能く凡より佛位に入る者なり。また十地の菩薩の境界を超ゆ」と

【拳】 正しく祕密の經論を書寫せんとする理由并に書寫の勸誘、併せてその功

欲はゞ斯の法最妙なり。汝當に受學して自ら覺り、他を覺らしむべき者り。

【字】 ○此の一章は惠果和尙が弘法大師に告げたまへるお言葉である。○知自心……『大日經疏』第一に曰く「云何が菩提とならば謂く實の如く自心を知るといつぱ卽ち是れ如來の功德寶所を開示するなり」と。○金剛頂十萬偈……『金剛頂義訣』卷上に曰く、「其の大經本は阿闍梨の云く、經夾廣長にして床の如し。厚さ四五尺、無量の頌あり。南天竺界鐵塔の中に在り。爾の時に記持する所の法を書寫するに百千頌あり。此の經を金剛頂經と名くものなり。菩薩大藏の塔內の廣本世に絕て無き所なり」と。○大毘盧遮那十萬偈……『大日經疏』第一に曰く、「阿闍梨の云く、毘盧遮那の大本に十萬の偈あり、浩廣にして持し難きを以ての故に傳法の聖者其の宗要を採るに凡そ三千餘頌あり」と。○淨妙法身……淨とは自性淨にして以て理を表す。妙は不思議にして以て智を表す。常住三世淨妙法身のこと。○金剛頂經說……金剛頂分別聖位經に說ける經文のこと。○龍猛菩薩曰……『龍猛菩薩の『菩提心論』のこと。即ち『菩提心論』に曰く「惟し眞言法の中にのみ卽身成佛するが故に是れ三摩地の法を說く。諸敎の中に於て闕して書せず」と。

【拳】 惠果和尙より祕密乘敎を傳へられしを明し給ふ。

【義】 更にまた惠果和尙語り給ふて曰く、若し本當に自心を見極めたならば、自心もこれ畢竟大日如來に外ならぬこと卽ち凡佛不二一如たることが解り、從つてまた佛心を如實に證知すれば衆生の本心を知悉することが出來るのである。此の理を證知する者を大覺と名けるのであり、大覺を得んと欲するならばまさに諸佛自證の法敎を學ぶべきである。謂ふ所のその自證の法敎とは謂はゆる金剛頂十萬頌の偈及び大毘盧遮那十萬頌の偈の經典がそれである。此の兩部の大經は常住三世淨妙法身たる金界の大日智法身と、大毘盧遮那佛卽ち胎藏理法身とが自眷屬とともに法身佛の宮殿たる、法界祕密心殿の中に住し給ふて、常恒に演說したまふ所の自受法樂の爲めに說き給はれた法敎である。此の故に金剛頂分別聖位經には次の如く說かれてゐる。卽ち曰く自受法樂の

德を明す。

【講義】此處に於て今機緣の衆の爲めに能詮の經法を讀誦し、講釋して所含の眞理を述べて祕密の法門を宣揚して佛恩を報じ奉らんと願ふ。然れども未だ能詮の經本少くして法を流傳せんとするも差支へさへぎらる。是を以てそれらの祕經の書寫を企て弟子の僧、康守、安行等を使として差し向け各々の處へ發足し赴向せしむ。若し神通乘の機根たる善男善女、或は僧、或は俗、我れと志を同じうせん者あらば此の法門に結緣して、書寫し、讀誦し、說の如くに修行し、所詮の理の如くに思惟致すならば三僧祇の長時を經ずして父母所生の此の肉身のまゝにて十地の位を超越し、遠かに心佛に證入するであらう

六道四生皆是父母。蠉飛蠕動無不佛性。庶使豁無垢眼照三密之源。斷有執縛遊五智之觀。今不任弘法利人之至願。敢憑煩有緣衆力。不宣謹疏

弘仁六年四月一日沙門空海疏

【譯文】六道四生は皆是れ父母なり。蠉飛蠕動佛性あらざることなし。庶はくは無垢の眼を豁かにして三密の源を照し、有執の縛を斷じて五智の觀に遊ばしめん。今弘法利人の至願に任へず、敢て有緣の衆力を憑り煩はす。不宣謹んで疏す。弘仁六年四月一日沙門空海疏す。

【字釋】○蠉飛……小飛の虫。○蠕動……蠢々たる虫のさま。○無不佛性……『涅槃經』第七如來性品に曰く「一切衆生に悉く佛性あり」と。○無垢眼……『大日經疏』第一に曰く「無垢眼執金剛とは卽ち如來の五眼なり」と。

【參考】書寫の功德によりて一切の有情平等利益せんことを明す。

【講義】六道四生は皆是れ父母たりしものであり、また蠉飛蠕動と雖ども皆佛性を具するものである。されば庶くは書寫の功德によりて六道四生一切の有情悉く皆無垢眼を輝かして醍醐の妙果たる三密の源を照らし、諸法實有と執する所の有執の縛を斷じて五智の樓觀に優遊せしめんことを。今弘法利人の至願に任へずして敢へて有緣の衆力を憑り煩はす次第である。不宣謹んで疏す。弘仁六年四月一日沙門空海疏す。

九九　高野建立初結界時啓白文

高野建立初結界時啓白文

【講方】高野建立の初の結界の時の啓白の文。

【字釋】○結界……高野の結界は軍荼利結界なりと敎舜十八道記上卷に記せりといふ。

【參考】初に題名を揭ぐ。

【講義】高野山に伽藍を建立するその初めに當りて結界をなさんとするに際しての啓白の文。

沙門遍照金剛。敬白十方諸佛兩部大曼荼羅海會衆。五類諸天及以國中天神地祇。幷此山中地水火風空諸鬼等

【講方】沙門遍照金剛敬つて十方の諸佛、兩部の大曼荼羅海會の衆、五類の諸天及以國中の天神地祇、幷に此の山中地水火風空の諸鬼等に白さく。

【字釋】○五類天……上界天・虛空天・地居天・遊虛空天・地下天。○地水火風空……地神・水神等を指す。○諸鬼……古本には諸鬼神とありと云ふ。

【參考】文の初に當りて歸敬の語を設く。

【講義】沙門遍照金剛敬つて十方の諸佛、兩部の大曼荼羅會上の諸佛諸尊、五類の諸天及び日本國中の天神地祇、幷に此の高野山中の地神・水神・火神・風神・空神等の諸鬼神等に白し奉る。

夫有形有識必具佛性。佛性法性遍法界而不二。自身他身與一如而平等。覺之者常遊五智之臺。迷之者毎沈三界之泥。是故大悲大日如來獨鑒三昧耶之妙趣。悲歎六趣之塗炭

【講方】夫れ有形有識は必ず佛性を具す。佛性法性法界に遍じて不二なり。自身他身一如と與んじて平等なり。之を覺る者は常に五智の臺に遊び、之に迷ふ者は毎に三界の泥に沈む。是の故に大悲大日如來獨り三昧耶の妙趣を鑒て六趣の塗炭を悲歎したまふ。

【字釋】○有形有識……非情と有情。○佛性法性……香象の『起信論義記』卷上に曰く「論に云く、衆生數の中に在ては名けて佛性とし、非衆生數の中に在ては法性と名く」と。○三昧耶……Samaya) は梵語にして譯して平等・本誓・除障・驚覺等といふ。平等とは如來が衆生の三業と如來の三密と其の本性無二平等なりと知り、衆生を加持して如來と其の德を等しからしむる義なり。本誓とは如來が衆生をして悉く無上菩提を得せしめんと大誓願を起す義なり。除障とは如來が方便を以て衆生の煩惱障を除く義なり。驚覺とは無明に狂醉せる衆生を驚覺し、或は定中の菩薩を驚覺する義なり。○塗炭……塗は泥、炭は火。卽ち塗泥炭火の中にある苦しみ。

【參考】迷悟佛凡の所以を明す。

【講義】夫れ有形の非情にしても、有識の有情にしても皆此れ必ず佛性を具有してゐるものであり、佛性法性は十方の法界に遍じて彼此差別することなく不二一体のものである。また自身も他身も此れ平等一如の眞如の理とともんじて平等たるものである。之を覺る者は常に五智の樓臺に優遊して醍醐の妙味を味證し、之の理を悟らずして之に迷ふものは毎に三界の泥中に沈みて苦しむ。是の故に大悲大日如來は獨り三昧耶の平等の妙趣を鑒みさせ給ふて、佛凡本來より無二平等である筈だのに、それだのに一切の衆生は六趣に輪廻して塗炭の極苦を受けてゐることは哀歎に堪へぬと悲歎したまふ。

如實智雷震於法界殿。祕密曼荼傳乎閻浮提。從金剛薩埵傳授龍猛菩薩。師師相傳迄今不絕。遂使弘敎和尙辨正三藏振錫東來。流傳漢地拔濟群生

【講方】如實智の雷法界の殿に震ひ、祕密の曼荼閻浮提に傳はる。金剛薩埵、龍猛菩薩に傳授せし從り、師師相傳して今に迄るまで絕えず。遂使て弘敎和尙、辨正三藏錫を振つて東來して漢地に流傳し、群生を拔濟す。

【字釋】○如實智……『大品般若』第一序に十一智を說き、その第十一智が如實智なりと。自宗に於ては如實智は五智の通智なりとし、五智內に向ふを正體智と名け、外に向ひて衆生を利益するを後得智と云ふ。從つて如實智は正後二智に通ずる名なれども、多くは自證につきて、正體智に用ふ。六大眞如の實際阿字本不生の理を證するが故に如實智と云ふ。○雷……法雷で說法をいふ。○法界殿……法界宮。○弘敎和尙……金剛智三藏を指す。○辨正三藏……不空三藏を指す。

【參考】眞言密敎の興起と漢地への傳來とを明す。

【講義】大日如來が如實智の自證の法を法界宮殿に於て說き給はれしものを、金剛薩埵が聽聞してより祕密曼荼羅の法敎は閻浮提に傳はり、その金剛薩埵より龍猛菩薩に傳授され、かくて嬭々相傳し、師師相ひ傳へて今に至る迄（高祖大師）絕えず。轉つて支那の國への傳來に就いて云へば、支那への傳來はかの金剛智三藏、不空三藏が錫を振つて東來して漢地に流傳し給ふて、一切衆生を拔濟し給ふたことに始るのである。

雖然地隔泓海。人機未熟。教韞秘閣未及此朝。某甲幸
賴諸佛加持力。幽明機熟之力。以去延暦二十三年入。
彼大唐。奉請大悲胎藏及金剛界會兩部大曼荼羅法。
並一百餘部金剛乘。平歸本朝。地無相應之地。時非正
是之時。日月往苒忽過一紀。

訓方 然りと雖ども地泓海を隔てゝ人機未だ熟せず、教秘閣に韞んで未だ此の朝に及ばず。某甲、幸ひに諸佛の加持力と幽明機熟の力とに賴つて、去んし延暦二十三年を以て彼の大唐に入る。大悲胎藏及び金剛界會、兩部の大曼荼羅の法並に一百餘部の金剛乘を奉請して平かに本朝に歸りき。地に相應の地無く、時正しく是なる時に非ず。日月往苒として忽ちに一紀を過ぎたり。

字訓 ○泓海……深海のこと。○秘閣……秘密の教法を寺閣に喩ふ。卽ち大唐青龍寺の惠果和尙の胸中に包藏してゐること。○幽明機熟……眼前に見えぬもの、見えるもの、卽ち諸神鬼と諸大德。○往苒……歲月の長びくこと。○一紀……十二年のこと。

聖意 秘密教日本に傳來せしことを明す。

講義 か樣に大唐の地にまでは祕密乘教傳來せしかども然れども本朝と大唐との間には萬里の深海を隔て居る上に、人の機根未だ祕密乘教を受學するに到らざる次第にて、祕密乘教は大唐の青龍寺の惠果和尙の胸中に包藏されたまゝにて、本朝には傳來せず。然るに某甲幸ひに諸佛の加持力と、諸天善神、諸大德の援護の力を蒙つて、去る延暦二十三年を以て彼の大唐の地に渡り、青龍寺惠果和尙より、大悲胎藏及び金剛界會兩部の大曼荼羅の法并に一百餘部の金剛乘の祕密教を奉請して、海陸ともに無事平安に歸朝したのであつ

た。かく受傳して歸朝したのではあつたが、此の祕教を宣布すべき根本道場もなく、また此れを本當に宣布すべき好適の時節でもないまゝに往苒としてためらつてゐる內に早や一紀十二年を經過するに至つた。

爰則輪王啓運擬弘此法。必須得其地。簡擇四遠。此地
卜食。是故天皇陛下特下恩璽賜此伽藍處。

訓方 爰に則ち輪王、運を啓いて此の法を弘めんと擬す。必ず須く其の地を得べし。四遠を簡擇するに此の地卜食せり。是の故に 天皇陛下特に恩璽を下して此の伽藍の處を賜へり。

字訓 ○啓運……啓とは教の義、開發の義で、知らぬことを教へてハツキリとする樣にし、啓きこと、見えぬことをシヤンとし、現しあけひらくこと。開よりは意狹く手際なり。啓運は氣運をひらく、卽ち幸運に向ふこと。卽ち嵯峨天皇の大いなる御力添に依り眞言宗宣布の氣運を啓かせ給ひしを指す。特に弘仁七年に高野山七里四方の地を賜ひしことなどを指し給ふならん。○四遠……四方の遠境。○卜食……『孔子傳』に曰く、「卜するには必ず先づ蓍を以て龜を畫して然して後に之を灼く。兆順なれば蓍を食む」と。されば占つて善なる兆現はることで、吉相をいふ。○恩璽……御恩德極まる所の御印ある書。

聖意 秘密教弘布の時機到來と、上御一人の御恩詔に浴し奉りしことを明し給ふ。

講義 時節の至らんことを待ちつゝありしにはからずも 轉輪聖王の聖天子におかせられては畏いこと乍ら祕密乘教宣布の氣運を啓かせ給ひ、更にまた此の法教を弘傳せしめ給はんと擬せらるに至る。この 陛下の御仁惠に感泣し奉る所である。此處に於て祕密乘教弘傳の根本中心地となるに相應の地を求むべきであるを以て四方遠境の地の果までも此れを檢し考ふるに此の高野が最もよく相應の地相に契ふ。是の故に 天皇陛下に於かせられては特に御恩德の印璽を下したまはれて此の伽藍となるの地域を御下賜せらるゝに至つたのである。

今爲上報諸佛恩。弘揚密教。下增五類天威拔濟群生。
一依金剛乘祕密教。欲建立兩部大曼荼羅仰願諸佛
歡喜諸天擁護。善神誓願證誠此事。所有東西南北四
維上下。七里之中一切惡鬼神等。皆出去我結界。所有
一切善神鬼等有利益者隨意而住

訓方 今上は諸佛の恩を報じて密教を弘揚し、下は五類の天威を增して群生を拔濟せんが爲に、一ぱら金剛乘祕密教に依つて兩部の大曼荼羅を建立せんと欲ふ。仰ぎ願くは諸佛歡喜し、諸天擁護し、善神誓願して此の事を證誠したまへ。所有の東西南北四維上下七里の中の一切の惡鬼神等は皆我が結界を出で去れ。所有の一切の善神鬼等の利益有らん者は意に隨つて住せよ。

字訓 ○仰願より隨意而住……此れは『陀羅尼集經』第四に說ける、軍荼利の法の文と大同小異なり。○證誠……證明して之を誠實にすること。○四維……四隅。

聖意 正しく結界の旨を明し給ふ。

講義 今上は諸佛の恩德を報じて密教を弘揚し、下は五類の諸天の威光を倍增して之を崇め奉り、他面に一切の衆生を拔濟せんが爲に一ぱら金剛乘祕密の法教の旨趣に依つて兩部の大曼荼羅を安置せんとす。仰ぎ願くは諸佛歡喜し給ひ、諸天擁護を垂れ、善神は誓願し給ふて此の我が兩部曼荼羅を建立せんとする所の一大佛事を證明し、誠實にし給はんことを。所有の東西南北四維上下七里の中の一切の惡鬼神等は皆此の結界の地より出で去らんことを。また所有の一切の善神鬼等の佛法に利益あらん者はどうか隨意に結界に留り住せられんことを。

又願此道場者。普以五類諸天及地水火風空五大諸
神。并此朝開闢已來皇帝皇后等尊靈。一切天神地祇。
爲檀主。伏乞一切冥靈晝夜擁護。助果此願。敬白

訓方 又願くは此の道場は普く五類の諸天及び地水火風空の五大の諸神並に此朝開闢已來の 皇帝皇后等の尊靈、一切の天神地祇を以て檀主と爲。伏して乞ふ、一切の冥靈晝夜に擁護して此の願を助け果せ。敬つて白す。

字訓 ○檀主……檀は梵語の檀那（dāna-pati）の畧で、檀那は布施と譯す。慈心を以て普く他に施與するをいふ。布施を分ちて普通は財施、法施、無畏施の三種とす。財物を施與するを財施といひ、教法を施與するを法施といひ、人の厄難を救ふ等無畏を施すを無畏施といふ。布施は必ず施者、受者、施物の三事より成る。今檀主とは施主であり、此の高野の地を賜ひたるは上 御皇室の御施しであり、一切天神地祇の御許與になれるものなるが故に檀主となされ給ひ、且つ此の財施の御施しによりて生ずる一切の功德を檀主たる、聖靈及び一切の天神地祇に報ひあられんことを意味するものである。

聖意 一切の冥靈に擁護を祈つて、此の結界の願を果さんことを乞ふ旨を明す。

講義 又願くは此の道場は普く五類の諸天及び地水火風空の五大の諸神并に、本朝開闢以來の 皇帝皇后の各御尊靈、一切の天神地祇を以て畏くも檀主となす。されば生ずる所の一切の功德は皆開闢以來の 皇帝皇后の各御尊靈を始め奉り、一切の諸天善神に報謝あらんことを。か樣なわけであるが故に伏して乞ふ一切の冥靈晝夜に此の道場を擁護して此の結界の願意を助授して、果さしめんことを。敬つて白す。

一〇〇　高野建立壇場結界啓白文

高野山建立壇場結界啓白文

【訓方】高野山に壇場を建立して結界する啓白の文。

【事意】初に題名を掲ぐ。此の一文の中、「啓白一切諸佛より、隨意而住までは」『陀羅尼集經』第四卷、十一面觀世音神呪經の上卷に七日供養壇法を說ける文と大同小異なり。また同經第十三卷の佛說諸佛大陀羅尼都會場印咒品、また一字佛頂輪王經第四法壇法の啓白の詞も大同小異なり。

啓白一切諸佛般若菩薩金剛天等及與一切業道明冥

【訓方】一切の諸佛と般若と菩薩と金剛の天等と及び一切の業道の明冥與に啓白す。

【字訓】○一切……諸佛・般若・菩薩・金剛天等の一切。○諸佛……佛寶。○般若……法寶に當る。○菩薩……僧寶。○金剛天……五類の諸天。○業道明冥……實類の有力のものをいふ。即ち三界六趣皆業所感なるが故に業道といひ其の中に幽あり、明あるが故に明冥といふ。焰魔法王五道の冥官の類及び諸天鬼神等は悉く是れ冥に屬し、龍等の如きは是れ明に屬す。

【事意】啓白に當つての敬の詞を述ぶ。

【講義】一切の諸佛の佛寶と、般若等の法寶と、菩薩等の僧寶と、金剛の諸天等と及び一切の實類の有力の諸天鬼神等に啓つて白す。

我今此地者是我之地我今欲立七日七夜都大道場法壇之會供養一切十方法界諸佛世尊及般若波羅蜜多諸菩薩衆領諸徒衆決定一切祕密法藏難思議之法門

【訓方】我れ今此の地は是れ我が地なり。我れ今七日七夜の都大道場法壇の會を立てて一切の十方法界の諸佛世尊と及び般若波羅蜜多と諸の菩薩衆と諸の徒衆とを領せる一切の祕密の法藏難思議の法門を決定せんと欲ふ。

【字訓】○都……都は攝の義、一切の佛菩薩等を攝入すること。○領諸徒衆……阿闍梨所領の徒衆で、阿闍梨の諸弟子等を指す。阿闍梨が諸弟子を引き連れての意。○決定等……まさに定んで誠信を以て祕密の法藏を供養し、住持せんとすること。

【事意】結界の爲めに道場を設くる義を明す。

【講義】我れ今思ふに此の高野の地は、是れ我れに賜はりたるものである。依りて我れ今此の地に七日七夜を費して土壇を築き、その上に曼荼羅諸尊を畫きたる、謂ゆる一切の諸佛諸尊を攝入したる所の廣大なる修法壇場を建立して一切の、十方法界の諸佛世尊と及び般若波羅蜜多と諸の菩薩衆と諸の弟子等とを引き連れて、一切の祕密の法藏、難思議の祕密乘の法門を誠信を以て供養し、住持せんと欲す。

故取諸勝成欲護身結界法事於此伽藍東西南北四維上下所有一切破壞正法毘那耶伽諸惡鬼神等皆悉出去我結界之所七里之外若護正法善神鬼等我佛法中有利益者隨意而住於此伽藍防護護法

【訓方】故に諸の勝成を取つて護身結界の法事を欲ふ。此の伽藍の東西南北四維上下に於いて有所る一切の正法を破壞せん毘那耶伽、諸の惡鬼神等皆悉く我が結界の所七里の外に出で去れ。若し正法を護らん善神鬼等の我が佛法の中に利益有らん者は意に隨つて此の伽藍に住して佛法を防護せよ。

【字訓】○勝成……殊勝成就のこと。○毘那耶伽……毘那耶伽（Vinayaka）を譯して障碍、困難等といふ。義譯して常隨魔といふ。『蘇摩呼童子經』第一請問除障分品に曰く「世間の諸の障難の毘那夜迦に都べて四部あり。一には擁護部の主を無憂大將と名け、二には野干部部主を象頭と名け、三には牙部部主を嚴髻と名け、四には龍象部部主を頂行と名く。其の部の內に於て種種の形あり、名を知るべからず」と。

【事意】正しく結界の作法を明す。

【講義】此處に於て諸の殊勝成就の法門を以て護身結界の修法をなさんと欲ふ。此の伽藍の東西南北四維上下に於てあらゆる一切の正法を破壞せんとする所の毘那耶伽等の諸の惡鬼神等皆悉く我が結界せんとする所の七里の外に出で去らんことを。若しまた正法を護持せんとする所の善神鬼神等にして、我が佛法の爲に利益あらん者は隨意に此の伽藍に住して佛法を防護したまはんことを。

於此伽藍如來像前諸佛子等同法一心住持佛法奉報四恩饒益有情歸命金剛軍荼利菩薩法七日七夜作法結界懺悔禮拜在此院內東西南北四維上下所有一切破壞正法毘那耶伽諸惡鬼神等皆悉出去我結界之處七里之外若護正法善神鬼等我佛法中有利益者隨意而住

【訓方】此の伽藍の如來像の前に於て諸の佛子等同法と一心に佛法を住持して四恩を報じ奉り、有情を饒益せん。金剛軍荼利菩薩の法に歸命して七日七夜作法結界し、懺悔禮拜す。此の院內に在つて東西南北四維上下に有所る一切の正法を破壞せん毘那耶伽諸の惡鬼神等皆悉く我が結界せんとする所の七里の外に出で去らんことを。若しまた正法を護持せんとする所の善神鬼神等にして、我が佛法の爲に利益あらん者は隨意に此の伽藍に住して佛法を防護したまはんことを。

【字訓】○軍荼利……軍荼利明王は五大明王の一にして南方寶生佛の敎令輪。軍荼（kuṇḍa）は水器・瓶の義、利（li）は止住の義。瓶は甘露を容るゝ器なるが故に、諸軌に多く甘露軍荼利と名け、また悉氏軌には甘露瓶菩薩と名く。軍荼利は辨事の明王なり。また此の尊は毘那夜迦を辟除すとも說かる。

【事意】別して高野山の結界の作法を明す。

【講義】此の高野山の伽藍の如來像の御寶前に於て諸の同法の佛子等一心に佛法を誠信を以て供養し、住持して四恩を報謝し奉り、一切の有情を饒益せんとす。依て金剛軍荼利菩薩の法に歸命して七日七夜間此の祕法を修して以て結界し、罪過を懺悔し、諸佛を禮拜す。されば此の山內の東西南北四維上下にあつて、所有の一切の正法を破壞せんとする所の毘那耶伽、諸の惡鬼神等皆悉く我が結界せんとする所の七里の外に出で去らんことを。若しまた正法を護持せんとする所の善神鬼神等にして、我が佛法の爲に利益あらん者は隨意に此の伽藍に住して佛法を防護したまはんことを。

至心勸請三寶殿恩重敎主釋迦尊具大威力神呪心善護能化觀世音金剛軍荼利菩薩諸聖衆藥王藥上救脫菩薩諸聖衆金剛藏王菩薩諸聖衆梵釋四王龍神等護法諸天影嚮衆來入道場證成法事於我勸請哀愍攝受

【訓方】至心に三寶殿、恩重の敎主釋迦尊と、大威力を具する

神呪心と、善護能化の觀世音、金剛軍荼利菩薩諸〻の聖衆と、藥王藥上救脫菩薩諸〻の聖衆と、金剛藏王菩薩諸〻の聖衆と、梵釋四王龍神等の護法の諸天影嚮衆とを勸請したてまつる。道場に來入し、法事を證成して我が勸請に於て哀愍攝受したまへ。

字訓 ○三寶殿……三寶を尊んで殿といふ。單に三寶のこと。○釋迦尊……佛寶を指す。○神呪心……法寶を云ふ。心とは諸尊の心眞言のこと。○觀世音等……觀音已下の諸菩薩衆は僧寶を指す。○梵釋等……梵釋等已下は外護影向衆を指す。○觀世音……觀世音菩薩を今此處に擧げ記すことは、觀世音菩薩が如上の軍荼利の法に依つて辟除結界する供養壇法を說くが故にである。故に善護能化を稱したのである。○藥王藥上……藥師本願經に說ける八大菩薩中の二菩薩にして、藥師佛の眷屬なり。○救脫菩薩……『開書』には藥師經の對向衆なりと說けり。○金剛藏王菩薩……此の尊は金剛部の果德を主り、同部中に最勝の尊なるが故に金剛藏王と名く。元來金剛部なれば金剛手院に列すべきが如しと雖ども、此尊は金剛薩埵の大智の所現にして金剛薩埵の果德を表す、虛空藏院は三部の果德にして、此尊は金剛部の果德なるが故に虛空藏院中に於て金剛手院の下に住す。此の菩薩に十四部衆の眷屬ありて常に隨侍し、而も其の十四部衆の各々威力を有し、その名を閑いただけでも天人魔王鬼神等心に恐怖を懷くと稱せらる。○證成……しろしめすこと。

摩訶 諸佛諸天善神を證明として此の法の成就を祈り給ふて結言とす。

講義 至心に三寶、即ち大恩敎主釋迦牟尼世尊の佛寶と、大威神力を具足し給へる神呪眞言等の法寶と、善護能化の觀世音菩薩と、金剛軍荼利菩薩等の聖衆眷屬と、藥王藥上救脫菩薩等の聖衆眷屬と、金剛藏王菩薩等の聖衆眷屬等と、梵釋四王龍神等の護法の諸天影嚮衆とを勸請したてまつり、此の道場に來入を乞ひ、此の結界の法の旨趣をしろしめして我が勸請の願意を察して哀愍攝受したまふて成就せしめんことを祈り奉る。

一〇一　高雄山寺擇任三綱之書

高雄山寺擇任三綱之書

講方 高雄の山寺に三綱を擇び任ずるの書。

字訓 ○三綱……寺院に於て大衆を統率し、綱軌を維持し、庶務を辨理する職。上座・寺主・都維那の三役を云ふ。上座は梵名を體毘履(Sthavira)又は悉替那と稱し、比丘衆中の宿德にして、庶務を辨理す。寺主は梵名を毗訶羅莎弭(Vihārasvāmi)又は羅々帝(manati)といひ、堂宇の造營管理等の事を司る。都維那は略して維那といひ、梵名を羯磨陀那(karmadāna)と稱し、次第、授事、悅衆等と譯し、寺規により日常の諸事を指授する役なり。

摩訶 初に題名を掲ぐ。

講義 高雄の山寺に三綱の役を擇び任命するの書。

夫護持佛法必資綱維。和合衆徒誠待其人。是故妙德爲菩薩之座首。遍覺則慈恩之上綱。是則護法利人之雅致也

講方 夫れ佛法を護持することは必らず綱維に資る。衆徒を和合することは誠に其の人を待つ。是の故に妙德は菩薩の座首爲り。遍覺は則ち慈恩の上綱たり。是れ則ち法を護り人を利するの雅致なり。

字訓 ○綱維……のつとり治むること。○待其人……善人のあることを待つ。○妙德等……文殊菩薩を菩薩衆の上座となすの故事を指す。即ち不空の『表制集』第二の置文殊上座表に曰く「大聖文殊師利菩薩は大乘佛敎皆周ねく流演す。今鎭して臺山に在つて福、兆庶を滋うす。伏して望むらくは自今已後天下をして食堂の中に賓頭盧の上に於て特に文殊師利の形像を置かしめて以て上座とせん。諸を聖典に詢ぶに具さに明文あり。僧祇の如來尙んで訓旨を承く。凡そ出家とは固とに衣を稱ぐべし。普賢觀音猶拂を執つて侍たり。聲聞緣覺鉢を擁して後へに居す。斯れ乃し天竺國皆然り。僧等が鄙見にあらず。仍て請ふ永く恒式とせん」と。○遍覺……遍覺は玄奘三藏の諡號。○慈恩之上綱……慈恩寺の上座となすこと。○雅致……素意のこと。

摩訶 佛法の流通は必ず善き傳法者を待つの旨を明す。

講義 夫れ佛法を護持し流通せしむるためには必ずよき傳法者によりて則り治むること即ち綱維といふことに資らねばならぬし、また衆徒を和合し統攝することは誠に善き傳法者を待つて初めて可能なのである。從つて此の故にかの妙德文殊菩薩は菩薩衆の座首と仰がれ、遍覺玄奘三藏は慈恩寺の上綱として尊崇せらる。此れ皆法を護り、人を利益する謂はゆる善き傳法の聖者としての素意を果せし結果に他ならぬ。

今此高雄伽藍。未補三綱。無人護持。緇林鬱茂近童駢羅。不因指車。誰知曉暮。

講方 今此の高雄の伽藍に未だ三綱を補せず。護持するに人無し。緇林鬱茂にして近童駢羅たり。指車に因らずば誰れか曉暮を知らん。

字訓 ○緇林……緇は黑色の衣、卽ち黑色の衣を着たる僧のこと。林とは僧の多きをいふ。○鬱茂……あを〳〵としげれること。○近童……近事男と童子のこと。近事男については『要覽』上卷に曰く「優婆塞唐には近事男と言ふ謂く諸の佛法に親近し、承事するが故に」と。童子については『寄歸傳』第三に曰く「白衣、沙彌の所に謂して佛典を誦じて落髮を求むるを童子と號す」と。○駢羅……ならびつらなること。○指車……指南車のこと。

摩訶 高雄の山寺に未だ三綱の制なきを明す。

講義 然るに今此の高雄山の伽藍には未だ三綱の制を設けて、然るべき仁を三綱に補任することなし。從つて高雄山寺の護持經營發展を期する可き人なし。それだのに僧衆林の如くに無數に鬱茂として盛んに競ひ立ち、近事男や童子が駢羅として大勢集り住す。從つてそれらを統攝し、指導することなければどうしてや曉暮即ち佛果の悟りを知り得るに至らうや。

所以近隨衆簡。遠應渤馱之遺訓。拔禪師杲隣以爲上座。杲者除雲霧於大虛。滿光明於法界。隣者養德法雲之震宮。紹位大日之覺殿。名含此德。實當合契。人皆具瞻。上下同讓

講方 所以に近くは衆の簡に隨ひ、遠くは渤馱の遺訓に應じて禪師杲隣を拔きんでて以て上座と爲ん。杲とは雲霧を大虛に除いて光明を法界に滿つ。隣とは德を法雲の震宮に養ふて位を大日の覺殿に紹ぐ。名此の德を含めり。實當に合契すべし。人皆具に瞻、上下同じく讓る。

字訓 ○渤馱……佛陀に同じ。○禪師……高僧を崇めて禪師といふ。卽ち『善住意天子所問經』下卷に曰く「何等の比丘をか禪師と名くることを得。文殊の曰く、一切の法に於て一つに思量を行ず。謂はゆる不生なり。若し是の如く知るを禪師と名くるを得。乃至。少しばかりも取と非取と無し。一切の法を取らざれば悉く所得なし。故に憶念無し。若し憶念せざれば彼れ則ち修せず。若し修せざれば彼れ則ち證せざる故に禪師と名く」と。○雲霧……無明に喩ふ。○大虛……法性のこと。○光明……智慧をいふ。○法雲之震宮……法雲は第十地の稱。是れ等覺補處の位なるが故に震宮といふ。震宮は東宮のこと。○名……『莊子』第一逍遙篇に曰く「名は實の賓なり」と。○合契……符節を合する如くぴつたりと合ふこと。○具瞻……衆庶の瞻仰するところとなること。

摩訶 三綱の中の上座の役に杲隣を選任せしことを明し、并に杲隣の德を嘆ず

【讃】か様な有り様で高雄山寺も三綱の必要を痛切に感ずるに至つたので、そこで近くは寺内の衆の選出に隨ひ、また遠くは佛陀の遺訓に應じて果隣禪師を拔擢して以て上座となさんとす。果とは雲霧の無明を大虛衆生の一心に除きて光明即ち始覺の智体の光りを法界に滿ち照らす意味であり、隣とは穢を法雲地たる第十地の等覺の補處になり得る様に磨き養つて遂に大日如來の覺殿に證入して覺王の位を紹ぐに至るの意である。か様に果隣といふ名前には高德深妙の意味が含まれてゐるのであるが、今果隣禪師に於てはその名とその實德とが符節の如くにぴつたりと契合してゐる高德の高僧なるが故に今此の上座の要職に就任するに當りても衆庶皆仰し、上下同じく一様に席を讓りて尊敬する所である。

擢芯蒭實慧除任摩摩帝所謂實者棄虛掃僞之義慧者剪愚破暗之稱遊實相之三昧證金剛之妙慧斯德斯在省名會理衆心共許余亦印可

【訳】芯蒭實慧を擢でゝ摩摩帝に除任す。謂所る實は虛を棄てゝ僞を掃ふの義、慧は愚を剪り、暗を破するの稱なり。實相の三昧に遊んで金剛の妙慧を證す。斯の德斯に在り。名を省るに理に會へり。衆の心共に許す。余も亦印可す。

【字】○除任……故官を除いて新官に任ずること。○實相三昧……五相三密の觀門。實とは重ねて實の字を述ぶ。○金剛妙慧……再度慧の字を釋す。金剛は實相の智に名く。○印可……印は決定、可は許可の義。

【智】實慧比丘を寺主に任ずることと、實慧の德を歎ず。

【讃】次にまた芯蒭實慧を拔擢して寺主に任ず。謂はゆる實慧の實とは虛を棄てゝ僞を掃ふ義、即ち眞實不虛妄の義であり、慧とは愚を剪除し、暗を破する義である。されば實慧の義に徹すれば實相の三昧たる五相三密の妙觀の内證に契ひ遊び、金剛の妙慧、即ち堅固利業の實相智を證得して佛果を覺るに至るのである。か様な深德が實慧の名に存して居るのである。今それを省るに實慧比丘にはその名をその實德の理がぴつたりと會つて居り從つて、寺主に任ずるに當りて衆庶も皆之を許し、余も亦之れを許可す。

擇僧智泉任羯磨陀那金剛之智大悲之泉既合自行化他二德必須調和緇素二衆同入眞俗二諦選此三仁稱彼三德三德卽一切德一切德卽三諦三諦則三寶三寶則三平等三平等之觀何人不行誠須彼此上下同住三三昧耶功德功德護持內外伽藍早證本有之五智震法雷於五趣

【訳】僧智泉を擇んで羯磨陀那に任ず。金剛の智と大悲の泉と既に自行化他の二德を含めり。必ず須らく緇素の二衆を調和して眞俗の二諦に入るべし。此の三仁を選んで彼の三德に稱へり。三德は卽ち一切の德なり。一切の德は卽ち三諦なり。三諦は三寶なり。三寶は則ち三平等なり。三平等の觀は何人か行ぜざらん。誠に須らく彼此上下同じく三三昧耶の功德に住して功德をもつて內外の伽藍を護持し、早く本有の五智を證し、法雷を五趣に震ふべし。

【字】○智泉……金剛の堅利を以て智に喩へ、大悲の滋潤を以て泉に喩ふ。○三仁……三人の仁者なるも、今は三人の高僧を指す。○三德……一には養德謂はゆる大定。二には破暗謂はゆる大智、三には大悲謂はゆる大悲。これを三德と謂ふ。三德卽ち一切の德を攝す。一切の德は三諦を出でず。また一說に謂く、三德は必ずしも定・智・悲に配するに非ず、凡そ三人具する所の德を統べて彼三德と言ふのみと。○三寶則三平等……『大日經疏』第十九に曰く「三寶は是れ三三昧耶なり。三昧耶は是れ等の義なり。即ち此の三寶等しきが故に三三昧耶と名く」と。

【智】智泉を都維那に任ずる旨と、三綱の役人揃つた上の利益を明し給ふ。

【讃】僧智泉を選拔して都維那に任ず。智果の智とは堅固利業の智即ち如來實相の智であり、泉とは大悲潤の泉である。されば智泉の名に於て既に自行化他の二德を含意してゐるのである。されば此の名の示す如くに必らずすべからく緇素の二衆をよく調和し融和して眞俗二諦の眞理を證悟せしむべきである。かくの如く此の三人の高僧を選び任ずることによりて、佛の大定・大智・大悲の三德に匹敵し得るのである。三德は卽ち一切の德であり、一切の德は卽ち三諦であり、三諦は三寶であり、三寶は卽ち三平等である。三平等の妙觀は眞實行人たるもの皆等しく觀行する所である。されば彼此上下を論ずることなく柔皆此の三三昧耶の妙觀に住して、その功德力によりて伽藍の內となく、外となく常に護持して、早く本有の五智を證得し、眞言の妙旨を說法して五趣の衆をして佛果に證入せしめんことを願る次第である。

于時弘仁之年季冬之月語諸金剛弟子等夫剃頭著染之類我大師薄伽梵子呼僧伽僧伽梵名翻云一味和合等意上下無諍論長幼有次第如乳水之無別護持佛法如鴻鴈之有序利濟群生

【訳】時に弘仁の年、季冬の月、諸の金剛弟子等に語ぐ。夫れ頭を剃り、染を著するの類は我が大師薄伽梵の子なり僧伽と呼ぶ、僧伽は梵名なり。一味和合と云ふ。意を等しうして上下諍論無く、長幼次第有り、乳水の別無きが如くして佛法を護持し、鴻鴈の序で有るが如くして群生を利濟すべし。

【字】○金剛弟子……眞言宗の佛弟子をいふ。卽ち曼荼羅に入て金剛名號を得しが故にかくいふ。○大師薄伽梵……佛を指す。今は大日如來を指す。○僧伽……僧伽(Sangha)を衆と譯す。和合衆のこと。三人以上の比丘の一處に和合して集まりて修行せる者をいふ。出家の團體なり。○一味乳水……『增一阿含經』第四衆生品に曰く「佛諸の比丘に告はく、汝等所以に出家する者は一師を共にし、一水乳に同じかるべし」と。○等意……慈悲の心を等しくすること。○鴻鴈之有序……鴻鴈のならび飛ぶに先後次第ありて亂れざる如く、長幼序あること。

【智】大師より高雄山寺の弟子等に一味和合にして敎化敎導に志すべきことを告諭せしもの。

【讃】弘仁の年、晩冬の月に當りて、諸の金剛弟子等に告ぐ。夫れ頭を剃り、衣を著するの類は我が大師薄伽梵たる佛の子である。これを僧伽と呼ぶ。僧伽は梵語であり、此れを飜譯して一味和合衆といふ。慈悲の心を皆等しうして上下諍論することなく、長幼次第あつて恰も乳水の別なきが如くにして皆心を合せて佛法を護持し、また鴻鴈の飛來に先後序あつて亂れざるその如くに長幼序あつて亂れず、秩序整然として亂さずに心を併せて一切の衆生を利濟すべし。

若能悟解已卽名是佛弟子若違斯義卽名魔黨佛弟子卽是我弟子我弟子卽是佛弟子魔黨則非吾弟子吾弟子則非魔弟子非我及佛弟子所謂旃陀羅惡人佛法國家大賊大賊則現世無自他之利後生卽入無間之獄無間重罪人諸佛大慈所不能覆蔭菩薩大悲所不能救護何況諸天善神誰人存念

【訳】若し能く悟解し已るをば卽ち是れ佛弟子と名く。若し斯の義に違するをば卽ち魔黨と名く。佛弟子は卽ち是れ我が弟子なり。我が弟子は卽ち是れ佛弟子なり。魔黨は則ち吾が弟子に非ず。吾が弟子は則ち魔の弟子に非ず。我れ及

び佛弟子に非るは謂所る旃陀羅惡人なり。佛法國家の大賊なり。大賊は現世には自他の利無く、後生には無間の獄に入る。無間重罪の人をば諸佛の大慈も覆蔭すること能はず菩薩の大悲も救護すること能はざる所なり。何に況んや諸天善神誰れ人か存念せん。

字訓 ○魔黨……『菩薩善戒經』に曰く「惡弟子を度するときは法を破壞す。故に魔弟子と名く」と。○旃陀羅……惡人と曰ふ。○無間之獄……梵語の阿鼻(avici)を譯して無間、無救と譯す。閻浮提の下二百由旬にある極苦の處にして苦にひまなきが故にこの名あり。

要義 二惡人となることを戒しむ。

講義 上述の義を若し能く悟り、此れを守り行ふものをば即ち是れ佛弟子と名け、若しまた此義を悟らず、否反つて此の義に違背するものをば即ち魔黨と名くるのである。佛弟子は即ち我弟子たり。我が弟子は即ち是れ佛弟子である。魔黨は則ち吾が弟子に非ず、吾が弟子は則ち魔の弟子に非ず。我れ及び佛の弟子に非れば謂はゆるこれ旃陀羅惡人である。惡人は佛法にとりても、國家にとりても大賊たり。大賊は現世に於ては自利利他の積德の行なく、後生には無間地獄に墮つ。無間重罪の惡人をば諸佛の大慈も蔭庇すること能はず、菩薩の大悲も救護すること能はず。何に況んや諸天善神誰れ人か思ひを存して救けようや。救け得ざる所である。

宜汝等二三子等。熟顧出家之本意。誰尋入道之源由。長兄以寛仁調衆。幼弟以恭順問道。不得謂賤貴一鉢單衣除煩擾。三時上堂觀本尊三昧。五相入觀早證大悉地。

講方 宜しく汝等二三子等、熟出家の本意を顧みて誰れも入道の源由を尋ねよ。長兄は寛仁を以て衆を調へ、幼弟は恭順を以て道を問へ、賤貴を謂ふことを得ざれ。一鉢單衣にして煩擾を除き、三時に上堂して本尊の三昧を觀じ、五相入觀して早く大悉地を證すべし。

字訓 ○二三子……弟子を云ふ。○寛仁……心ひろく人をあはれむこと。○一鉢單衣……一鉢一衣の外に餘物を畜へざること。簡素の義を言ふ。○三時……晨・午・昏。○五相……五相成身觀のこと。○悉地……梵語の悉地(Siddhi)を成就と譯す。

要義 出家の本分に則つて佛道に精進すべきことを諭す。

講義 宜しく汝等弟子たちよ、とくと出家の本意を顧思し、また誰れも皆等しく入道の原因所以を心に思ひ浮べるべし。長兄たる長老の師は寛仁の心を以て大衆を調柔し、幼弟たる若輩の者は恭順を旨として佛道を問ひ學ぶべし。更にまた皆等しく賤貴を口にすることなく、一鉢一衣にして餘物を畜へずして簡素を旨として煩擾を除き、晨・午・昏の三時に上堂して修禪觀法して本尊の三昧を觀じ、五相成身觀を修して佛果圓滿を成就し、證得すべし。

變五濁之澆風勤三覺之雅訓。酬四恩之廣德興三寶之妙道。此吾願也。自外訓誡一如顯密二教。莫違越。若故違越者五大忿怒十大金剛依法檢殛。善心長者等。依內外法律治擯而已。以一知十。不煩多言。

講方 五濁の澆風を變じて三覺の雅訓を勤め、四恩の廣德を酬ひて三寶の妙道を興せよ、此れ吾が願ひなり。自外の訓誡は一ばら顯密二教の如し。違越すること莫れ。若し故に違越せば五大忿怒、十大金剛、法に依つて檢殛すべし。

善心の長者等內外の法律に依つて治擯せよ而已。一を以て十を知れ、煩しく多言せず。

字訓 ○五濁……劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁、○澆風……澆季の惡風。○三覺……自覺、覺他、覺行圓滿で佛のこと。○雅訓……正しきをしへ。○五大忿怒……不動、降三世、軍荼利、大威德、金剛夜叉の五大明王のこと。○十大金剛……十護の天。即ち毘首羯磨、劫毘羅、法護、眉目、廣目、護軍、珠賢、滿賢、持明、阿吒縛俱なり。○檢殛……殛は誅、檢按して殛誅すること。○長者……德ある者。○治擯……刑罰をいふ。

要義 佛陀の雅訓に從ふべきことを諭す。

講義 五濁澆季の惡風吹く處の世を變ぜしめんがために佛陀の雅訓を勤めて世に宣布し、以て四恩の廣德に酬ひ奉ると共に三寶の妙道を興起せしめよ。此れ吾が願ひである。その他の訓誡は一ばら顯密二教に說けるが如し。よろしくそれらの訓誡に違背し、越法することなかれ。若し故意に違越せば五大忿怒明王、十大金剛法に依つて檢按し、殛誅する所ならん。善心の長者等世出世の法律に依て刑罰に處せよまくのみ。今此處にはほんの一部分を記せしに止る。煩しく多言せざるを以てその他を推察し、類推して詳しく知れ。

一〇二　綜藝種智院式并序

綜藝種智院式并序

【訓方】綜藝種智院の式并に序。

【字訓】○綜藝種智……綜藝とは藝能をすべること。種智は一切種智を植ゑること。綜藝の言葉の出所に就いては『大日經』第一具緣品に「初の阿闍梨衆藝を兼ね綜ぶ」とあるによるならん。また種智に就いては『大品般若經』第二十六六喩品に曰く「一切の種智を以て一切の法を知る」とあり。

【筆意】初に題名を揭ぐ。

【講義】弘法大師が庶民教育普及のため創設せし綜藝種智院の式并に序文。

辭納言藤大卿有左九條宅。地餘貳町。屋則五間

【訓方】辭納言藤大卿左九條の宅有り。地は貳町に餘り、屋は五間なり。

【字訓】○藤大卿……右大臣藤原の朝臣三守なりと。『公卿補任』卷第二（弘仁七年）に曰く「參議從三位式部卿巨勢麻呂の孫。從五位下阿波の守眞作の三男、弘仁七年に參議に任ず。十二年正月に權中納言に任ず。十四年五月に中納言に任ず。七月職を辭すれども許されず、同十一月懇辭を上つる。卽ち之を許さる。天長元年に宮內卿に任ず。同三年に刑部卿に任じ、五年に大納言に任ず兵部の卿を兼ぬ。又彈正の尹を兼ぬ。承和五年に右大臣從二位に任ず。七年七月七日薨ず。年五十六。後山科の大臣と號す」と。

【筆意】藤原の朝臣三守の邸宅に就いて記す。

【講義】辭納言藤原の朝臣三守大卿は平安京の左京の九條にその邸宅があり、その宅地は二町有餘にして、家屋は五間あり。

東隣施藥慈院。西近眞言仁祠。生休歸眞之原迫南。衣食出內之坊居北

【訓方】東は施藥慈院に隣り、西は眞言の仁祠に近し。生休歸眞の原南に迫り、衣食出內の坊北に居す。

【字訓】○眞言仁祠……東寺をいふ。○生休歸眞……送葬の地をいふ。○衣食出內坊……官の倉庫をいふ。

【筆意】三守卿の邸宅の周圍を明す。

【講義】三守卿の邸宅の東は施藥慈院に隣接し、西は眞言の仁祠たる東寺がすぐ近くにあり、南は生休歸眞の地、卽ち送葬の原が近くにあり、北は衣食出內の坊たる官倉がある。

涌泉水鏡而表裏。流水汎溢而左右。松竹風來琴筝。梅柳雨催錦繡。春鳥哢聲鴻鴈于飛。熱渴臨也卽除。清涼憩也卽至。兌白虎大道。離朱雀小澤。緇素逍遙何必山林。車馬往還朝夕相續

【訓方】涌泉水鏡のごとくにして表裏なり。流水汎溢して左右なり。松竹風來つて琴筝のごとし。梅柳雨催して錦繡のごとし。春の鳥哢聲あり、鴻鴈于き飛ぶ。熱渴臨めば卽ち除き、清涼憩へば卽ち至る。兌には白虎の大道あり、離には朱雀の小澤あり。緇素逍遙する何ぞ必ずしも山林のみならんや。車馬往還すること朝夕に相續ぐ。

【字訓】○水鏡……水の清きをいふ。○表裏……前と裏。南側と北側。○左右……東西、東側と西側。○琴筝……琴も筝もコト。○梅柳……梅は紅白、柳は青故に錦の如き觀を呈す。○春鳥……鶯のことなりと『開書』に『文選』を引きて注せり。○熱渴……夏の暑氣をいふ。○兌……西。○離……南。○白虎・朱雀……白虎・青龍・玄武・朱雀の四神の中の二にして、今四神に相應すべき地相を有する立派な屋敷なるをいふ。四神の中、二神を擧示して他の二神を含め示す。なほ四神相應の地相とは、左に流れあるを青龍とし、右に長道あるを白虎とし、前に汙地あるを朱雀とし、後に丘陵あるを玄武とするを云ふ此れ最貴の地なり。

【筆意】三守の屋敷の四季の風情を賛へ、且つ此の屋敷の地相が最貴の地たることを明す。

【講義】涌泉は恰も水鏡のごとくに淸らかにして屋敷の南側と北側にあり、また流水の小川水を汎溢する程に滿へて東側と西側とにある。松竹樣に茂り、吹き來る風恰も琴筝を奏でるが如くであり、紅白の梅の花、柳の青き若芽春雨に催されて恰も錦繡のごとき景觀を呈す。春には鶯鳥鳴きさえづり、秋には鴻鴈于き飛。三伏の猛暑も此の屋敷に憩へば暑さを忘れて淸涼となる。また此の屋敷の地相をいへば西には白虎の大道りあり、南には朱雀の小池ありて誠に四神に相應の最貴の地相を具ふ。緇素逍遙するは多く遠くの山林にまで出かけてゐるけれども、豈遠くの山林にまでも出掛けるの要あらんや、此の三守の屋敷幽邃閑雅にして實に逍遙に好適の地である。從つて車馬此の屋敷に往來して朝夕に相續く程に多くの人々が來遊してゐる。

貧道有意濟物。竊庶幾置三教院。一言吐響千金卽應。永捨券契遠期昌地

【訓方】貧道物を濟ふに意有つて竊かに三教の院を置かんことを庶幾がふ。一言響きを吐けば千金卽ち應ず。永く券契を捨てゝ遠く冒地を期す。

【字訓】○三教……儒・道・佛。○千金卽應……三守が許諾を與へしを指す。○捨券契等……券契は約定のかきつけ。要約の書。約定の書き附などは用ひず、寄附して菩提の爲にすること。

【筆意】三守が邸宅を寄附せしことを明す。

【講義】貧道、衆生救濟の志ありて、竊かに三教院を設立せんことを企て、それを藤の大卿の邸宅に設置せんことをこひねがふ。そこで此の旨趣を藤大卿に語り告げし所、忽ち其の意を贊して千萬金に價する邸宅を券契などは用ひずして寄附せられ、遠く未來の菩提の資とせらる。

不勞給孤之敷金。忽得勝軍之林泉。本願忽感樹名曰綜藝種智院。試造式記曰

【訓方】給孤の金を敷くことを勞せずして忽ちに勝軍の林泉を得たり。本願忽ちに感じて名を樹てゝ綜藝種智院と曰ふ。試に式を造つて記して曰く。

【字訓】○給孤等……給孤獨が地に金を並べ敷きて土地を買ひ求めて佛に獻ぜし故事を指す。卽ち『西域記』第六に曰く「室羅伐悉底國の城南五六里に逝多林あり。（唐には勝林と言ふ。舊には祇陀と云ふは訛なり。）是れ給孤獨園なり。勝軍王の大臣、善施なるもの佛の爲めに精舍を建つ。善施之を賑はし、貧を濟ひ、孤を哀れみ、老を恤しむ。時に其の德を美て給孤獨と號す。佛の功德を聞いて深く尊敬を生じ、精舍を建て佛の降臨を請ぜんと願ふ。世尊、舍利子に命じて隨つて揆を瞻せしむ。唯太子の誓多園の地爽塏なり。時いで太子に詣して具さに情を以て告ぐ。太子戲れて言く、金を遍ぜば乃し賣らんと。善施之を聞いて心豁如たり。卽ち藏の金を出して言に隨つて地に布く。少しく未だ滿たざるあり。太子請ひ留めて曰く、佛は誠に良田なり。宜しく善種を殖うべし。卽ち空地に於て精舍を建立す。世尊卽ち之を阿難に告げて曰く、園地は善施が買ふ所、園樹は逝多の施す所、二人心を同うして式功業を崇む。自今已來此の地を謂つて逝多給孤獨園となすべし」と。此の文の中、勝軍は波斯匿王なり。太子は名は戰勝といふ。されば今まさしくは戰勝の林泉といふべきであるが、功を推し、本に歸すれば則ち太子の園は父王の地なり。故に勝軍の林泉と稱せしならん。

【筆意】寄附せられし邸宅を綜藝種智院と名けしことを明す。以上を以て序文を畢る。

【講義】かの逝多給孤獨園は善施給孤獨が土地に金を敷き並べて買ひ求めて佛に獻ぜしと稱せられてゐるが、今貧道は左樣な苦勞なくしてたゞちに勝軍の林